

精神衛生研究

第 5 号

昭和 32 年

Journal of Mental Health

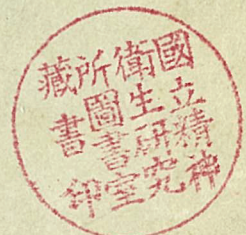
Number 5

1957

国立精神衛生研究所

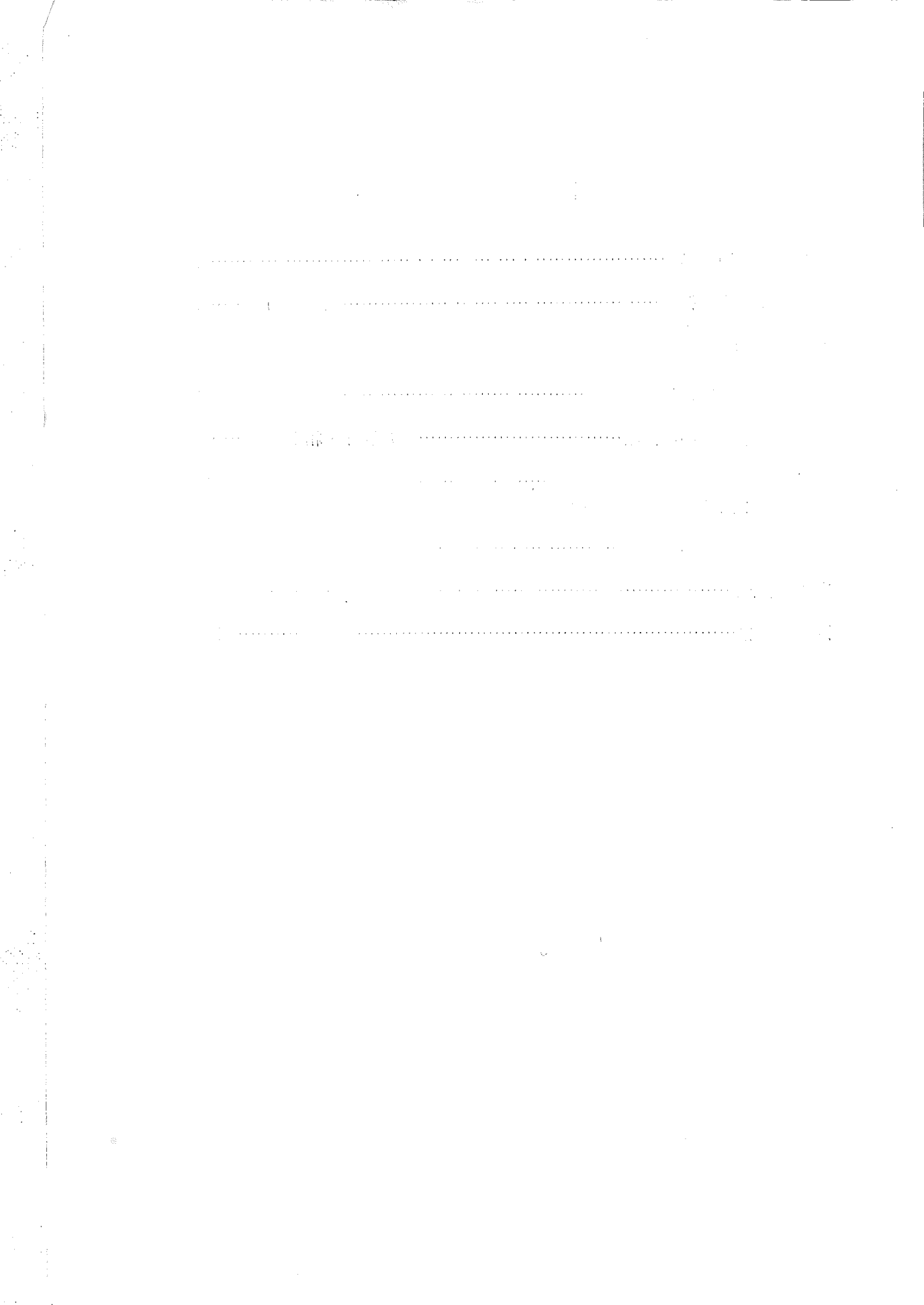
National Institute of Mental Health

Japan



目 次

はじめに	1
附属相談室の概況	高木 四郎 3
原 著	
非指示療法による面接記録	佐治 守夫 7
盗みをする子供の治療	玉井収介・柏木 昭 63
神経症における「心因」の問題 —— 1症例の自由連想を通じて ——	加藤 正明 95
幼児恐怖症の心理療法	池田由子・田村満喜技 115
英文抄録	157
所 報	167



は じ め に

Foreword

われわれの研究所が附属精神衛生相談室をもって発足してしまい満5ケ年になる。この間、「このクリニックの運営やケースの処置をどのようにやっているか」「精神医学・心理学・社会学・ソーシャルケースワークなどの異った学問や技術をもつものが、どのように参加し、どのように役割を分担し、効果をあげているかを知らせてほしいものだ」という声がしきりによせられてきた。

日本としては珍しいこの種の(行政)研究機関としては、各種の精神衛生問題に対してわれわれがどのようにとりくんでいるかを、多くの諸賢に知って頂き且つご批判をあおぐことが必要であると同時に、クリニックにもちこまれた個々のケースの処理の仕方如何という臨床的な技術や方法、およびその底に流れる理論や考え方についても、われわれのやり方を知って頂き、いろいろの批判と指導をお願いすることも、われわれの責務の1つであるように思ってきたわけである。

われわれはこの5年間に、相談室へ訪れるケースや患者に対して研究的にいろいろのやり方を試みてきた。それは時期的にいっても、クリニックチームの個人々人についてもいえることであって、最初から計画的に1つの方法をはっきりと設定してやってきたわけではないし、日本に初めて設置された機関としては、早くから方法や体制を固定すべきでない(わが国に適した方法や体制を研究業績を通して生み出すことを、1つの目的とすべき研究機関であることからいっても)ことは当然であろう。それにしても、クリニックという組織体を各研究者が能率的に活用するためには、最少限の運営要領(申合せ)を研究的にきめておく必要がある(その一端については高木室長の解説論文を参照されたい)この要領を頭にいれながら、クリニックチーム各人の研究者としての創意と工夫にもとづいて、(単にクリニックの運営に協力するというだけでなく、もっと能動的に)いろいろのやり方を各人が試みつつ今日に至っている。そして、それらの業績のごく一部として、ここにまず4編を発表し、諸賢のご批判を乞うということになったのである。

ところで、ここに掲げた4編は、執筆者各人の個人的研究の成果として発表されたものであって、われわれの代表的または標準的業績として選抜されたものではない。むしろ、なるべくバラエティに富んだものを、自由にまとめられたものと計画し企画し、偶然に選び出されたものにすぎない。4編を熟読し比較して頂けばわかる通り、主たる治療者が単独で処置治療に当たったものもあれば、児童ケースのようにその親をも並行して治療し、治療を2名以上のスタッフがタッチしているものもある。また、精神医が治療者となっているものもあれば、心理学

専攻者が治療者になったり、ソーシャルワーカーがそれを行っているものもある。診断主義的立場にとらわれないいわゆる **non-directive method** (非指示的方法) としての **client-centered therapy** (患者中心治療) を試みている例もある。従ってクリニックの運営要領にとらわれないで、形式的にはこれののっとりながらも、実質的にはこれをのりこえようという野心的なものなど、いろいろのものがみられる。

思うに、これまでのわれわれのやり方を通じて、われわれお互の間に何か共通した広場がみられるとすれば、——筆者の私見としていえば——クリニックの中で治療処置を行うということと、心理療法的指向があるということと、人間の理解を主にサイコダイナミックス (**psychodynamics**) の立場で捉えようとしていることなどではないかと思われる。これらの諸点はもちろん反省を要する点でもあり、特にケースワーカーの場合にこれでよいのかの疑問も生れる。しかし、これらのある種の特徴は、研究的計画的に創りあげたというよりは、試み的なやり方を進めてきた一応の結果として、あるいはクリニックチームの足並を不用意に乱すまいとした配慮の結果として生れてきたようにも思われる。それ故今後これがどう変るか、変えてゆくべきかは、目下のところ何ともいえないところである。

なお、ここに掲げた4編の中には、読者によって充分理解できないような新奇な「方法」「考え方」「用語」などがあるかと思われるので、解説に代えて、論文毎にクリニックチーム全員による「ディスカッション」を加えてみた。もちろん、これだけでも不十分ではあるが、われわれの意図としては、各論文について精密な組織的説明を加えないで、なるべくなまのまのケース事例、ケースプロセスを読者に提示し、そこから生れるであろう読者各位の疑問反論がどのようなものであるかを期待しようという、いわばケース提示にあたって“非指示的方法”を応用してみようとした。もちろん実際は、いろいろの事情から必ずしも編集企画の通りにはならなかったのであるが、編集企画の意図だけは説明しておく必要があるであろう。

最後に、いろいろと面倒なやり方に心から協力して下さった執筆者及びその他の所員各位に対して、深い謝意を表すると共に、同攻諸賢の暖いご批判ご教導をお願いしたいものと思う。

(横山定雄 記)

附 属 相 談 室 の 概 況

Shiro TAKAGI:

The Outline of our Mental Hygiene Clinic

附属精神衛生相談室長 高 木 四 郎

本号に掲載した心理療法に関する4編の事例報告を読まれる前に、本研究所附属相談室の現状の概略を知っておいていただくことは、4編に対する理解を深からしめるための予備知識として必要なことと思われる。

われわれの相談室においては米英等の精神衛生クリニック (mental hygiene clinic) , 児童指導クリニック (child guidance clinic) にならい、相談業務はすべて精神科医・心理学者・ソーシャルワーカー (ケースワーカー) のチームワークによって行われている。

まず、相談者 (成人の場合には患者自身、児童の場合には親その他の保護者) が来所した際、最初にこれに面接するのはソーシャルワーカーである。この面接の目的は第一には問題の概要 (症状、経過) , 家族歴、既往歴、発育歴等に関する資料を収集し、第二には相談室のやり方 (チームワーク) について理解を与え、もしも心理療法の対象として適当と思われる場合にはその予備知識を与え、それに対する意欲の程度を確めることである。この面接はインタビュー面接 (intake interview) と呼ばれ、ソーシャルワーカーの重要な機能の1つである。

次の段階には日をあらためてスタディ (study) ということが行われる。診察、諸検査の段階である。スタディに包含されるのは精神医学的面接、身体的検診、心理テスト等であり、児童の場合にはソーシャルワーカーによる親の面接も続行される。時には精神科医も親に面接して、経過、既往歴等について補足することがある。スタディは適当な間隔をおき2日間ぐらいにわたるのが普通である。

以上の過程を経た後、関係者は合議し、その結果、一応診断が下され、その事例が心理療法に適当と考えられるとき、治療が開始されるのである。

以上が精神医学的クリニック (psychiatric clinic) ないしは精神衛生クリニック (mental hygiene clinic) としての本相談室において、相談者が最初に来所してから治療が行われるに至るまでに原則として行われる手順の大体であり、以下の4編はすべてこの原則に従っている。

さて、治療の段階に入ると成人の場合と児童の場合とでは、かなり様子が異ってくる。成人の場合には加藤、佐治の2例のごとく、もっぱら本人だけが治癒の対象となるのが普通で

ある。ただし、環境因子が発病に重大な役割を演じている、いわゆる「環境神経症」のような場合には本人の心理療法と並行して、ソーシャルワーカーによる環境調整が行われることもある。

児童の場合にはこれと違い、治療の段階においてもチームワークが続けられる。すなわち、池田・田村、玉井・柏木の2編にみられるごとく、子供の心理療法と並行して親（大抵の場合母親）の治療（ケースワーク治療）が行われる。わが国ではまだ、このように子供のみならず親の治療をも並行して行うという方法については一般に知られていないようであるが、米英等の児童指導クリニックにおいては1930年代以来、伝統的に行われていることであり、この点児童の心理療法においてはソーシャルワーカーが治療の重要な一翼をになっているわけである。児童は成人のごとくパーソナリティが十分に独立しておらず、心理的には親、ことに母親の一部といってもよいくらい、母子の結びつきは強く、親は児童の最も重要な心理学的環境をなしていると考えられる。したがって、器質的・遺伝的原因による場合は別として、児童の性格行動の異常はほとんどすべての場合、親子関係の障害に基くとも考え得るのである。これが子供の治療と並行して親の治療も行われる理由であり、このような方法は児童の心理療法の効果を十分、かつ確実ならしめるのである。

以上のごとく、子供の心理療法と並行して母親のケースワーク治療が行われるのが常道であるが、このほかにもいろいろな変形がある。たとえば母親とともに父親の治療も行われることもあり、思春期を過ぎた相当年長の児童の場合には成人同様本人だけの治療が行われ、反対に2～3才以下の乳幼児の場合には母親だけの治療が行われることもある。

ここで注意しておきたいのは、以上のように一応インテーク、スタディ、治療の各段階が分けられるけれども、治療はすでに最初の面接、すなわちインテークやスタディの時から始まっているということである。すなわち、インテークやスタディの段階における面接も治療的な態度をもってなされるのである。同時にスタディ終了後、診断が下されるけれども、これはいわば暫定診断（working diagnosis）であり、その診断は治療の進行とともに精密化され、時には修正される。そして、この過程は治療の終結時、最後の面接の時まで続くのである。いわば、診断と治療とは最初から最後まで相並行して行われるのである。このことは一見奇異なことと考えられるかもしれないが、心理療法の対象となるような事例の性質上当然のことであり、程度こそ違え、一般医学においてもある程度行われていることなのである。

次にだれが治療を担当するかという問題であるが、精神科医も心理学者、ソーシャルワーカーもこれに従事している。（以下の4例の治療者のうち、加藤、池田の2名は精神科医であり、佐治、玉井の2名は心理学が専攻である。）職場・家庭等の問題に対するカウンセリングは別として、しばしば身体症状を伴い、身体疾患との厳密な鑑別診断を必要とする神経症等の精神医学的症例を、医学的教育を経ない者が扱うことに対しては精神医学方面から強い反対があるかもしれない。しかし、アメリカのクリニックにおいても心理学者やソーシャルワーカー

が心理療法に参加しており、われの相談室においても前述のごとくスタディの段階において精神科医の診断を経ており、かつ心理学者、ソーシャルワーカーが心理療法を担当する場合には精神科医による個人指導 (supervision) ないし助言が行われているので、弊害は生じないのである。しかし、このようなことは本相談室のごとくクリニック・チームを有して、はじめて許されることであり、医学的知識を有せず、種々の精神医学的症例に接した臨床的経験の乏しい心理学者、ケースワーカー等が単独で不用意に精神医学的症例に対して「心理療法」をなすことは多大の弊害を生ずるおそれがあり、賛成できない。ただし、神経症その他の精神医学的症例以外の職場・家庭等の問題、児童における性格素行上の問題等に対するカウンセリング (心理療法) は心理学者やケースワーカーや教育者等によって大いに試みられ、普及発達することを希望する。

児童の場合、ソーシャルワーカーが親を担当して治療の重要を一翼をになっており、これが伝統的な形であることはすでに述べたが、治療者の組合せという点でも種々の変形が試みられている。親子とも精神科医が担当して「心理療法」が行われることもあり (SZUREK のいわゆる「協同療法」 collaborative therapy) , ソーシャルワーカーが子供を、精神科医あるいは心理学者が親を担当するようなことも試みている。そしてソーシャルワーカーの行う「ケースワーク治療」も、精神科医・心理学者の行う「心理療法」ないし「カウンセリング」も、その内容技法にほとんど差異のないことは柏木、田村の記述にみられるとおりである。

本号には成人の治療例としては、たまたま精神分析療法 (自由連想法) および非指示療法の2編が掲載されることになったが、われわれは決してこれらの立場を固執し、これらの方法だけを行っているわけではない。本相談室の実際においては、むしろ "brief psycho-therapy" と呼び慣らわされている方法が最も多く行われている。われわれは今後も1つの立場に偏することなく、できるだけいろいろな方法を試みるつもりである。そして、それらの経験の中から日本人に最も適した心理療法の生まれてくることを期待するものである。このことは児童の場合についても同様である。児童の心理療法にもさまざまな理論と技法があり、それらを一々時間をかけて追試し、吟味するところから進歩も生まれてくるであろう。

最後に心理療法やケースワーク治療に初心の読者のために一言しておきたいことがある。それは心理療法というものは治療者のパーソナリティと被治療者のそれとの交互作用の上に進出し、効果があがるのだということである。だから心理療法には一定の諸原則はあっても、少しく極端な言いかたをすれば、治療場面におけるやりとりは治療者の異なるにしたがい、また相手が異なるにつれて皆違うといってもよいのである。たとえ同じことをいったとしても、治療者の異なるにつれ、また同じ治療者でもその際の心理状態、態度によって相手に与える効果は皆違うはずである。この色彩の違いは、たとえば池田、玉井の2編を注意深く読まれ、比較されれば明瞭に観取されるであろう。そこに心理療法の科学性という問題が生じてくるわけであるが、

ここには論じない。たゞ記述された治療者の言動の端々をいたずらに模倣するようなことなく、そこに働いている治療の原則を読み取られるよう希望する。

(末記) インテーク, スタディ, 個人指導(supervision), 協同療法(collaborative therapy)等の意義の詳細については、「精神衛生研究」第3号の拙稿, 「アメリカの児童精神医学と精神衛生」を参照されたい。

原 著

非指示療法による面接記録

Morio SAZI:

A Case treated by Non-directive Method

心理学部 佐 治 守 夫

「序 文」

以下にのべるケース記録は、非指示（クライアント中心）療法によって、治療的面接9回の後、治療を終結したクライアントについてである。非指示療法の体系は、情緒的な障害をもつ人々の問題を扱う方法として、広く認められるようになってきている。周知のごとく、この方法はロージャズによって体系化されたものであり（文献1）、この方法による治療例をまとめた、ケースブックも公刊されている（文献2）。

非指示的な治療法を他の療法から区別する主な要因は、治療状況の方向づけやそこにおける決定が常に、カウンセラーの手ではなくて、クライアントの手にゆだねられているということである。他の治療法の場合と同じく、彼の症状ではなくて、彼の全人格が、治療の焦点となるのだが、クライアントが自らの行動の責任をとり、自己指示的である意味での独立的な態度を獲得し、自己のパーソナリティの統合を達成することに目標がおかれるのである。ロージャズは、非指示的方法を用いるにあたって、2つの基本的な仮説をおいている。第1の仮説は、治療者が、個人の統合と自己指示を完全に承認しているということであり、第2の仮説は、個人の中に適応に向う自発的な力が存在しているということである。第1の仮説によれば、治療者はクライアントの生活を指導する責任をとろうとすることは、かえってクライアントの成長を妨げることになるのである。第2の仮説の意味するところは、もし個人が好適な治療状況のもとにおかれるなら、彼は自らのうちに持っているより満足な適応に到達する力を充分に発揮し活用しうるに至るということである。もし個人が、情緒的な障壁から解放されるような状況におかれるなら、このようなより高い水準の適応に達する手段を自ら発見できると考えられるのである。

このような仮説にもとづくならば、非指示療法においては、指示的な治療の場合と比べて、いわゆる診断の過程にはそれほど重点がおかれないのである。ここでいう診断とは、治療者が彼の仮説にしたがってクライアントを指導していく責任をもつ場合に必然的に要求される、治療の方向づけを得るための理解を意味する。クライアントの成長を妨害している情緒的な障壁

からクライアントを解放してやる点に、テクニックの上での重点がおかれることになるのである。

このために治療者に要求される態度は次のごとくである。治療者は先ず第3に、クライアントのパーソナリティを心から受容しなければならない。といっても、このことは治療者がクライアントに対して賞讃を与えねばならぬとか、元気づけの手段でクライアントに対する同情を表明せねばならぬとかいうことを意味するのではない。むしろ、クライアントを、現在彼がそうあるべき権利をもつ1人のパーソナリティとして、また、彼がそうありたいとおもういかなるタイプのパーソナリティにも転換しうる1人の人格として、全人格的に受容することが要請されるのである。

第2の主要な治療者の態度は、クライアントとの間に許容的な関係を確立することが重要な治療的価値をもつことについての認識をもつことである。治療者自身の判断や価値観の枠組にもとづいて、クライアントの行動や態度を評価することは、最もさげねばならない態度である。クライアントに対して賞讃や非難を与えていると（たとえ暗々のうちにもせよ）印象づけるなら、それはもはや非指示的な態度ではあり得ない。むしろ必要なのは、クライアントが表明したいと思ういかなる感情的態度をも、あるいは彼がとりあげたいとおもっているいかなる行動をも、何等の防衛的な態度をとまなうことなく、自由に治療場面で問題となしうるような許容的な関係をつくりだすことである。治療者の側で、僅かな批判的な色彩をその言葉の端々に示すことでも、この許容的な関係を失なわせてしまうのである。

第3に要求される態度は、クライアント自身が、自らの問題を処理していくことができるというクライアントに対する信頼の態度である。これはクライアントの人格に対する微妙な尊重の態度として、治療的関係全般をつらぬくものとなるのである。クライアントに対する受容が、このような信頼と尊重によってうらづけられるとき、クライアントは、自らを受容し自らを尊重する態度をもつに至り、自己決定、自己指示の態度を獲得するに至るのである。

このような基本的態度を具現するテクニックとして、治療者は、感情の認知及び明確化 (Recognition and Clarification of Feeling)、単純なる受容 (Simple Acceptance)、内容の繰返し (Restatement of Content)、非指示的なリード (Non-Directive Leads)—クライアントに自らの話題の選択や発展をゆだねる—、治療的関係の構造化 (Structuring of Therapeutic Relationship)、等のやり方を用いるのがある。その方法の適用による治療状況の進展については、具体的なケース記録に即してのべることにしよう。なお、非指示療法にあっては、治療者の方で、知識を与えるとか、説得するとか、批判するとかいった、指示的な方法は全くとられない。このような指示的方法は、全般的にいて、クライアントの洞察の達成や構成的な活動の進展を妨げることが多いという事実が研究されている (文献3,4)。解釈や元気づけのテクニックも殆んど用いられないのが普通である。かかるやり方もクライアントの自己指示を

妨げることが多いと考えられている。

著者は以上のような原則にもとづいて、現在の著者に可能な限りの努力を治療的面接において払おうとした。もちろん、この面接においても不十分な点はあまりにも多いが、気づいた点を注として附記した。読者に対する親切というよりはむしろ、自分自身に対する批判の意味である。また、上にのべたことからして、治療的面接全体の文脈の中での、治療者の反応が問題にされねばならず、紙数の許すかぎりにおいて、面接の逐語的な記録を再録した。(面接はすべてクライアントの許可を得た上でテープコーダーにより録音したものである)。

文 献

1. ROGERS, C.R. Counseling and Psychotherapy. Boston: Houghton Mifflin Company, 1942.
ROGERS, C. R. Client-Centered Therapy. New York: Houghton Mifflin Company, 1951.
(邦訳が友田不二男氏他によってなされている。
ロジャース選書, 全五巻, 岩崎書店1955-1957)
2. SNYDER, W. U. (Edt) Casebook of Non-Directive Counseling. Boston: Houghton Mifflin Company, 1947.
3. SNYDER, W. U. An Investigation of the Nature of Non-directive Psychotherapy. Journal of General Psychol., VOL 33 1945, pp. 193-223.
4. 佐治守夫 片口安史, 心理療法による治療効果の測定に関する研究, 精神衛生研究第4号, 1956.

面 接 記 録

〔S. M. 27 才, 女性, 独身〕

治療者, 佐治守夫

インテーク面接, 昭和 31 年 8 月 13 日

インテーク・ソシアル・ワーカー, 須藤憲太郎

インテーク面接において明らかとなったクライアントに関する諸点は次の如くである。

1. 来所経路: クライアントは始め他の病院の精神科医の下を訪れようとおもったが、丁度夏休み中のことであったし、たまたま当研究所の話聞いて来所する気になった。前から新聞で知ってもいたし、特に重い病気でない人でも相談にのってもらえるとのことだったので、母に相談した上で来所した。

2. 相談内容及び過程: ある出版関係の会社につとめているが、直接の上役である課長(中年の独身の女性)と感情的に合わないことが一番問題である。社に入ったのは今年の10月であり、入社試験の時多くの受験者の中から何のコネももたない自分を入れてくれたのがその課長なので、一面とても感謝している。試験の時の印象でここにこしたやさしい人だと思ったのが、実際にその下で働いてみると、予期に反して第一日目からひどく嫌いになってしまった。課長

は仕事で猛烈に多忙であるためだろうとも思うが、すごく感情的な態度で人に対する。気嫌がよくないとあいさつしても知らぬ顔でいる。忙しくなると皆にあたるようにわざと電話をガチャンとおいたり、本を投げだしたりする。仕事のことで相談にいくと、それからそれからとせきたてるように聞くし、とてもたまらない。自分の欠点や落度を認めようとしなくて、皆部下のせいにしてしまう。本当は課長に問題があるのだから、課長自身がこういう所に相談に来ればいい。同じ課のものはみんな泣かされてしまう。仕事は好きでやっていることでとても面白いし、同僚達もみんないい人ばかりなので、仕事をやめる気にはならぬが、課長に何かいわれたりされたりするたびに、自分が感情的にたかぶってしまってどうにもならなくなる。何とかそういう自分のことについて相談にのってほしい。夏で暑いせいか、仕事が忙しくなると、精神的にも肉体的にもすっかり参ってしまう。

クライアントは早口に感情的な調子で、時々涙ぐみながら、上のようなことを訴える。

クライアントの許可を得て面接を録音していたテープが残り少なくなったのを見て、それが終わったら帰らなければならぬのでしょうかと聞いて、「私はおしやべりをしたあとで、もう帰らなければならないと思うと嫌になる。何かしなければならぬと思うと、そうしたくなるなる。」と訴える。夜、もうねなければならぬと思うと、立ちあがってねにいくのがいやになってしまう。洗濯などにとりかかる時も同じであるという。

感情的になってしまうのは、課長や仕事についてのことだけではない。母と2人暮らしでアパートの一室に住んでいるが、時々悲しくなると母にあたって泣き出してしまう。死にたくなることも前からあった。そういうときはビタミン剤をのむと気がおさまる。自分でも、自分が感傷的で女学生のようなと思う。そういった傾向は前からあったのだが、入社して以来特に感情的になるし、肉体的にも疲労を感じ易い。このごろは完全にまいってしまったという。

インターク・ワーカーの印象では、話し方や服装など、年の割に子供っぽい点が多分にあるという。

従前の処置や既往症など特記すべきことはない。

3. 家族構成：母（51才）と本人の2人暮らし、初めから一人子である。父は本人が4才の頃、内科的疾患で死亡。本人は高校をでた後、出版関係の勤めを2度ほどやって後、現在の雑誌社に入った。

インターク会議で、著者がクライアントの「Study」を行うこととなった。インターク・ワーカーの話をきいて、少なくとも精神病的な疑はないこと、彼女自身治療に対する十分な動機づけをもっていることを知り得たので、「Study」の期間を特に区別することなく、一貫して治療的面接の形をとることにした。前述の如く、ロージャスの意味での非指示的な治療を行う場合には、診断的な過程は、クライアントの依存的な態度を助長し、治療を長びかせたり、失敗におわらせたりする危険があることを考えたからであり、特にこのクライアントにあっては、母や課長と

の間柄から予想される一面アムビバレントで依存的な傾向が、治療者との関係においてもつくりあげられる可能性が考えられたからである。

「1回目の面接」 (8月17日)

総括:

治療者はこの回始めてクライアントと会った。感情をこめたやや早口な話し方で、時々涙ぐむが、そのあとで自分の話に笑いだしたりする。声の調子や話し方はたしかに年齢に比して、子供っぽい。やや治療者に甘えている様子がみられる。アポイントした時間に10分遅れて来所した。

1. 「時間を50分とりますから、その時間はどうぞ、貴女の自由におつかいになつて構いません。この間の御話はS先生(インターク・ワーカー)から聞いております。でも私は、あなたのことについて、それだけしか存じあげていませんし、今日ここで問題にしたいと思っていられることについて何でも御話になって頂けませんか」(注1)という治療者(Tと以後略記する)の言葉に対して、クライアントは(Cと以後略記する)殆んど間をおかずに次のようなことを話した。要点はおよそ次の如くである。

2. この間話した課長さんとの問題は大体解決したように思う。時間をみつけて話しあった。「そんなに気をつかって気の毒だったと思う、私も忙しいのでついそうなるのだ、気にしないでほしい。」と課長がいてくれた。思いきって話をしたことで、却ってよかったと思う。話しあうことで信頼ができるようになってつくづく感じた。(註2)

3. 課長の問題は実はそれほど自分にとって重大なことではなくなった。もっと重大なことがおきた。どうしていいか全く分らなくなった。自分でもひどく混乱して、こうやって歩いてきたのさえ不思議な位だ。

4. ある男の人を長い間好きで、今も好きで、これからもやっぱり好きだろうと思う。結婚

(注1) 著者はふつう第1回目の面接の冒頭でこのような治療への導入をしている。この際、時間を50分としたのは、クライアントが10分おくれてきたからで、普通は1時間とっている。2回目からは1時間づつにしている。なおこの面接の終り近くに、定められた1時間…時から…時までは自由につかっていいこと、ただしその時間以外は時間はとれないことを約束した。定められた時間を自分のものとして利用する責任をクライアントに持ってもらう為である。

インターク・ワーカーが前に会っているのではなくて、最初から治療者がある場合も、大体同

じような調子で治療者は面接を初める。「何故あなたがここにいらっしやったのか、私は殆んど(全く、あるいは誰々さんからあなたのこと依頼されたこと以外は)何も知りません。そんなことについて何か話していただけませんか」といったいい方になるだろう。この始めの導入は、クライアントに自分なりのやり方で話題を進展させる完全な自由を保証するのが望ましいし、そうすることに彼自身の責任を与えることが必要なのである。治療への動機づけは、まずここから始められなければならない。

したいと私は思っているが相手は納得しない。相手が浮気をしている、つまり私のライバルがいることも私には分っていた。でもそれは相手が浮気屋だからなので、真剣なものではないと思っていた。ところが相手はそのライバルの人と結婚すると宣言した。彼の友人達は、私の為にも彼とは別れた方がいいといってくれる。しかし私にはあきらめきれない。私が1人で、誰が何ととっても私は彼の妻だと心にきめていた。ところが相手はそれを私のエゴイズムだという。結婚で自由を束縛されることなど真平だという。

5. どうしていいか分からなくなって同僚にもうちあけた。あきらめなさいといわれたが、やはりあきらめるには、まだ自分のやるべきことをやっていないと思った。相手の男の人の両親の所に初めて自分から会いにいった。向うの両親も私の事を理解してくれたと思うし、私の母親も理解してくれていると思う。でも両方の親も、相手が納得しないのに結婚しようとするのは私が苦勞するだけだと思って、とめたいと思っている。2人の結婚は幸福になれないという。

6. こうなったのは相手も悪いが私も悪い。至らないからだと思って自分をせめる。でもどうしていいか分からない。前にやはり失敗したことがある。私の満足の為に何でも世話をやろうとして相手を束縛してしまって失敗した。今度の彼の場合にはその逆で何にもしてやらなかった。そしたら相手は色々世話したり面倒みてもらいたかったらしい。今度のライバルという人は、色々世話をあげたりするらしい。結局私が至らないんです。

7. まだ手おくれではないと思う。彼は会ってくれぬが、何とか会ってゆっくり話したい。でもその結果どうなるか分からない。相手は私が束縛するというが、もしそういう所があって、自分のエゴの為に相手を愛しているといった所があるのなら、そういった自分を変えていかなければと思う。

8. 来週もつづけておいでになる気持ちがおありですかというTの言葉に、ここにくるととてもさっぱりして、何か解決が得られそうな気がする。ぜひ伺わせていただきたいと答えて、時間を約束して帰る。

(注 2) 後の面接で(特に第6回)明らかなように、課長との問題がここで解決しているわけではない。今のクライアントにとって、より彼女の心を奪う出来事が生じたために、この問題は一時その重みが相対的に減少しているにすぎないとおもわれる。しかしここで重要なことは、インターク・ワーカーとの1回の面接で、彼女は自分の問題を話しあうことの重要性、そのやり方で問題の解決に近づくという気持ちをつよくもつに至ったことである。インターク面接が成

功であったことが、このことから明らかである。今まで一度うちあけたことのない自分の問題を話し、それを受け入れてもらったことで、彼女は課長にあって話してみる勇気を得たのであり、また自分の恋人の両親にぶつかってみて、自分を理解してもらおうとする態度をもついているのである。自己指示、自己決定は、まだ未熟な形においてはああるが、彼女の心にすでに芽生えており、これが今後の面接を動かしていく力となるのである。

第1回目の面接において表明されたクライアントの主な感情。

1. 話しあうことによって、他人への親頼感をもつことができる。課長との関係もそうである。
2. 自分の好きな男の人と何とかして結婚したい。だが相手がそれを望んでいないので、困ってしまった。ライバルがあらわれたし、その人にまけたくない気持ちもあり、現在ひどく混乱している。
3. 問題を打開するために全力を注いでいきたい。何とか全力をつくしてみても、それでだめならあきらめられるが、そうでないうちはあきらめられない。
4. 結婚問題や、愛情の問題に関して自分にはエゴイスタックな面があると他人にいわれるが、自分にはそれが充分納得できない。
5. もしそういう面があるのなら、改善していきたい。
6. 自分にも相手にもこうなってしまった責任がある。

「2回目の面接」 8月24日 (逐語記録)

T 1: どうぞ今日も1時間
(miscellaneous--Non-directive Lead) *

C 1: ウフ(笑)勝手にしやべる……

T 2: エエ、時間をおとりしますから……

(Answer)
C 2: あのう、すっかりよくなりました。おかげさまで。(ハハハ)それでもって(エエ)すっかり駄目になっちゃった。ですから(ハハハ)すっかりよくなっちゃったんです。

(Question)
T 3*: すっかり駄目になったっておっしゃいますと、この前の……

(Answer) (Insight)
C 3: 話していたこと、(ハハハ)すっかりもう自分で傷つくだけ傷つかなければ、やっぱりあきらめられないことがすっかり傷つくだけ傷ついちゃったんだと思うんです。

(Simple Acceptance)
T 4: はあ、はあ。

(Insight)
C 4: そしてもうあらゆる可能性をおしてみてだめだったから、もう(エエ)……。あのその時だけでもとても気持ちがすごくよくなって、それでも自分の愛情を揚棄しなくちゃならないんだっていうことがすごくよく分ちやっ たんです。(ハハハ) (Problem)
(ハハ) よくなったんですけど、それから家に帰ってきたら、母にまあ…母…家の母は怒らないんですけど(エエ)、まあすごく悪口をいうわけなんです。私の悪口じゃなくて向うの悪口を。そしてたらとたんに自分のその(エエ)きれいにこうすごくいい気持ちになっていたのが、すっかりくずされちゃった。

(Simple Acceptance) (Reflection of Feeling)
T 5: はあはあ。お母さんがそういうことをおっしゃったので(エエ)何か自分が又変な気持ちにな

注 * ()内は反応のカテゴリーを示してある。

(序文参照)

* T3 相手の感情を完全に理解していなければ、それを受容したり、反射したり明確化したりすることは不可能である。ここでTは、C2の内容を理解し得なかったために、内容について質

問しているのである。この態度は、相手についての知識を蒐集する意図のもとに行なわれる質問とは、全く異っていることに注意。知識を得るために質問をするのは、Directive Leadであり、診断的な態度を相手に明示するものである。

っちゃった。

(Agreement) (Problem)
C 5: ええ。結局自分がすっかり、もうこれはいいんだというようになったのに、あのすっかりくずれちゃった。(ハァ) いやんなっちゃったんで
(Ambivalent Attitude toward Others)
す。でもその母もとてもあのよくしてくれたし、もう他の人だったらあんなにしてくれないと思うほどよくしてくれた。それから向うのお父さんお母さんたちもすごくよくしてくれたんだと思うんです。だけども、それだからすごくいやんなっちゃったんです。(ハァハァ) それですごく、せんから私にいいお友達がいて、そのお友達に家に泊りにきてもらって喋って又それが少しよくなった。その立て直しができたんです(ハァハァ) ええ、それでそのお友達には私の気持ちが
(Problem)
分るんですけど、それからだけど家にいると又いやになったり、よくなったりやんなったりよくなったりするんです。(ハイ)ですからそのお友達と
(Simple Acceptance)
今度一日家に泊っていただいてそれから2日間向うに泊ってしゃべっているとよくなってきたんですけれど、昨日からもう、
(Insight)
あんまりその愛情を揚棄するもしないも私も向うも何も持っていない、私も何もっていないんじゃないかという
(Insight)
気持ちになってきた。(ハァ)ですから、今の特有な感情なんですけど、どうなるんだか分らない。

(Simple Acceptance) (Clarification of Feeling)
T 6*: はあはあ、まあ先のことは分らないけれど、今の所ではそんな形でなんとかかたがついちゃったような気もするんですね。

(Incomplete Agreement)
C 6: ええ、結局そのこと自体はかたがついてしまったんです。(ハァハァ)ただ私の気持ちの中でそれがどうなっていくかということが分らない。

(Reflection of Feeling)
T 7: ええ、まだ……

(Problem)
C 7: ええ、でもその何かそう思っちゃったのは、ゆうべから今朝にかけてなんですから、その前は、あのこれが救われるチャンスだっていう気がしたんです。ですからあの前の時はその(ちょっと間)あのすっかり話してみただめだということがはっきり分って、それでもっとこの人を本当にもっと高い所…高い…自分の愛情というものを高めていって…いかなきゃならないという時に、すごく気持がよくなって、あの自分が病人じゃなくて、あの気力も体力もでてきたみたいで、あの禅が何かやりたくなくて。(ハイ)それでこの前こちらへ…一番最初に伺ったころはもう禅…禅をやるなんていう気力もなかった。(ハイ)ですけど、それが今度の関心事じゃないわけですけど、でもその何かだんだん体力が回復してきてそういう風になってきたんかしらとも。(ハァ)それがとてもよかったと思うんです。思うんですけど、がまた変になっちゃったから、分らなくなっちゃった。
(Simple Acceptance) (Insight)
(ハァハァ)でもそれより以外に……。ですから今なんとかならなかったらもうとてもだめだっ

(Clarification of Feeling)
T 8*: うんうん、今のこれを機会にして自分がこう立直らなければ、

(Incomplete Agreement)
C 8: ええ、立直らなければ……ええ、だし(エエ)それから自分でもとてもいやだと思ってもあの……何だかよく分らないですけど、私の中にすごくこう……放浪性っていうのか、なんかそんなのがあるんじゃないかと思うんです。

(Question)
*T 9: ホウローセイ?

(Answer, Problem)
C 9: 放浪性って言葉が悪くっても(笑い)(ハイ) すごくじゃもし、もっとおかしく言えば、グウ

注 *T6: ここでのTの明確化は、C5の感情を充分に汲みとってはいない。それ故不正確である。C5でCの表明している感情は、「色々自分で努力したり他の友達に助けを求めたりして一応おちついた。そしたら自分と相手との間に本当に

愛情とよびうるものがあつたのかどうか疑問になってきた。先は分らぬが今はどうもそんな気がして空虚な状態にいる。」とでもいうべきものである。T6の反応が不正確であったため、C6の反応は、半ばTの反応を拒否する形ででている。

タラってというのが(ハイ)あると思う。ですけどそのグウタラさというのが……そのグウタラさに徹して行かれれば話は簡単なのに、グウタラでもないってというような所もあるから、(ハァ)そのグウタラさを捨てちゃわなきゃいけないっていう気がするんです。だけどそのグウタラさを捨てちゃうのがとても悲しい。……

^(Question)
*T10: 私にどうもよく分らないんですけど(2人一緒に笑う)、グウタラというのはどういうことを指していらっしゃるんですか?

^(Answer)
C10: つまりその放浪性みたいなものです。

^(Clarification of Feeling)
*T11: はあ、何かこう自分で自分がこうコントロールできないようなそういうような事……なん

^(Question)
ていうか……そういうのとも違う?

^(Answer)
C11: ええ、つまりその何か縛られてやるのがすごくいやなんです。(ハァハァ)^(Miscellaneous)ですからこの前自分でそんなに愛と思わなかったのに、この前の前の先生何んと……M先生ですか(ア、S先生)S先生、あの何かしなければならぬというのがおかしいようにおっしゃっていられた。(ハイ)ですから自分でもおかしいのかなあと……そのことばかり喋っているからすごく思いもかけないと思っちゃったんですけど(ハイ)そのしなければならぬというのが、すごくいやなんです。

^(Reflection of Feeling)
T12: はあはあ、そういう意味で縛られているのがとっても耐えられない。

^(Problem)
C12: それからあの社が終って家に真直帰るのが

^(Negative Attitude toward Others)
いやなのです。(ハイ)それでその真直帰るのがいやなのですけれども、家の母にすれば、そのしょっちゅう遊んで帰るから……くたびれるのよって言うんです。でも、しょっちゅう遊んでもいないんですけど(エエ)仕事でおそくなる日もあるし翌日どこか皆でアイスクリームをのみにいく日もあるし、(ハイ)それからまた、何となくどこかへいきたくなる。(ウン)その何となくどこかへいきたくなるのは誰でもあたりまえだと私は思っているんですけど(ハァ)母にいわせるとすごくあたりまえじゃない。

^(Reflection of Feeling)
*T13: はあ、お母さんにいわせるとちょっとこう変だっていうわけ。

^(Agreement) ^(Problem-Negative Attitude toward Others)
C13: ええ、それで御飯の時に帰ってこないのが悪いです。(ハァ)そりゃ悪いことは分っているんですけど、せんからそうなんです。それで始終喧嘩になるんです。けど(ハァ)ですけど……帰りたくないっていうとこんど家が面白くないからだというんです。^(Ambivalent Attitude toward Others)そうじゃないんです。(やや泣き声になる)。(ハァ)そうじゃない、家が面白くないんじゃないんです。ですけど…よそに比べたらずっと面白いんだろうと思うんです。けれど…

^(Clarification of Feeling)
*T14: なんかこう真直家に帰るって言う、そういうことにきままっているという事にたえられない…(エエ)そういう気持……

^(Agreement)
C14: ええ、それから、ええすごくせんから……^(Problem-Insight)だからあのそういうのが、そのこの間のその人で

注 *T8: この明確化も甚だまずい。C7で表明されている感情は、「今自分が問題点に立っている。」という自己認識にもとづいている。T8は「当然何か今自分が重大な時期に立っているような気がしているんですね」とでも反応すべきであった。この考は、国学院大学教授、友田不二男氏によって示唆せられたものであり、Tも同意見である。

*T9,10: これはT3の場合と同様な質問である。

*T11: これは途中まで、明確化の形で反応していたTが、Cの表情や態度を注視しながら、T11の反応がよびおこした相手の感情を察知して、T11が必ずしも正鵠を射ていないことを知り、質問の形に変えたものである。Tは自らの発言中に常に相手の態度に注意を払い、言語化されていない感情の動きをも、敏感に感じとらなくてはならない。

すね。(ハイ) その彼とも、彼の……彼に対する
(Negative Attitude toward Self and Others)
気持ちというのが、そういう所の共通性だろうと
思うんです。すごく向うはもうグウタラ一本やり
なんです。(ハイ) ですからそういう私のグウタ
ラさと向うのグウタラさとが共通する所があっ
て、そいでまた私にグウタラでない所もあるため
に、すごく……いけないんだろうと思うんです。
(Simple Acceptance) (Problem)
(ハァハァ) ですから結局その人に対することも
何もかも……私のその学校をでてから今まで、社
に入るまでの生活というものを知ってなきゃなら
ない時だと思うんです。(ハイ) 思う。……で、
(Ambivalent Attitude toward Self)
今の仕事の方がずっと私に向いているって自分
も思うし、みんなそう言ってくれるし(ハイ) 仕
事は面白いけれど、ただそういう自分の前の5年
間なら5年間の過去を棄てなくちゃならないって
いうのがすごく悲しい。……悲しいですって…
…と分らないんです(笑)(ハァ)だけど……

(Reflection of feeling, Inaccurate)
T15*: こう自分でもよく分らないような気持ち

(Insight)
C15: とにかくでも棄てなくちゃいけないと思う
(Ambivalent Attitude toward Self)
んです。でも困っちゃう。そしたら私も、すごく
不遜だけどもう自分の一生が見えちゃうような気
がするんです。

(Simple Acceptance)
T16: はあはあ。

(Ambivalent Attitude toward Self)
C16: それで……だけど今の仕事は大切に、す
ごくいいし、だけど、今の仕事をとるか彼をとる
かということになったらやっぱり今の仕事を完
全に取ると思ってとったわけです。…だけど…そ
したらこれからもごく何か自分のそういうものを

棄ててしまって、あのその自分のそのグウタラ性
ですね。グウタラ性を棄てちゃってやっていくと
いうのが、もうとても悲しいようなつまらないよ
うな気もするし、捨てなきゃならない時期だとも
思うし、……その捨てるためにはやっぱり何かそ
の禪にでもいったらいいのかしらとも思うし、そ
ういって…(ハァ) 捨てるんじゃなくってもっと
本当にとらわれない気持ちにならずにちゃいけない
と思う。ですけど……

(Clarification of Feeling)
T17: もっととらわれない、そういうことにこだ
わらないで自由でいられるようなそういう気持ち、
(Ambivalent Attitude Toward Self)

C17: つまり自分の生活をちゃんと立てていって
も、何もそのグウタラさっていうものをじゃなく
て、もっとそうなんて言うかだから本当にこの
間、彼によく喋った時の気持ちのように、そのもっ
と自分の愛情をおしひろげて行くことができ
れば、きっと自分でも悲しくないだろうと…(ウン)

思う。だけども……なんだか知らないけれど…
(Clarification of Feeling, Inaccurate)

*T18: 今そんなこと考えた位じゃおさまりがつ
かないような、
(Incomplete Agreement)

C18: ええ、わか……分らない
(Simple Acceptance)

T19: 分らない、はい。
(Problem)

C19*: それであの、それと別に、何か仕事があ
ごく面白くても大変で大変で(エエエエ) すご
くいやいやいやいやと夜中に叫びだしたくなっ
ちゃうんです。(ハァ) それでこれと関係ないんで
すが、この前言うの忘れちゃったんですけど(ハ
イ) すごくあの夜ねると気持ちが悪くなるんです。

注 *T13,14: これは一応無難な反応である。こ
れらの反応は、それに続くC13, C14によって、
同意され、更にその問題を発展させていくCの
態度を助けているのである。

*T15: このTの反応はC14を充分に受容しては
いない。「自分の中のそうした問題の態度をす
て去らなくちゃならないとは感ずるけれどそれ
は何か悲しい気がするし、どうもそうするはっ

きりした決意がつかかねるんですね」とでも明
確化すべきであったろう。

*T18: ここでの反応は、C17が混乱したの感
情的表現である故に、困難である。だが、「そ
うしていくことが大事だという気がするけれ
ど、どうも自分でもはっきりしないわけなん
ですね」とでも応ずれば、C18は、このような半
ば拒否的な発言とは異っていたであろう。

それで(ハイ)大抵計ると熱があるんです。(ハイ)それで何か頭が枕から落っこって、後へ持つていかれてしまうような(ハァ)それももう何かずうっとこういうふうに(身振りをして頭を後方(Simple Acceptance)にふる)なっちゃう気がするんです。(ハイハイ)そういうのがよくあるんです。それで何かその始めのうちはそうだったんですけれども、なんとなくよく直っちゃったからまあいいと思っていた。そのうちだんだんいやいやいやいやって叫びださなきゃいられなく(ハァ)それは何だか分からないんですけど、それを直して頂きたいんです。

(Restatement of Content)
T20*: はあ、なんかこう頭を後へ引っばられて行くような、後にずうっと行っちゃうような……

(Problem)
C20: はあ、いくら枕を高くしても高くしても(ハァ)落っこっちゃう気がする。(ハァ)それですからそれがもうとてもいやでしょうがない。

(Refraction of Feeling)
T21: そういうのがなくなればいい。

(Agreement)
C21: ええ、無く…無くしたいんです。それでワァといって、こうなんかすごくアワワワ…いやいやいやって言いたくなるんです。(ハァ)それやると……とたんに……前に原稿が入らなかったとか、そんなことを思いだしたりすると、いやいやいやと(ハァ)言いたくなっちゃうんです。

注 *C19, T20: このCの言葉の最後に、Tの返答を求めTから何か教えてもらいたいとの意図がみられる。Cは自分の症状について明確な解答と、その治療とをTに要求している。それに対してTは、直接の解答を与えることなしにC19の内容を繰り返す形で応じている。この結果C20において、その症状についてより詳しい説明がなされ最後に自分の思い通りにならないような時に、このような症状が起きてくるという、C自らによる一つの解答が得られている。何等かのインフォメーションをが求めてくる場合、原則として、すぐそれに答えることのできる場合はめったにない。たやすく解答を与えてやる

(Restatement of Content)
T22: はあはあ、何か自分の思い通りにいかなかったような時に、

(Agreement) (Problem)
C22: ええ、この前一番初めにきた時、すごく今までよりもちょっと仕事が困難で、できなくてできなくて(ハイ)どこをどう探したらいいのか分らないような時だったんです。(エエ)何かいやいやと本当にいやなん…(ウンウン)…でもこういうことはあんまりないんです、仕事の上では。だけどとにかく夜になると。(Problem-Negative Attitude toward Others) 今まではだからそのこわい課長さんがいやでいやで、いやいやいやって

いうのも多かったわけです。(ウンウン)それで怒鳴られたりすると、途中真直家に帰って来たくないんです。でみんなで喋るんですけど、そうするともう立ち上るのがいやになっちゃって、いつまでもそこに坐っていたくなっちゃう。(ウン)そうすると帰えなくちゃならない、なんないという

(Negative Attitude toward Others)
のがいやだし、で帰ってくると、怒りゃしないけども、そのあんなに遅く帰ってくるから、またくたびれるんだとかいわれるのがいやだし、……

(Clarification of Feeling)
T23*: 何かこう自分の気持ちをお母さんがちょっとも理解してくれていなくて、勝手なことをいうような、そんな気持ちが……

(Agreement) (Ambivalent Attitude toward Others)
C23: ええ、向うのいうのはすごくよく分るし、

ことは、それが誤ってはいない場合でも、Cの依存的な態度を進展させ、治療時間中のCの自らに対する責任を妨げてしまうからである。解答は究極的に、クライアントの中から生れべき性質のものなのである。

*T23: この明確化は、ややCの表明している感情から先に進みすぎているかもしれない。「勝手なこと」という言葉が強すぎるのである。しかしC23によってみると、全くCの感情からはずれてはいなかったことが分る。CはC22の線にそって更に深く話題を進展させているからである。このあたりから、Cと母親とのAmbivalentな感情が表明されてくる。

(エエ) 私が帰ってきてほしいと思うでしょうけれども、でもだからといって、……家に帰ってきたから……いやじゃなくて面白くていいんですけども、だから毎日行けば、自分だって帰ってきてたくなるんです。(笑) (エエエエ) だけど行きたいときには行きたいと思う。思うし……で母はし

(Simple Acceptance)
Attitude toward Others)
よっちゅう言う、別になった方がいいんじゃないか、いいんじゃないかと言うんです。(ハァ)別になりたくなんかちっともない。(ハァ) (涙ぐんで話す) 別になりたくないっていくらいっても、それを又言われると、いやでいやでいやで(ウン) いやいやいやいやと……(ウンウン) 叫びだしたくなっちゃう。でもすごく向うは、あの自分のいることが邪魔だと思っているんです。(ハァ) 思っ

(Restatement of Content)
てなんていやしないのに思っているから…… (涙で声がかすれる)

T24: お母さんの方で勝手にそういう風に考えている。

(Agreement) (Acceptance of Others)
C24: ええ。ええそれから1つにはとってもしや

(Problem)
なんだろうと思うんです。家に帰ってきてどなるから私が。(ハァハァ) それもいやはいやだろうと

(Simple Acceptance)
(Ambivalent Attitude toward Self and Others)
思うんですけど、家にいる時位どならなきゃいられないと思っちゃうんです。

注 *C25: クライエントの自由な感情の表現は、C25—C29にかけて、自己と母親との間の感情的な問題…恐らくはクライエントが常に直面して、しかも解決を見だし得なかった問題……に触れてくる。家をでたくなるクライエントの気持としかし母を離れるのは淋しいという気持が交錯する。母への感情は、基本的に依存と愛情を求める感情である。しかしそれは子供の時のように、すべて母によって満されるものではなくなっている。この点に関してこのクライエントの感情の力学は、次のような形での解決を求める。結婚して家をでるという合理化の形で、母へのアムビバレントな自分の気持を

(Reflection of Feeling)
T25: 家に帰ってきた時ぐらい、そうしなければ

いられないような気持になっちゃうんですね。

(Agreement) (Problem)
C25*: ええ、すごく家にかえる……つまりどなるというのは親愛の情の表現だと思っ

(Simple Acceptance)
(ウンウン) そんなこといくらどなったって……

どなる(泣きだしながら、強い感情をこめて話す)
(Ambivalent-Negative Attitude toward Others)
……どならないんで……どならない程他人じゃないと思っ

(Clarification of Feeling)
T26: うんうん、そういう貴女の気持をお母さん

ちっとも分ってくれないような……

(Problem) (Negative Attitude toward Others)
C26: よくあのよく小さい時から、みんな親不幸だ親不幸だっというんです私の事を(ウンウン) お母さんに対してちっとも孝行する気がないって

(Clarification of Feeling)
いうけれど……ちっとも孝行なんてしなくてもいいもんだと思っ

んです。孝行しなくちゃなんないなんて、随分、なんだか親子ぢやないみたいだと思っ

んです。(やはり泣きながら話す)
(Agreement)
T27: もっと自由な許されていいというそういう感じ、

(Agreement)
C27: ええ (強い感情をこめて)、それで私達本

(Negative attitude toward Self and Others)
当にそうだったんです。……だけどいつの間にかだんだん大きくなってきちゃって(ウン) …だか

らだんだん少しは孝行しなくちゃいけないんだと

整理しようと試みる半面、結婚したい相手から愛情をうけとることを強く期待しているのだ。

「家をでるための方便として、」……という言葉はこの解決を求めて実際には解決が得られていない感情の表現なのである。あとで(C71—C76) 表明される、大人になることへの抵抗も、母から必然的に離れざるを得ない、感情的に成熟していく自分に対する抗抵であり、同一の問題を違った側面からとりあげているのだ。C88に至って、この問題に関しては、「本当は(母と別の家にすむことは)できないことですね、だから、母の影響からのがれたい……」という形での自らの感情への洞察となるのである。

いう気もするけれど。……(エエ)どうしてもだから、その小さい時には孝行しないというような私達だっというのがよかったけど、だんだんいつの間にか少しずつ離れてきちゃって、(ハア)お母さんの心を全部みたくも私じゃないし、私の心を満すのもお母さんじゃない(ウンウン)というのが

(Clarification of Feeling)

T28: なんかこう、まあ前と違っちゃって、そういう風にお互同志完全に満しあうっていうか、信じ合うというか、そういうことができなくなっちゃったような……

(Agreement)

C28: ええ、つまりその義務だっというような気持がでてきちゃった。(ハイハイ)でも、今は

(Simple Acceptance)

そんなこと考えなくても、割に仲良しなんですけれども、(ウン)もう5年位前には、とつてもそれで家からでていってやりたくなくて、(ウンウン)それでやはり今のこの泊めて頂いているその御友達、C学院の時のあの先輩なんですけれど、すごくいいお友達、その人の所に10日間位家出して、……家出たって、家にちやんと電話かけるんですから、そんなあの合法的な家出なんですけれども(笑)。でそれでそこに10日間位いたんです。

(ハアハア)その彼がでてきて、それでその人の所にとてもいきたかったし、だからその人の所に行きたいことが……じゃなくてその前も、その前にこの間お話ししましたその家庭が持ちたかったために失敗したといった(エエ)その時に、完全

(Insight)

に家をでていく為の方便だったと思うんです。その次にこの間の彼がでてきた時も、やっぱりでていきたかった。(ハア)……今度は方便ではないまでも、とにかく……ただその人達がいいからいきたいってだけの気持ちじゃない。

(Simple Acceptance)

(Clarification of

T29: うん、何かもつと別な、……やつぱりどこかにこうお家から離れたい気持ちもあったんじゃないかと(エエエエ)思われるわけなんですわ。

(Problem)

C29: それでその人にあつてからすごくよくなったわけなんです。そういう気持ちがなくなっちゃったわけです。(ハアハア)ですから、家にいるのも

ちっともいやじゃないし、それで又、お母さんと仲良くなっちゃったし(ウン)だからいいと思ってたんです。(ハイ)それで自分としては、その人にもしなだったら家に、2人きりだから、きてもらって、どうせ将来はあの、お母さんと一緒にいなくちゃならないんだし、あのう向うも一日家にいる仕事だから、私も仕事をもって、それでお母さんに家で何かしてもらって、暮していったら一番幸だと思って、始終思いつづけてきた。だけど向うはそういう風には思わなくて、向うはもっとも……本当に私を単に愛しているとか愛していないとかいうことが、それが私に理解がつかないのが悪いんですけども、(ウン)どうしても自由でいたいっていうんです向うは。(ハア)それが他の人にはみんな分るんです。私にだけその自由でいたいって気持ち分つても分らないんです。(ウンウン)で他の人が言うには、その私が彼のことを悪い悪いって言うけど、悪いんぢやなくて、もつと何か、そういう常識で判断しちゃ可愛そうだっというんです。(ハイ)……だけどとにかく私はそういう風に思って、だから、この間もよく話したけど、めぐり合せが悪かったからお互にすごく不幸だった……まあその時はとてもよかったにしても不幸だったんだというわけで、それはよく分るんですけど。……その事と、分らない

(Problem)

んです。とにかく家に帰ると又いやになるから。

(Ambivalent Attitude toward Others)

今日でも、最も現実の問題として、今の先輩の家からね、いても、あのお洗濯だつて具合が悪い

(笑)それから家に帰らなきや着るものもなくなっちゃうから困るし。でもその人といれば、とにかくよく喋って、向うのこともいって、それでだんだん状態がよくなっていくことは確実だと思うんです。(ハイ)でもそうかといつても、2人で暮したから、やっぱりせつかくのいいお友達を失ってしまうことになつたりしてはつまらないし、

(ハア)あの今三日や四日間その人の所に行つているのはいいけども、2人で一緒に暮すというの

(Simple Acceptance)
はお互様によろしくないと思んです。(ハアハ
(Ambivalent Attitude Toward Others)
ア)で母は、今度自分がでていく、でていくとい
って、どこかへ家を探してきてとっているんで
すけど、そんなこといったって現実的にお家賃払
うのだって大変だし(エエ)私はくたびれちやうか
ら家にいた方が、いてもらった方がいいし、1人
だったらすごく淋しいと思って、ちっとも別に1
人になんかなりたくはないんです。だし……家に
かえるといやになるだろうということは思うし
*(Clarification of Feeling)
T30：なんかも母さん自身のそういう考え方が、
貴女にはぴったりしないような所もあるけれど、
大体まあ気持は分るわけなんですね。
(Ambivalent Attitude Others)
C30：ええ、すごく両方ともすごく分っているん
ですけれど。だからほんとは言わないで、向うは
がまんしているんでしようし、私もがまんしてい
るんだけど、でもほんとにあんまり仲良しすぎて
(ウン)よく分っちゃうしそれからお互いに向う

がうけた傷っていうのがその人が受けた以上に口
惜しくって、いやでいやでたまらない。(ハア)
ですから家に帰って話すともう、何かすごくもっ
と憤慨しちゃうんです。いろんなこと、だから話
したくないしとも思うし。

(Reflection of Feeling)
T31：貴女が何か痛手をうけると、それがお母さ
んにも、貴女以上に敏感に感じちゃうんですね。

(Agreement)
C31：ええそうです。向うがそういうふうに向う
るとすごくいやなんです。

(Reflection of Feeling)
T32：貴女の方でもお母さんの気持を充分に感じ
ちゃうんですね。

(Agreement)
C32：ですらないやで、どなっっちゃうんです。

(ハアハア)だけどそうすると、そんな話聞きた
くないとか、何か自分がそれで痛いからいやだ。
(Ambivalent Attitude Toward Others)
(ウンウン)で何かそれで、私の中にそういうグ
ウトラ……な所があるが、あるという事を認めて
くれないだろうかどうかわからない。グウトラ……

注 *T30：クライアントの感情の力学を解明して
みればC25の註でのべたようになるであろう。
だが治療者は、このような理解 — 問題点につ
いての解釈 — にもとづいてクライアントにそ
の問題を指示したり、解決方法を教示したりす
るのではない。前述の力学は、この治療面接の
最後に至って、治療者としてではなく、クライ
エントの人格の力学の再構成者として把握しよ
うとする時に構成されるものである。しかし治
療者として、その治療の人間関係の中にある限
りにおいて、彼はクライアントと全く同じ枠
の中におり、そうして初めて、相手の全人格的
な受容が可能なのである。分析学的な見地に立
つ人々も、解釈は最も慎重になされなければなら
ぬと説くが、非指示的な立場に立つ場合、治
療者の側から人格や感情の力学を構成し、それ
を相手に指摘してやること(解釈)は、非指示療
法の原則にもとるものなのである。この構成乃
至解釈は、治療者がクライアントの世界から離

れてしまっていることを意味する(序論参照)。
事実として、Cの感情的な動きの全面的理解と
受容に専念している限り、Tは自らの枠組にも
とづいて、Cの世界を解釈している違をもたな
いのである。非指示的な立場に立つ限り、洞察
とは、Tの解釈や指示によって生ずる構成物で
はない。Cが自らの世界を今までとちがって自
由に表明する機会をもつ際に、新しい感情的
事実に直面し、それを自己の体系の中に包含し
うるに至り、それに伴って自己体系の拡大変容
が生ずる際の、随伴現象にすぎないのだ。洞察は
この意味でTがCの外から指示を与えてやる時
に促進されるものではなくて、TがCと全く同
じ次元におり、Cを全面的に受容しうる時に、
自然な過程としてCに生じてくる事実なのであ
る。T30において、もし解釈を与えようとする
れば可能かもしれない。だがTが拙いながら、こ
こで困難な反射と明確化の方法でに反応してい
る基本的な態度に注意せねばならない。

私の中のグウタラというものに気づかないだろう
と思うんです。それで、グウタラ以外の私というの
は母の影響を受けているんだと思うんです。

(Reflection of Feelings)
T33: お母さんには、貴女のそういう一面とい
うものを、どうもよく分らないんじゃないか。

(Agreement)
C34: ええ、そうだろうと思うんです。でグウタラ
だってことが分って貰いたいんですけど。

(Clarification of Feeling, Inaccurate)
T34*: うんうん、自分にはお母さん以外の面があ
るんだということを、お母さんが理解してくれたら、
そういう問題も少くなるとまあそういうよ
うに考えておられる。

(Disagreement)
C34: 問題は少くならないかも (ハイ) 知れない
ですけど (ハイハイ) わかんないんです。

(Clarification of Feeling)
T35*: はい、とにかくそういう点があることを理
解してもらいたい。

(Agreement) (Problem, Ambivalent Attitude toward
Others)
C35: ええ、だから、それはつまり母に言わせれ
ば、捨てちゃわなくちゃいけないわけなんです。

だからもう何も、彼とあうわけじゃないからいい
けど、…… (ハイ) とにかくそのお友達とどこか
遊びに行き遅くまで帰って来なかったり、そう
いうのいけないというんじゃないから、他の母、
お母様たちよりずっといいんですけど、(ウン)
もっとちゃんと何曜なら何曜に皆で映画に行っ
てきて、それからお喋りをして帰ってきてというよ
うに、決めたらいいじゃないのというけど、……

(Problem)
だけどそうじゃなくって、パーッと行きたい時
に行きたい。(ウンウン) 何日に決めたらと (ハ
アハア) いいじゃなくって……

(Clarification of Feeling)
T36: そうこの決めて行くということは、自分の
気持ちにそぐわないわけなんですな

(Agreement) (Problem)
C36: ええ、でもそうかといって、その人と会う

ときは、決めて何日会うというのは平気だからそ
……うすると今度、帰ってくるのがいやだったり
またそれでふらっと散歩にどっかに行ってみたか
ったり、(ハイ) すごくそういうようにしたい。

(Insight)
(ちよっと間) で今までは、私が学校をでてから
数年間暮してたのが、そういう生活ばかりだっ

いたんだからだろうと思う。それを振り棄てなき
ゃあけない時期だと自分では思うんですけど、
それより前に、もっとそれが私の本質だという気

(Problem)
がしちやう。どっちだか分らないんです。(ウン)そ
うかといって、そんならそれでもっと徹しきっち
やうということは、そんなら今の仕事をしないで

でそれをやっちゃうということは、とつてもでき
ないんです。(Simple Acceptance) (Problem)

(ハアハア)今の仕事をするのは仕事
自体がすごく面白いし、私の誇りでもあり、……

つまり私がかもし虚栄心がなかったならば今の仕事
にそんなにしがみつかないかもしれない。(ウン

Acceptance) (Problem)
ウン)で始終自分で自分の虚栄心のためだ、彼の
ことも私の虚栄心のためだ……何でもそういうふ

うにおもえるし(ウン)彼のことも愛しているん
じゃなくて、自分のためにこの人にももらいた

いから、自分の必要のためだ、必要のためだと、
今までもしょっちゅう考えていたんです。……

ですから向うにも悪いと思うし、ひけ目もあるし
(Insight)

始終そうおもっていたんですけど、この間の時
ああそれじゃあいけなかったんだ、悪かったんだ

(ウンウン)と思ったのに、また何だか愛になっ
てきちゃったんです。

(Clarification of Feeling)
T37: うん、何か自分の中に、こう色んな矛盾す
る気持ちがあって、自分でどうしていいか分からなく
なる……

注 *T34: この明確化は、相手の表明している感
情の中心点を外れている。母が理解したら、問
題も少くなるというのは、Tの考であってCの
考ではない。当然それに対するC34は、否定的
な形となる。T34のような反応は、Tが正しく

理解してくれないとの印象をCに与え、Cの感
情の自由な表明を阻止するものとなる。

*T35: この明確化もおしつけがましく、失敗で
ある。

(Agreement) (Insight)
C37: ええ、それで、だから彼がエゴだエゴだというけれど、私の方がよっぽどエゴだと思いません。(ウン) 自分のエゴの追求のために何でもかんでもおいときたいから。(ハイ) だけど自分の仕事は面白いし、仕事が面白いというのは、あながち、虚栄心だけじゃないと思うんですけど(ウン) でもやっぱり、もし本当に私の中からそういう虚栄心とか名誉欲とかいうものを除いちゃったらどういうことになってくるのかしら? ……

(Problem)
で前の時もそういうものを名誉欲かそういうものを棄てたいと思って、円覚寺に行きたいと思ったんです、数年前に。(エエエエ) けどもその時は何かもう自分の色んな欲望というものが、もういやでいやで、というより苦しくて、もう何とかそれを捨てるためだったら何とかしたいと思っていた所に彼がでてきて、そんなことしたってだめだっていうし、そのうちだんだんよくなっちゃって、自分でもそんな色んなこと捨てなくちゃいけない、いけないという気持ちが当分薄らいじゃったわけなんです。でも今やっぱりどうしても捨てなくちゃいけないんだと思う。

(Insight)
T38*: 捨てなくちゃいけないというのは、どういう気持ちをですか?

(Answer)
C38: その名誉欲とかそういうもん……

(Clarification of Feeling)
T39: はあはあ、そういうものを自分ももっていると、やはりいつまでも苦しまなくちゃならないんじゃないか(エエ) そんな気持ちがなさるわけですわね。

(Insight)
C39: そいでその名誉欲だって、私なりの名誉欲で、大人がみたら、今の私を……もっと自分の名誉を……ふみにじっているようにみえると思うんですが、(ハイ) 自分では。だから本当の大人達が見たら私のしていることはすごく勝手だし、な

んかあやまちだと、この少女のおかしたあやまちだということになっちゃうだろうと思うんです。

(ハアハア) 向うの両親も家の母も少年少女がおかしたあやまちだっているような感じしかもってないのかもしれない(ウンウン(……でもそうだからこそ随分いい親達だと思えます、でそうでなかったらすごく怒っちゃって(ウン) 両方とも勘当かなんかになっちゃうとこかもしれない。(ハイハイ) だけど自分では、そりやそうなんでも、誤ではないと思ってるんです。けど自分が少女だということは確かだと思っている。でもその少女……少女時代というものとも別れなきやいけない(ウン) と思うんです。

(Clarification of Feeling)
T40: それよりもっとこう大人らしい、そういう態度を身につけなきゃならない時代(エエ時が…) 時がきていると(エエエエ) 感じられるわけですね。

(Agreement)
C40: ええ。……(中略。ここで語られている感情は、女学校にいらっているときは、とても大人のように感じちゃっていたが、実際の少女時代は女学校をでてから初まったと思うこと。その少女時代の終りがもうきていた筈なのに、本当はまだ終わってなかったこと。前に俳句をやっていたが、俳句の先生がなくなって、そのお葬式があった時自分の俳句に対する関心もなくなって、以前の自分と変ってきたこと。今まで俳句に自分の1つよりどころがあったが、もうそんなものでは自分の感情がおさまりがつかないこと。などである。)

(Insight)
……自分の少女時代が終わっちゃったんだということが分る。でもそれが他のことと結びつくんだということは分らなかった。でも……今たしかに終るんだということが分る。だけど終らしたくないと思う。

注 *T38: ここでTがCの内容を十分に理解できなかったのは不注意である。Cは明瞭に自らの感情を表明しているのだから、それをうけて、虚

栄心とか名誉欲とかいうものをとりのぞいてしまったら、自分でもどうなることか分らないという形で明確化すべきであったろう。

(Reflection of Feeling)
T41: うん、一面終らしてしまいたくない気持がある。……なんかそういうなつかしさがのこっている。……

(Problem-Insight)
C41: もし本当の大人だけになっちゃったら、すごく話らないと思うんです。

(Clarification of Feeling)
T42: 一面では、大人になる時がもうきていると思いつつも、なんかまだそういうものから離れきれない様な、こう…淋しさみたいなものがあるわけですね。

C42~45: (中略。ここでは、以前の自分にとどまっていたという感情が更にくわしく語られている。彼に対する感情を自分の中にとどめておきたいことなどもその1つである。だがここでやはり、どうしても結婚したいといった以前の気持とは変っている自分を発見している。どうしても結婚したいと思っていた自分は、打算的でエゴイスティックだったとの理解があらわれる。そのあとで以下にでてくるような、自己の問題になる諸点が語られ始める)

(Problem)
C47: それから私は自分のことで、罪を意識することがひどくきびしいと思うんですが、その反面すごくあまいんだろうと思うんです。(ハイ) 自分に対してもすごく自分を責めて、だからそういうところを知っている友達は、もうそんな責めてばかりいて、もっと自分をかわいがらなきゃいけないのよなんて言う人もいる。(エエ) それからすごくあまくって、あの子にはそのこわい大人が必要だって大人達はいう。だけどお友達みんなそういわないんです。すごくあなたに必要なのは、やっぱりもっとなんか心のより所になるような人なんだと(ハアハア)いつでもみんな言うんです。

(Restatement of Content)
T48: はい、自分で反面でこう責める所があるかと思うと、なんか、どこかであまいような所もある。

(Problem)
C48: すごくどっちかだ、両方だと思うんです、(ハアハア) だけど、……どうしたらよいか分ら

ない。……(ちょっと間)……だし、すごく元気になっちゃう時もあるし、あんまり気分がむらがりすぎるから……

(Simple Acceptance, Restatement of Content)
T49: うんうん。すごく気分が動揺して……

(Problem)
C49: 始終変わるんです。(ハア)……でちょっとのことですぐ悲しくなったり嬉しくなったりするのは、どうしてだか分からないけど、そういう自分をなるべくよしにしたい。(ハイ)しなければ暮していけないと思うんですけど、それはまたすごく悲しいし、そうかといって悲しいとか悲しいとかいいう前に、すぐ動揺してしまうのは事実だし……だからどうすればいいか分からないんです。

(Clarification of Feeling)
T50: うんうん、自分でそんなように、色々あっちへいたりこっちへいたりしている自分をみていると、どうしていいか全然分らなくなっちゃうんですね。

C50: (省略、友人と話していても突然話の筋とは違ったことを言いだすので、Cと話しているときとまどってしまうといわれることが語られる)

(Clarification of Feeling)
T51: 他の人に何かこうついて行けない所がある自分の中にあるわけなんですね……

(Agreement)
C51~C52: だろうと思います、知らないんですけど。(省略。……彼と話している場合には、向うもぱっと変ってしまうからかまわない。そういう面で彼と共通な所、結びつく所がある。友達にいわせると、自分にはひどくいらいらさせる所と安心させる所と2つの面をもっている。その二つの面があることをよく知っている友達は許容してくれるし、自分でもそれが自分の本質だと思う。今から新しい自分になっていくには、その本質をすて去らなければならぬとも思う。だがそれは自分の本質じゃなくて、過去の自分の生活(俳優をやっていたことがある)で身についたものかもしれない)……分らなくなる。)

(Clarification of Feeling)
T53: うんうん、何か今までの自分をふり棄てなくちゃならぬとも思うけれど、もし本質的なものだったら、それに別れちゃうのはつらい、とても

つらい、

(Agreement) (Problem-Insight)
C53: ええともてつらい。だけどそういうものを
ふり棄ててみればいいんだろうと思う。思うん
ですけど、ふり棄てられないだろうとも思うんで
す。

(Clarification of Feeling)
T54: とにかく何とかそういうものじゃない、こ
う安定した、もっと動揺しない自分というものを
作りたいと思う

(Agreement) (Problem-Ambivalent Attitude toward Self)
C54*: ええ、そういう動揺しない自分というのは
お母さんの影響だと思えます。(ハイ) だから
動揺しない自分は本当ではないとも思えます。

(ハイ) だからつまり私は詩人だと自分でも思っ
ているわけです。1つも1行も書かなくても詩人
だと思ふ。そういう私の中から、そういうその詩
の世界というものをとりのぞいてしまったらいい
んだろう(ウン)と思えます。けども、だった
らずいぶん悲しいとも思ふし。

(Clarification of Feeling)
T55: うん、自分の中のそういう詩の世界を見棄
ててしまったら、自分は何かこう空虚になっちゃ
って、何にもなくなっちゃうんじゃないか……

(Agreement) (Problem, Insight)
C55: ええええええ、だけど…そうだからといっ
て、そればかりでいかれるかといったら(ハァ
ハァ)いられない。ととても苦しくて。(省略
……ここでCのいう詩の世界に関する追求がなさ
れる。……この2・3日、前とちがった純粋な意
味でお芝居がやりたくなった。前にお芝居がやり
たかった時は、出世したいとか自分を楽ませる
ためとかいう手段にすぎなかった。今はもう手段
としてやる気はなくなった。自分の本質にあった

ものだという意味でやりたい。でもそういう世界
と別の、仕事の世界も面白い。今の仕事にうちこ
める方が、ずっといい。やっぱり面白いし、やり
甲斐があるし。自分が今の仕事についてのも、そ
の面白いということと、自分の虚栄心を満足させ
てくれるし、満足して今の仕事を選んだ。それは
それでいいが現実的な世界と詩の世界と、どっち
かにしなかったら苦しくてたまらない。でもどっ
ちかにするのはいやだ。全然わからなくなった。
今までは、そんなに分るとも分らないとも思っ
ていなかったのに、喋っていたら、なおさら分らな
くなってきた。)

(Reflection of Feeling)
T56: はい、そうして話しておられるうちに、だ
んだん混乱がひどくなってくるような……

(Agreement)
C56: ええ、でもたしかに……それ以外に……
(Insight)
やっぱりそれが本当だった。この2,3日で、色ん
なふうに考えが変わっても変わっても、やっぱりこの
問題が最初からついている事で(ハイ)その問題
のために、色んな事件がやっぱりそのためにで
てきたと思えます。(エエ) だから表面は色んな
(ウン)あの課長さんのこともあるし、それから
彼の話もあるし、色んなことがあっても、そこが
一番の根本だと思えます。(ウンウン)その
大きな転換期に立っているのに、自分でそれが処
理できない、ええ、だし、もうしなくたって、
でもそりゃもうしてるになっちゃう、することにな
っちゃうんだろうと思えます。

(Clarification of Feeling)
T57: どうせしなくちゃならないことに……
(Agreement) (Insight)
C57: なるだろうと思えます。(ハイ) だけど

注 *C54: ここで、自己並びに母親に対する、
わりきれない感情が語られている。以前の自己
と将来の自己を、詩的な世界と現実の世界、あ
るいは、母に結びついている自己と、母から離
れていく自己といった二つの対立する概念で考
えようとしているのである。

*C55~56: C54にのべられた、自己の内的な葛

藤がさらに究明される。そしてC56において結
局自分の最近の色々な問題は、変化しつつある
自分、転換期にある自分という同じ基本的な問
題から生じているのだという洞察が得られ、そ
の解決がなされねばならぬと決意するに至るの
である。

どうせしなくちゃならないことだなんて、思ったこともなかったのに、どうしてそんなことになっちゃったのかわからない。とにかくしなくちゃならないんだ、そのことのために起こってきたすべての事件なのだ(ウン)と思って……(ハイ)思います。

(Interpretation)
T58*: まあそういう自分の中にある問題が、色々なことに関連して、色々な混乱をひきおこしたんじゃないか(エエエエ)とそういう風に考えられるわけですね。

(Asking for Information)
C58*: ええ……、(やや長い間)……でも先生だったら、どうお思いになりますか? ああ……自分はでっちも変だと思わなくても、先生だったらどういう診断を下してどういう風にして下さいますか。

(Structuring of Therapeutic Situation)
T59*: ええ、あのね、私そういう意味での診断を下したり、あるいはどういう風にささいって申し上げる立場はないと思うんです。ここでね、今まで貴女のお話して下さっているようにね、(エエエエ)自分自身の(エエ)気持ちを、貴女自身で(エエエエ)こうながめれたりね(エエ)ある

いはお話しているうちに(エエ)何かこう、

(Insight)
C59*: ええ、自分で悟るんですね。(悟ルトイウカ) そのために先生がいて下さるわけですね。い(Positive Attitude toward Therapy) つでもここにくるとあとからすごく良くなるからいいんだらうと思うんですけど、(ハイ)でもど(Asking for Information) うしたらいいかわからない時(ウン) やっぱりそれでは診断を下して下さらないんですか?

(Question)
T60*: ええと、あのそういうことが何か貴女として、何かお役に……貴女自身の役に立ちそうな気がなさいますか。

(Answering Question)
C69*: 先生がおっしゃったって、きっと自分のいいと思う通りにするだろうと思うんです。(ハァハァ) 今までもすごくみんなに相談して、それでみんな、こうこうしたら……それは止したらいいんじゃないのとか、こうしたらいいんじゃないのとか言ってくれて。(エエ) 結局の所は、どうせ自分のやりたいようにやるから(エエエエ) だから随分Cさんが意志がついのねっていう人もいるし、(ハイ) そんなら人に相談しなきゃいいのっていう人もいるし(ハイ) ……だけど どうしても相談せざるを得ないし、いろんなことを

注 *T58: このTの反応は、やや解釈といわれるものに近い。明確化と解釈はこのような言い方あっては紙一重である。もちろん、この解釈も、C57の洞察にもとずいて、その言葉を用いての解釈であり、その点で非指示的ではある。だがここでは明確化の形をとって、「何かあなたの直面している問題の焦点が、ここにあるという気がなさるわけですね」という反応が、より望ましかったであろう。

*C58: Tが、T57にみられるようにややCから離れて反応していることが、Cに自らの今までの洞察や理解への評価をTに求め、指示や診断を求める態度をここで表明せしめていると考えられる。

*T59: ここでは単に「診断を下してもらいたいん

ですね」と反射すべきであったかもしれない。治療者の意図は、ここで非指示療法における治療状況の設定、場面構成をすることであったが、この箇所でするものが適切であるかどうか、Tにも明瞭ではない。

*C59: Cはやはり、自分だけに治療場面での決定の責任をとることに不安を感じているのである。

*T60: ここでの反問は、自己指示、自己決定に不安を感じているCに、その気持ちを追求していくことを期待しているのである。あくまで、C自らの問題の方向づけをCに委ねるTの態度が、次のC60に見られる如き問題の発展、解決をひきだすのである。

向うがいつてくれているうちに、自分でサッと
(ハハハハ) どうしてもしなきゃならない事が分
ってくる。多分とって先生がもし、お捨てなさい
といったら、きっと、捨てられませんというに
相違ないだろうと思います。

(Approval)
T61*: はい、やっぱりそういう意味で、貴女自身
が決めていかれることじゃないんでしょうかね、
(Structuring
of Therapeutic Situation)
貴女が今までやってこられたように。それでその
ために、貴女のお気持ちにそってできるように私が
お助けするというのか、その気持ちにそって動いて
行くというのか、そういう役割を、私がするんだ
と思います。…… (かなり長い間、30秒ほど)

(Problem)
C61: でも、やっぱり捨てなくちゃいけないにし
てもなんにしても、今は捨てられなきゃ仕方がな
いし(ハイ) それだったら もとの木阿彌でまた
救われるチャンスを逃しちゃう事にもならないか
と……

(Restatement of Content)
T62: ああ、そういう心配がある、(エエ) 何とい
うか、せつかくそういう時期にきているのに、又
もとの木阿彌になっちゃうんじゃないかという心
配があるわけですね。…… (ちょっと間) ……

(Problem)
C62: だから結局、やっぱり何かの力によって、
彼を愛しつづけるという気持ちにならなかつたら、
とってつまらなくて、つらいだろうと(ハハ
ハハ) 思うんです。

(Clarification of Feeling)
T63*: うん、何というか、どんな力でもいいから
そういうもので自分のより所となるような愛情を
つないでいきたい。

(Agreement) (Insight)
C63: ええ、でもそれもやっぱりしなければなら
ない。愛さなければならぬっていうことで、ち
っとも誰の為にもならないことなんでしょうけど
それじゃあどうするかといったら(笑) どうにも
ならない。(エエ) それからももちろん、あのそう
いう何か高い所から高するといったって(ウン)
そりや、してあげようと思えばできるんでしょう
けれど、すごく何にもしてあげたくないし、あの
お祈りするだけしかできないと思うんです。(ウ
ン) 思うけど、そうかって愛するのをやめるとい
うのは悲しいし、(ウン) だけでも本当には愛せ
なくなっちゃうんじゃないかと思うし、愛さな
くなれば、なおさら悲しいし。

(Clarification of Feeling)
T64*: とにかく何かもう貴女自身としてこう重
大な岐路に立っちゃって、その中でこう身動
きがとれないような状態になるんじゃないか
と、そういうような不安がなおりになるわけだ
ね。

(Agreement) (Problem)
C64: ええ、もうすごく。だから何か分らないんで
す。(ウン) すごく小さい時から、平凡なしあわせ
ていうようなものに生きたい生きたいと思ってい
たのに、(ハイ) ちっともそういうのに、めぐり
合わないで、(ハイ) で今これから来るのかもし
れないのに、今度いやだいやだいてっているん
だと思うんです。今、本当に平凡な幸なんてち
っともほしくないと思うんです。だからあんなに自
分てその平凡な幸、平凡な幸と思ってきたのもや
っぱり嘘だったのかしら。(ウン) (中略)

注 *T61: ここでは、Tは相手の態度を是認して
しまっている。この態度は、それがいかなる場
合に用いられても、非指示的方法の原則からす
るなら望ましいことではない。評価や批判と同
じく、是認も否認も、決定の責任を治療者が持
てしまうことになるからである。ここでは、や
はり「自分を主体にしてやっていきたいと思う
んですね」とでも明確化すべきところである。

*T63: この明確化はまずい。「彼を愛しつづ
ける気持ちが続くなら、こんなつらい目にあわな
いですむだろう」という気持ちを単に反射してお
きたい。

*T64: この明確化は、相手の感情によく沿
っていたと思われる。C64の同意は、「全くそ
うだ」という気持ちが言葉の調子につよくあらわれ
ていた。

(Insight)
……自分の探しもとめているものと、自分のして
いることとは、いつでも違っていて、そういうも
のには、とうていめぐり合せそうもなかったし、
(ウンウン) 今もしここでそうすれば、そういう
ことがあり得るのかもしれないけど、もうそれは
ちっとも魅力のあることじゃなくなってしまって
……今初めてそう思うんです。

(Restatement of Content)
T65: なんか、貴女が探しもとめていた平凡な幸
というのは、全然魅力がなくなっちゃった。

C65: (省略, 平凡な幸が魅力を失ったことの説
明, そのあとTが電話で中座)

(Insight)
しょうがないですね今は。どうしてもしょうがな
い。

(Clarification of Feeling)
T67: はあ、自分で急に決定しようとしても、ど
うにもならないっていう……そういうお気持ちで
しょうか?

(Agreement) (Asking for Information)
C67: ええ。(やや長い間) でももしよその人だ
ったら、こんなに考えないでしょうか、それとも
考えるんでしょうか、

(Clarification of Feeling)
T68*: ああ 何か他の人と違って、自分は非常に
考え過ぎちゃうんじゃないかっていう気持ちがなさ
る。

(Agreement)
C68: ええ、すごくそうも思いますし、(ハァ)
(Problem)
それからあの私の周囲では割合みんな考えて……
ですからそれほど変っているとも思わないけれど
、もし大人達がみたらなんだか自分のやっくだ
らない事に、もうああでもないこうでもないとい
って、色んなこと言って、聞くに耐えないっても
う言うんです。(ウンウン) 母はもうすごくよく
分って、そうかそうかと聞いているんですけど、
そのうち聞くに耐えないって言いたしちゃうんで

(Asking for Information)
す。(ハァ) だからきっと先生だってそうお思い
になるん……(笑)

(Restatement of Content)
T69*: 私はそう思わないかって……ええ、私そん
(Giving Information)
なことはちっとも思いません。

(Problem)
C69: なんだか、とって大人達がみたら愚の骨
頂なんだろうと思う。思います。

(Giving Information, Reassurance)
T70: 私、そんなこと思いません。あの貴女のお
(Structuring)
気持、どういうお気持ちかなって思って、いつ
もおうかがいしているだけです。なるべく貴女の
御気にそうように私自身うごいていきたいと思
いますしね、そういうことを私いつも考えているわ
けです。

(Insight)
C70: だから、やっぱり大人がすごくいやなんだ
ろうと思います

(Restatement of Content)
T71: 何か、大人の世界というのが、とってこ
う憂鬱な、嫌悪を感じるような……

C71~76: (省略) ここで今までの世界から離れ
て、大人になっていく自分に対するアムビバレ
ントな態度が、迷いながら語られる。これは、自
らの母親に対する依存的な態度と、今後、自らの
力で立っていかねばならぬとの意識との葛藤の形
をとる。「大人なんてみんなつまらない。すてき
な大人なんていないとおもう」といった言い方で
大人への抵抗がのべられるが、「でも素晴らしい
大人だっているんですね」という言い方で、大人
の世界への肯定も表明される。そして「つまら
ない大人になっちゃうような気もするし……つま
らない大人にならないために、何とかしなくちゃ
ならないんじゃないでしょうか」といいます。……そのために苦
しむことがあってもしょうがない筈なんです
ね」といって洞察決意がそれにとまらうのである。最

注 *T68: C67の質問をうけて、Tはそれに答
えないで、その質問の底のある感情を明確化し
ている。この明確化が、大人達が自分をどうみ
ているかについてのC68の発展となっている。

*T69: ここではやはり C68の感情を反射して

「私も聞くに耐えないと思うだろうという気が
するんですね」と受けるべきである。一応その
ようにうけてからT70におけるような場面構成
に移るべきであったろう。

後にこの洞察は、「本来自分のなるべき姿に自然になっていく筈のもので、だから大丈夫なんでしょう」という点にまで達するのである。

(Reflection of Feeling)
T77: なんかそういう意味で……自然にそういうような形になっていくだろうから、そんなに心配しなくてもいいんだという気持もある。……自分が信頼できるような気持もするわけですね。……

(ちょっと間) ……
(Asking for Information)
C77: でも気が変じゃありませんでしょう。ああ家の母が気が変かどうか、うかがってきなさいって。(笑)

(Restatement of Content)
T78*: お母さんがそうおっしゃった。(エエ) 貴女自身どうお思いになりますか?

(Answer)
C78: ちっとも変じゃないと思うんです。

(Simple Acceptance) (Approval)
T79*: はいはい。私もそう思います。(笑)

(Insight)
C79: だから、何か母、母と私の問題を何とかしなくちゃいけないっていうのが、まずそれと同じことだと思います。

(Simple Acceptance) (Restatement of Content)
T80: はい。今まで貴女がおっしゃってきたね、

(エエ) その大人の問題……
(Agreement)

C80: それと同じだと思います。(ハイ) ですか
(Asking for Information)
ら別になるのがいいか悪いかどうでしょうか?

(Restatement of Content)
T81: ああ、お母さんとの問題についての解決を

(Asking for Information)
C81: ええ、先生が、示唆なさる立場じゃないっておっしゃるけど、(ハッ) もし私が他のお友達にだったら、始終何とかかんとか聞いてみて、そうじゃないとか、ああじゃないとか言ってくれるけれども、先生はどうお思いになりますか?

(Question)
T82*: 私ですか

(Asking for Information)
C72: 別になった方がよいかどうか……

(Restatement of Content)
T83*: 別になった方がいいかどうかね (エエ) ……

(Question)
…(ちょっと間) ……どうでしょう? どちらの方がいいんでしょう?

(Answer)
C83: そりゃあ、別になった方がいいと思います。(ハイ) でも別になったら、ずいぶん淋しくっても……(ちょっと間) 別になった方がいいんじゃないかしら?

(Restatement of Content)
T84: うん、まあそんな気持もおありになるわけね、

(Insight)
C84: そう思っていないですちっとも。(笑)

(Reflection of Feeling)
T85: ちっとも思っていない。はい。

C85 (省略) ここで、母と別々に暮らすことについての アムビバレンシイ が詳細に語られる。実際は、ちっとも別れたくないなどない。しかし母と一緒にいることが自分によくないということも、事実として分る。母と別になれば、すぐ日常生活で世

注 *T78~T79: ここでも質問及び是認の形で T の応答がみられるが、録音を聞きかえしてみると、C77は、「自分ではちっとも変じゃないと思っているが、母が変だということ」を言っているのであるから、その感情を反射すべきであった。それによって、C78~C79の推移はCが自らの感情をより追求する方向に変化していたであろう。

*T82~T83: C81 及びC82 において、Tはどうしても解答を与えるべく強制されるような状態におちこんだ。かかる場面をつくりだしてしまったのは、前からの場面構成の失敗(T59, T70等)であったことを示すものであるが、一面

では、Cの依存的な態度がここに至って強く表面化してきたとも考えられる。Tは「問題の解決を得るのに、他人の力にたよりたいと思っている」Cの感情を明確化してやる機会をここで持ち得たかもしれない。しかしこれは一歩間違えうと、全くの解釈となり、Cの拒絶をうけるかもしれない危険を孕んでいる。ここでのTの最後の反問は、実は、どうにも仕方がなくなるといった方法であったのである。C83がたまたま円滑にできてきたからいいようなものの、普通はこのような応答では、Cの不信をまねいてしまう結果となりかねないのである。

話してくれる人がいなくなって困る。でもその半面、母に影響される所なく、自分のものを追求していける。このような2つの面が検討される)
 (Problem-Ambivalent Attitude toward Others)
 C88……でも母と離れた方がいいのかもしれない。(ハイ)でも本当はできないことですね。
 (ハア)だから、母の影響からのがりたい。
 (Interpretation)
 T89*: まあ、実際にお母さんから離れるか離れないかは別として、そういうお母さんに縛られたり影響されたりしないような、そういう自分であって(エエ)欲しいわけですね。……あの今日(ハネオス)
 (Miscellaneous)
 イハイ) 時間になりましたけれど、あのまたおいでになるお気持おありでしょうか?
 (Positive Attitude toward Therapy)
 C89: 私はあのきたいんです。すごくあとがいい
 (Miscellaneous)
 んですけども、ただけもう現実には来られない。
 (Restatement of Content)
 T90 あまりお休みがとれない。
 (Miscellaneous)
 C90: ええ、きっと……と思いますけど。……

(Asking for Information)
 家の母のいうことを聞いて下さいますか? 母をよこしてもよろしうございますか?
 (Restatement of Content)
 T91*: はあ、お母さんに私お会いすることですね。
 (Miscellaneous-Positive Attitude toward Therapy)
 C91: ええ、それできっと喋っていると家の母は本当に何を考えているか、自分だって……私だってここにくると、思いもかけないことを言って、びっくりしちゃうことがあるから(ハア)きっと母がそういうふうにおもう……
 (T92以後で、もしCも母親も希望するなら、Tは母親にあってもいいこと、それから仕事の方の休みがとれるようだったら、いつでも面接の時間をとることを約束し、Cもそのことを承諾して、「お願いいたします。どうもありがとうございます」といって帰る) (第2回目の面接、終り)

2 回の面接を終えて、処置会議 Study Conference にこの結果が報告された。そこで報告され、また論議された内容は次の如くである。

1. クライエントの人格特性——感情的に未熟な子供っぽいパーソナリティである。他人に常に愛情を求め依存的である反面、自己愛的、自己中心的な傾向がみられる。他人に常に愛情を要求して接近するが、それが、自己中心的であるが故に満足されず、常に他人に不満を感じ、そこに対人関係のアムビバレンシイが生ずる。
2. 問題の発生及び経過——如上のパーソナリティをもつと思われる上役との対人関係に適応できず、また、恋愛に失敗することで、心理的な崩壊に直面した。以前から軽度の不安発作もあったのが、これらの問題を契期として、神経症的不安としてさらに強まった。前からあった母との間の解決されていなかった感情的な問題、相互の依存と独立との葛藤も表面化している。
3. 診断——精神病的な色彩はない。ヒステリー的な傾向をもつ未熟なパーソナリティの上に発展した、軽度の神経症。或いは神経症とよぶよりは、症状がそれほど明確でない点適応異

注 *T89: 時間の終了をつけ、次の回の約束を相手の責任において結ぶというのが、最も普通の面接終了時のTのやり方である。

*C90~C91: ここでCは、母にも自分とおな

じように問題があり、Cと母との間の困難は、両方でこれを解決しようとしなければならぬことに気づいていると思われる。このような感情を反射してやるべきであったろう。

常人格(Maladjusted Personality)とよぶのがふさわしいかもしれない。(後のロールシャッハテストの項参照)

上述のことから考えて、もしクライアントが、継続を希望するなら心理療法をつづけるのが適当であろうとの結論が得られた。

「母親との面接」 8月31日 1時間

母はやや、やせ型の初老の婦人。服装はきちんとしており、話し方は丁寧で、まとまっている。母親の言によると、母とクライアントとの関係については次の如くである。

1. 母1人子1人で狭いアパートの一室にいると、つい面倒をみすぎたり心配しすぎたりして、子供扱いにしてしまう。
2. 子供は仕事が忙しいので疲れて帰るのか、気分がむらがあり、私もついいらいらしてぶっつかってしまう。
3. 一時は、子供も本当に別居生活を考えたらしい。でも経済問題もあるし仲々そうはいかない。この間の結婚の話にしても、やっぱり「母さんから離れたい気持ちがあったのよ」なんて申しておりますし。

4. 私もつい子供をたよるもので、それがうるさいのかもしれない。

以上はクライアントの言葉と殆んど一致する。更にその他明らかになった事実は、

5. 子供が4才の時夫が死んで、それ以来子供と一緒に暮している。子供が19才の時、1度再婚し、1年ほど子供を親戚にあづけておいた。再婚はうまくいかず、離婚してかえり、又子供と暮している。

6. 私(母)にも変な所がある。夜などねていると息苦しくなって、空気が足りないような気持ちになる。狭い部屋に荷物が一杯あるのがいけないと思う。そんなのが1年に2度ほどあった。(軽い不安発作)

以上のことから、2人とも神経症的である母1人子1人の、互いにたよりあっている親子が互いに抱束しあい、お互いの感情的成長を妨害しあっているようすがうかがえるかもしれない。

「3回目の面接」 9月7日

総括:

1. 課長さんにここにくる時間を貰いたいといったら、それであなたがよくなるんだからといって気持ちよく許してくれた。とても嬉しかった。

2. この前の時、平凡な幸福なんてちっともほしくないといっただが、この頃は、自分のまはりの日常の些細なことに、本当の幸福な気持ちをもつことができる。

3. 結婚したいと思っていた相手に対しても、自分のものにしたいという気持ちからではなくて、素直に好きだといえるようになったと思う。

4. こういう気持ちになれて、問題がやや解決したと思う。自分の周囲の世界や、自分が少し

づつ変わっていくんだと実感する。今までと違って、自分の顔も心もきれいになりたいと思うし、自分がとても至らなかったんだと思えるようになった。とてもいいことだ。今までの自分は執着心がつよくて、エゴイストだった。それが問題だったと思うようになったことは、いいことだと思う。

5. 身体的な疲労は少しも感じなくなった。とてもよく働らせる。よくなった。

6. 自分には、人によく思われたい気持が強い。そのくせ、競争心もつよい。だから人を憎んでおいて、そのあとでは笑顔でつきあう。

7. 治療者の夢をみた。研究所にきたら留守であえなかった。他の先生にテストされた。がっかりしたような、ほっとしたような気持になった。(Ambivalent Attitude toward Therapist の表明?)

8. 来週を約束して帰る。

(解説) この回の様子は終始明るい調子で話していて、1回目2回目のように感情的に昂奮する場面はみられなかった。服装も前回とは違って、ずっと地味になっていたし、髪も前回までとちがって3つ編の長い髪の形ではなくなっていた。一般に態度が以前と違って落ち着いており、クライアント自身も上述の如く、元気に仕事ができるようになったとのべ自らの気持の変化を認めている。しかしその変化がどのような意味をもつかについての十分な理解はまだ語られていない。この変化が安定した改善ではなかったことが、次の回の面接で明らかになる。

「4回目の面接」 9月21日

予定していた一週間後の面接は、クライアントの母親からの電話で「当日病気(食中毒)のためいけなかったから、別の日をアポイントして欲しい」とのことだったので、この日まで延期された。

総括:

1. 食中毒は大したことなかったが、仕事の途中で具合わるくなったのを我慢して責任だけは果たしたのに、課長がつらくあたるのでいやになって、とても悲しくなった。

2. 仕事を休んで家にいると、いつもとても気持が落ち着かないが、今度は割合気楽だった。

3. でも、母が私のことを色々気をつかいすぎるからいやになって泣きだしたくなる。(面接申母のことになると、Cは泣きだす。)夜中にアアアといって声をだしてうなるといい気持だがそうすると母は耐えられないという。外にでて気を鎮めたらいいという。そんなこといわれると全くいやになる。

4. 母がよくしてくれることは分るが、あまり自分の心に触れてもらいたくない。母も課長もとてもよくしてくれるのに、悪口ばかりいって、悪い子だとTが思いはしないかと心配になる。

5. 課長がつらくあたるので、課の同僚たちがみんな次々と具合がわるくなる。だから私だ

け課長を悪くいうのではなくて、皆で悪口をいいあうんです。

6. 課長とのことでは、私も悪いのかもしれない。課長は他の課長に自分のことをほめて言ったらしい。そんな位なら叱らなければいいのに。

7. 社でも家でも落ち着いた気持になれない。社では社にいる時の態度を身につけてしまうし家では母に対して1つの態度をとってしまう。本当の自分になれない。それが苦しい。

8. でも、色々な問題に耐えていける自分になりそうだ。何か楽観的な気分になってはいる。

(解説) この回の面接はやや沈んだ感情的色彩で一貫している。殆んど笑はなかったし、かなり頻繁に、涙が見られた。

この回での中心的なテーマは前々回から一貫した、課長及び母親との感情的な関係についてである。依存的な態度とそれが満されないことについての不満が、自己中心的なクライアントの態度の表明と交りあって語られる。しかしそれがインタビュー時の攻撃的な色彩、2回目3回目の依存的な、他人に多くの問題の責任を見出そうとしていた態度から、僅かに変わってきている。それは、自己及び他人の受容、現実の承認の態度の芽生えであるといっていよう。この態度が、何とか問題に対処していけそうだという希望をクライアントに与えているのであろう。

「5回目の面接」 9月28日

総括:

この回も、4回目と同じくかなり憂鬱そうな、沈みこんだ口調で話だし、途中から殆んど泣き続けながら、終り近くまで泣き声で話す。

1. この1週間、みんなにも不思議がられたし、自分でも驚ろくほどよく働けた。だが、2日位前から又具合がわるくなった。

2. とても淋しくて、一番最初にここに来た時の状態に戻ったのではないかと悲しくなる。(この話の途中から泣きだす)。

3. 編集の仕事が締切近くで、すごく忙しく、課長さんもいらいらして、ひどくあたるし、家に帰ってから寝ているうちに気持が悪くなった。気分がすぐれないのに母が用事ででけるといったらとても気持がわるくなった。吐き気がしてきて、吐いてしまった。

4. 近所の医者に薬をもらったが、かえて気分がわるくなった。明日はこちらに相談に来られると思ったら、少し楽になった。

5. 社にいるとき、猛烈に仕事ができるが、何かそれは本当の自分ではないみたいだ。真の自分は中において、外側のヨロイの外にもう1人自分がある。その外側の自分が仕事をしている。家に帰ると、ヨロイを脱いでしまった自分ができて拾収がつかなくなる。

6. 前とまるで変わってしまって、よく仕事をする自分を、社の同僚は変だ、アブノーマルだ

というし、母も文句ばかりいって泣いてばかりいて変だという。自分では変じやないつもりだが、やっぱり変なのかもしれない。

7. 現実の社会はとてもきびしいんだと思う。課長だけが悪いんじゃない。どうしてもその厳しさに耐えなければならぬと思うが、家に帰ると、とたんにぐったりして母に当たってしまう。母はあんな社にいるから変になるんだからやめてしまえというが、自分には仕事は棄てられない。母が休めというだけでも、頭が変になるみたい。仕事をしていると元気でいられるし面白いからいいが、一旦休んだら自分がどうなるか分からない。

8. 社と家との中間の緩衝地帯がほしい。入院でもしたくなった。自分のことを色々外側から見守り親切にしてくれて、しかも自分に干渉しないでくれる場所がほしい。いつも自分は仮装している。そんな必要のない所がほしい。

9. 本当は誰も自分を理解してくれてはいない。友人もいるし、他の人よりは色々恵まれているとは思いますが、でも本当に自分の気持を分ってはもらえない。

10. 自分は孤独に直面することはたまらなくいやだ。お喋りしていて、そこから分れて1人で帰るといのがいやなもの、その理由からだ。

11. 人間より動物が好きだ。犬とお話していると慰められる。でもこの頃は前とちがっちゃって、犬がお友達ではなくなって、ただの犬になっちゃった。その変化は当然のことだとも思うが、一面とても淋しい。

12. 人に献身したいといつも思っていて、実際は自分のために人を求めている。友達によくするのだから、自分によくしてもらいたいからそうするんだって分った。(声を出して泣く) そんな自分はとてもいやだ。あなたは人に傷つけられることなんてあり得ないと友人がいう。私は傷つけられるのが恐ろしいから傷つかないようにいつも自分を守っているんですね、きっとそうですね。そんな自分がとってもいやなんです。

13. 母と一緒にいたい気持もあって、しかも離れたいのも、自分が母を傷つけたり、母に自分が傷つけられたりするのにたえられないからだ。(このあたりからやや落着いて笑顔をみせ始める)

14. 変だと友人にいわれるほど、猛烈に仕事をしていたのは、やはり正常な状態ではないと思う。変な昂奮状態の中で苦しい自分を忘れようとしていたんですね。

(解説) この回に至って、クライアントは現実の自己をさらにつきつめて見詰め始める。自分はよくなって仕事ができるようになったと思っていた(3回目の面接時)が、本当に解決が得られていたのではなかったとの洞察がそれである。自分を無理に装って仕事に逃避している面があること、だから家にかえると却って苦しくなること、仕事に熱中している自分も、家にかえて気分が悪くなったり、母に当たったりしている自分も異常なのだと認め初める。現実逃避することで、ある程度の解決を得ているが故に、仕事を休んだり、社をやめたりしたら、

自分がどうなっていくか分らぬのである。どうしていいか分らぬままに、社と家と両方から離れていられる場所がほしくなる。友達といつまでも話してたいのもそれだし、入院したいという希望もそこから生れる。仮装したりヨロイを身につけたりしないでいられる自分でありたいのだが、それは孤独な自分が自己に直面する世界であり、その淋しさにはたえられない。以前は動物にその淋しさを慰められていた。しかし以前と違って自己をみつめはじめたクライアントにはもうそれも不可能である。自己のエゴイズム、報酬を期待している献身の醜くさにも耐えられぬ。(クライアントはクリスチャンである)。献身も友情も、自らが他人に傷つけられぬ為の予防策でしかなかったとの洞察が、強い感動と共に得られている。自己を自己の目から欺むき続けようと努力しており、その反面その苦しさから自己を解放しようと努力しつづけていた、クライアントは、自己をつきつめて見たこの回に至って、1つの統合に到着するのである。六回目以後はむしろ垣々とした感情の吐露がつづき、5回目までにみられたげいしい感情の動揺は(完全に消失したわけではないが)はるかに少なくなってくるのである。

「6回目の面接」 10月5日 (逐語記録)

(Non-directive Lead)
 T 1: それじゃ、どうぞ日、今も1時間時間をとりますから
 (Miscellaneous)
 C 1: 今日は私が遅く来たんです。(エエ)あの…
 (Acceptance)
 T 2*: ええ結構です。
 (Problem)
 C 2: 今日はとってもいいんです。(ハア)あの今日は課長さんがお休みで、(笑)
 (Restatement of constant)
 T 3: ほう(笑) ああ課長さん今日はお出かけにならないわけ、社の方に、
 (Problem) (Positive Attitude toward Others)
 C 3: ええ今日は(ハイ)、来週……じゃなくて、昨日か一昨日だったかあの(ウン)、S先生(The-rapist)の所へ行きますか、行きますと云いましたら、じゃああの市川の先生の所をお願いにきて頂いてあの云ったんです。(ウンウン)、で私いつでもお願している先生のところ(ハイ)いつも市川だから、大変だから来なくてもいいからと云って向うが出てきて下さるんです。
 (Miscellaneous)
 いつでも東京へ。(ウンウン)だけどあの、いつていらっしやいと云ったから、だから今日そこへきてきたんです。(ハイ)それで遅くなっちゃった

んです。(ウン)すごく早く出たんですけど(エエ)
 (Problem)
 でもとっても何となく今日はあの、気が楽で(ウン)あの居ないと思うと(笑)
 (Reflection of Feeling)
 T 4: 課長さんが居ないおもうとすごく気が楽なわけ……
 (Problem)
 C 4: ええ、ここへ来てまでも何だか気が楽な様な気がするんです。それで、でもそんなに云ってるんですから本当にあんまり悪いんぢやないんだけど、1人辞めました。喧嘩して(ホウホウ)。それである、この前こちらに来て帰ったら私の隣に居る人が……あの帰ったらってこちらに来て……私休んでましたでしょう。(ハアハア)そしてあのまま勇を鼓して社に行った訳なんです。(ウン)そしたら隣の人が居なくて(ウン)、黒板見たら何処へ行ったとも書いてないんです。(ウン)ですからあの、どうしたのかと思って、ぢやあいよいよあのIさんも参っちゃったのかなと思って(ウン)お休みかなと思ったらその中に机の抽出をこの、ガチャガチャあけてもう、すごく中探している

注 *T2: この反応は、遅刻したことを是認する意味を反映してしまふ恐れがある。ここでの調子は、それほど強いものではないにしても Ap-

proval のニュアンスをもつ以上、避けなければならぬ。T2 はむしろ無い方がいい。

んです。(ウン)何かこう、ああ探されることは知っていたけれど、あんなにして休んでると机の中を探されるんだなあと思って、嫌だなあと思ってたんです。(ウン)そしたらそれで立上ってあの、
(Ambivalent Attitude toward Others)
 ちよっと手を洗っていたら、私には、とても気の毒だったわね、とか今度はととても御気嫌が良かったんです。(ウン)休んだということ、とても休むといい時と、それからもうなにしろ行くときと、それからもうなにしろ行くときと、明らかにこちらがこちらの不注意で休んちゃった時でも御機嫌のいい時には、そう、可愛想だったわねと云うんです。(ハイ)それで明らかに過労の為に具合が悪くなってても(ウン)もう尋ねても呉れない。この間なんか本当に家で変なものたべちゃったから自分が悪いのに(ハイ)、あのとっても「まあどうしたの気の毒だったわね、過労だったんでしよう」とか云っていて自分ではとっても悪いから(ウン)「本当に家の不注意の為に申訳なかった」と云ったんですけど(ハイ)。でその中お隣の人の机をあけてガチガチヤ(ウン)。そしてあの、私が立上って手を洗いにかお茶飲みにか、なんかちょっと立ったら給仕さんが来てあのIさんやめたの知っていると言ったからびっくりしちゃったんです。(ハアハア)それでその時ももう全然驚いちゃった。でもこの前も幾度も辞めるとか、明日はもう来ないとか、もう泣いて大変な騒ぎをしても(ウンウン)まあ翌日は思直して来ているから今日も来るんだろうと思ってたんです。(ハイ)そしたら本当にやめちゃったんです。(ウンウン)だからそれであんまりそんな事があったので、皆びっくりしちゃって(ウン)。もう本当はでもそれいくらなんでもそれだけでやめたんでしようかしら? と思って変だと思っただけですけど。〇…

(Reflection of Feeling)
 T5*: ちょっとよく分らない訳ね、その人が(エ

エ) 何でやめたか、

(Agreement) (Problem-Negative Attitude toward Others)
 C 5: ええ。明らかにもう、喧嘩して辞めた事は確かなんです(ハアハア) その動機は。(ウンウン)で常務さんの所にやはり云いに行ったんです。そしたら今迄そんな事知らなかったけど、
 といって……下さって、そんならぢゃあ私達に幾らかいい影響があるかしらと思ったら、まあどう変りも無いけど(ウン)でも幾らかは、幾らかはいいのかも知れない。

(Simple Acceptance) (Reflection of Feeling)
 T 6: うんうん。課長さんの態度が前とは少しは変わった様な気もする。

(Agreement) (Problem-Negative Attitude toward Others)
 C 6: ええ、幾らか。まあとにかくそんな事があってこっちがびっくりしちゃっているのに、割合びっくりしていないから(ウン)、もう前からやめるのが分ってたんかしらと思うのですけれども、その前に私が名刺を頼んだ時にその人も一緒に名刺頼んでるんです。(ハイ)ですから明らかに積りだったんだろうと思うんです。(ウンウン)だから本当に急にその何か私が具合悪くなったんでその、「Cさんはあんなにあの自分でやりたいというから、大丈夫だというから、やらしておいたら、あんな過労になりましたから、あなたの方に3分の1位あのやって貰いますから」(課長の言葉)と云ったんです。(ウン)すぐその人が口惜しくなっちゃったんだそうなんですけれど、その前に何か毎月写真を撮るのがその人の(ハイ)仕事であるんですけど、そのたんびに大喧嘩なんです。(ハア)それが口惜しかったのと、だろうと思うんですけど(ウン)でも何かそれ以外に自分の方にも何か無かったらやめないと思うんですけど(ウン)……そうだったら私達何時やめてるか分らない程、(笑)……

(Approval)
 T7*: ええ、皆が同じことだからね、はい。

C 7: でもとにかく彼女がやめて幾らか良ければ

注 *T5: この Reflection に続いて、「やめた理由はもっと他にもあるとおもえる」と反応す

べきであったかもしれない。

まあその人には気の毒だけど(ウム)いいかとも思うんですけど、でもそれよりもきつとその人は何か他にあるんだと思うんです。(ハイ)だからそんなに……

(Restatement of Content)
T 8: いろいろな原因が自分の中にその人の中にあるんじゃないかとも思う。

(Problem)
C 8: 結局やめても、その人だけがやめられる立場に…奥様なんです、(ハアハアハア)ですからあともう1人奥様がいて、赤ちやんが最近生れるけど、その人は御主人も(ウム)給料が安くなってとって働かなければ赤ちゃんが生れてもたべられないからってもうどうしようかと云って、やめたいのは山々なんだけれどやめられない(ハア)片方のそのやめた方の奥様は、御主人がもう大人で(ウン)、沢山おとりになるから何で勤めているのか分らないと皆云ってたんです。(ハア)もう結婚する前からやっていたならばその当然だけでも(ウン)お嫁に行ってからあそこに入ったんだから、どうして勤めたんだろう、不思議ねえなんて。(ウン)……だからきつとやめても……(Insight)他の人だったらばもう嫌なのが(ウン)この位あって(ハイ)、いいのがこの位(アアア)あって(ハア)いい方がこの位だから(ウン)皆我慢しているんだけど、それがこうだったら完全にやめちゃうんだろうと思うんですけども、……

(Restatement of Content)
T 9*: まあその人にはやめても特に直ぐどうというのではない。

(Problem)
C 9: それで何か……でも私の事が直接のことに

なってるみたいだから悪い様に思えるんですけども、(ウン)でもそれはそんなに考えなくてもいいだろうと(ハイハイ)思うんです。

(Restatement of Content)
T 10*: まあ、そのやめた人には何か直接そのやめる時にあなたの事がひっかかっていた訳ですね。

(Problem)
C 10*: ええ、具合が悪くなったからというのでどなったというんで(ウン)口惜しくなったというんです。(ハア)でもとにかくもうびっくりしちゃったんです。(ウンウン)でそれはあんまりまあ(Positive Attitude toward Self)考えなくてもいいということにして……それから(Negative Attitude toward Others)あのこの間(ウン)原稿を一項目400字2枚半で7項目頼んでいらっしやいというのが、それがはじめあの結局3頁のもの…じゃない四頁のものだから(ウン)あの、15枚でお願いしていらっしやい(ウン)あのこういったタイトルで、内容はこういうものであの15枚で欲しいんだけども、何々先生のを欲しいんだけども、それについてプランを考えてみるという事だったんです。(ハイハイ)それであの(ウン)、もしなんだったらこれ、レイアウトしてみてもいいのよ。何時も整理課というのが別にて、私達がレイアウトする必要がないんですけど(ハイ)それしてもいいって云って、……1項目1枚で15項目たてても同じ事だからというもので、それでやったんです。それで私がやって7項目の方がいい(ウン)って言って、じゃあ7項目で400字2枚半で頼んでいらっしやいというので、

注 *T7: ここでの Approval も避けるべきである。「(みんなおなじ辛い目にあっているけれど。)自分の方になかなかなかったらその人もやめなかったらと思うんですね」と明確化すべきであつたらう。

*T9: 「その人の場合と他の人とでは、仕事をしたいという気持の上でちがいがあがると思うんですね」と反応すべきであつたらう。

*T10: ここでもクライアントの意識と、Tの反応とは、大きなずれがある。「その人のやめた直接の原因に自分が関係しているので、悪いような気もするけれど、それはあまり考えなくてもいいだろう、」という直前の内容を繰り返すか、あるいは単に、Simple Acceptance の形で応ずべきであった。

それで頼みに行った原稿があるんです。それで出
来上ってそれをすっかりこしらえて(ウン)あの私
も悪いのかも知れないですけどもね。(ウン)
(Problem-Negative Attitude toward Others)
とにかく、400字2枚半で7項目、こちらでペラ
に書直して、それですっかりこしらえて出したら
これCさんこれ五頁って云ったのかしら」と云っ
たので、いいえ四頁ですけど。「とっても多いけど
もどうしたのかしら」って云うんです。(ウン)そ
れから「四百字二枚半とおっしゃったから、あの
それで頼んできてこしらえたんだけど」と云った
ら、まあ考えれば多いんですね。400字2枚半ぢ
ゃ。(ウン)だけど私はそんなことは云わないとい
うんです。(ウン)それで絶対に云わないというん
です。(ウン)ですから「私はあの時そう思ったけ
れど、じゃあ私の聞き違いかも知れませんが、ど
うもすみませんでした、こんなに多く頼み過ぎち
ゃって」。まあその時はむこうもここにこえて、
私も(ウン)私も確かに聞いたと思うけども、証
拠が無いしするからと思って、我慢しちゃったん
です。(ウン)そしたら……でそういう事が始終あ
る訳なんです。(ハア)そしたら翌日になったらそ
の400字2枚半で頼んで来いといったことが書い
た紙が出てきたんです。そういう時は本当はつき
つけてみせた方が(笑)いいのかもしれない。そ
れをつきつけてみせるのは……、私が勇気がない
からつきつけてみせないんです。(ハイ)それでも
口惜しくて口惜しくてしかたがないんです。こち
らでは。(ウン)もう自分で云っておいて、それ
ももしかしたら私が間違えたのかもしれないと云

えば、誰だって間違いがあるんですから、決して
そんなせめるといふ積りはないので(ウン)
ただあまり確信をもって絶対にあなたが間違っ
ているという(ウン)んで、それで口惜しいなあと思
ってこう出しておいて、まさかつきつける訳にい
かないから、机の上に置いといたんですけど、忙
しいから……もう片方の彼女がやめたから、もう
試験問題か何か考えるので忙しくて忙しくてもう
みてないので、その中まあまあいいと思っちゃった
(Insight-Positive Attitude toward Self)
んですけども、まあすごくいいと思っちゃった
って云うのは、まあよくなったと思って。(ウン)せ
んだったらすごくもう口惜しくてもうそれこそど
(Positive Attitude
うなったか分からないのに(ハイ)きつと先生が何
toward Therapy)
かこうこっちで魔法か何か使っていらっしゃる
みたいと思っちゃった。(笑)
(Clarification of Feeling)
T11*: ええ、前と比べると何かそんな点で、そ
ういう時の自分の態度が随分変わった様に思われ
る。

(Agreement) (Insight-Positive Attitude toward Self)
C11: ええ、そんなに口惜しくて口惜しくて。

といってもずっと怒り方が自分の怒り方が変わっ
てきたから、どうしてかしらと思っで不思議になっ
(Problem)
ちやっ(ハイハイ) たんです。それ以外にはあ
の、何だかごたごたと色々な嫌な顔をしたという
のは、まあ数限りなくありますけど、割合この1
週は嫌な事が無くて。……昨日もそのやめた人
の送別会があったんですけど、(ハイ)皆でお喋り
したらもうきつとすごい悪口会になっちゃやうだろ
うと思ったんです。普段だったら口惜しくて口惜
しくてたまらなくなつて、何時も悪口会になつち

注 *C10: これ以後(C21のあたりまで)課長に
ついでの問題が、インテークの時以来初めて詳
細に語られる。本質的には Ambivalent な関
係が、初めは Negative に、最後には課長に
対して同情的な見方(C16)を表明しながら事
実を主として語られる。自分の課長に対する態

度の変化が、それにもなつて実感される。自
分がよくなったとおもうという自己の変化の認
識が、それと同時に表明されてくるのである。

注 *T11: この明確化では、「こんな変化がと
ても自分でも不思議な気がするんですね」とい
ったニュアンスを含めた。

やう。昨日はそしたらそれ程悪口も出なかったし
するから(ウン)。皆の方も割合良かったらしいで
す。

(Restatement of Content)

T12: ああ、そういう時に課長さんの悪口を云っ
て了り訳ですね。

(Agreement) (Problem)

C12: ええ、すごくもう何とかでかんとかで、も
うただ悪口といってもよく男の人が飲みについて
(ウン)、よく悪口なんか云う、そういう様なのよ
りもっと(皆)、なんていうんですから凄くいても
う女の子ばっかしてすから、感情に走っちゃって
(ハア)もうでも他に比べたらもう陰謀とかね(ウ
ン)、そういうものは無いし、勢力争いなんか無
いし、ただもう口惜しくて口惜しくて、それこそ
人が聞いたらびっくりしちゃう様に、絶対私が死
ぬ時は殺してから死ぬんだとか、毒を入れちゃう
とかそれはもう凄いです。それでもうだから昨
日なんか、どういう事になるかと思う程だったの
に、割合皆が落着いて、きつとだからそのこわ
い課長さんが落着いていたから、きつと皆も昨日
は落着いて(ハア)いられたんだろうと思います

(Reflection of Feeling)

T13: なんか課長さんが落着いていると、皆も
(エエ)落着いているけど、具合が悪い時(エエ)
こう雰囲気はひどくなる(エエ)感じなんです
ね。

(Insight)

C13: ええ、ですからこの前は具合が(ハア)悪
くて、その前は具合が良かったというのは、(ウ
ン)出張に行っていたから(ウン)具合が良かっ
た。(ハア)だから今迄でも、何がどうといっても
、その人が具合が悪いと具合が悪い。

(Reflection of Feeling)

T14: うんうん、何となく課長さんのそういう態
度であなた自身のこう気分がひどく(エエ、悪ク)
悪くなる、

(Problem)

C14: 悪くなるのは結局その為なんです。(ウン
(Positive Attitude toward Others)
ウン)とにかくその何かまあ怒らなくなってきた
し、大部分良くなってきたし(ウン)だしもう今
(Negative Attitude toward Others)
日はなんとも云えずのんきで、もう本当に何も、今
日家にきつと寝ているでしょうが、吉祥寺からこ

こ迄は分らない。(笑)(ウン)もう見てないから
といっても何処にも寄道する訳でもなくっても、
何だか見ていられる様な気がしてたまらない。

(Reflection of Feeling)

T15: うん、何だか何時でも自分がこう監視され
て(エエ)いる様な気がするんですね。

(Negative Attitude toward Others)

C15: ええ、それで、そんなに怖くもないのにと
自分では分っているんですけど、兎角来た丈で怖
くって。

(Reflective of Feeling)

T16: ハア、部屋にその課長さんがいるだけで
(エエ)すっかり怖くなる。

(Negative Attitude toward Others)

C16: 何処かへ出かけて行っても見られている様
な気もするし、(ウンウン)そこに居るのも嫌だ
し、そうそれはでも別に私文じゃありませんけ
ども(ウン)……でもきつとすごく何か不幸な人
なんだろうと思うんです。(ハイ)であの本当に
意地が悪いっていうのと違って、自分がポーッと
しっちゃっているんだろうと思うんですけれども、
(ウン)とにかくみんな、みんなそのみんなまあ27
か8か生きてきて、あんな我儘な人であった事か
ないという程(ハイ)すごく我儘な人だと思う事
は思います。だから悪い人というのじゃないけど
も……

(Reflection of Feeling)

T17: そういう意味でその課長さんの事を考えて
みると、可愛想だなと思う事もある。

(Insight-Positive Attitude toward Others)

C17: ええ、可愛想だとか、本当に不幸だとかい
うのは思うし、きつと(ウン)よっぽどおうち
に帰っても、きつとあんまり言えないらしいか
ら、私達にあたっちゃうのかしらとか(ハイ)お
友達も無いから気の毒だとか(ウン)いう風に思
(Negative Attitude toward Others)
うんですけれども、だからといって人の上に立つ
人があんなに感情をむき出しにして怒っていいの
かしらと思っちゃう。(ウン)ですからあの人さえ
普通だったら(ハイ)私達はちつとも具合悪くな
らないのに、(ウン)その為には何時も具合悪くな
(Ambivalent Attitude toward Others)
る。それから(ハイ)何だかここにきて今日悪口
云ってばっかりいて悪くなる。(笑)(ハイ)(中
略)……(ここで、課長の態度とそれに対する課

の同僚達の反応とが詳細に語られる。皆が御菓子たべるときあげても喜んでくれないし、茶碗はよく割っちゃうから新しい茶碗をもってあげてもそれを使わないで、別の茶碗をもってくる。いつか、他の人が御茶ついであげたらそれをのまないで、自分で御湯をもってきてのんだ。お茶じゃなくてお湯のみたくなる時だってあるだろうが、その時の様子が、みていたらひどく癪にさわるような様子だった。お茶をあげた人が、「お茶をお飲みにならないんですか？ 毒は入れてないつもりですけれど」といったんで大騒ぎになった。課長が気嫌がわるいときは、お茶に鎮静剤を入れようかなどと仲間同志冗談に言いあっている。そんな課長の様子が描写される。だがこの話も、笑いながら、こんな変った人なんだという調子で話され、強い敵意や攻撃の態度で語られているのでない点が注目される)

(Restatement of Content)

T18: なにかこう人がしてくれた事を素直にこう受取ってくれないようなところがある訳ですね。

(Insight-Positive Attitude toward Others)

C18: ええ、だからきっとよっぽど不幸だったんだろうと思うんです。(ウン)何か嫌な目に遇ったから、人を信じなくなっちゃったかしら(ウン) どうなのかしらと思って。…(ちょっと間)…でもだんだんそういうのも直ってきたから、直ってきたといっても向うは直らないですけど、私の方が少しはあのおかしいなとか、変ってるとかいうように思える様になってきて。

(中略)……

(Insight)

きっとそのカーッとなるの一番ひどいのがそのやめた人と私と、結局その人の一番風当たりが強いのが、そのIさんというやめた人と私とになる訳なんです。本誌が四人いて(Aハ)その中一人はそのもう長くいてだんだんのみこんできたからという事もあるし(Hイ)それから赤ちゃんが出来るから仕事をしないって(ウン)いう事もあるし、それから片方の人は入りたてだから(ウム)まあ……(ウンウン)その人と私が殆どやってる訳で、

それだけやればやるだけ怒られるっていう率が多くなる(ウン)。それはこの間言われて、ああそれじゃ仕方がないと思ったんですけど、やればやる丈風当たりがひどくなるんだから仕方がないんだって云うんです。(ウン)だから本当にそうなのかもしれないですけども(Hイ)だからそういう事を聞いたから、少しは、あれなのかもしれない。

(Simple Acceptance) (Restatement of Content)

T19: うんうん。課長さんとの接触がそういう形で多くなる、仕事沢山して、多くなればなる程それだけぶつかったり(エエ)感情をこわしたりする(エエ)ことも多くなる訳ですね。

(Problem-Negative Attitude toward Others)

C19: でも本当はただ忙しいという事だけでは別に何にも関係ないと思うんです。ただ忙しくて忙しくてたまなくて帰ってきた時、嫌な顔をしたとか(ウン)それから何で怒られたのか分からなくなるとか、人の怠慢じゃあなくて

(Problem)

気がつかないでした事をせめたてるとか。(中略) そうするとちょっと部屋から出て、誰か来て「今日は暑いわね」とか「寒いわね」とか云うと、途端にみんな途端にワァーッと泣いちゃうんです。(ウム)そのそこでは我慢してちょっとだからすごく怒られた時に、S 駅迄次にもう原稿を頼みに行くんだったか、依頼だったか何だかに行かなくちゃならなくて出掛けたんです。そしたらその時もあの初稿のゲラが一杯出てたのを(ウン)何時もなら初稿はあの私が見て、そしてそのまま廻してそれで再稿で見るっていうのを、凄く怒って「拝見します」なんて云うんです。(ウン)もうさんざん怒っておいて、そんな事云ったから口惜しくて口惜しくて、それででもとにかく我慢してS 迄行ったんです。そしたらそしてS であの行く電車を待っていたら、後から他の部の人に来て、「Cさん、何処へ行くの？」と云ったら、途端にワァーッと泣いちゃって、その人は駅できまり悪くて(笑)悪くて(Hアハア)困っちゃったそうなんですけど。すごくそういう事が、そのやめたIさんという人もやっぱり(ウンウン)

あの誰か上から来た人にあの今日は暑いとか寒いとか云われた途端に泣いちゃったとか。一番まあ彼女と私がよく泣いてた訳なんですけど、その毒を入れたんじゃございません、と云った人は矢張始終喧嘩していたけど、私が入る時その人、付録に入ったんです。(ウン)それで付録になったら少し良くなった、そんなに何とか思うけど、幾らか良くなった。

(Reflection of Feeling)

T20: 何か一生懸命こう張りつめて我慢しているのに、他の人に何かこう何でもない事を云われると、

(Problem)

C20: 途端に嬉しく(ハァ) なっちゃって、それでもって、ワンワン泣いちゃう。もう泣き出したら止らなくなっちゃうんです。(ハァ)だからやっぱり一番そこであのよく風当たりが強いからそういう事になるのかも(ウン) しれないけど。

(Clarification of Feeling)

T21*: うん。それにしてもその課長さんの態度がそんな事ではなかったならば、何の問題も無い。

(Agreement) (Problem)

C21: ええ、あとはとても問題は無いと思うんです。自分で仕事は凄く面白いし、本当に今云った様に、あの変な勢力争いだとかそういうのがなくな

(Positive Attitude toward Others)

って(ウン) みんなとっても仲良くって(ウン) それよりみんながよくしてくれるんですけれどもね、(ハイ)とってもいいし、あんなにみんなおんなじ位の年頃の女の人ばかり揃っていて、よくあんなにみんな仲良くやってると思う程(ウン) 仲良くやってくれるし、それからよその部の人なんかでも、別に親しくなくともみんないいし(ウン) 社としてはあとは別に。……お給料の安いとかというのはみんな云うけれど、私など入りたてだから当たり前だし、そんなに構わないし、一番何でもいいと思うんですけど。(ウン)でもとても悪くなくなっちゃう事も。昨日もあのよその部長さんが

あの「今日はお揃いで皆さん何処へ行くの?」とおっしゃったから、「あの今日はIさんの送別会なんですけれど」と云ったら、「Iさん何でおやめになったのとか」と云われたので、具合が悪くてやめたんです」と私云っておいたんです。そしてあの「そう大変ね、でもあなたの事とってもよくやって下さるから助かるっておっしゃったわよ」とその内の課長さんが他所の洋裁部の部長さんにそう云った、(ウン)云っていらっしや

ったわよ、と私にその方が云うんですけど、そういうのを聞くとすごく何かここへ来て悪口は云

うし、悪いなあと思う、思っちゃうんです。(ウ

(Ambivalent Attitude toward Self)

ン) だから悪いのはすごく悪いと思う、思っても自分で悪いと思ってるけど悪いからと思って云わないでいれば尚更気が悪くなってくる(笑)

(Simple Acceptance) (Clarification of Feeling)

T22: はいはい、まあ課長さんとしても、貴女の事をいろいろそう云って下さる事もあるし、そんなに悪口云っちゃいけないなあと思うんだけど、やっぱり思っている事は出ちゃう訳ですね。

(Problem-Insight)

C22*: ですからあのまあ私達だけが云っている分には、構わないかもしれないけれど、でもき

つとそれだけではたまになくなっちゃうから、こ

こへ来たんだと思うんですけれども(ウン)。

(Problem)

でやっぱりやめた人もあの私があの人に帰って母に話すとそのお母さんが、もっと憤慨しちゃうからすごく嫌だという様に、そのやめた人の御主人がすごく憤慨しちゃんです。(ハァ) もうそんな奴と一緒にいる事はない、明日編集局長の所へ行って云ってやるって云うんです。(ウム) ですから御主人がすごく憤慨しちゃって、どうしてもやめなさいとおっしゃったんだそうです。(ハイ) ですから家に帰って話すと、すごくもうみんな見えないから、尚更もう怒っちゃうんですね。(ウン

注 *T21: この明確化も、クライアントの現在の感情から離れている。風当たりが一番つよいが

ら、それだけつらくなると反射すべきであるだろう。

ウン) で見てたらもっと怒っちゃうかもしれない
……でも今週はそういう風だったから、とても良
くって(ハァハァ)^(Positive Attitude toward Therapy)それからとっても、もうそれ
にしても、先生が魔法を使っているらしいのか
かどうなのか、何にも先生は何にもおっしゃ
らない……ませんでしょ。ですから無指導療法
と云うんですか(笑)(ハイ)……それであの
から本当は何もおっしゃらない、だから私が勝手
に一人でいろんな事思っているんだと思うん
ですけど。まあとてもよく先生がよくして下さ
っている様な気がするんですね。ですからあの
随分良くなったなあ、やっぱり行っただけの事
があったと、自分でも不思議だと思っちゃ
う。(ハイハイ) 何にもおっしゃらないでどうし
て良くなるのかしら、すごく不思議な治療があ
ったもんだと(ハイ……一緒に笑う……ウンウン)
思うんですけど。それでその悪口の方は、です
から今日その位です。(笑、ハイ) ^(Problem)あの悪口の方
じゃなくって、今度は(ウム)私のことを云いま
す。(ウム) ^(Anfivalent-Positive Attitude toward Self)それはやっぱりみんな変だと思
うんだそうです。すごく昨日もその送別会の時、送別
会だか(ウン)私に変だと云われている会だか分
らなくなっちゃった(ハァ) なんですけど、(エエ)
^(Positive Attitude toward Others)よくあんなに変なのにみんなが憎まないでくれる
と思って、すごく有難いと思って、(ハァ) ^(Problem)あの何
処かへ行きますでしょう、すると(ハイ)、すご
くみんなと何処かへ行くのが好きなんです。置
いていかれるのはとっても嫌だから(ウン)、
一緒に何処かへ行くと云えば、必ずついて行っ
ちゃうし、もう仲々別れ際が悪いし、もう行きま
しょうと云えば、絶対についてくるという位よく行

くし、連れて行かないとひどいわねとかああと
云うんです。でも本当は私はひどいわねと口で云
う時には、それ程ひどいと思っているんじゃない
って、(ウン) 本当にひどいと思ったら絶対に云
わない(ハァ) ですけど、まあひどいわねとい
う時は、それ程ひどいと思っているんじゃない
にしても、まあまあ一応連れて行って貰いたい
と思う訳なんです。(ウム) ですから連れて行
って頂戴って云って、よくついて行くのにも拘ら
ず、今日は何処どこへ行かないって云うと、あ
のせいかでございませうけれどもと云って、私
が帰っちゃうと云うんです。(ウン) 自分ではそれ
全然知らないんです。(ウン) その誘われて帰
っちゃうという所がみんな、あれは凄いわね、と
云うんです。全然そんな事を知らなかったと云
ったら、もう本当にあの、ああいう実にビジャッ
としていても何とも取つくしませんが(Insight)
帰っちゃうんだそうです。(ウン) 自分では云わ
れてびっくりしちゃったんです。全然(ハイ) そ
んな人に誘われて帰った覚えなんか無いと思
う(ウン) 位なのに(ウン)、もうみすみす約束
があると思ってもやっぱりちょっと一編お茶を
飲んでからそこへ行くとか(ウン)、何か本
当に自分でもだらしがない程よくみんなに
何処かへ行っちゃう(ウン) と思うのに(ハァ
ハァ)、それで私一人の云う事、その毒を入
れたんじゃないと云う人が一番その中でも
仲良しなんです。私と同じ年で、(ウム) 市
川の人なんです。(ウン) その人と一番よく
お話するけど、私ばかりでなくて他の人も
みんなそう云っていると(ハイ) 云うから、
きいたらみんな貴女はああいう時はすま
じいわね、と(ウン) 言うので

注 *C22: 途中から、治療状況について述べられる。(このクライアントの場合、割合によく、非指示的な方法を理解していたと思われる。)ここで職場での問題につづいて、自分自身の問題

がでてくる。前の問題に対して、感情的になることなく、客観的に眺め得たクライアントは、自らの問題に対しても、平静に客観的に眺める態度を取り得ている。

びっくりしちゃったんです、全然知らないんです。

(Clarification of Feeling)

T23: はあ、貴女としては、何時もこうつき合っていると思っているのに、何かそういう態度をとっていた事に殆ど気がついていなかった……

(Problem-Insight)

C23*: ええ、全然自分では私は何時でもだらりだらりとだらりなく行っちゃうし、何てだらしないんでしょうかと思うだけで、何時でもだから、おいでおいでと云えば喜んで尾っぽを振ってついて行く犬と同じみたいについて行くかと思っていたのにとにかく、帰るんだそうです。そういう事が二度とか三度とかあった。みんな大抵そういう目に誰でも遇っているんだそうです。(ハッ)「だから貴女がエゴイストだって云うんだ」って云うんですけど。私は本当に何時かここでお喋りしたみたい(ウン)、あの人達に対して、自分のエゴを發揮したことなんか無いと思っている。私がエゴイストじゃないと思っはいやしないんですけども(ウン)、お友達に向ってはエゴを發揮する事なんて絶対ない積りなんです。(ハッ)だからエゴイストだと云われた時はびっくりしちゃったん

(Problem-Insight)

です。(ウン)それからその何か喋っていると急に他の事をきいて、あの例えばその市川のお友達ですね、(ウン)すごくまああのよく話してくれる訳なんです。自分のいろいろなその恋愛問題を話す訳なんです(ハイ)私に。そうすると私はこっちが身の上相談にまあその時はのっている訳なのに、いきなりそのあの犬は可愛想だとか何とかと云うと、とっても口惜しいっていうんです。

(ウン)だからそれはエゴだ、そりゃあそれだけいうとパッと又私は身の上相談に戻って、必ず戻ってくるというんです。(ウン)その(ハイ)、だ

けどちょっとそこで云った後に(ハイ)、こちらは挫折しちゃうから(ウン)、そのすぐくエゴイストだというんです。ですから私はどうしてもそのエゴイストだといわれるのが分らないけれども(ウン)それはでもまあパッと自分で意識しないでもそれを云っちゃうんです。いつかあの銀座歩いていて、その話し乍ら歩いてたら、向うからあの脚の立たない犬が来てもうすぐびっくりしちゃったんです。(ウン)それから、柳が芽をふいてきたとか何とかその他の時もいったらろうと(ウン)思うんですけど、それはまだそういったというのは分るんですが、もう1つの帰っちゃうというのが全然分らない。(ウン)だから、でも帰っちゃったってそう悪い事じゃないからいいけど(Insight)(エエ)自分で全然気がつかないでそんな事してて、やっぱり変なんだなあと思うし(ウン)。それからもう昨日もさんざん笑われちゃったんです。この前の時も、(ハイ)あのこの前のあの、あの人の話で(ハイ)、あの私がすっかり頭が変になっちゃって(ウン)、自分でもその時確かに変じゃないと思うんです。私の状態から云わせれば。だけどあの自分でもよくもこんなにできると思う程に、1時間位しか寝ないのに、翌日ちゃんと着物を着かえて出て行ったり。(ウン)あのレースの洋服を着かえて彼のお父様の所へ行く積りでそのレースの洋服を着て行ってそのタオルでわんわん泣いてるというんです。それがもうみんなおかしくておかしくて……たまらないんだそうです。ですからみんな心配してくれちゃったけれど、そんなレースの洋服着ているのに、ハンカチ出して泣けばいいのに、もうこんなタオルで泣い

注 *C23: 感情的になることなく自己を扱うことができるようになったとき、今まで気づいていなかった自己の問題点を素直にうけとるだけの余裕を持ち得てくる。意識しないで、他人に冷たくあたっていた自分、話を聞いていてふと

自分中心の話題を持ち込んでしまう自分、悲しくなると自分や周囲のことなんか全くお構いなしにその感情のままに流されてしまう自分などがここで語られている。そういう自分がやっぱり変っていると知るのである。

て(ハイ)すごくおかしくて…おかしいけど、
でそんなに泣いててもだけどその時にはあの、こ
りゃあ大変だと思ってみんなも随分良く相談にの
ってくれて(ウム)たのに、その、で随分考えて
くれている(ウム)わけなんです。ですから(ハイ)、
本当に私があのただ泣きたい為に泣いていると思
ってやしなくて大変だと思っている事は信じられ
るけど。それがこんなひと月もたたない中こんな
元気になっちゃってもう全然もう前にあった事な
んかなかったみたいな顔をして平気な顔して、笑
ったり遊んだりしていると云うのも(ウン)、すご
くもう、もしCさんじゃなかったら随分みんな馬
鹿にされたみたいだと思って(ハァ)、あのもう怒
っちゃうところだろうと云うのですけど(ウン)
(Problem-Insight)
とにかく自分でもすごく不思議だと思うんです。

(ハイ) みんなが云う迄もなく私もどうしてこん
なに元気で平気でいられるのかしらと思って(ウ
ン)不思議だと思うんですけど。だから頭が変な
のかしらん(ウン)とも思うんです。

(Reflection of Feeling)
T24: 自分でもそう言った変り方がちょっとこう
よく分らない様な(エエ)気がする訳なんです。

(Agreement) (Problem)
C24: ええ、当然半年位寝ているかそうでなければ
寝てない迄もあの何時も悲しくて……という
様な筈なのに(ウム)、何時も嬉しくて、って
い
う様なのは少しおかしと思っちゃうんですけど
も、(ハイ)でも何時も嬉しいという訳でもなく
って、すごく淋しくて淋しくてこの前の前位に(ウ
ン)あの、この前の前淋しくてこの前にひどく
元気だと云ってからあと、ひどく淋しくて淋し
くって(ハイ)、どうしようかと思ひ程淋しくて
しょうがなかったんですけども、それで毎日毎日
遊んじゃったんです。(ウン)そしたらあのそした
ら中毒しちゃったから(アア)、何も遊んだから中
毒したんじゃないんですけども、それはその淋
しいというのは直ったんです。(ウン)だから今は
ちっとも淋しくないけども、でもあんなに淋し
い、自分があんなに淋しいということは、別にそ

れは病気じゃないと思う(ハイ)んです。

(Clarification of Feeling)
T25: 当然そういうふうな事が自分にあって淋し
かったんだろう、とそういうふうに思うわけなん
です。

(Problem)
C25: 何時も八月の終頭というのはすごく淋しく
てたまらない。(ウン) 今年八月の終は(ハァ
ー)、ちっとも淋しくなかった(ハァ)。あの今迄
も明らかにあの時とあの時とこれで3回目とは、
もうとっても同じ状態で淋しかった。つまり誰が
居ないからとかその、彼を失ったから淋しいとか
いうんじゃない(ウン)、もうもっと根本的に淋
しいん(ハァー)。あの何時か、あれ20才位、25
才の時ですけどね、(ウン)今流でなくて昔流
に。(ハイ)あの鎌倉にいて、鎌倉にいたあの20
才の時にお母さんがお嫁にいて(ウン)、それで
私が1人でその時も随分本当は馬鹿なんでしょう
が、一人でどうしても鎌倉にいると云ったんで
す。(ウン)その鎌倉から離れるのがどうしても嫌
だ(ハイ)、みんな誰が考えたってそんな小さな
娘が鎌倉に1人残っているなんて考えられない事
なのにその、一緒にいらっしやいと向うでは云う
し(ハイ)、それからあの伯父さん達も、うちに来
るとか何とかしろというのに。向うのあの嫁に
いった家でもね、向うの(ハイ)お嬢さんが、
お嬢さんといっても、すっかりあのちゃんと子供
がいるんですけどもね、あのCさんも一緒に来る
んだと思った、と御馳走を作って待っててくれた
そうなんですけど、その日行かなかったんですけ
ど、お母さんがお嫁にいくのがとってもその時は
嫌だった(ハイ)。もうすごく嫌だったというのは
勿論なんですけど、その他に、どうしても鎌倉に
いたかったというの、確かに嘘じゃないんです
(ウン)。……で今お母さんがお嫁にいくんだっ
たら、ずっと違うと思うんですけども、その時はと
にかく憎らしくて憎らしくて何とも憎らしくてた
まらなかったんです。(ハイ)そしてその時あの1
人で5月13日にお母さんがお嫁にいて、それ

から1人でずっというて、8月の終頃になってからあの(ハイ)。(Problem)録倉ってところは秋がすごくいいし、夏もいとこなんですけど、秋のなり際がすごく淋しいところなんです。(ウン)あのみんな帰っちゃって嵐みたいになってくるし(ハァ)、帰っちゃってって、そのお友達はみんな居るんですけど、なんかそのそこところがすごく淋しいんです。(ウン)その秋になってから本当に具合がいいんですけどね。でその八月の時もう本当に8月25日から9月5日位迄の間は、とっても淋しくて淋しくてどうしようもなく淋しかった。

(ハァ)その時が1回と(ウン)、それから例えば23か四位の時ですけどね、その時は始めてあのラヂオに出られて、(ハイ)とっても嬉しい筈なのにその時帰りに淋しくて淋しくてもうとってもあのあすこの田村町の所を歩き乍ら、もうどうにもならない程淋しかった時と、(ハァ)その2回と今度その、この間の時と3回位すごく淋しかった(ハァ)、でそして分ないんです、何でそんなに淋しいんだか(ウン)。

(Clarification of Feeling)

T26: 何だかその1つ1つの事件というものに関係してなくて、もっとそういう風に自分が淋しくなっちゃう事がある様な(エエ)気がするんですね。

(Agreement) (Problem)

C26: ええ、お母さんがお嫁にいった事(ウン)が淋しいっていうのは(ウン)、そのあれですけど、そうじゃなくてもっと何か、(ウン)だし、でもそれが何時でも直っちゃうからいいんですけど。だけど、だからっていい、みんなみたいにあの孤独なんていうのは分ないんです。(ウン)ちっとも孤独だなんて思った事ないし、その孤独に徹しなければとか、なんとかで。此の間もその何時もよくその仲良しのお友達、その市川の人でなくて(ハイ)、B 学院の先輩ですごく仲良しのお友達と喋った時なんかその孤独っていう事を云うんですけどその、孤独なんていう言葉があったなんていうの全然知らない(ウン)んです。

(Problem-Insight)

(ウン)。で本当にこの間も云った様に孤独とか劣等感とか羞恥とかの感情が私の中には1つもないんです。(ウン)ですから羞恥心が無いっていうのも、すごく変なんでしょうと思うんです。(ウン)全然そいでいて、だから私は自尊心が無いとかとよく云うんですけど、(ウン)ものすごく自尊心が強い様な所もあるんです(ハイ)。だから他の人と自尊心のあり場所が違うんだらうと思うんです(ウン)。それで特別あのよくみんな云うんです。何かちょっと云えば、キャンといって怒りそう(ハァハァ)っていうのは、すごく誇が高いっていう事なんだらうと思うんですけど、そういう誇の高さというのと、まるでその泣いて膝まずいてそのあの逃げないでくれて云ってその、彼に頼むなんていうのは、どこにもうその自尊心があるんだかも疑っちゃうという位(ウン)。みんなだったら反対だって云うんです。そんなちょっと足を踏まれた、足を踏まれたというのはあれですけど、例えば何か失礼な事を云われたとかでキャンといって怒らない代りには、そんな膝まずかないっていう(ウン)。(Insight)ですからすごく自尊心のあり場所が違うんだらうと(ハァハァ)思うんです。

(Restatement of Content)

T27: (ハァ)他の人と貴女自身のこう傷つけられる感情とが、何かこう違う様な気持……

(Agreement)

C27*: ええ、きっとそうなんだらうと思うんです。(ウン)それで兎角昨日もとってもあの時おかしかったけどあの、昨日は全然もう愉快そうに喋って(ウン)、まあみんなおかしいわねCさんて、何ておかしいんでしょう、なんてみんなが云うんですけど(ウン)。それでさよならというのは絶対云わないんです私。さよならという言葉が大嫌いだから。(ウン)あの人と別れる時、さよならと云わない、それで今迄さよならなんて云った事なかったのに(ウン)あそこに入ったら、さよならって云わなきゃいけないからと思って、びっくりしちゃったんです。(ハイ)ちょっと他の事云

ったらみんなおかしいと思ってるんですね。(ウン) それでさよならというのが、それから仕方がないから、さよならと云っている中に、まあさよならというのもそれ程まあ、さよならといったら明日会わない様な気がするんですよ(ウン)。だから云ったら大変だと思っちゃうんですけど、(ハイ) それでも確実に会っているんだから、まあ大丈夫だろうと思って。(ハイ)でまあさよならというのは云う事にしたんですけど、言いたしたらそんな別にそんなに必ずしもその明日会わないという訳でないからいいという事分ったんですけど。
(Problem)
(ウン) みんなとよく何処かへ行ってお茶のんで帰るとき、あの(ウン)、電車の所に立ってみんな出ちゃう迄送るんです私が(ハイ)。そうするとそれはお母様があのお客様がいらしたら門迄出る迄決して閉めちゃいけないんだとか、(ウン)それから電車を送るとかいう風に(ウン)、小さい時から云われたから、頭にこびりついているんだろうと思って、絶対に(ハイ)あの、電車が出る迄はそこに立ってあの見送るし……っていうのは(ウン)、始終習慣なんですけどね、(ウン)その見送るのはまあまあいいんだそうです。みんなにすればおかしいですって(ハイ)。見送るのも毎日会っているのに。だけでもまあ見送るのはいいとしても、手振るから嫌だ(笑)って云うんです。だけど手を振るから嫌だってどうして私がまた、みんなが手を振らないのかしらと思って変だなあと思ったんです(ハイ)。みんなちゃんとおじぎする(ウン)、ですからおじぎするのどうしておじぎするのかしら、こんなに毎日顔を合せて親しいのにおじぎしなくちゃならないなんて、みんな

何て不思議な事だと思っていたら(ハッ)、もうCさんだからここで云うけど、(ハイ)本当にねえ手を振られると恥しくて恥しくてたまらないからね、手を振らないで頂戴ねって昨日云われる。(ハイ)(笑)まあ手を振らない事にしましたけど(ハイ)、何かそんなに手を振るって云ったって、まさかそれ程沢山振る訳(笑)じゃないのに。
(Restatement of Content)
T28: ええええ他の人の場合、貴女のそういう態度がひどく何かこう恥しい様に思う。
(Agreement)
C28: だそうです。
(Reflection of Feeling)
T29: はあ、貴女自身はそんなことちっとも考えていない。
(Problem)
C29: 私ちっともそんな、手を振るの当り前だと思うんです。(ハイ)。だからきっと何か今迄育てきた環境が違うから(ウン)なんだらうと思うんですけども、
(Clarification of Feeling)
T30: はい、何か貴女が他の人と違った風にこう育てられてきた為に、他の人に変な感じを与える様な事をやっちゃうんじゃないかと、
(Agreement)
C30: ええそう、そうらしいです(ウン)、どうも。でもなにも家の母が手を振れとは云わない(ハイ)。(笑)だけどそのそりゃあ学校の所為だらうと思うんです。(ウン)とって面白い学校にいたから(ハイ)、手を振ったり(ウン)、握手したり(ウン)、今日とは云う代りには、大抵は今日はって云ってもう握手しちゃうんです。(ウン)それからファーって云って両手出して握手しちゃう程、まあみんなそういう風な表現に馴れて当り前になっちゃってるのだから、手を振る位何とも思っていなかったらおかしいのかと思って、(ハイ)……何かそういう風に、とにかくおかしいん

注 *C27: ここで未成熟な子供っぽいクライエントの態度が明瞭にあらわれている。しかし後に、そのようなクライエントなりに、読書の好みが変わってきたり、マンガが前ほど好きでなくなったり、自分の中に変化がおきつつある

ことが語られている。そういうような私っていうものが、だんだんきつとなくなるんでしょうねという言葉がやや感慨をこめて述べられるのである。

だそうです。

(Restatement of Content)
T31: 他の人から見ると、ちょっと変わった所がある。

(Agreement)
C31: ええ、だそうです。(ウム)自分はそういう所は変ってないと思いますけど(ハイ)。……それからよくこの頃、本か何か読まないしと落ち着かない様な気がしちゃって、淋しくってしょうがない時にも、ですからどうしたらいいかしらと思って、あんまり淋しかったからあのそうでなくて淋しくなくても行く積りだったんですけど。ペレスブラド(アア)に行こうとあの本当は、それはすごく不思議なんです(ウム) ペレスブラド……マンボが大好きなんです。私が(ウム)、それでそのマンボが大好きだというのは、もう体質的にもうマンボ好きなんだと思うんです。(ハイ) だけどあの彼がとってもマンボが好きで(ウン)、それであのペレスブラドなんて私名前知らなかったのに、まあ教えてくれて(ウム)、それでそういうああいいうすごい熱狂的なリズム(ウン)が好きなんだと思うんです。(ウン)ですからまあペレスブラドが来てその行くのは当たり前だけでも、今頃きたってしょうがないし、まあ又そこへ行って彼のことで思出すのもいけないしとか、そういう風に思っていたんです。(ハイ)でもとにかく行かざるを得ないからと思って、行こうと思っていたんですけど(ウム)、それであのその淋しくってたまらない日に行ったんです。(ハイ)それはとっても悲しい事だと(笑)思うんですけどね。(ウン)そしたらその彼の事なんか全然思出さななんです。(ウン)それで面白かったし、とっても良かったけども何だか前の程素敵でもない様な気がしたし、……

(Simple Acceptance) (Reflection of Feeling)
T32: はあはあ、……前程そういうマンボなんか

にも……

(Agreement) (Insight)
C32: ええ、つまりまあマンボが好きなんっていうと、今のその人達がマンボが好きだということと同じみたいですけど(アア) そうじゃなくって、(ウム) そうかもしれないんですけども。マンボが好きだしああいいうものが好きだという(ウン)様な私っていうものが(ハッ) だんだんきつとなくなるんでしょね。

(Simple Acceptance) (Clarification of Feeling)
T33*: うんうん、なんか前程本当に好きじゃなかった様な、

(Agreement)
C33: ええ、ものすごく好きでもうっていう様な。……そりゃああそこに入ってから、ジャズが嫌いになるってみんなそうなんです、もう(ウム) それは噪音に耐え得なくなるんです、その(ウンウン) ガッチャンガッチャンというのがあの電話をガッチャンと置いたり、本をパツと置く(アアアア)、その為にジャズが嫌いになるというのは明らかに分るんですけどね、(ウン) ですからだんだんそのそれで近代音楽だって嫌になってくるんです。もう(ウン) 聞くのにやっぱりああいいう12音階だか何だかああいいう様なもの(ハイ) は、何等の、その快感を与えない様な感じになってくる(ウン) 前はやっぱり、それも快感を与えない迄も何かそこに共鳴するものというのがあった訳です。ウン何かとってもまあ静かな音楽かなんかきいているのがよくなって(ハイ) くるんですね。(Problem)
(それでそのペレス・ブラドにいてもなおらなくて、その淋しいのが。それから翌日映画に(ウン) 行ったんですけど、それでもまだ直らなくともう一人で銀座歩いていて、淋しくって淋しくってたまらないんです。ですからもうどうしたらよいかと思っちゃったんですけども。それからあのK書店に入って(ウム)、それでKも

注 *T33: この明確化は相手の感情を受容して
いない。クライアントが感じている自己の変化
への感慨を反射すべきところである。たとえ

ば、「だんだん前のような自分とは違った自分
になっていくんですね」といった反応が適切で
あろう。

下がゴツチャゴツチャしているから(ウム),あの上に行ったら,いろんな本があったから,それを見ている中に少し気が落ち着いてきて(ハイ),それから本を買って帰って来て,(ウン)それで気が落ち着いた(ウン),それで大分よくなったんです。(ハイ)けど……あのあそこに入った時,もっとも新聞が読めなかったり,いろんな本が読めないし,前からあんまり沢山本読む方の性じゃないんですけど,(ウン)あのあまからという雑誌が(ウン)あるんだけど,あんなのは気が楽でとってもいい(ウン),良かったんです(ウン)。あのそんな御料理の何処が美味しいとか,きれいな写真が出てたり(ハイ),何にも刺戟がなくて良かったけど,それから銀座百貨というそれも広告の雑誌ですけどね,(ウン)……銀座の事が書いてあったり,何かそんなのはとても気楽に読めて(ウム),つまらないけどまあ良かったのが。とっても何かつまらなくなってきた。それから何か随筆みたいな(ウンウン)そんな様なものがとってもつまらなくなっちゃったんです。(ハイ)もうその誰かが余技でやったものなんていうのは,もう問題じゃない。まああまからは勿論そのあの女人,余技でやってるんじゃないでしょうから(ウム),そんな事云ったら悪いでしょうけども,何かとっても一生懸命やったものがやっぱり何かとっても素敵なんだ……

(Simple Acceptance)(Clarification of Feeling)
T34: うん, うん。そういうものにこうひかれる様な(エエ)気持ちがしてくる,

(Agreement)(Problem)
C34: ええ, だから今は, とってもだからその時は, その心理学の事が面白くなってしょうがなかったから。(ハイ)何を読んだらいいでしょうか?

(Question)
T35: 何かそういう心理学の事一般(エエ)に関してですか?

(Answer)
C35: ええ, その時は精神衛生(エエ)っていうのを買ってきたんです。(ハァ)あのこのK……Kじゃなかった, Oさんじゃなかった, 何か何とかさじゃなかった……児童精神衛生部長さん,

(Giving Information)
T36: ええ, 分りましたT先生,

(Miscellaneous)
C36: T・S先生(エエ), その方ともう一人何とか,

(Miscellaneous)
T37: ええ, ……他の人と共著で,(エエ)

(Miscellaneous)
C37: ええ, そしたら, K先生(ウム)が出ていた。それでいろんな事読んだら, 無指導療法だ(ハァ)って(笑)というのが分った

(Miscellaneous)
T38: ああそうですか

(Problem-Insight)
C38: でまあそれはとにかく(ウム)。あの読んで自分がそれを読んだらよくなる訳じゃない(ウム)と思うんです。(ウム)あれを読んで私がよくなるという事はないと思うんです(ハイ)けども, あれは先生達のお読みになる本で, やはり患者の読む本じゃないです。……

(Approval-Miscellaneous)
T39*: (笑) ええええ, 必ずしもそうでもないんですよ。私, 詳しくは分りませんけど。

(Problem)
C39: それでその(ハイ)患者が読んでよくなる本じゃないと思うんですけど(ウム), だけど, とにかくああいうのを読んでいけば, まあ気が落ち着いていい(ハァ), 今一番それが気が落ち着いています。……

(Miscellaneous)
T40*: あの, お話途中なんですけど,(ハイ)時間が……

(Miscellaneous)
C40*: はいはい, 帰ります。(笑)それじゃあ, また来週……

(Miscellaneous)
T41: ええ, どうぞまた。

(六回目の面接終り)

(解説) 態度は前回までの感情的な起伏のはげしい様子とは変って, 平静になっている。課長について語る際にも, 相手の態度を客観視した態度を崩すことなく, 相手の気まぐれな自己中心的な態度にまきこまれていた自分をも客観的に見ることができた。そこには, 自分の態度についての反省が, 折にふれて介入する。

自己の態度の変化(課長や自己自身に対して冷静になったこと)が不思議だという感じとともに

語られる。未熟な自己、感情的に自己中心的な自分が、他人からどうみられているかについても、詳細に語られる。

この回で前回までとちがったある変化がクライアントに生じているといえるだろう。しかしまだ

クライアントは「先生が魔法でもかけているみたい」といっている如く、自己の変化、成長に対して治療者へ依存している態度を著明に残しているのである。

「7回目の面接」 10月17日

総括：

前回との間に2週間たっている。面接予定日の朝、クライアントから電話があって、「引続き調子がいい。1人人数が減ったこともあって社が多忙なので、無理をすればいけないことはないが、他の人にも悪いから1週間のばしたい」ことを希望してきた。7回目の面接は、特に記すべき変化もない。前回にひきつづいて、仕事の様子や社の話などをしたあとで、自分でみた色々な自分の性質を語り初めた。内容は殆んど前回迄の面接にでていたことであるが、「自分でそう思っているだけで、本当かどうか分らない。何かそういうものを知るテストはないか」とクライアントからテストを希望してきた。治療者はその感情を反射し、明確化したあとで、テストに関する知識を与えてやった。「ロールシャッハテストやT・A・Tが、希望なさっている意味に沿うと思う。——（テストの概略を説明する）でもそのテストをやったからといって、それであなたのすべてが分ってしまうとかいうものではない。今まで何回かの面接でもう、あなたは自分のことをよく分ってきていらっしやるし、私もあなたの理解された範囲であなたのことを知り得た。それ以上のことをテストで知ろうとするのは無理なことだが、もし希望なさるのなら、むしろ私の方でもお願いしたい。資料としてとらしてほしい。」と説明する。クライアントは、ロールシャッハテストを選び、それを残りの時間施行する。（テスト・田頭寿子）ロールシャッハテストの結果については、フォロー・アップ時の再テストの結果と比較して、後に記載する。

テストの施行は、その施行の意味やテストによって知られる限界を十分にクライアントに理

注 *T39： この反応もまづい。Tが不必要な、全くクライアントの要求していない意見をのべている。「その本をよんだからよくなるとは思えないけど、なにかそういう本をよんでいると気持がおちつくんですね」とクライアントの感情を反射すべきであった。

*T40： Tは時間がくれば、話が完全におわらなくとも、一応の区切りのついた所で、面接を終えるのである。これは治療の原則にもとづいて、

時間の制約を明らかにすることであり、クライアントに治療状況での責任をとって貰うために必然的に要請されることである。

*C40： 前にクライアントは、「自分は話をしている帰らなくちゃならないと思うと耐えられないやになる」(インタビュー面接、2回目の面接)と語っていた。そのことが問題であることを知っているのだから、ここでは笑いながらわざと「ハイハイ帰ります」と答えているのである。

解してもらった上で行るのが望ましい。特に非指示療法の場合、テストの施行が、治療者に権威を与え、クライアントが治療者の指示を期待するようになる可能性をもつ故に、充分注意しなければならない。テスターが治療者と別個の人間であることも、この意味から望ましいことである。

「8回目の面接」 10月24日

総括:

1. 社の同僚と遠足にいった。表面はとてもたのしかったのだが、何かもう1つ心からたのしめない。自分が心からみんなにとけこんでいない。この頃自分のことを色々考えるようになって、前と違った自分があるのを知ることになったが、その新しく分ってきた自分と、前からある自分と完全にとけあっていない所が問題になるのだと思う。

2. そういう現在の自分が何か淋しいので、何にも考えないでぼうっとしていたいような気もする。入院したいとか、母から離れたいとか前に言ったが、単に母から離れたいという意味だけでなく、新しい自分をつくりだして行きたいんです。

3. 母が再婚したとき、とても母が憎らしかったが、今なら母が再婚していても大丈夫自分1人でやっていけると思う。

4. 母は再婚した先で、先妻の子が居たり、毎日客が多かったりして、とてもたえられなくなって、気が変になっちゃった。(不安神経症らしい。)その時入院してよくなった。母がここに続けてくればいい。今でも時々息苦しいなどというから。母の兄は本当に気狂でM病院に入院していた。この子供(伯父の子供、クライアントの従兄)も現在M病院に入院している。(2人とも精神分裂症?)今まではそんなこと恐ろしくて考えたくなかった。

5. 母方の祖父は、ひどく気むづかしい人で、我儘で1人よがりだった。母は恐がっていたし、私もとても恐ろしかったことを覚えている。母は兄2人の末の妹で、ただ1人の女の子として、とても祖母に可愛がられた。けれど母は祖母をもひどく嫌っていた。祖母と母とが喧嘩していたのは、すこし以前の私と母との間柄とにしているとクライアントはいう。

6. 父は養子にきたが、母とも祖父母ともあわなかったらしい。小さい時のことで父の事は殆んど覚えていない。なつかしいと思ったこともないし、今おもうのはいい人なのに気の毒だったということだけだ。

7. 母は私の小さいときから変っていた。病気がうつるといって、近所の子と少しも遊ばせてくれなかった。私は客がきたり、祖母が来たりするのが嬉しかったが、母は誰ともあいたがらなかった。祖母がやってくるといつも喧嘩していた。

8. 母の長兄が経済的な援助をしてくれているが、家ではその伯父にも特に親しくしているわけではない。

9. 私は前はひどく人嫌いだった。特に男の人が嫌いだった。でも本当に好きな人ができて

からは、そんなことはなくなった。

10. 趣味や考え方が変わった。前はたよる人がいないと何もできなかったと思う。今からは1人でやれそうだ。

(解説) この回始めて、幼時期の母親の態度や母と父、或は母と母方の祖父母との関係が語られた。母の兄と、その子が精神病らしいことも、殆んど不安なしに語られている。幼時期の神経質な母の態度、母と祖父母との歪んだ関係も感情的な色彩をおびることなく平静に語られている。クライアントがいつているように、このような事実は、今まではひどい不安をよびおこすもので、考えたくなかった事実であったのだ。それと並行して、母から離れてもやっていけそうな自分が確認されているのである。しかしまだ、完全に首尾一貫した自己ではなく、多くの矛盾した面をもつ自己であることも認識され、そのような自己として受容されつつあるのである。

「9回目の面接」 11月7日

総括:

仕事の都合で、1週間面接の延期を希望し、その日にいつもの通り定刻に来所したクライアントは、今までになく明るい様子だった。

1. ずっとここ半月程、今までの何年かの生活の中で一番快適な状態が続いている、時々淋しくはなるが、それはそんなに異常だとは思わない。
2. 此の頃、ピアノを習いたいとか、心理学の勉強をしたいとか本気で考えて、実行している。何か素直に色々なことをやれそうな気持ちだ。力みかえてしようという以前のような気持ちとは違っている。
3. 今までは自分を全然知っていなかった。とても子供だった。今でも子供っぽいんですけど。(笑)
4. 女の人はいくらたのしくても仕事だけで生き甲斐をみつけていくのはむづかしいとつくづく思う。やはり仕事以外にも何かたよるものがなければ、とおもう。私の場合、母と私がいるのでたよりあっていける。時々衝突しても、お互がいるから生きていける。私に本当に好きな人ができたら、その人と助けあっていくんだと思う。その時母がどうなるかは、その時にならないと分らない。(笑) でもそうやってうまくやっていく人もいるし、そう心配はないかもしれない。
5. 課長さんとも衝突しなくなった。こっちも変わったのか、そのために向うも少しはよくしてくれるのかもしれない。
6. 部屋が少し広くなった。とてもせいせいした。(アパートの他の部屋にうつれたこと。)
7. 長い間本当に有難うございました。一応、もうこれで大丈夫だとおもいます。又変にな

ったら、いつ来てもいいんですね。(T エエエエ、どうぞいつでも) それではさようなら。

(解説) クライアントはこの回で自らの責任において、治療の終結を決定している。八回目の面接後、2週間の間にこの終結を決意したのである。自発的に自然に仕事をしたり勉強したりする意欲がでてきたこと、今まであまりに子供っぽかったことを自覚してきたこと、母と自分との依存関係を承認し、より現実的にそれに対応していこうとしていること、職場でも課長とあまり衝突せずにやれるようになったこと。これらは、クライアントが実感しつつある変化である。子供っぽい自己中心的な、依存的な感情が中核であった初期、特に6回目以前のクライアントに比して、この変化は著明である。クライアントは、まだ感情的に未熟な面をそのまま、残しているけれど、その自己の状態を承認し、その現実承認にもとづいて行動しようとしている。他人を理解し受容しようとしており、それがある程度可能となってきている。自己の中の矛盾を知り、それが次第にクライアントなりの仕方と統合されようとしている。これらの変化が、自己指示的に、クライアントの責任においてなしとげられつつあることを確認したとき、「もうこれで大丈夫やっているとおもいます。又変になったらいつきてもいいんですね」という治療状況から離れる決意を持ち得たのである。

「フォロー・アップ面接」終結から2カ月後。1月16日。

総括:

治療者から、その後の様子について話を聞かせてほしいとの依頼に、心よく応じて、早速来所。元気そうである。

1. その後ずっと楽しくやっている。此の頃、自分の力の限界がやっと分ってきたと思う。それは淋しいことで、自信がなくなることだが以前ひどく自惚れていたのに比べれば、いいことだとも思う。
2. 前ほどひどくはないが、まだ元気になるときと沈みこむときとの波がある。友人は、私と一緒にいるといらいらさせられる面と、とても安心させる面があると今もいう。淋しくってみんなに愛してもらいたい性格はどうも以前と変らないらしい。
3. 自分の周囲の世界が、以前とちがってきたことは事実だ。一面、平凡でつまらなくなったが、落ち着いてきた。大人になりたくないと思っているが、やはり平凡な大人になっていくかもしれない。
4. 以前のように夜中に苦しくなったりすることはなくなったが、時々ひどく淋しいと思うことはある。でもそれは誰でもあることなのでしょう。
5. 課長や母に何かいわれて、カーッと頭にくることはずっと少なくなった。でもまだすっかりなくなってはいない。

この状態は、まだ完全ではないまでも、次第に成熟していくクライアントの動きとして、す

べて理解しうるものである。そして、治療終了後、症状は消失し、まだ充分ではないまでも仕事場でも家庭でも、以前に比べてはずっとよく適応している状態を知るに足るであろう。

なお、この日に、クライアントの承諾を得て、ロールシャッハ・テストを再び施行した。7回目の面接時（10月17日）のテストから約3カ月経過しているが、この2回のテストを比較してみるのには、クライアントの人格構造及び、その変化を知る上に興味深いとおもわれる。次にその大略をかかげる。

ロールシャッハ・テスト

解 釈 者 片 口 安 史

テ ス タ ー 田 頭 寿 子 （記録の責任は著者にある）

第 1 回 施 行	第 2 回 施 行
1956 年 10 月 17 日	1957 年 1 月 16 日
(7回目の面接時・インテークより約2ヶ月後)	(フォローアップ時・治療終了より2ヶ月後第1回目のテストより3ヶ月後)
R=32	R=48
$T/r_1=7''$	$T/r_1=7''$
W : D=14 : 17	W : D=17 : 26
W%=44	W%=35
D%=53	D%=54
Dm%+3	Dm%=11
$\Sigma C : M=4 : 5$	$\Sigma C : M=9.5 : 9.5$
FM : M=6 : 5	FM : M=8 : 9.5
FC : CF+C=0 : 4	FC : CF+C=7 : 6
FC+CF+C : F _e +o+C'=4 : 6	FC+CF+C : F _e +o+C'=13 : 6
F+% = 40/60	F+% = 79/64
F%=31	F%=28
H%=16	H%=25
A%=40	A%=42
At%=22	At%=6
Content Range=8	Content Range=9
P=6.5	P=7
Color Shock +	Color Shock ±

第1回のプロトコル

反応数は、平均よりも多く、反応時間は平均よりも短い。これはインクプロットが被験者の

観念を容易に湧出せしめていることを示しており、とくに努力することなしに反応をしていることを意味する。これは一面、表現に際しての抑制があまり強くなく、表現にむしろ自己満足を覚えているのかもしれない。また反応時間の短かさは、物事をあまり検討することなくすぐ決定し実行していく傾向を反映しているかもしれない。

反応内容は広く、興味の領域の広さと観念内容の豊かさを反映している。以上の点から、知的水準は高いことが分る。

しかし情緒的な面には多くの問題が指摘できよう。

1. **Color Shock** が見られる。ことにカード II にきて、反応が抑制され、つよい情緒的ニュアンス、殊に攻撃的な色彩をもった反応がでている。ただこの **Color Shock** は時間の遅滞をとまなっていないし、一応 P 反応もでているから、とくにつよいものではない。

2. **At 反応の固執 (Perseveration)** がみられる。心気症的な傾向の反映とみてもいいかもしれない。もしこの心気症的傾向が否定されるならば、一般的な不安の指標とみてもいいかもしれない。

3. $FC : CF + C$ で、 $FC = 0$ $CF + C = 4$ という関係がみられるが、これは極度に情緒的コントロールが低下していることを示すであろう。

4. 知的水準が高いにも拘わらず、 $F + \%$ があまり高くなく、ことに純粹の $F\%$ が低下しているのは、情緒的に不安定なためであろう。

5. 一般に情緒的な色彩をもった反応が多く、ことに攻撃的なものが多い。物事を極めて主観的に着色してみる傾向のあることを示している。ことに攻撃的なものは、何か強いフラストレーションの存在と、攻撃的態度の蓄積されている状態とを考えることができる。

6. $FC + CF + C : Fc + c + C'$ は、後者が優位であり、**Depressive** なニュアンスを感じさせる。しかし **Depressive State** という程、この面が優位なものではない。

7. **Diviant Verbalization** の軽度のもが多くみられているが、これは精神病的な傾向というよりは、ものごとを主観的に自己中心的にみていく未成熟な人格を反映しているものと思う。

以上をまとめていうなら、人格構造の特性は次の如くである。外界並びに内界の刺激に対して感じ易く、それをそのまま、抑制することなく表現する。いわゆる両向型の人格であるが、一般にその反応にはあまりにも豊かな主観性による歪曲がみられる。この意味で、社会的な協調を欠いており、**Common Sensible** なものが少なく、未成熟な面が目立つ。しかしその社会的な協調性の欠如は、P 反応の欠如という意味でのものではない。すなわち、このようなパーソナリティは、生活態度において他人と共通な広場に一応立ち得るが、その感じ方や問題のとりあげ方に、他人との共通性を欠く点が目立つのである。この主観性は、一面、子供っぽい主張となり、一面現実から遊離して非現実的な世界におちいる。精神病的な色彩はないが、感情

的に未成熟な、神経症的な特性は濃い。しかしこれは本来の人格的特性であつて、神経症的な不安や抑圧を反映はしていても、その面は僅かであるのかもしれない。

第 2 回のプロトコル (第 1 回目との比較において)

反応数は 32 から 42 に増加しているが、基本的な反応様式には特に変化はみられていない。ことに知的な側面では変化をみない。情緒的な面ではいろいろの変化がみられているが、このパースナリティの特性である依存的な自己愛的な態度は大きな変化はみられていない。特に変化したと思われる諸点は次の如くである。

1. FC:CF+Cは、0:4 から 7:6 に変化しており、FCが多く見られるようになっている。これは情緒的コントロールが良くなったことを意味するだろう。一般にFCは、成熟した情緒的態度を示すといはれており、前回に比して相対的な改善がみられているのは事実であるが、FCの内容からして (主観的色彩の濃い **Fabulized Response** を含む)、安定した成熟に達しているとはいいいきれない。

2. 反応内容は、やはり情緒的なニュアンスの強いものであるが、攻撃的な内容がなくなっていることは注目に値する。不安な感じは、しかしいくらか残在している。一応情緒的な安定を指示しているといつていいのかもしれない。

3. 反応数が制限されたり、反応時間が滞ったりする形での **Color Shock** が消失しているが、カードⅨで却って反応度が極度に増大するという形で、色彩が作用しており、外界の刺激に作用され易い情緒的な不安定性を反映しているものと思われる。

4. At 反応は減退しており、一般に不安は低下していると思われる。

5. FC+CFC:C:Fc+c+C' は以前と逆転し 4:6 から 13:6 に変化している。Depressive なニュアンスはかなり少くなっていると思われる。

6. Diviant Verbalization が同じく残っており、主観的着色のつよい自己愛的な傾向は変っていない。

以上の変化を要約すれば

第 1 回目のプロトコルにみられた、基本的な態度、未成熟な依存的な面はそのまま残っている。しかしその態度に対する、このパースナリティなりの統合のありかたが以前と異なるといえるかもしれない。

明らかな変化は、色彩反応、反応内容の **Affective Symbolism** においてみられる。初期に比してより穏やかな平和なものに変化しているのである。同時に Depressive な状態や不安状態も明瞭に減少していることが分る。これらはすべて、より成熟した安定した方向への変化であるといつてよいであろう。形態水準においては、New F+% は僅かな増加しかみせていないが、F+%は、2 倍の増大をみせている。これは、**Reality Testing** の増大とよばれる変化、すなわち外界の現実に応じて自己を統制する仕方の増大であるともいえるかもしれない。

い。

上述の人格構造 **Personality Structure** 及びそのフォローアップ時の変化は、前述してきたスタディ時及び治療過程にみられる特徴及びその変容とおおよそ対応しているといつてよいであろう。未成熟な人格が、それなりに統合されはじめ、自分の状態を理解して、その基礎に立ってより現実的に行動しはじめているのである。

「総括及び考察」

1. 27 才の女性 (**Maladjusted personality**) のクライアントに、インテーク面接後九回の非指示的方法による治療を行った。治療終結の 2 ヶ月後に、フォローアップ面接を行い、その際に、7 回目の面接時に行つたロールシャッハテストと比較すべく第 2 回目のテストを行った。

2. クライアントの治療初期における問題及び人格特徴は次の如くである。

感情的に未熟、依存的で常に他人に愛情を求めている反面、自己愛的自己中心的な、主観的感情にまぎこまれ易い人格である。他人に愛情を求めて接近し、その要求が満足されている間はよいが、自己中心的なその要求は満たされることが少く、常に他人に不満を感じフラストレートし、対人関係のアムビバレンシイは甚だしい。特にこの関係は母親との間に強く形成されている。父親を幼時に失い、母 1 人子 1 人の生活を続けている親子関係が、クライアントのこのようなパースナリティの形成にあずかっていたかもしれない。

このような特徴的な人格の持主であるクライアントは、現実的な態度が要求される職場で、たまたまやや問題のパースナリティ (感情的に動揺しやすい、自己中心的なオールドミス) をもつ上役との対人関係に失敗し、さらにクライアントが好きだった男性との恋愛に失敗したことをきっかけとして、適応異常をきたしたと考えられる。抑鬱的傾向、軽度の不安発作が加わり、以前からの動揺しやすい感情傾向が一層促進されたのである。ヒステリー的性格の上に発展した適応異常状態といえるであろう。

3. 知的にはすぐれており、外的並びに内的な刺激に対して豊かに反応する特性をもつクライアントは、治療状況で自由に自己を表現しそれを理解する機会をつくりだした。許容的な治療状況の下で、治療者の理解と受容に勇気づけられて、治療状況における責任を充分自己のものとしてうけとることができた。治療者の受容的態度は、クライアントにおける自己受容と他人の受容の傾向を発展させるモデルとなつたと考えられる。母親との間のアムビバレントな感情的態度、自己中心的な愛情への要求、課長との間に発展していた母親に対すると類似の関係、愛人に対してとっていたエゴイステイックな求愛、これらが殆んど赤裸に……多くの場合涙と共に語られ、理解されるに至る。その理解は更にすすんで、自分が、今過去において作りあげてきた上のような傾向 (これは子供っぽい、母親に依存し他人に常に愛情を要求する態

度である)を棄て去らねばならぬ時期に直面していると実感するに至る。だがこのような実感は、過去においてそのような自己の安定追求に有効であった態度を、完全に直ちにすてさることへの抵抗をうみだす。過去の自分への執着と、新しく成長していこうとする自己への信頼や希望とが交錯する。今までのような安定追求の方法、自己防衛の態度が、現実において自分を苦しめているとの理解は、しかし、究極において、子供であつた自分、未成熟であつた自己への理解を生みだす。よりよい安定追求の道は、クライアントがより現実的に自己並びに自己の周囲の他人を見ることであり、その態度において行動することである。

4. 治療状況における治療者の態度は、反射や明確化によって、クライアント自身の問題を現実把握することを促進した。それはクライアントの内なる問題を、彼女自身の責任において自由に取扱うことであつた。そこには治療者からの命令も指示も解釈もさらには元気づけも存在しなかつたし、何等のクライアントの態度への批判も存在しなかつた。治療者に対する依存的な態度も発展し初めはした。だがそれは治療者の明確化と反射の方法によって、クライアントの内なる問題として把握され、いわゆる転移的關係は発展しなかつた。このような状況は、上述のクライアントが自らをより現実的に、事実即して理解する基礎を与えるものであつた。

5. クライアントは、一時、自らの不安定な状況から目をそむけて、現実の中に没頭しようとした。仕事に猛烈な勢で突入した。だがそうすることは、解決されていない自己の問題にただ覆いをかけているにすぎないことに気づかざるを得なくなる。家に帰って母と一緒にいると、それから逃避しようとしていた自らの中の問題の態度に直面してしまう。この事実が治療状況の下で実感されたとき、クライアントは一時混乱におち入る。だがその混乱は、より安定した方向に自己が再統合されていく、必然的な過程にすぎなかつたのである。

6. クライアントは再び、自己並びに職場及び家庭での対人關係に、自らの目をむけ初める。それは以前とは違つて、感情的な色彩に曇ることの少い、理解と安全感の下での再確認であつた。治療状況はその安全感をつよめてくれたし、同時に成長しつつある自己は、今までは不安をよびおこしていた事実直面しても安全であることを知るようになったのである。ここで依存的な対人關係が、アムビバレンシイの度を低めた形で実感され、それが受容される。それと平行して、未熟であつた自己が、前は嫌つていた大人になりかけていること(これは以前には、母親への依存からはなれねばならぬという淋しさと不安をともなつていたのだが)を承認するに至るのである。

7. テストの結果にみられるごとく、治療によるパースナリティ変化はまだ十分なものではない。父親との關係や、性的な問題は、このクライアントにあつてどのような位置をしめるのか、全く不明である。クライアントがこの問題に全然触れなかつたからである。機会があれば更にフォロー・アップして行きたいとおもう。

(附記 いつもの事ですが心理学部片岡安史氏及び田頭寿子氏には、ロールジャッハ・テストのことで、多くの助力を仰ぎました。資料の整理に関しては、竹村和子氏及び研究員高柳信子氏に多くの時間を割いて頂きました。インタークにあたられた、須藤憲太郎氏にも色々御世話になりました。厚く感謝致します。)

ディスカッション

Diagnosis (診断) と client-centered (来談者中心) の問題

S₁ : (司会) 先ずクライアント・センタード (来談者中心) による方法というものの適用の限界があると思うんですが、一つそんなことから始めていただけますでしょうか。

D₁ : 先ずクライアント・センターということについて治療の方向づけがクライアントの手にゆだねられているということと、それからクライアントの能力の問題とが今迄の精神医学の考え方でいくと批判の対象になると思うんです。例えば精神病とか、器質的な問題とか或いは、いわゆる精神病質と云った場合、治療の方向づけがクライアントの手にゆだねられるということの解釈が問題になるんじゃないかと思うんですが。

P₂ : (筆者) そうですね器質的な精神病というような問題について、これがどの辺迄行けるかということについては誰も解答を持っていないと思うんです。はじめにそういった意味での診断のプロセスも必要になると思うんですけどね。

D₁ : クライアントの能力の判断のプロセスがやっぱり必要なんじゃないですか。それと同時に治療者側が、クライアントの中に自ら問題を処理していく能力があるという信頼が必要になってくる。クライアント・センタードの可能性の判定は進めて行くうちにわかる問題でもありますけど信頼することも必要になるわけだと思うんです。そ

れから心理療法の対象になるものは、一応ノン・ディレクティブ (非指示的) の対象にもなると考えてもいいでしょうか。

P₁ : ノン・ディレクティブ療法は比較的広範囲に適用可能ということは認めるけれど、あらゆる場合に適用しなければならないものであるとか又それが唯一の方法であるというようなことはいえないと思います。

D₂ : あの方法でやるか、この方法でやるかを考えるとやはり診断ということになっちゃうんじゃないでしょうか。

D₁ : クライアント・センタードということに問題をもう少しぼって考えると、例えば精薄の場合だってやはりディレクティブ (指示的) が可能な場合もあると思うし、問題を広げていけば器質的とか精神病とかで対象がきめられる問題ではなくなるのではないのでしょうか。例えば内因性の精神病でも問題になり得る場合もあるし、だから線の引き方がそこで問題になってくると思うんですよ。

P₁ : P₂ 先生にちょっとおたずねしたいんですが、先生は、はっきり診断などとらわれずに治療を進めるという所迄はいいに思えるんですが、そこにまだ診断の過程が含まれているような感じがするんですけどね。

D₁ : 然し、いわゆる古い意味での診断とは違うでしょう。

P₂ : 治療のプロセスの中で何かこちらの応答に対する反応が違って出てきたなというようなこと

注 以下発言者はアルファベットでその専攻を表わしている。即ちSは社会学専攻、Dは精神医学専攻、Pは心理学専攻、Cはケースワーク専攻を指す。

は、やはり途中で感ずるだろうと思うんです。そういう時にやはりそういう意味での診断的な過程が入ってくる可能性はあると思います。それからわれわれは診断的な意味で最初からその人を批判したり判断したりすることはないし、又途中でだんだん或る種のズレを感じるようになってきた時は、すでにクライエント・センタードではなくなくなってしまっているわけです。そういった時には違った形の治療に移っていくことになってしまおうと思うんです。

D₂ : 最初の頁の情緒的障害ということばについてなんですがこれはちょっと問題があるんじゃないですか。即ち情緒的障害を持つすべてについてこの方法が認められるのかという点に、精神医学の方からの批判が入ってくると思う。情緒的障害と一口にいても、発生的な原因的な色々のものを含んでいる。それらすべてに対してこの方法が適用されるのかというのは重要な問題だと思うんです。

原因診断と状態像診断

S₁ : 診断の問題に入りましょう。

D₁ : ええ。先ずその診断の定義なんですが、それには原因診断と症状診断又は状態像診断とがあるわけです。そこん所を先ずははっきりさせた方がいいんじゃないでしょうか。

C₂ : この二つは我々が取扱うのに必ずしも確然としたものではないと思うんです。

C₁ : はっきりしない所に問題があるんじゃないですか。内因性精神病の時に特にそうなんです。状態像診断ということだけに限定すれば、ノン・ディレクティブとディレクティブとの間にそんなにズレはないと思うんですよ。状態をつかむためには十分プロセスが進まなくてはならない。進めば進む程状態像がはっきりしてくるわけですから。

P₁ : 原因診断というのはダイナミックなものを

指すんですか。

D₁ : 必ずしもそうとは限らず内因、心因というような機械的な原因論もあるわけですよ。

P₂ : ロジャースの場合にはそれらを問題にするかしないか解らないが、ロジャースなどには神経症などの場合外側からこの人間はこういう問題で症状が発展しているんだというような事を、はっきりいえるはずがないという確信が先にあるんです。これは実際に外からそういう表現で原因をきめちゃって、その理解に従って症状を除去するように治療を行うというのが不可能だという意味なんです。ノン・ディレクティブの場合ではクライエント自身が問題を理解し、治療者がむしろその後からついていく形になる方がより自然なのだという考えを持っている。だから診断技術そのものは問題ではない。それよりもそういう問題のあり方を理解する立場というものが重視される。その点の違いが問題になってくるのだと思います。

S₁ : 面接の場面では診断的態度は全然持たないが、終わった後ではやはりふり返っているわけですか。

P₂ : やっぱりそういうことはありますね。ただその点で私自身もちょっと混乱したんですが、どうしてもそういう態度を取らざるを得なくなる場合があります。例えばクライエントがこういう問題をこの間出したけど、今日はこういう問題を提出した。そういう点で前回と今回で違いがある。この違いというものはこういった形のものがこういった様になっているんじゃないか、というようなどころではやはり診断みたいなものが入って来てしまいますね。然し、テクニックとしてはその点を扱う方法は別に用いません。

Interview (面接) に於ける素材の問題

D₁ : 診断的アプローチでは色々の素材を集め、そして診断なり治療に入るわけですが、そういう問題はノン・ディレクティブの立場ではどうでか

か。

S₁ : 私自身疑問なんですけど、色々の素材を持っていることが、インタビューの場面で相手の患者にうまくついて行くのに都合がいいのか、かえって妨げになるのかどうなんでしょう。この辺でちょっと素材の問題にふれてみたいと思うんですが。

D₁ : 素材を持っていた方が、相手の感情を正しくリフレクト（反映）するのに都合のいいということになりますか。

C₂ : それがなければ治療者の方で不安になってしまうんじゃないんですか。

C₁ : 私はノン・ディレクティブの立場ではないんですけど、素材もっていて、何か準備が自分の中になされている場合、何かこちらで物をいうとしますね、その時の物のいい方なんですけど、自然に出てくると思うんです。例えば"その気持は良く解ります"というようにしますね。それはいい加減にいつているのではなく、やはり診断的な理解に基づいてごく自然に出て来たものなんです。そういう自然さをむしろ私としては尊重したいんです。その辺で少々ノン・ディレクティブと違うわけなんですけど。だから素材を知っていればそれだけ応答が自然になるんじゃないかと思うんですがどうですか。

D₁ : その点なんですけどね、その素材をどうやってその治療者がつかんだかが非常に問題になってくると思う。

C₁ : その素材は治療が進むと修正されるんです。最初に得た素材に関する理解は動かないわけじゃない。その修正されたものにわれわれがついていくわけなんです。ついて行くという点はノン・ディレクティブと同じなんですけど、その応答がちょっと違うと思うんです。

D₁ : もし素材を知る方がいいというならば、一切を出来るだけの力で集めた方がいいということになるんでしょうか。

C₁ : 洗いつくすというんじゃないと思います。自然な反応をするために必要な程度の素材なんです。

D₁ : そういう点からいえばノン・ディレクティブな方法でも相手が男であるとか女であるとか子供であるとか云う程度の判断はあるんだから、素材によって、反応の仕方が違ってくるということもいえるだろうと思います。だから素材一切を否定するという事は実際には不可能だと思います。結局素材をどこ迄広げればいいのかという問題になりますね。

S₁ : 友田さんがいわれたんですが、色々手を尽して調査するようなデータなど1、2回の面接ですべて判ってしまうということなんです。それ以上やる必要はありませんと断言されたんです。

C₁ : 私は1、2回の面接で判ってしまうという種類の素材を指しているのではないんですが。

P₂ : 私もやはり素材ということを考える場合には、その応答とアクセプタンス（受容）に役立つ意味でのものだと思います。だから最初にしっかりつかんでその理解に基づいて、だからこの人はそういう態度に出るんだと、きめたり判断したりするというような意味での素材とは違うと思うんです。

D₁ : 素材を最初つかんでそれによって計画をするというものは違うんですね。例えばこの場合母親が治療に入って来るけれど、これはそういう意味での計画ではなくむしろ自然なプロセスとして参加したという事を意味しているわけですね。素材を相手が提供するか、それをこちらが積極的に把握していくかという点で違うわけですね。

P₂ : ノン・ディレクティブの場合はクライアント自身が問題にしなければならぬことならば、自発的に必ず提供するだろうという気持があるんです。

S₁ : 果してノン・ディレクティブな治療者として、素材はそんなに必要なんですか。クライ

エント自身が治療していくわけですから必要ないように思うんですね。

D₁ : 本人にとって素材になるのでしょうか。

S₁ : 本人自身にとって必要であり且つ重要な問題が残っていたとしても、本人がそれで治ってしまえばそれでいい。話の相手になりさえすればいいので何もつかまなくてもいいというまあ極端ないい方ですがそれでいいんじゃないんですか。

P₁ : S₁先生が素材をつかんでいなくてもいいのじゃないかとおっしゃいましたが、もう少し具体的に説明するとどういう事になるのでしょうか。

S₁ : 感情の状態をつかむことは重大だが内容はつかめなくても、その感情をつかめればいいと思うという意味なんですよ。

S₂ : 素材にも色々あって内容だけでなく感情的なものもあるわけでしょう。

P₁ : C₁先生のいわれる自然さというものは私にとってはこういうものなんです。例えばこのケースの場合はそんなに問題じゃないが、"私は分裂病でしょうか、ノイローゼでしょうか"と聞かれた場合、私なら説明してしまう。つまりそれがディレクション(指示)になるんじゃないかという恐れを持ちながら説明してしまうんです。それが私のいう自然さです。しかしこの事をもってノン・ディレクティブの限界とすることは出来ないと思います。そこで色々な診断と、色々な方法というものが合わされて、はじめて理想的な体系がととのうんだろうと思います。

P₂ : その時間問題になると思うが、1人の治療者が色々な態度を取るということが出来るかどうかという所に問題が残りにませんか。

D₁ : 精神分析の場合はその背後にある隠れたものまで問題にしているわけですね。素材の範囲を非常に拡大しているんですが、この場合にはそういったことをしないんですね。

D₂ : 分析の場合はそれだけではなくてその背後に生物学的な問題即ち無意識のレベルにも入って

こない様なものも考えなくてはならない。もしそういうものがあるとしたら、これは当然指示を与えなければ、いかなる方法をもってしてもそれを本人の意識の上にもたらすことは出来ないでしょう。

S₁ : そういう問題に触れることが出来なければ治療が出来ないという種類の対象なら、こういうやり方はやはり限界があるんでしょう。

C₁ : そういうことで出来ないからむしろこういったものに役に立つんじゃないでしょうか。例えばそういう事をいくら説明したってわからないものはわからない場合があるんだから。

S₁ : そういうことを説明する必要がないものが治っていくんですね。

P₂ : 分析的な意味で解釈の方がそれに関して不安になったり、何かもっと深い事があるんじゃないかと考えたりすること、そんなことに不安を持ったりするんじゃないんですか。私自身はインタープリテーション(解釈)をしていくことにはとても耐えられないんですけれどね。

S₁ : その解釈ということなんですが、ノン・ディレクティブにおける解釈というのは、どういうことなんですか。そういうことでひとつ。

Clarification (明確化) と Interpretation (解釈)

D₁ : クラリファイする事とインタープリテーションを与える事とは紙一重だという事が、私達にも感じられる。正統的な精神分析は別としても、インタープリテーションも随分変わってきているんじゃないんですか。恐らくこの辺にノン・ディレクティブと精神分析との触れ合いがあるんだと思います。

C₁ : ノン・ディレクティブの場合にいうインタープリテーションとクラリフィケーションとはどういう違いがあるんでしょうか。

P₂ : インタープリテーションと、クラリフィケ

ーションとでは 2 つの面で異っていると思います。第 1 にクライアントの感情に対する密着の度の相違ということです。クラリフィケーションはクライアントの感情と正に同じ水準での感情の明確化ですが、インタープリテーションの場合は、その水準よりやや深い層に関係するといえるんですね。だからインタープリテーションの場合には、少なくともクライアントにとって、まだ明瞭に意識されていない感情に触れることになるだろうと思います。この場合に起きてくるクライアントの反応は時間の遅滞、拒否等になり易いわけです。で、ついでなんですが、それをノン・ディレクティブセラピーでは抵抗とよんでいます。第 2 の相違は、第 1 の事に関連するんですが、治療者が、彼自身の考えなり意見なりをクライアントと別に持っている場合は、インタープリテーションになるだろうということです。ノン・ディレクティブの立場で診断的態度を問題にするのは、この点においてだと思います。で、クライアントの感情にそのままついていくという事は、セラピストが彼の異った立場からの理解をおしつけないということなんです。

面接の回数について

S₁ : 友田氏もいっているし、ロジャースもそうだと思うんですが、非指示的療法によれば治療回数が非常に少なくてすむ、つまり治療期間が短かくてすむというようなことをいっているんですが、そういう効用はないんでしょうか。

P₂ : 私の経験では必ずしもそういう事はいえないと思うんですが。

C₁ : 治療者側で解釈したりしてしまって、こちらで責任をとってしまうことによって治療が長くなるという危険性について、友田先生は警告されたんじゃないんですか。

研究と治療との関係

D₁ : 治療をやりながら心理療法を同時に研究しようとする、非常に矛盾があるんですね。治療が済んでから眺める時は心理療法の研究者だと思わうんですが、治療場面では治療者であると同時に研究者としての役割を兼ねようとする、インタープリテーションというような点で色々な問題が起ってくるということを私は感じてるんです。心理療法の場面では、やはりその人なりの治療しか出来ないと思うんですがね。研究としては少なくとも healthyeclecticism (健全な折衷) でなくてはならないと思うんですが。一般的には 1 人の治療者としてはそれはやはりむづかしいんじゃないかと思えます。何故ならそこに反省がともなったら、そこではもう治療者ではなくなってしまい、研究者になってしまう。一時に 2 役を同時に兼ねるということは、私達にとって非常に問題だと思います。しかし科学であろうとする限りそれを兼ねなくてはならないんじゃないでしょうか。何かこの辺に矛盾を感じてるんですがね。

P₂ : やはり治療状況では 1 人 1 役でしかあり得ないと私は思うんです。終わった後では研究者でなければならぬかも知れないんですが。

D₁ : その場合科学であれば、自分が何であるかクライアントが何であるかという所まで入って来ちゃうんですね。

P₂ : 私はそこ迄考えないんですがね。実際自分の反応している応答がこれはまずかったなという反省が起きることは起きます。でもこれはやはり治療者の態度じゃないかと思えます。

診断主義への反省

D₁ : 素材を集めるという問題にかえるが、診断派でもやはり相手がいっているという事そのものを診断するのであって、そこでいわれたことが事実であるかどうかという事は別問題なんです。面接の状況において、その人がその記憶をたどっているという事実を問題にするのだと思うんです。

私達としては、相手がいったことにもとづく診断と、事実を集めてする診断を混合してまとめてしまふ場合が普通です。

C₁ : その辺で診断派の反省もなされなくてはならないと思いますね。昔はそういったものが客観的なものじゃなくてはいけないといった目的でデータを拾集することが一義的に必要だったんですが、その人がその面接という状況でそういう所に意味があるんじゃないかと思うんです。

D₁ : 今彼がこういうふうに考えている、こうしているのはこうだ、とかだから治療はこういう

ようにやるべきだというような考え方については、いわゆる診断主義も或る程度修正されなければならぬですね。

C₁ : それはオブザーバーであるとかインベスティゲータであるとかという科学者としての立場よりも、むしろ治療者として当然考えるべきことなんでしょうね。

S₁ : じゃこのへんで一応このノン・ディレクティブメソッドについての討議をおしまいにしましょう。

盗みをする子供の治療

Shusuke Tamai and Akira Kashiwagi:
Treatment of the Child who Steals

児童精神衛生部 玉 井 収 介
社会学部 柏 木 昭

本人M10才 男子, A小学校五年生	治療回数 本人 15回
父親 48 才 日傭労働者	母親 13回
母親 42 才 (継母)	治療終結 本人 31年 10月 20日
弟 4 才 本人とは異母弟	母親 31年 9月 28日
妹 4ヵ月	治療担当者 インテーク 柏木
インテーク 31年 6月 8日	スタディ 柏木, 玉井, 菅野
治療開始 31年 7月 14日	本人の遊戯治療 玉井
治療 母子とも毎週1回約1時間	母親のケースワーク治療 柏木

は し が き

以下に述べる事例は、盗みのある子供とその継母の治療の経過である。この稿では主として継母子関係にある児童に対する心理療法の適用性 (applicability) と、クライアントに対するケースワーク治療の可能性又は、その自己決定の問題について考察してみたいと思う。

治療についての手続としては、ケースワーカーの最初の面接 (インテーク) と、精神科医、心理学者及びケースワーカーによる検査 (スタディ) を経て、児童の心理療法及び継母のケースワーク治療に入るという本研究所に於ける一般的な仕方になっている。

インテーク面接

来所経路: A小学校々長伊藤氏が、「盗みと狂暴で手に負えない1人の生徒の指導を願いたい。母親を寄越すから会ってくれるように」といって紹介され、インテーク面接にはその母親が来所した。
相談理由及び経過: 母親は継母。背の低い小肥りの人で背中に赤坊を負い、外に本人とその弟 (継母の実子) を待たせ、困り果てたような顔で面接

室に入った。彼女は山形県出身で少からず東北訛りがある。胸のポケットから紙片を取り出して、それを見ながら、本人がいかに頻繁に盗みをするか、それをいかにうまくいっていつくろうかについて極めて長い話をする。

この間も「何某方の金が1000円ばかりなくなったが、又M男ちゃんじゃないかしら。昨日M男ち

ちゃんがおそばを食べているのを見たわ」と同じアパートの人が注進して来た。どうもこの頃余り御飯を食べないと思っていたら、そんなことしたのかと思って、帰ってきてからききただして見ると上眼づかいに、とても恐い顔で私のことを見ながら、「嘘だい、俺そんなことするかよ、600円拾っただけだぞ」と言った。嘘とはっきり分っているが、その嘘のつき方がいかにも自分は、ほんとうのことを知っているんだというように聞こえる。盗んだ現場を見た人がいるので、「そいじゃ、母ちゃん、その人にききに行くよ、これから」というと、「ああいいとも、きいてきなよ、拾ったのは本当なんだから」といって平気なものだから

以上が、盗みについての典型的な陳述の内容で、この様な話しが約40分にわたってくり返された。これは継母の本人に対する拒否 (rejection) の具体的な表現である。

M男はかっとなると物凄い顔になる。そしてとても狂暴になるので友達がおびえてしまう。この間も一寸したメンコの上のつまらない争が大きくなって、M男は相手の襟首をしめ上げながら、「やい、このやろう、俺が取返すまで、てめえをうちに返さねえぞ」とすごんだので、友達が家へ逃げてってしまった。狂気のようになって彼をその家まで追いかけて行き、鍵の掛かった戸をがたがたさせて、「やい、このやろうでてこい」と恐い声を出して、今にも押し入って来そうになったので、そこうちの母親が、うちまでとんで来て、「お婆さん、早くなんとかしてちょうだいよ」と自分に頼むんだが、自分だって手を焼いていてほとんど困り抜いていたので、「どうしようもないんだよ、困っちゃってるんだから」といってる所へM男がとんでかえってきて、その友達の母親にむかって、「やい、このやくざ女、また俺の事、悪くいってやがんだな、ようし、もう承知しねえぞ、このかたきをとってやるんだ」と叫びながらまた友達のうちへとってかえした。これは大変と思ってその母親が近道で家へ帰った時は、時すで

ついそうかなという気になってしまう。然し盗られた方がそれではおさまらず、「アンタんとこのM男ちゃんはしょうがないよ」といわれるので、もっとよくしらべると、やはり彼が盗んだのは事実とわかり、M男が学校から帰るとすぐに「お前はまたやったな、少しはうちのことも考えたらどうだ！」といってお尻を20ばかり叩いてやった。するとすなおにあやまって、「母ちゃんごめんなさい」というので不憫になる。それで2,3日おとなしくしていると思うと、またけろっとして盗って来る。盗んだ金は、それでそばを食ったり、友達におごったりする。

に遅く、その子はM男に顔を水道栓にぶつけられて傷を負わせられていた時だった。

その他、書店から漫画を万引して、その現場で女店員に見付けられ、その店員と主人がやってきて、弁償を要求したがM男はしらばっくれて、「俺は取りやしねえよ」といい張るのでその女店員が口惜しがって泣き出した話や、金を盗んで発覚して叱られるのを恐れて1日中、雨の降る中を家へ帰って来ないので搜索願を出したりした話が更に続けられた。

従前の処置：盗みは大抵、5,6才の頃から気がついた。いろいろ手を尽したが全く困り果てて、小学2年の時、K警察署の少年補導係に頼んで指導してもらったことがある。前後3回行って一度目は捕縄をかけられたりして「こんなに恐いんだぞ」とおどかされたので、その後しばらくよかったが2回目3回目は優しくいわれたりしたので警察なんか恐くないという気持ちになってしまった。

今は、家から離れてどこかへやられるのが一番こわいらしくて、その時だけは涙を流して嫌だという。学校では受持の先生も校長先生も非常に心

配されている。校長先生は一度「人の物を取らない嘘をつかない」などの座右の銘を書いて約束させた。自分(継母)も、又父親も非常に心労して何とかしようと思うがどうしようもない、万策つきたというところである。自分は大抵弁償してきたが、合計すると、まだ1500円位たまっている。盗みが余り頻繁なので、もう自信がなくなっちゃった。これで弁償できなくなったら大変だと思う。

発育史：4才以後順調であるが、それ以前のことは継母なのでよくわからない。

教育史：入学は順調だったが、成績はずっと下である。1年、2年及び四年は皆勤したが今年は盗みが発覚し、くさって学校へ行かなかったことが2回程あった。学校では、友達のうけはいい方で性格が明るく、おごってしまったたりするので漫画などはいくらか貸してくれる程である。

既往症：実母が肺結核で亡くなってから肺門リンパ腺炎で入院、齧歯があって胃腸が悪く、少し食べ過ぎるとすぐ青い顔をしたが、小学校に入ってから丈夫になった。3年の時、食べ過ぎて胃を悪くし、休んだことがあった。しかし学校は好きで絶食しても行くくらいである。

家族関係：父親は48歳で、現在は日傭労働者である。非常にきれいずきで几張面なので自分とは正反対。仕事から帰ってくると子供の足の裏が汚いとか、戸がはずれているとか、始終口喧しくいつている。仕事から帰ると必ず「M男、勉強したか」ときく。すると、大抵4才になる弟がとりなして「父ちゃん、今日兄ちゃん勉強したよ」という。どうも父ちゃんはこごとが多過ぎる。この子供のことで夫とよく喧嘩して「私の方が暇を貰いたいわ」と思うことがよくある。子供のことで自分が不平をいうと、夫は「頼むからやめてくれ。子供のことはもうたくさんだ」ということがよくある。

私は42才でM男が4才の時に結婚した。M男の実母は肺結核で死亡。実母とは織物工場に働いて

いた時の友人である。自分としてはM男はいつもはいい子なんだが、一旦気分が暗くなると乱暴しちゃうので、これはきっと小さい時から叱られてこんなになっちゃったのではないかと思う。全くいい時はとてもよくて、「母ちゃん赤坊おぶってあげよ」とか「手伝つてやるよ」とかいう位だし、性格が明るいので皆に可愛いがられる。自分はほんとうに可愛いんじゃないかと努力した愛情だと思う。亡くなった仏の心になって見て、ああ自分の子がこんなになっちゃったのかと見ていたらたまらないだろうと考えて努力する。自分は夫と違ってごまかしがきかない。叱るだけ叱ってしまつてそれでやっとなんかおさまる。ところが夫は胸の中に気持を抑えておくことができる人で、いつも自分は夫に「俺が叱る時位、お前は猫なで声でやればいいんだ」とか「お前は田舎の言葉でやるからいけないんだ、東京の人はもっとやさしくいうぞ」といわれる。私は近所の人の手前を考えたことなんかない。私はあたりまえのことを叱るんだが、近所の人はいつも「叱るな」という「残酷なお母さんもいるもんだ」ともいわれる。夫は私が「もう育てることはできません」というと、「できませんといわれたら俺もどうしようもない」という。私もときどきもう実家へ帰っちゃつて、他の人にお嫁にきてもらつてM男のことを頼もうと思うこともあるが、自分よりこの子の養育について自信のある人なんか居ないと思う。

下の子は4才で、M男がこの子の年頃にはこんなにお小遣いはやらなかったと思うと何かうしろめたい気がする。この子と比較してやはりほんとうの子じゃないからかしらと思う。M男の甘えたいという気持を認めてやらなかったし、お使の時くっついてくるとこっちは来ちゃいけないといつたりしたこともあった。

親の治療に対する態度：今迄何とか自信を持って努力して育てて来たが、もうほとほとどうしようもなくなった。然し「収容所」にやればいいと人

に言われるが、それだけはしないでなんとかして やりたいと思う。

インテーク面接に於ける継母の発言の内容を検討して見ると、本人に対する拒否 (rejection) を結婚する基本的な感情として認めることができる。更に原因論についての継母の感情は自分のまへの養育者達すなわち、実母、父親その他に、現在のM男の行動の責任があるという所謂投射 (projection) が特徴的である。然しながら自分の拒否的な面は継母が意識していないわけではなく、そこに罪障感があって一方的にネガティブな養育態度に対するブレーキとなっているに違いない。従って本人には全く困っているが、人のいうように少年院などには送りたくない、なんとかしてやりたいという固執が認められるわけであろう。

これらの診断的考察を具体化し、問題の様相 (構造) 及び原因論について更に明確にするために、インテーク面接につづいて、スタディの段階で母親との面接が 2回行われた。

ス タ デ ィ

(以下Cは継母、Pは患児、Tは治療者をあらわす)

C. (母親) との面接

スタディ面接第一回：最初に実母が入院中本人を伯母が引き取って養育したことが話された。M男が嘘つきで強情なので、非常に厳格な伯母はそれを直そうとして折檻した。それで鼻血を出したりしたことも再三あった。ケイスワーカーが、「そんなことがやはり影響してるんでしょうかね、どうでしょうどう思いますか」というと話は更に発展した。

実母は結婚前、青年学校時代、2カ月ばかり一寸精神病的だったことがある。医師には相談しなかったけれど、普通と違っていた。それでM男を実母のそういう点と思い合わせて見るとどこかそっくりなところがある。勝気で復讐心が強いところなどほんとうにそっくりだ。然しその一方純情で義理がたく、嘘をつかない性格で、人から物を借りると必ず品物をつけて返すくらいである。自分とは然し一番仲がよかった。実母が肺結核で亡くなってから、百日目に自分は現在の夫と結婚した。自分は全然夫のことを知らなかったが、話にきくと子供をおぶってまで勤めに行くというので結婚

してもいい気持ちになった。それまでカリエスで結婚することなど全然考えたことがなかったが戦争中志願して働いたT航空会社で重労働をしても平気だったことや、死ぬ気でやったらかえって精神統一も出来て爆撃も平気だったことなどを考えて、結婚しても大丈夫という気持ちになった。また子供を、とにかくそれだけ可愛がる人ならと思って、ただM男の為に結婚しようという気持ちになった。だからまわりの人がよくM男を感化院に入れたらというがなんとしてもM男を手放そうとは思わない。夫は「もうこんな調子では弁償もできない位でどうしようもないじゃないか、家ではとても直らないからどこかへやろう」というが、自分はとてもそういう気にはなれない。夫のいうことももっともで、このまえた来 (インテークの) 次の日もM男が古本屋から千円取ったらしいが、どうして弁償していいか目鼻が立たない。古本屋から取ったということは確実だ。この間も自分は一度M男をこの古本屋に連れて行ってそこの娘さんに、「この子が来たら注意して見ててくれ」と頼んだのだから。こんなことも考え合わせて、今に何が起るかわからないと思う。それで自分も、放したくないという気持ちと預ける方がいいかもしれない

ないという気持の板挟みになっている。

あの古本屋のことがあった直後、警察署の少年補導係の人が「あの子は政府の学校へ入れた方がいいのじゃないか、もし必要とあれば自分が出向いてやる」といってくれた。そのことを校長先生に話したら、折角研究所へ行って、根本的に見ていただいているんだから、その方針に従った方がいいんじゃないかといわれた。それでまたそのように少年補導係の人にいうと「そうか？ そんなことでいいのか？ 何だったらいっても話しにのってやるよ」といわれた。

自分ではできるだけ叱らないようにしているが神様みたいな気持になることは不可能だ。それでいつも、激しく叱ったあと「ああ、又あんなに叱るんじゃないかな」と思う。

スタディ面接第2回：父親は少しもこの頃M男を叱らない。どっちみちよそへ預けなければならぬから不憫に思っているのだろう。どうもかわいそうが先に立つてしまうらしい。

自分（継母）も4つの年に実母に亡くなられ、11才まで祖母に預けられた。12才の時新しい母が来て自分は叔母の所に養女にやられたが、やはり生

家がよくて帰りたくて仕方がなかった。叔父叔母の代りに父母と呼ばなければならなかったが、叔母さんは自分が「お母さん」と呼ばないのでよくヒステリーを起こしていた。それからまたよく嘘をついたものだし、一度もそれがバレたことがなかった。そんなことが因縁でM男に出て来てしまっているのかと思うと、何か悪かったなあという気がして仕方がない。だからやはりM男の淋しい気持もよく分る。

自分は善良じゃなかった。嘘をついたり、虚栄心があったりで、小さい時は先生になりたかったけれど、それもやめてしまった。いろいろ考えていたのでキリスト教の伝道をきいて教会へ行った。18才の時に勤めていた織物工場をやめて女中奉公をしたがカリエスになってしまった。死んでもかまわぬ心算で20才の時また織物工場に帰った。戦争が始って、いっそ働くなら御国の為に働こうと思ってT航空会社に勤めた。キリスト教は信じられたわけではなかったが、何か神はあるような気がした。その頃読んだ本の中に「祈りは苦しみからの赦免ではなく最高の意志への従属である」という言葉が書いてあって、これには心から感服した。

心理学的諸検査結果

児童統覚検査 C. A. T.

反応態度に特記すべきことはない。反応内容としては次の点の特徴としてあげられる。

1、画面を理解し、物語を構成する能力は劣っていない。したがって知能は正常と思われる。

2、画面の各動物を把握する仕方及び物語の内容にはいちじるしいかたよりはなない。

3、特徴としては画面を夜と規定することが多いのがあげられる。

4、両親との関係は、一般に、両親と子供であると指摘するにとどまって、それ以上の説明が抑制されている。それは特に父に対していちじるしい。母に対しては母が子供をかわいがるとい

で2回ほど出ている。

5、両親間の緊張の存在を思わせる反応が一つある。

われわれが今日までに扱った多くの継母子関係にある例では、両親への不満、敵意を表現することが多かった。その点本例はやや例外であるといえよう。

ロールシャッハテスト Rorschach Test

カードⅦまでは順調に進んだが、Ⅶから隣室の母の面接に気をとられてややおちつきを失っている。

反応数、時間、ロケーション、ディターミナン

トなどの点では時にいちじるしい特徴はない。コンテンツレンヂがややせまいこと、A%が若干高いことなどが注意されるが、全体として極端な傾向はみとめられない。

絵画欲求不満テスト P. F. T.

この結果はややいちじるしい特徴がある。すなわち、大部分(24問中19)において何らかの形で外罰的に反応している。自己の非をみとめず逆に攻撃的になる傾向がつよく、それは友人関係とくに相手が男の子であるといちじるしい。

障害優位型の反応はわずかにすぎないが、注

精神医学的面接

はっきりした話し方、態度で、質問すればよく答える。稍虚勢的な話し方が目立つが、表面殆んど警戒的な様子は認められず、人なれした態度である。

野球、ソフトボール、映画を見た話などが話題となり、また小遣いで菓子を買うという。家族の話では、父が日雇をしていると答える時には、稍々なげやらない方をし、父も母もおこらない

これら回2のスタディを通じて、継母の拒否的感情が表現され、本人の行動異常の特質が、家族内の人間関係殊に母子関係のダイナミックな要因に由来するものと考えられるが、これらの点について次に診断的要約を記す。

診 断 的 要 約

M男の非行についての原因論をインタビュー及びスタディ面接に於ける継母の話から総合するとそれは性格的な異常というより、むしろ親子関係に由来する諸要素に対する反応であると考えられる。継母は非常に几張面で、自己に対して批判的である。M男の盗みの弁償は継母にとって最も重要であり、極めて厳格な躰がM男に対する養育態度となっている。この継母の躰の態度は潜在的な憎しみを基調としたものであることは、継母の自己に対する反省評価、例えば「努力した愛情」という言葉やM男の非行についての多彩な具体的表現(万引防止の為にM男を古本屋に連れて行き、古本屋の警戒を喚起したことなど)にその根拠を求めることができ

目すべきはその相手が父や教師などに限られていることである。すなわち、相手によって使いわけを行っているわけである。

以上の諸検査の結果を総合して判断すれば凡そ次の如くいうことができよう。

本児は性格上、知能上にいちじるしい偏異があるとは思われない。しかし両親との間には少からず感情的なあつれきがある。

その不満や攻撃的な傾向はつよいがそれほど深く抑圧されてはおらず相手によってそれを直接に表現することはさけている。

という。

担任の先生は今まで女ばかりだったが、こんどは男の先生になった、いい先生だがこわい、叩く時もあるが白墨を投げるんだという。喧嘩の話で、中学生3人を相手にやっつけちやうんだと虚勢的。音楽の時間は、昼休みの前で、歌うとおなかへちやう、みんなそういつているよという。

また赤鬼に追いかけられた夢を見たという。

る。この「努力した愛情」は一方、潜在的な憎しみを避けようとする継母の意識的努力であることは明かである。

即ちM男の盗みや狂暴など一連の問題は、この継母の過度に厳格な養育態度と努力した愛情という2つの不自然な生活傾向に対する反応であり、更に父親の施設送致という拒否的態度はこの反応の悪化要因 (aggravating force) となっている。

以上のべてきた面接および検査の結果から総合して判断すれば、本児は、性格上知能上に著しい異常をもつものではなくその問題行動は主として両親に対する感情的なあつれきに基因する一次的行動異常であると判断される。したがって、心理療法の対象となりうる問題であると考えられる。

母親のケースワーク治療はインテークおよび2回のスタディ面接によって、母親が自ら多彩な素材を俎上に載せ、M男をめぐる対人関係等に対して卒直な感情を表現する意欲があることが認められた。これは問題と治療そのものを理解し、解決に自ら積極的な役割を果しうるのでないか、ケースワーク治療に於ける自己決定の原理が適用できるのではないかということが推測できた。

以下、本人、母親ともその治療の過程を3つにわけて、記載する。この分け方には、特別な根拠があるわけではなく、両者の進捗の対照上便利な為である。然し強いて言えば、第1段階(治療の第1回から第3回まで)は、両者とも治療に対する準備(orientation)ができ上り、子供は「どうせまた叱られるんだろう」といった態度がなくなり、母親は、子供の心理療法を理解し、また説明されたり指示されたり助言されたりはしないケースワーク治療に漸く慣れてくる時機である。その第2期(第4回から第7回まで)は両者とも、第1期でなされた準備に基き、自由な表現をすることができるようになる時期であり、第3期(第8回から終結まで)は、子供は治療場面以外でも落ち着き、盗みが止まり、母親は種々の面に於ける洞察(insight)が発展し、情緒的レベルにまで深まり終結に至るまでの時期である。

治 療 経 過

第 1 回 (P.) 7.14

ブレイルームに導くとだまってついてくる。部屋に入っても、だまって立ったまま。

T. 「好きなようにおもちゃであそんでいいよ」

P. 口の中でかすかにうなずく。

いろいろなおもちゃに手を出してみるが一寸さわってみるという程度。イスにかけようとはしない。絶えず手をのばしたり首をすくめたりする。

ときどき治療者の方をのぞきみるが、視線が合いかけるとそらして窓の外の方をみる。

学校のことなど1,2質問してみるとぶっきらぼうに断片的な答をする。何かひとりごとをつぶやいている。

治療者はそれ以上あそびをすすめることもなく話しかけることもせず、終始、横あるいは斜め前

ぐらいに位置しつづける。

時間の終るまでほとんど同様の経過がつづく。

P.は相談室に連れてこられた理由が自らの盗みであることを知っており、叱られること、あるいは詰問されることを予想していたごとくである。それはかつて警察その他へ連れていかれた際の経験から生じたものであろう。そのため治療者に対して非常に警戒的であった。遊戯室の設備や治療者の態度はP.には極めて意外であったらしい。あそんなでもいいといわれてもにわかになそれを信用することができず、治療者の真意をはかりかねて当惑と不安にみちていたように思われる。

第 2 回 (P.) 7.19

定刻に来所。

この日は、治療者側の都合で予定された日を変更したため、遊戯室が先約があって使用できなかった。

T.「今日はお部屋がふさがっているから使えないの、外へ出ようか」

立ち上ってついてくる。一通り動物舎をみて廻る。この間終始ややはなれて無言のままである。

唐突に、

T.「先生、何かしたくて、先生！」

T.「何をしたい？」

T.「野球しようよ。ねえ」と身体をくねらせるように甘えかかる態度を見せる。

1回目の面接により、治療者が今まで P. が接した大人のように叱ったり詰問したりする人ではないという理解はできたようである。しかしなお警戒心が全くなくなったのではない。この日の前半の態度は1回目の連続である。後半突如親しみを表現してきたのは警戒心が解けたのではなくて、叱らない相手にいつまでも抵抗しているのは損だというやはり過去の経験にもとづく打算があったのではなからうか。しかし2人だけで話をしていると治療者がいつ詰問したり叱ったりするかもしれない、という不安がある。野球を申し出た理由は親しみつつ適当に距離をおこうとしたのかもしれない。

第 3 回 (P.) 7.28

廊下のイスで待っていて治療者が出ていくと立上ってビョコリとおじぎをする。この日はプレイルームで一時間中話している。

T.「おしまいにしようね」

ホッとしたように無言でさっさと出ていく。

そこで、グローブとボールをもってきてキャッチボールをはじめ。次第に熱心になり、炎天下を汗をタラタラ流しながら投げつづける。そのうち、交互に投手と捕手になろうといい、やがてストライクとボールを判定しあって三振と四球だけのゲームをしようと提案する。1回はともに2走者を出したところでチェンジ、2回はT.が2点、P.が3点を得たところでチェンジとなり、終了する。

2回の終りまで行ったので、数分間時間を超過した。中に入ってくると、廊下の待合室で待っていた母に、

「ああおもしろかった」と大声でいう。

前回とは打ってかわった能弁になる。

話の内容は、主として映画である。自宅の付近の映画館は、どこが40円で2本立てとか、どこは洋画があるとか非常にくわしい。毎日10円のおこ

づかいをもらい、5円を貯めておいて面白ブックを買う。面白ブックは100円だ。だから映画をみる金はあまりたまらない。

そのほかは只の切符でももらったときでないとき家の人(母のこと)がやってくれない。チャンバラが好きだ。大友柳太郎が好きで錦之助は嫌いだ。(このあたり身振が入る)

P.「のこりの五円はトマトを買う、今日も100円買った。大好きだから。」

P.「今ほしいのは野球のグラブだ。いくらする

かしら。高いだろうね。(としきりにくりかえす) 600円ぐらいかな、(自答)……高くは買えないや。」(と治療者の顔色をさぐりながら話す。)

やがて立上り、窓の方に向きながら小声で……

P.「家の人だね、先生に話して研究所のを安くゆずってもらえとっていたよ。」

T.「あれはね、ここに備えつけてあるものだからここへ来たときに使うものなの。だからゆずってあげることはできないね。」

P.「そうだろうね。」(外を向いたまま)

この日は1回目及び2回目の前半にみられた如き警戒的な態度は全くみられなかった。前回あれほどよろこんだ野球を提案せず1時間中話していたのは、治療者がいつ詰問しはじめるかもしれない危険を敢ておかしたものでそれだけ治療者に対する信頼が増してきたことを示すものといえよう。しかし、警戒心が全くなくなったのではない、それは打ってかわった不自然な能弁さが、自分に不都合なことをいい出す余裕を与えないためではないかと解釈される点からもうかがわれる。話題を映画に集中したのは、好きだからというほかに、それが教師や両親にもっとも嫌われることであるので、治療者がどこまで黙っているかを試す意図もあったのであろう。

グローブの一件は、拒否されたことによってP.との関係が単に仲良くなるだけのものではないことを理解する一歩となっているであろう。

(母親はこの日、Pが家で全く勉強しないことを訴えている。なお、グローブのことは、のちに母親が語ったところでは、反対にPが研究所のがほしいといったのを母がとめたのだそうである。)

第1回 (C.) 7.14

ケースワーカーは最初にM男の心理療法の説明をした。また母との面接はこれを効果あらしめるためのものであるといったことなどを話すと、時々質問したり、「叱らないじやいられない」といったようなことや、「子供の性格が出来上っちゃったものだとしたら、とても直らないんじゃないか」とか「私なんか、とても直らないでしょう」といったことを時々挟んだ。

「あれしろ、これしろといってくればそれを

やることができるんですが」と母親がいうので、

ケースワーカーは「今迄、いろいろな人に、叱っちゃだめだとか、こうしろあしろといわれてもいざとなるとそんなものなかなか守れなかったでしょう。だからそれより自分の性格とか傾向を復習しながら、自分と子供の関係といったようなことを考えて行くという仕方の方がいいんじゃないでしょうか」と説明した。

以上のように、治療面接の第1回では、治療に対する準備として、指示や助言に従うことが如何に無力であるか、また治療の機能は、母親自らが自分の問題を理解し、意欲的な努力を持つ時に進捗することが説明された。然し母親はこうした指導を受けた経験がなく、問題解決の方針をケースワーカーに求めている。治療の枠組を説明する為の基盤として、ケースワーカーが母親とよい治療的關係にあったことをここに付け加える。

第2回 (C.) 7.19

この1時間を母親はすべてM男の行状報告に使った。

中学生が意地悪をして喧嘩し、頬にさわってかばんを道にほうりなげて学校へ行かなかったことや、夜帰って来なかったが、父親は、いつもなら

探しに行くところ、残業で疲れて寝てしまったこと、夜の12時頃アパートの廊下でむしりを敷いて寝ていたこと、A駅の前でそばを食い逃げしたこと、T町で氷水をまた食い逃げしたことなどを例の通り刻明に話した。

この時間のケースワーカーの発言は殆どなく、専ら聴くことに努力を集中した。これら行状の報告は母親が問題を理解する為の素材とはなり得ないが、それをそのまま、母親の子供に対する感情も態度をも含めて受容れるよい機会であった。

第3回 (C.) 7.28

最初に「先生、何も話すことがありませんよ」と断ったが、ケースワーカーがそのまま待っていると話し始める。

M男は夏休みなので気を緩めて少しも勉強しない。きっと学校の先生が勉強は少しぐらいしなくてもいいからと前に父親にいったことがあるのでそれをいいことにして、この頃全然しないのだろう。それで私はつい叱っちゃう。そうすると自分で「ああまた叱っちゃった」と思って点数が下ってしまう。それで自分は今週は5点だった。M男も父親も5点。下の弟だけ8点というところでしょうか。それで愛情が根本だということがこの頃よくわかったが、憎しみが先になってるなと思うことがよくあって、また点を下げてしまう。子供を叱れば叱る程、反抗が強くなる。それではとす。然しこのようにしてこの頃自分を客観的に見ることもできるようになった。

自分は言葉が強すぎてそれが一番情ない。父親にももうその辺で「ハイ」とか「そうです」といえといわれるが、こっちが、道理が合ってるのに「ハイ」とか、「そうです」なんていえないと思う。それで余り頬にさわるので、「父ちゃんはずいぶん封建的だね」というと「俺が封建的なら一体誰が封建的じゃないっていうんだ」といわれてしまうことがよくある。こんどは自分で自分がぐやしくなると、反省しなければならなくなる。自分の気持がすぐ反映して子供に移る。あまりM男が勉強しないので何とかさせようとしても思う通りにならないとつい私はあたり散らしてしまう。するとM男は耳を手で掩う。そういう時に私の点がうんと下ってしまう。然し子供の心は敏感でこちらが5点位だと子供も5点ぐらいしか点が取れない。「このやろう、学校から帰ったら、とちめてやるぞ」と思うと、M男の眼が坐ってそうと

入ってくる。ところがこちらが同情的な気持を持って居ると、M男もそれにそのまま反応してくる。あの子がよくなるのも悪くなるのもみな私のせいだと思う。

この回の終りにケースワーカーが「始めに話すことがないといっておりましたが、もう時間になっちゃいましたよ」というと、「ほんとです、

こんなに私はおしゃべりじゃないんだけど、ここに来るとなんだか楽しくなっちゃっていろいろしゃべっちゃうんです。今迄は一人で考えこんじゃって憂鬱だったけれど、ここへ来るようになってから、何んだか1週間が待ち遠しくなってきました」と嬉しそうな様子だった。

この回で自分の養育態度、生活態度を客観的に見る事が可能になったことを表現し、子供の行動異常に直接親が関係しているという理解の萌芽が認められる。さらに面接治療の機能に対して積極的 (positive) な感情が表現されるようになった。

第 4 回 (P.) 8.3

定刻少し前に来所。

待合室で、T. の顔を見るなり、「先生、おそいね」とニコニコして立上る。この日もブレイルームでほとんど話している。多少おもちゃに手を出すようになったが、つづけてあそぶことはな

い。

話の内容はやはり映画のことで重複も多い。母が思うようにみせてくれないことに不満があるらしいが、それを話すときには治療者の顔を一言一言うかがいながら話している。

一般的な態度はほぼ前回同様で、やや不自然な親密さとT.の顔色をうかがう態度が特徴である。この回にみられはじめた母親への不満が、その後表明されていないのは、このときのT.の態度に関係があるかもしれない。その点についてはのちに考察のところでふれる。

母親の言によれば、この前日中学生と大喧嘩してアパート中を騒がせたとのことである。父も大に怒って、「今度は許さない、どこか施設に入れてしまう」と怒鳴り、母がとりなしたという。P.はそのとき、ごめんなさいとあやまっていたというが、T.はこの日のP.の態度から前日にそのような事件のあったことを察知しうるような印象は何ら受けなかった。

第 5 回 (P.) 8.11

おちついてきておもちゃに興味を示すようになってきた。いろいろとりあげてあそぶが中にはあそび方のわからないものもあるらしい。

P.「うちにはこんなにおもちゃないの……しよ
うぎだけなの」

T.「しよぎできるの？」

P.「ウン、好きなの」

T.「するかい」

P.「ここでしてもいいの？ここにあっていいの？」と急にうれしそうな声を出す。

持ってきてはじめてと年に比べてはなかなか巧妙な手を知っているし、真剣に考える。

しかし、注意していると、T.の目をぬすんで駒の向きを反対にしたことが認められた。歩1つで

あるが、要点の歩である。少したって、
T. 「おや、これはこっち向きじゃないの？」と何
気ないいい方できくと、
P. 「ああそうだね」と素知らぬ顔でもとにもどし

てすましている。それ以後このようなことはなく
なった。
終ってから次回は治療者の都合で、母子別々の
時間に来所するようにいと大よろこびである。

治療場面及びT. に対して相当馴れてきたことがみとめられる。少なくともT. が、従来接して
きた大人のように詰問したり叱ったりする人間ではないという安心感ではできたようである。
そして当初の連れられて来所した態度から自ら来所する気持になってきたことが明瞭にみとめ
られる。

胸を置きかえたのは前回映画の話ばかりつづけたのと同じような意味かもしれない。親しみ
は感じつつもこのような表現の仕方をするところに本児の特徴がある。これをそのまま通すこ
とはよくないと思われるがいかにして止めるかには意見がわかれよう。

この回で母親は、子供のことにはほとんど触れていない。前週のごとき大きな事件がおきて
いないこともあるだろうが、母親の態度が問題そのものよりもその原因となる素材を考える方
向に向っているのである。

第 6・7 回 (P.) 8.20・8.27

この2回は毎回しようぎをする。多少の違いはあ
るが大体態度には自然さが増していることがみと
められる。胸をおきかえたりすることは全くなく

なり、勝敗にもこだわらず負けてもあっさりして
いる。ことさらに親しみを示すことも減少しつ
つある。

6 回目に母親は、P. が少し素直になってきたと述べている。

7 回目には確かに素直になってきた。その変化には自分の方が圧倒されそうだが、それでも以
前のように口惜しくはなくなったとのべている。

以上のように治療場面における変化に応じて家庭におけるP. の行動も好転しつつあること
が母親の言葉からみとめられる。

ここで、しようぎを取入れたことはその後の経過からみて批判の余地があろう。のちに考察
のところでふれることにする。

第 4 回 (C.) 8.4

面接室に入りながらケースワーカーが笑顔で、
「いかがです、点数は？」ときくと、「そうです
ねえ、点数は、5点の上下というところですね、
6点に上げられることもあったんだけど何とかし
ようと思うとついこごとが多くなるんです」とい

う。これについてケースワーカーが「こごとが多
くなると点が下る？」とたずねるとそうなん
です。この間うちへの帰りに点数のことをM男に話
したら、「母ちゃん、俺は何点位だよ」と聞くの
で、「お前の成績は5点だよ、だけとお母さん

も5点しか上げられないといったよ」というとM男は「いいぞう、いいぞう」と手を叩いて喜んだ。それから「父ちゃんは何点ぐらい」ときくので「さあ父ちゃんはいっしょうけんめい働けれど一寸ごとが多いから8点ぐらいかな」といつやった。「じゃあ弟は」、「やっぱり8点だよ、いつもいい子だけどやんちゃをいうことがあるから8点だ」というと、「10点じゃないの?」ときき返した。今日は来る時お前は昨日なんか3点だよといったら、「母ちゃん得点がよくなるようにするよ」なんていっていた。

M男は昨日中学生と喧嘩して、一日中大騒ぎを近所で引き起したまま家へ帰って来なかった。夕方父親が帰ってこのことを話したら父親はかんかんになって「明日、国府台へ行ったら、どこかへ預けてもらうようにそういつて来な!、もしそうじゃなかったら承知しねえから」と私の事をどなった。そこへM男が帰って来たので父親は「今日という今日は絶対許さない、さ今から警察へ行くん

だ」といったら「ごめんなさい、お父さんごめんなさい」といつてあやまった。父親はとても頑強なので、私が「そいじゃ、私が代りに父ちゃんにあやまってやるから」といったら、「お前が余り甘いからいけないんだ」といつて外へ涼みに出てしまった。その間に子供達を全部寝かしつけてしまったら、父親が帰ってきて、ああはいつても内心は子供がかわいいのか、汗を拭いてやってた。

アパートの管理人のおばさんは昨日の事件のあとで、私に「あんなじゃしようがないよ、あんた、アパート中のものにも迷惑だし、本人の為にも放つといちゃだめだよ、どこかへあづけた方がいいよ、私もね、始めは協力したいと思つてたんだけど、あんまり狂暴なんで何をしでかすかわかりゃしないよ、あの子は。あの狂暴性は10やそらの子じゃないよ、うっかり便所なんかに坐つてもいられやしないものね」といやみををいつた。それをきいて私はしょんぼりしていたが、今日はまた調子がいいです。

心理療法によるM男の治療という母親の決心は、父親や近所の圧迫によって動揺したが、研究所に来るとのことによって、依然としてその決心が支えられているという印象をケースワーカーは感じた。

第 5 回 (C.) 8.11

今週は平凡だった。然しM男も私も5点位、父親はほんとうは10点位だがごとが多いから8点だ。何か見付けて怒らなくちゃ気が済まない。夕方家へ帰って来るとすぐに何かいう。性格かもしれないが、今日こそは何もいわれないようにしようと思つてきちんとしておくが何か引張り出しちゃ怒る。結婚まえに実母の姉に今の夫のことをきいたら、「あんなのとはいっしょにいられないよ、まっぴらだね、あんなに口喧しいのは」といつていたがほんとにその通りだ。結婚した頃は自分が無口だったので、主人は朗かだからむしろい

いと思つていた。だけど今となつては余りうるさ過ぎる。それで時々「父ちゃん、私のことに口を出さないでよ」といつと「なんだ、お前がちつともきちんとならないからいけないんだ。バカヤロ!」とどなる。それで私は「父ちゃん、余りバカヤロというな」といつてやる。そんな人だけど結婚の時は顔が細長いということだったのでそいじゃいいやと思つた。私は小さい時からデブだとかセメングルだとかいわれてとても嫌だった。丸くなくて太くないというからそれならいいやと思つて結婚する気になった。日備になるまえはそれ程でも

なかったが、たしかに気が荒むので家へ帰ってからうるさくなるのだらうと思う。何しろ荒っぽい人たちの相手だから。この間も刑務所を出たばかりの若い人といっしょに砂利かつぎをやっていたが後から押すので「おい」と怒ったらどなり返してきたのでよっぽど腕力でやつつけてしまおうか

これら父親に対するネガティブな批判にも拘らず、母親には父親に対する敵意感情は全然見られない。これらの表現はこの面接のテーマソングである夫婦間の愛情 love への準備であったのである。

この間、冗談に父ちゃんにいつてやった。「このアパートの中に10人の奥さんがいるけど、いったい私じゃなけりゃ誰がいいかよ」ときいたら黙っていた。それで私が「Tさんなら父ちゃんにちようどいいかもしれないけれどやっぱり考えてみるとだめだな、父ちゃんなんかつまないとTさんは言うだらうよ、ねえ」といつてやったら「このやろう、過ぎるぞっ」て怒っていた。ケースワーカーが「お母さん自身はどうです。他の10人の主人たちを見てどう思います」ときくと、やっぱり私達は似合いの夫婦という所だらう。仕事の収入を主人は几張面にノートにつけているが、それと家に入れてくれる金額がきっぱり同じだ。こんなにいい人はありはしないだらう。アパートの10人の主人達と比べたらやはり一番いいだらう。

そういうわけで、父親は10点だという気持がある。ところが自分は内職も指が麻痺して出来なく

と思ったが「いやいやこれじゃいけねえ、M男の父親があんなじゃやっぱりしようがねえ」なんて言われるかもしれないからと思ってじっと我慢したということだが、そんな鬱憤を家で晴らすのだらう。私は私で子供のことにかまけてしまうので一層気がくしゃくしゃしてくるのに違いない。

なってやっているのに、夕方帰ってくれば私が子供の事もうまく行ってないので結局点数が下っちゃう。

戦争中工場で働いていた頃から点が辛かった。それでまだ5点から上へいったことがない。あの頃は空腹で考えることは食物のことばかりで浅ましいと気がつく点と点が下ってしまう。表面はお国の為だなんていつていっしょ懸命やっているように見えるが、その実そんなことだったので点を下げちゃったのだらう。今から比べるとずっとよかったけれどこんなことだったら一生5点で終わってしまうかもしれない。

面接室を出てから「先生、勉強させない方がいいでしょうか」ときくのでケースワーカーはそれはそうできればいいが、いずれにしても、お母さんの気持が大事、一番気易い方を選んだらどうだらうとサジェスチョンを与えた。

この回では殆ど子供についての報告が継母からなされていない。子供の異常行動そのものを問題にする態度が治療経験によって、その原因となる素材そのものに移行したことがわかる。

ケースワーカーがケースワーク治療の場合に準拠しなければならない、と思われる原理の1つである「自己決定の原理」によれば、クライアントの問題の提供をケースワーカーの側からは規定しない。診断にもとづく治療計画は確立されても、この計画を一方向的に推進しない点で、この事例に大いなる特徴が認められる。

M男は少しすなおになったと思う。5点5分か6点位やれるかなという所。「然し武勇伝がありましてね」

ケースワーカーがそこで「武勇伝なんていえる程になったんですね、お母さんにも少し余裕ができましたね」と支持的な応答をさし挟むと、「最初は思いつめていてM男の悪口ばかり言っていたけれど、ここへ来るようになってからだんだん変って自分の悪口というか、結局何でも自分が問題だと思ふようになってきたんです」といった。

先週先生(ケースワーカー)に勉強なんかさせない方がいいといわれたので、よし一週間勉強のことはいわないようにしようと思ったが、どうも我慢ができない。宿題帳を一寸開いたら算術なんかも間違っているののでつい直したくなってしまう。でもずっと口が出そうになるのを抑えていた。ところがそうすると却ってこだしに叱るようになってしまって結局だめだ。結局積りに積って爆発してしまう。それで「おいM男、ここへ来い」といって教えこんじゃうのだ。父親とも相談して勉強のことは余りやかましくいわないことにしようときめたが、父親は一度は「うん」というもののすぐ我慢できなくなってしまう。二人ともあだめだなと思う。そんな時にM男が「母ちゃんはすぐそんな風に僕に怒るんだからね」なんていわれると、なんていうか私には姑根性のようなものがあるんだろうと思う。もしこれがほんとうの子供だったら違うと思う。下の子だったら成行きに委せるがM男だとそうはいかない。M男の顔を見るとただそのまま遊ばせておくのが損な気がする。

それでもできるだけだまっていようとする。然し抑えていようとするとかえって陰険になる。私が猫なで声を出しても心までは出せないから結局意地が悪くなる。だからそんな言葉だけでなく、心の底から物がいえればしめたものだと思う。勉強強くないと思っているから、前ならどなりつけてしまいたい所だが、じっと我慢して猫なで声で、「もう遊んじゃったものはしょうがないからね、あとで母ちゃんが見てやるからね」なんて落着いてもの優しくいえばいいことはないが、勉強を一日もさせないでおいて静かに見ているのは難しい。

父親は私にむかって「お前の声や調子がいけないだ」とよくいう。

ケースワーカーの介入(intervention)がここに入る。「お父さんの気持ちよくわかりますが、言葉は乱暴でも母親の優しさがやっぱり子供に感じられる場合もあると思いますが、山形の田舎なんかではいかがですか」というと、すぐそれに応答して、「そうなんです。M男なんかよく知ってますよ。近所のおかみさんがよくM男を呼んで優しいいい方で説教するんですがね、その人は物質的な人なので、とにかくふだんのその人を知るので、説教なんてされたって、なにあってやがんでーというんですよ」

時間の終りに、「玉井先生でも子供にあんなに大きな仕事ができるんですから、自分でできない筈はないと思うんです」と付け加えて、自分の覚悟を自ら確認したような様子である。

この回に於けるケースワーカーの介入(intervention)は、診断的なものである。然しながらこの介入(intervention)は、やはり継母の自己決定(self-determination)の原理に基くものである。即ち継母が使用する日常の言葉づかいの問題が面接の素材として提供され、さらに「猫なで声を出しても心迄はそれを出せないから結局意地が悪くなる。だからそんな言葉だけ

ではなく、心の底から物が言えればしめたものだと思う」という継母の理解の上でなされた介入である。広い意味での明確化 (clarification) といっておいてよいだろう。

第 7 回 (C.) 8.24

この1週間は兄ちゃん (M男) に私は負けじみだ。でも前のように口惜しくはない。却って張合いがある。だから今度はM男には確実に6点がつけられる。自分は5点5分というところだろう。勉強をしないということでは依然として同じだが、確に素直になったと思う。私がまた勉強という点ではだめ。私の点が一番上らないのは勉強させようとしていただつことにあるらしい。

M男は、何が何だかさっぱりわからない絵を画く。牛だか猫だかわからないような絵を半分程画いて放っておいたのを父親が見ていたが何だかわからない。「父ちゃん、さかさまだよ」と私がいうと「あっそうか」というようなことがあった。子供の落ち着きというものは家庭の環境からというが、やはりそうらしい。父母に愛されて何の不安もない子供はいい絵を画くというがこれは本当ら

しい。私なども、夫に自尊心を傷けられたりけなされたりすると自分もやけになる。そんな時は何をやっても駄目で後を振りかえって見てみると、そういう時に限って余計な買物をしたり、軌道に乗ってないことばかりしている。夫に叱られるというのは兎に角余りいい結果をもたらしさない。M男にしても結局同じことだと思う。上から抑えられることで、伸びるものが伸びない。余りいわれるので萎縮してしまう。責任はこういう点でも親にあるのだと思う。自分が叱られた時の気持はほんとうに不愉快で、自分のいいたいこともいえなくなってしまう。ところが国府台に行くとも何もいられないので本当に楽しい。今迄になかったことなので、自分の気持にてらし合わせて見てM男の気持がよくわかる。

M男を一方的に叱ることがよくないというのは、この母親の生活経験から得られた理解であることを、この面接全体を通じてうかがうことができる。

第 8 回 (P.) 9.1

前回までは定刻よりかなり前に来所していたがこの日は寸前数分前ぐらいに入ってくる。

いつものようにしよぎをする。いつもより真剣に考え、無口になっている。態度もやや固い印象をうける。

母親の面接の記録に明らかな通り、この回の面接の行なわれた週のはじめに、P. が、相談室を訪れるようになる少し前にひきおこしていた相当大きな窃盗事件が発覚し、何の予告もなく母子ともに警察に呼び出されるという事件がおきている。

母親がそのことをそう白な面持で訴えたのはこの前日である。したがって、この日のP.の態度がやや固く、無口で来所がおくれたのはこの事件の影響であったものと考えられる。

終りに、今日から学校がはじまったので、学校へ行って通信簿出してきたという。しかしいつもより来所時間のおそかったのはそのためばかりではなかったようである。

第 9 回 (P.) 9.8

10分位おくらせてくる。時間におくらせてくるのははじめてであり、こののちにもない。

渡り廊下を少しよるめきながら入ってくる。顔を合せてもニコリとするだけでいっものように声を出したり手をあげたりすることはない。プレイルームに入ってもイスに腰かけたままうつむいて腹をおさえている。

T. 「おなかいたいのか？」

P. 「熱があるの。ゆうべ、学校で映画見たの。それでかぜひいたらしいの。『月はほりぬ』という映画だった」

ひたいに手をあててみると38°以上とも思われる程の熱さである。

T. 「ベットのある部屋へいこうか？」

P. 「ウン」

それで隣の面接室にうつる。ベットに崩れるようにねころぶ。一息すると、

P. 「一勝一敗だったね」

この日の態度から察するとP.はT.に対しての警戒心は全くなくなり十分に信頼しているように思われる。そして相談室を訪れることに対してこのように積極的になっている。

前述の事件のために、ここで母親に対して1回特に面接が行われている。それはP.に対する8回目と9回目の間に行われているので以後は、P.の9回目と母親の10回目とが相応することになる。

この9回目の面接において母親は従来のおちつきをとりもどしている。

P.自身も、これは以前の事件が発覚したのであって新しく事件を起したわけではない。

P.への9回目、母親への10回目の経過にみられるごとく、この出来事は好転しつつあったP.の状況を逆転させることにはならなかったわけである。

第 10 回 目 以 降 (P.) 9.15—10.20

こののち終結する15回目まで毎回しょうぎをする。この間におけるPの態度は順次自然さを増していっている。たとえば、13回目には、終了後、Tが名札ははずすのを忘れて出てくると、「先生

T. 「え、しょうぎのこと？」

治療者はまさかしょうぎをするという出すとは予想していなかったのでややおどろく。

T. 「するかい？」

P. 「ウン、したい」

開始したが、起きていられないらしく、横になったまま手を伸す。しかし指手は全くでたらめになる。途中でつかなくなると、中止して横になる。治療者もイスを近づけて横になり、頭を近づけて2人とも仰向けになりながらアサヒグラフなど一緒にみている。

P. 「先生、駅からここまで遠いね」

T. 「熱があったから疲れたんだろ」

P. 「ウン、だけど帰りは下り坂だから楽だね」とみずからはげましている。

T. 「来週は元気になっていらつしゃいね」

P. 「ウン」

忘れものしたでしょう」といつて届けてくれたりしている。しょうぎの勝敗に対しても全くこだわらなくなり敗けてもさっぱりしてすることを楽しむようになった。敗けることは、T.が自分を一人

前に扱ってくれているのだと感じたようである。

こうして15回目で終結したが、母親の終了後T.
が終結の方向を目ざしてやや積極的な態度をとり
終結の仕方が不自然になった。

これは4回目、5回目における治療者の態度の
影響かもしれないが、この点については考察でふ
れよう。

母親は12回目（P.に対する11回目に相応する）の面接で、P. がこのごろ落ちついていることを話し、先日、アパートの玄関で財布をひろって持主にかえしたことがあったことをのべている。すなわちこのころには主訴であったP.の盗癖は全く解消したのである。

こののち母親は一人歩きする旨を話し13回を以て面接を終了している。それはP.への12回目に相応するから、そののちの3回はP.に対してのみ面接が行われた。

第 8 回 (C.) 8.31

第7回までは順調に面接治療が進行し、母親は最初の急迫状態（acute disturbance）を克服して余裕が出て来た。母親に影響されて父親の主な関心が施設送致から一步後退し、子供の養育に対する両親の協力態勢が出来上りつつあった。然しながら治療開始後第8週目に、何らの警告なしに警察から児童福祉司に対して本児の事件通告がなされたのである。これは母親にとって大きな打撃であり、呆然自失というところであった。

「今週は大変なのよ、先生」と青い顔をして面接室に入った。今週の月曜日（この第8回面接は金曜日に行われた）K署のS氏が「この頃どうしてるか、M男君といっしょに来て見なさい」と附近の交番の巡査に伝えさせたので行って見た。K署で最初M男が入って行って15分たって出て来、次に自分が呼ばれたが別になんということなくS氏が「M男君はどうです、この頃」ときいたぐらいのものだった。だから「この頃は素直になったがまだ落ち着きがありません」といった程度で帰された。それが水曜日に突然福祉事務所から児童福祉司が来て、印鑑を持って木曜日に福祉事務所に来るようにというので行って見たら、M男が研究所の心理療法に通う以前に起った空巣10件がすべてM男の犯行となっていた。びっくりして、そんな素振りには少しも見えなかったのでM男じゃないと思うとその福祉司にいったらよく聞いてくれたし、子供も私も研究所に世話になっていると

話したら「それはよかった」といってくれたが、それからは一週間に一辺ずつ家庭訪問をして様子を見ることがその福祉司によって決められた。

自分はどうしてこんなことを警察がするのだろうとむっとしたが家への帰りに、もしかしたら、警察に行った時M男が何か白状したんじゃないかと思って家に帰ってからM男にきくとやはりそうだった。「それでお前ほんとにやったのかい」といったらうんといったので、もうかあとなってしまった。全く折角いい方に一段一段階段を登りかけたと思ったが暗黒に突き落された気持でまたMをひどく叱ってしまった。当のM男は平気なもので「そんなに悪いことをしてお前これから一体どうする心算なんだ」ときいたら「どこか遠い学校へやられりやいいんだろ」とうそぶいていた。

次週面接の前にケースワーカーは、一回余計に提供する。来所してもしなくてもそれは母親次第であるとその決定は母親に委せた。

この面接の中に自己決定の原理に基かない指導法の実態を見る。即ち少年院送致を目的とする警察の事件通告及びそれに基づいて児童福祉司によって計画された家庭訪問は、クライアントのニーズが真に理解された上で行われたものではない。「少年院への送致」は最初は父親によって希望されたのであるが、母親の治療面接によって或る程度変化して来て、むしろ母親に対して協調的になってきた時期であった。従ってこの事件通告により両親の緊張が強まったのである。

第 9 回 (C.) 9.4

第 8 回面接の時に提供した予約(appointment)を利用して来所した母親は、再び以前の面接過程で見られたような落ち着きを取り戻していた。

事件通告があってから父親は警察に行つて M 男を少年院に送る為に書類が整っていなければならぬこと、然し果してすべてが M 男の犯行かどうか分からないことを説明されている。母親は黒白を明確にしないと安心できず、M 男に「母ちゃんはお前がほんとうのことをいえば怒りやしない」といって白状させた。すべてが M 男のした事ではなかったが、やはり合計すると相当の金額を盗んでいることを知って今更のように驚いた。父親にこのほんとうのことを話したのかどうかと大分迷ったが、父親の協力無しでは弁償も、M 男の折角伸びかけた芽も育たないと思ひ、まあ当っていただけろという心算で「父ちゃん、こんどの問題はうやむやに葬ってしまうことができないんだから父ちゃん少し考えてよ」といったら「何もお前に言われなくたって俺は毎日一生懸命考えてるよ」なんていっていた。それで、「もし実際に盗んだことがわかったらそのままにしておけないから非常に苦しいが、今迄の生活をもっときりつめて私とその弁償金を生み出して行くか赤ん坊を背負って、屑屋でも何でもいいから私がやるって決心したら父ちゃん賛成してくれるか」と聞いた。父親は「ああそんな屑屋なんかやるんだったら俺と別れてやってくれ」といわれてしまった。然し考えて見ると以前のように、「バカヤロウ、俺はもう返せねえからお前勝手に返せ」なんていう程度じゃ

なくてそれを認めてくれただけでも、ああやれやれ、助ったと思った。どんな難儀な問題があっても協力してくれることが自分にとっては一番嬉しい。父親と自分が本当にまぢまぢな気持ちしてると思つても、今迄は大抵のこと何もいわないでしまふことが多かったが、今度はもうそう躊躇してもいられなかったし、当って碎けるより仕方ないと思つていいたら割合に近くまで 2 人の気持ちが一致したということが非常に嬉しかった。然しそれにしても、父親はうるさくて M 男に干渉し過ぎると思う。M 男の一挙手一投足が叱られてしまうのでこんな調子で続いたら全く仕様がなくなる。尤も M 男がこんなに悪くなったのはまあ自分達が余り M 男を叱つたり、勉強は無理強いしたり、やかましくしすぎたりしたので自然と心がねじけてこんな風になったんだという風に気がついてくれて、そんな風な干渉もしなくなってくれる時もそう遠くはないと思う。

先日の金曜日と比べると落ち着いたと思う。いつか「最高の意志」ということをいったと思うが、この前の時は一体最高の意志がどこにあるのか全然わからなかった。でも 2, 3 日心をとぎすましている中にはやっぱり少しずつわかってきたのかも知れない。第一に絶対ごまかせないということ。これは弁償のこと。第二に子供が悪くなったのは自分達の親の影響がその原因の最大のものだということだ。M 男を少年院に送るといことは子供が必ずしも幸福になんかなれなくて却つて子供が不幸になることを知っていてそこへ M 男を預ける

という気持はどうしたって責められてしまうと思う。

とにかく今度は父親の協力もあるし、無駄を省いて生活費の中から弁償金を浮かせることも何とか出来るという自信がいった。いろいろ工夫してやってみると、きりつめてやろうというのも苦痛ではなくなった。却って子供も喜び、経済的に上がったときなどはほんとうに嬉しいと思う。

この回で母親の洞察が一段と発展した。今迄は、とにかく子供にすべての責任を帰してしまうので、そういう態度の中では、弁償金を生み出す生活は非常に苦痛であったが、子供の成長がすべて親にかかっていることを理解してからは、同じような条件で弁償金を生み出す生活が苦痛にならないという新しい経験を表現したのであり、これは生活体験から得られたものであったと思う。

第 10 回 (C.) 9.7

この回の継母の態度は今まで少し話し過ぎたことに対する反動から、稍会話の速度が鈍る。例えば「偉そうなことばっかしいって居る、何か人にそんなことをいわれそうな気がします」という母親の言葉によって、これをうかがうことができる。

この発言から母親は更に面接の内容を進展させて、「理論と実際」が喰い違っていることに自分の気持が定着しているとを表現する。

先日も父親にいわれてしまった。「お前はいろんなことというが、余程慎重に考えてやらなきや間違いのものになるから、俺が何時でもこんなに1ヵ月30日働けると思うからお前は平気でいろんなこというんだろうと思うが万一ぶっ倒れでもしたらお前の思うようには行かなくなっちゃうぞ」といわれてしまった。弁償のことで「お前はすぐにもそれをしなきゃならない、それができると思うが、人間は何でも一杯一杯の線を行こうとすると何か起きたときにつまずいてしまうんだ」といわれて「ああ成程な」と思った。それで私は夫は偉いと思った。弁償ということでも精一杯の線で考えない夫をもとは卑怯だと思っていたが、その時はむしろ、夫が実際ので落着きがあると思っ

今迄は適当に小遣いもやっているのに、親達に全然わからないように人の金を盗むなんて、M男のことを悪いと思いきってたから、こういう生活が苦痛だったし、そんな生活は絶対出来ないと思っていた。こんどは落着いて考えると結局はM男が悪くなったのは自分の為だと思おうと何か出来るような気になったのだから。

持になった。

このあと更に話が進展してその焦点が自分が子供を叱る時の態度について反省する。これは、学校の受持教師にM男の中間報告にいて、その教師と話しあっている中に得られたものであるという。先生に自分が思っていることを皆話してしまったら先生は半信半疑で「叱らない方がいいなんてとても考えられない。あの子は叱らないで育てたらなお増長して手に負えないようなことになってしまいはしないか」といわれた。然しその時私は「先生、それはそうですが叱らないといったって程度の問題です。締める時は締めなくちゃならないんですよ。然しよく考えて見ると反感や反撥を起すような叱り方をして来たっていうのがいけないと思うんです」という様に話した。

第 11 回 (C.) 9.17

この回の面接では治療についての母親の疑問が、その約半分を占めた。例えば子供は玉井先生としょうぎばかりやっているがそれで何か役に立つのだろうかというような質問はその典型的なものである。これに対してケースワーカーは、子供が大人と違って、言葉によらず、動作や遊びを通して自分を表現すること。玉井先生の最初から変らない受容の態度などのM男に対するポジティブな影響などについて説明した。

自分の面接治療について何かケースワーカーに説明してもらった方が早道な気がする。自分の考えばかりいって余りたどたどしいのでこれじゃ勿体ないという気がするといったので、ケースワーカーが説明されてわかって役に立たないことが多いが自分の力で少しずつ理解して行くときは遅いけれども役に立つという、母親はこれ

に同意して、理性では筋道をたてて決心するが感情というのが一体何処から来るのか、M男を見ると感情に左右されてしまうのだといった。絶対責めないと決心してこれを押し通そうとすると無理になる。この無理が感情になってしまって、大抵後から後悔する。

この回の面接の最初に治療に関する疑問がでてきたが、この疑問自体が彼女の問題であったとは思えない。むしろその点から派生されて出てきた理性と感情について自分が一貫した生活ができないという反省が、その背後に語り出さるべき素材として隠れていたのである。これは治療に関する疑問をケースワーカーが取り上げたので、その態度が応答的であったために可能になったプロセスであろう。

第 12 回 (C.) 9.21

M男はこの頃落ち着いている。先日、M男が学校へ行く時、アパートの玄関で財布を拾った。今このところを通ったのは島井さんだからと思って「島井さん、財布、落さなかったかよ」と叫んだら、近所の人が出て来て、それを島井さんに返してくれた。夕飯の時島井さんの奥さんが「今日はM男ちゃんとてもいいことをしたね」といってくれた。そこへ皆も集ってきてM男のことを賞めそやしたのでM男はそばで照れ臭そうにしていた。

夕方夫にそのことをいったら、「何かお駄賃を買ってきてやれ」といわれた。

この回の最後に母親が今迄ここで理論を作りあげたが、これからこれを現実化してみようと思う気持ちがあるがどうだろうと言って治療から独立して、生活を行いたいと表現した。そしてもしまた問題が起ったらまた見てもらうようにしたいと結んで面接を終了した。

M男の日常行動が落ち着き、盗みがなくなり、この回のようなエピソードを語ると共に、母親は、このままで行けば、何とか治療から独立して養育ができるだろうという見通しを立てる。これが発展し拡大されて、第13回に於ける終結への準備がなされる。

これは母親の最後の治療面接だったので、母親からいわれる多くのことは自分のM男に対する態度についての要約といった表現が多い。例えばM男には明るさ、素直さが残っている。こういうよい点をのばさねばならないのに自分がこんなに感情的になって危っかしいものだと思うというような言い方が終結を自覚した上での母親の発言である。

最後に、終結が如何に実施されたかを見る為に、テープレコーダーによって記録したケースレコードをここに転載する。Mは継母、Kはケースワーカーをさす。

M₁ : いつになったらもうこれで完全だ、もうここが頂上だなんていう時があるんでしょうかっていうような……

K₂ : そういう気持が残る。

M₃ : ええそういうような気持。まだまだ駄目だ。全くもう一人でじっと考えているともう頂上なんかとっくに通り越しちゃって、もう星の世界からどこかまだまだ遠い所まで登っていったような気持になっていることがあるんですよ。現実はまだまだ三合目か二合目の辺りをうろろろしてるような感じ。これはいつまでかかってこの自分のものにして行けるのやら、もう時期遅れにならないようにと思って、焦るような気持を持っているんだが、実際にはなかなか難しくそのものになっていかないような感じ。人に教えられたってそれはもうわかる問題じゃなくていろいろ考えたりいろいろ体験したりしているうちにだんだんそれに近づいていく様な。

K₄ : ここまでくれば一人歩きもそう難しくはないかも知れない。どうですか今日大体最後にして来週から一人でおやりになりますか。

M₅ : 先生。どうでしょう。まだ危っかしいからだめだって先生仰言ったら本当にだめかも知れません。

K₆ : お母さんの自信の程は如何ですか。

M₇ : 私の自信の程は危っかしくてどうも、何とも言えないような気がするものの、(うん) いやそれでもない気がする。もう一人歩きの方が、こ

んどはもう一人歩きだよっていわれちゃったら又そこに気が引き締っちゃって(うん) いいかも知れません。そんな風な気持ちになるし、もう落っこったら最後、もう先生落っこちちゃいましたなんていえるわけもないし、誰も相手になってくれる人がいないからね、よっぽど気を引きしめて登って行かなくや危いぞっていわれるような、又自分でそういつているようなんですね。そんな緊張した気持(うん) ここまでも引っぱってやったんだからあとは自分で行けないことはないだろうだからもう離されても仕方がないという気持。ここから出たらもうお前はもう一生上るせきがないんだからよっぽど心して歩いて行けよっていわれて、はいと素直に返事が出来るような気持。色々なんですよ。

K₈ : ここへ通い始めてからこの階段を登ったあとを見るとね、お母さんにこれからやって行くだけの力があると思うんですよ。だからといってやっぱり不安は残るでしょうけれどね。

M₈ : ええ残りますね、今朝も今朝とてあんな風に怒っちゃったりして気が暗くなったりする調子なんですからもうそんなこと朝っぱらからした日ですから余計何か不安です。昨日辺りは、昨日、一昨日あたりはもう大丈夫っていう様な気持になったかも知れません。それが今朝M男のこと怒ってしまった後だけになにか不安です。一昨日辺りは一寸しゃんとした、もうM男に対してごめんなさいねっていうような気持でM男んことを見られ

るという風になったらもう大丈夫だ、大丈夫一人歩きやれるっていう自信があったんです。昨日あたりは。

K10: 昨日、一昨日あたり、しゃんとした気持になったのは何かきっかけがあったんですか。

M11: それがね、あのうやっぱし一人歩きつていうことからいろいろ考えたわけなんですよ。そう一人歩きって今迄先生に頼ってたというか、こうだああたと考えるのを見てもらう、先生にまあ学校だったらこう書いてそれを先生に見てもらって点数つけてもらうような何か一つの励みがあったと思ったんですよ、今度それがなくなったが、今までだって先生だけが相手じゃなくて自分をそこへ導いてくれた1つの力っていうものが常に私の心の中にあったわけなんですね。ここへ来るようになった1つの因縁っていうか、導いてくれた力っていうか、私にこういうようにすぐに考えさせるようなきっかけを与えてくれた力っていうかね。そうしたものに対する真面目な気持っていうかしらね。そういう気持が先生の他にもう1つの対象としてあったわけなんです。どんな話をする場合でも、ここの所で先生がなくなってこんどは片方だけの相手が対象なんです。(うん) いろいろ考えるにしても何をしても何を相談するにもこんどは先生を抜きにしちやって考えて見たんです。(うん) そうするとやっぱし昔からの色々なことが考えさせられちやったんです。そして最後にはずいぶん私は今まで気が付かなかったことで、M男をゆがめているようなことを自分でやってきたんだという風に、よくよく得心が行くまで考えさせられちやったわけなんです。その一人歩きしなくちゃならない、先生のこと頼りにしないで、もう1つの力に頼って見ようっていう気持、そこにはほんとの嘘も偽りも何も無いほんとの気持しか動かないですからね。(うん) そこを頼りにして一応考えを進めてったんですよ。もう考えをあとからどンドンノートに書いていってみるんです。もう

1時間、赤ん坊をこの手に抱いたまま、ととととととととノートなら10枚ぐらい書いてみた、ノートに鉛筆で走り書きして思った通りのことを片っ端からそのままにずっと書いて行って見ると、もうそれでそういう線まで、そういう心境にまで考えさせられたわけなんですね。それがこの調子で行けば、まあもう一人歩きも大丈夫だっていう風に思ったんです。今朝あたり續にさわった様な気持をやっぱし誰か上からとがめてくれる人があるといいんだがなっていう様な気持になるんです。先生が駄目じゃないかなんて仰言って下さらなくても、もう先生のまえに行ってそう自分が、話をするとき、先生がそう思っているだろうなと思うだけでいいくすりになると思ったりするんです。(うん) やっぱし考え考えて行ったら、そう落っこちるということはないかも知れませんが、先生。どうでしょうかしら。M男だけはまだみていただけるんでしょう。

K13: ええ、しばらくね。

M14: そして、もうM男ももう卒業する頃までに先生、又機会があったら1回か2回か見ていただけないでしょうか。

K15: どうぞ。

M16: 先生の方の都合のよろしい時でいいですけど。

K17: ええ、お母さん次第ですよ。

M18: そうですね。

K19: 来る前にM男ちゃんにでもことづけされたり、或はおはがき1本出して下されば、いいんじゃないでしょうか。

M20: まあこのまま順調に行けば大したことないと思うんですけど、まだM男に大きな失敗されでもして一人で気持がぐらついたりなんかしてそんな時一寸心配なんです。

K21: そういう心配はあるでしょうね。

M22: 多分にあると思うんですよ、まだ。

K23: でもお母さんが大体、こういった様な落着

いた状態で、M男ちゃんが一応落ち着いている状況でね、これから独り歩きするというような力は僕はここで認めますよ。今まで、お母さんが何回かここで話しあったその結果としてその答を贈りものとしてじゃ今日は差し上げましょう。それでい

よいよ一人歩きをやって見るわけですね。

M₂₄: はあ、ほんとになんだかまだ不安は多分にあるんですけど、じゃあ一人でそろそろ持ってって見ましようかしら。

面接はこれで終わっているが、ここでこの回の特徴について考えて見る。まず、第12回の治療面接で発表された母親の治療から独立して生活をして行こうという決心が、この回で拡大される。ケースワーカーがこれを支持し、励ましを与えたのがこの最終回の面接の内容であった。M₁₂で、母親は治療状況から独立に、現実に対処することができるという自信を示す。同時に母親はここで面接治療の機能を深く理解するに至る。自分の足りない点を直接批判してくれなくても、自分が話をするときKの気持を考えるだけで十分だという理解は、言い換えれば治療者への完全な依存からの解放を意味するものと解してよいだろう。

K₂₃の発言は、過去何回かの母親の努力、即ち、建設的自我 (constructive ego) の支持がその機能である。

治療終結の翌日の母親の手紙をここに掲載するが、これによって、新しい生活態度で努力しようという母親の建設的な決意をうかがうことができる(以下の手紙は原文のまま)

先生昨日は有難うございました。早速校長先生にお目にかかって報告少々御礼申上げて参りました。校長先生も大変喜んで下さいまして色々とお褒めのお言葉を頂きました。昨夜はお洗濯をしながら北の空を眺めているうち大きな顔をくしゃん

とゆがめて涙が一すじ流れ出て来ました。柏木先生から頂いた贈りもののお言葉がふと胸に迫ったからです。「意志薄弱でだらしがない。」という今までの看板をもうはずませう。今日からは登れば登れる」という看板に取かへて一生懸命生きて行きます。本当に長い間有難うございました。今後ともよろしく御願申上げます。最後まで皆様によりしくお伝へ下さいませ。では御機嫌よろしくかしこ。

〔考 察〕

玉井、柏木両者の治療終結後の話しあい、この予後は良好であるという結論に達したのであるが、必ずしもそれがM男の盗みが皆無になる事を意味してはいなかった。むしろ少なくとも痕跡は残るだろうという予測であったが、それに対する母親及び父親の感情が安定する事によって、治療前と同じ様なかたちをとる事はないだろうというのが、その時の予後であったのである。

母親との面接は、ケースワークの原理から考察すると、その全体の過程そのものが、自己決定の原理にもとづいたそれであるということができよう。先ず第一に面接治療による解決か少年院送致かは、この家族が自ら決定したものでこの決定に基づいて治療が計画されたこと。

第二に面接治療の機能は、治療者の指示、助言が目的ではなく、すべて母親自身が素材を提供し、自らがそれを理解する過程での援助であったということ。第三に、治療面接の終結も母親

によって計画され、ケースワーカーがそれを支持するのみにとどまったこと。即ち全過程の最初から最後に至るまで、自己決定の原理が、この治療面接に於いて診断にもとづいた基礎原理として適用された事を強調したい。第四に診断は、問題の構造（様相）及び、原因論を明らかにするダイナミックな記述であるが、同時にそれは、ケースワークの基本原則の、適用性を指向するものでなければならない。これら4つの点で、この事例は、正に特徴的である。

次に P. の治療経過を総合して考察すると次の如き諸点が指摘されるであろう。

第一は、第1回の面接で、Tが、「好きなようにあそんでいいよ」というのみでその他一切の説明を避けていることである。これは、Pは、すでに警察その他の経験で、しからないとか、安心してよいとかの言い方をした成人を知っていると考えられたため、Pがいただいている不安や警戒や反抗は言葉によって打消すことは無意味であると思われたからである。そのような不安や警戒や反抗は実際にその必要がないことを体験することによって、消失していくまでそのまま受け入れられるほかはないと考えられたからである。

次に、第4回の面接で母親への不満を表明した際のTの態度には批判があるろう。その不満が以後の面接で全く表われてこない1つの原因はこの際、Tがその不満の感情について聴き手の役割に止まったことにあると思われる。Tはこのとき、Pの主要な感情は、継母への不満を表現することではなく、継母への不満や嫌われるはずの話題をつづけることによるT.の反応をうかがっていることにあると、感じたからである。

第三に、第3回目のグループのことについては拒否することは当然であろう。このことは、治療状況を確立にするために、P自身も責任もっていることを感じさせるに役立っているであろう。

第四に、しょうぎを5回目以降にとり入れたことは疑問の余地がある。というのはこのように全く没入するゲームを持ったことが、こののち継母への不満を表明する機会を失わせたとも考えられるからである。これは、治療が、問題行動の解消という比較的浅い層に止まったことにも関係があるであろう。

第五は終結の問題である。

10回目以降において、このように、主訴とする問題にもふれず両親への感情にもふれずに経過すると、P.とT.の関係がこれ以上深まることはないのではないかと感じるようになった。それは4回目に母親への不満を表現した際のT.の態度に原因があったことも思われるし、さらにしょうぎという素材に固定したことも、この関係を発展させることを困難にしたかもしれない。

そこでT.は、一応盗みが解消したことを以て治療の目的は達したこととし、母親の治療が終結したことを機会に積極的に終結しようと試みた。そして14回目をその準備とし、15回目

に、治療者側から、これでおしまいにしてよね、とディレクティブに終ることにしたのである。この点は大いに批判のあるところであろう。

以上、治療経過ならびにそれに伴う考察を、母、子について述べたのであるが、最後に継母子関係にある事例としての本例の特徴を要約してのべてみよう。

われわれの相談室で開設以来扱った継母子関係にある事例は42例に達する。

本例をよく理解するためには、他の継母子関係にある事例の一般的な特徴と比較して考察することが必要であろう。

継母子関係にある事例の主訴としてもっとも特徴的なのは、盗み、嘘言をはじめとする反社会的な行動が多く、いわゆる非社会的な行動は極めて少ないことである。その理由の考察はここではしばらく措くことにしたい。(文献1)

その次の特徴は母親の態度にある。すなわち、その子の問題行動の原因が自分の養育態度にある、と世間の人がみるのではないかという不安が非常に強いことである。そのため、原因を実父、実母(先妻)、悪環境など自己以外のものに投射し、「自分だけがこの子のことを心配している」と強く主張する傾向がある。このような態度はしばしば子供への敵意や憎しみの合理化されたものであることが多い。そこで、自己の責任を追及されそうだと感じると来所することを拒み、あるいは子供がよくなって行くと抵抗を感じたりする。このような態度を自己防衛的な態度とよぶことができよう。

ここから第三の特徴として心理療法が成功しがたいという傾向が生じる。事実、本例以外に心理療法が成功した例はほとんど見当たらない状態である。

以上の一般的な傾向からみると、本例は主訴となる問題行動としては典型的な例であるが、の態度にはやや異なる特徴があったといえる。すなわち、本児に対して真の愛情を感じることが継母できないと極めて卒直に表明していたこと、いいかえれば自己防衛的な態度が弱かったことである。われわれがあえて心理療法に入った理由の1つはここにある。

前述のように、本児の C. A. T. の反応が異例に属するほど母親への不満を示さなかったこと、及び、治療過程において母親への不満を示すことが少なかった事実はこの母親の態度に関係があるのではないかと考えられる。というのは、継母自らが治療状況において卒直に語った如く、家庭においてこの継母は強く子供をしかっている。すなわち、継母子関係に必然的な不満や攻撃は疑いなく存在するが……、そしてそれが子供の問題行動の原因なのであろうが……この母親からそれは、他の多くの例にみられるように抑圧や合理化を重ねた上での過度に教育的な、あるいは知的、道徳的な態度でなく極めて明瞭に表現されていたのである。そのため継子側の不満も余り複雑なメカニズムをとることがなかったのではなからうか。

このような特質を持った継母が治療を経過するに従い、継母子関係という現実を極めて自然に承認する方向に動いたことと、それに従って本児も又複雑な反応を増大させることがなく総体

的に治療が成功に導かれたのであると思う。

わずか一例を以て断言することはもちろん不可能であるが、継母子関係にある事例において心理療法実施への少くとも1つの重要なカギは、継母の防衛的態度をいかに処理するかにあるということも許されよう。

文献 1. 継母をもつ問題児の研究, 高木四郎外, 「異常児研究班」による研究, (文部省科学研究費) 未刊。

付 記

終結後約1カ月して学校長が来所してその後の経過を報告し, 全く事故をおこしていない旨語っている。さらに, 約4カ月後, 治療者が別の機会で学校長に会ったときには全く普通の子になったと語っている。

ディスカッション

事例の概略

S₁: (司会) 最初に C₁ 先生に 事例の概略を御話していただきたいのですが。

C₁: (著者) そうですね一口にいえば, 盗みをする子供の治療を母親と子供と2人の治療者が同時に行ったものです。で, この場合, 母親は継母なんです。この継母はもとの実母の友人でもあるし, 自分が継母であるが故に純粋に愛情を子供にかけられないといった気持を, 卒直に表現するというような特徴もっています。そういう意味からいって面接治療に適当なケースじゃないかと思いました。子供の方は最後の段階では実際に盗みがほとんどなくなっています。然しもっと重要なのは, 彼をめぐる環境要因即ち母親とか父親がその問題に対して, 非常に落ちついてきたという点だと思っんです。

P₂: (著者) この子供の場合のように, 本人が全く来る気がなくてつれてこられたというような

場合は大部分の子供がそうだと思うんですが, 来ることに関して抵抗があるようなそういう場合の子供を, どうしたらうまく治療を受けようという態度にすることができるかというそういう問題, その場合のテクニック等について, 私のやったことやその他にどんな事が出来たかについて, 批判して頂きたいと思います。

S₁: それじゃ, まず母親の方から参りましょう。

継母の特色

P₂: 母親の態度に関してなんですが, 例えば万引防止のために子供を古本屋につれて行って古本屋の警戒を喚起したことなどから, 潜在的な憎しみをいちがいに認めることができるでしょうか。例えば万引してもらったら困るし, そういう実際的なリアルな必要からそういうことをすることもあり得ると思うんですが, どうでしょうか。

注 発言者はその専攻を記号で表わしてある。S は社会学, Dは医学, Pは心理学, Cはケー
スワークをさす。

C₁ : 私は全体的な印象からこの潜在的な憎しみを否定出来ないと思ったんです。

診断と自己決定

C₄ : 特に自己決定の問題を、ここで先生がとりあげたのはどういう立場に立たれたのですか。

C₄ : 自己決定の問題と診断を結びつけようとしたんです。ここでいう自己決定はいわゆるnon-directive に於けるものとやや違って、こちらが果して治療が可能かどうかという意味で、それを診断と関連させたかった。問題の構造と要因を明らかにするだけでなく、更に治療の可能性適合を図って診断としてみようと考えたんです。

S₁ : どうでしょう、それじゃ診断の問題について入ったら。

D₂ : そうですね、今迄いろいろディスカッションを重ねてきたんですが、その機能について、この事例に論じられているのでそれを考えたいですね。

C₁ : 自己決定の原則は、診断派でも非常に重要視するべきだと思います。いかなる学派に属していてもケースワークには先ず第一段階としてのスクリーニングとしてこれを取り上げらるべきでしょう。そこにひっかかったらどうしようもないと思うんですよ。そういう点からケースワーク万能ではなく、やはり対象が選択されるわけです。まあとにかくここではスクリーニングとしての自己決定を問題にしたかったわけです。

P₃ : 診断についてなんですが、インターク・カンファレンスにおいてつける診断だったら69ページの上の4行ばかりの所に書いてあるように、一次的行動異常ということになると思うんです。そしてその次に書いてあることが、この時に心理療法に入るか入らないかということで問題になったんです。実は私は継母子関係にあるケースで成功した例がほとんどないから、治療に対してネガティブだったんですが、C₁ 先生が母親の態度に見込みがあるということをしきりに主張されて、つ

いに治療に入ったというわけなんです、その取り上げるまでのいきさつが69ページの所に出てくる。

単に一次的行動異常と診断をつけるということと、ここに出てくるような別の意味での診断との対比ということが、ここに問題になると思うんです。

D₂ : 単に診断分類ということだけではなくてね。

C₁ : それから私が自己決定の問題をとりあげたのもう1つの意図はこうなんです。ケースワークが実証的な科学たり得ないという所に問題があって、それをその方向にもっていくために、もっと努力しなければならないという声が学会の一部にある。もはやケースワークに於ける民主々義的な原理、自己決定の原理とか個別化とかそういうものを強調すべき時はすぎた、もっと実証的な研究方法を確立しなければならない、というのがその主張なんです、実際にケースワークが行われている場をよく見るとその民主々義的な原則さえまだ理解されていない。思いつきだったり強制だったり、ケースワーク以前のものであるという現状で実証的科学性を導入するということは無理だと思う。そういうものがテクニックや処置の面に逆影響を及ぼしてくる。そういう意味でも、まだ一般的なものになっていない自己決定の問題をとり上げたわけです。

S₁ : ケースワークには色々な種類があると思うんです。特に情緒の障害のケースワーク治療について、自己決定という立場が十分自覚されていないんじゃないですか。従って治療者がケースに対する民主々義的な立場が無視されているんじゃないかという予測から、C₁ 先生がこの事を強調されたとは私は解釈したんですけど。丁度ここに児童相談所の方が見えていますから、この問題について御意見を伺いたいと思います。

◆児童福祉司児童相談所でとりあつかう事例は、

警察から強制的に通告されたり、それから学校でもじゃまになるといって連絡されたりするものが多く、もう最初から自己決定の原則が破られている所に問題があります。それで親と子供を来所させて関係を作り上げる迄が、我々の仕事の80%を占めるんですね。所が具体的にいうと予定した時刻には来ない。そうするとそこにどうしても力が働く、すると子供も乗って来ないし母親も追従して、お世辞をいって許してもらうとかそんなことで終わってしまうんです。

D₂ : そういう点について C₁ 先生どうですか。そういう警察の通告等によるケースを、自己決定の原則にいかに乗せていけるかが問題になると思うんだけど。最初の段階でケースワークに於ける自己決定という点での見通しが、診断の中に大きな役割りを占める訳ですね。自己決定という点で困難と思われる場合はいかがですか。

C₁ : それがケースワークの限界になってくるんじゃないかと思うんです。スクリーニングの上でひっかかってしまった場合の問題は残るんですがこれは心理療法の適用性と同一問題になってくると思います。ただね、自己決定の原則を無視した警察の事件通告とかいうような形で表面に現われてくるそういうものを、もっと形を変えることが出来るんじゃないかというような気がするんです。例えばこの事例についていっても、我々研究所では自己決定を適用し得るクライアントなんですね。然し他の機関では適用せずに、事件通告を頭からやってしまう。そして通告された児童福祉司は何も出来なかったという結果に終るのは、当然だと思うんです。

P₂ : 実際にそういう形でやってきた時に、現実の問題としてこういうような事がうまく扱われてくれば好都合だが、自己決定の原則が適用出来ないからといってわれわれが手をこまねいているわけにもいかないと思うんです。つまり自己決定の原理は初めからあるんじゃないくて、クライアント

の中にそういうものを生み出していくケースワークなり心理療法なりの働きというものが、なくちゃならないんじゃないんですか。

C₁ : 私も同感です。たしかにこれは他の継母子関係と違って、非常にやり良かったケースです。然しそういった特質を持ったこの母親が治療をやっていくと、どんどんそっちの方へ延びていく、その点でケースワークが生きていたということがいえると思います。それからケースワークにおける自己決定の適用ということについてなんですが、機関の機能も考えに入れなければならないと思います。おのおのの機関の機能によって、自己決定の適用の度合等がまた違って来るだろうと思います。

P₂ : その事に関係してですが、69 ページの一次的行動異常と判断されるということがですね、この時に一次的行動異常でなく二次的行動異常といわれる場合、例えば知能上性格上の問題がある場合には、心理療法の対象とはなり得ないんじゃないかというようなニュアンスを、ここから受取るんですが、その点いかがですか。

P₃ : 精神薄弱ではないから心理療法の対象になるだろうという程度の意味なんです。

C₁ : 子供の場合性格的なものといっても、割合に動かし得るものだという理解を持っているわけですね。

D₂ : 性格的なものと一次的行動異常という点において、その両者の間に児童の場合いかなる差異があるか問題だと思うんですけど。

C₁ : Psychopathic (精神病質的) な印象があるかどうかということは、やはり気にしていたんです。だけど最初 K 先生(現在日本医大)や P₃ 先生と相談して、そういうニュアンスはないだろうというので治療の対象としてとり上げたわけなんです。

S₁ : 自己決定の原理とか診断はそのくらいにして何かほかに、

プロジェクトイブ・テクニクへの批判

D₃ : 治療状況に入ってますね。4回目ぐらいになっても母親に不満があるんだけど、それを話すというよりもむしろ治療者を試すような形で表現しているわけでしょう。でこういう子供の場合に最初のスタディの段階で、CAT等に対して子供の色々なものが果して本当にプロジェクトされたのかどうかという点に、ちょっと疑問があるんですが。

P₃ : そういふ問題はどのケースについても起る問題じゃないんですか。このケースの場合、母親の不満は4回も5回もやってからわかったのもそういうこともいえるけれど、一般の場合はスタディの段階で一応の判定を下してしまうんです。これは明らかにテストに乗っていないということがわかれば別だが、プロジェクトしているかしていないかは、そう問題にはならないんじゃないかと思うんですが。

D₃ : これを読みますと、能力とか、把握する仕方とか物語りの内容について、CATなどのテストでは割合に表層的な子供の社会的態度等がわかると思いますが、深い感情的な問題迄果してプロジェクトしているかどうかは疑問ですが。この場合盗みが5、6才の時から始まっているし、相当重いようですが、一次的行動異常という根拠はどこにあるんでしょうか。

D₂ : 結局診断に於ける分類という問題になるんでしょうか。

C₁ : それと表層的なものはよく出されるが、深層のものまではプロジェクトされないのではないかという点で、心理テストの効用という問題にもなる。

D₃ 先生の質問をうらがえすと、心理テストによる結果がもっと深層にわたってのプロジェクションであれば、この場合一次的行動異常ということがいえるのでしょうか。

診断と治療計画

D₃ : やはりそこに精神医学的な診断が必要だと思っんです。例えば、問題の発生が5才位から10才

位に渡っているということは、考慮の余地があるのじゃないでしょうか。

C₁ : この子は4才で実母と別れていますから、5才から問題が発展したとしても、一次的行動異常ではないとは必ずしもいえないでしょう。

P₃ : これはもっと一般的な問題であって、一次的行動異常と性格的な問題との区別がどこかということになるんじゃないでしょうか。

D₃ : やはり診断が一応きまらなければ治療の計画が立たないと思うのです。環境要因がより重要なら、親だけをとり扱うということも考えられるし、或いはこの場合子供の年齢も考えると遊戯療法でなく違った形のものを適用しなければならぬ場合もあるでしょう。従って最初の段階で遊戯療法を適用し得るかどうかという考察(診断)が必要だと思っんですけど。

S₂ : 私は最初から厳密な診断が必要だとは思わないんです。一応始めてみてスクリーニングをする。そして初めて心理療法に適するかどうかをきめていってもかまわないと思っんです。

C₁ : このケースでは、継母子関係の特徴と問題自体の特色から心理療法適用の線が出たと思っんです。

P₃ : そうなんです。それに子供の場合は大人と違った特徴があると思っんです。子供の場合は問題の内容として心理療法の対象になるかどうかという1つの制限がある。それからそのことと治療を受ける意欲があるかないかという問題が、大人だったら同じ人間の問題だと思っんだけど、子供の場合はこれらの問題が親と子と別々の人間のものであって、自ら違ってくると思っんです。でこの場合は、子供自身は治療を受けに来る動機は最初から強くはない。従って親の方が熱心だから治療に入ってみようじゃないかということになったんです。それでこういうのがまあ今迄は普通であって、子供の方のモチベーションの問題は、今迄余り考えられないで来てしまった様に思っんです。

D₃： 研究所では母親が熱心だからという事で始められた場合が、だいたい普通だったのではないのでしょうか。

治療の形態について

P₁： 治療者2人で行ったこの治療の意図について、ちょっと説明していただきたいんですが。

C₁： ここに出てくる問題は親と子供を順に並べただけで、治療者間のインテグレーションの問題は余り出してありません。まあ、正直に言って私達2人の間には、特に密接なインテグレーションを取ったとは思えません。然し共同治療の場合、治療者はお互がお互の事をよく知ってなくちゃならないというのは一見必要のように思えるんですが、お互がお互の事をよく知ったが為にそれがじゃまをする場合もあると思うんです。例えば、P₃先生が私の話を聞いて家庭の方ではこうだったという情報のもとに、子供の遊戯療法をやっていくとなれば有害でこそあれ益はないでしょう。そういう点からむしろ2人の間は独立にしようじゃないかという気分の方がむしろ強かったと思います。これは共同治療の原則から全く離れているかも知れません。

S₁： 他にになにか治療について問題になることはありませんか。

治療の終結（ターミネーション）の問題

P₂： 子供の治療の終結について、少し問題にしたいと思うんですが。

P₃： こちらが何とか治療を終結させたいと思ったのは、治療者自身の問題だったのは確かです。それで13回、14回頃そろそろその準備を始めたんです。然しそれまでの過程では、子供の問題行動は話し合いに出ることなく治療が進められたんです。問題行動をもう少し取り上げていけば、治療の終結はやりやすかったかもしれません。余り触れていなかった為に、これから先治療を続けてい

けば私との関係はこれ以上深まらないのではないかとこの様な恐れが出て来た。そこで15回位の所で私の方から丁度学校の運動会があってこれないうきがあったのを機会に、ここに来るのはもうおしまいにしようとおっさり提案して終わってしまったわけです。

D₃： 最初の目的の所まで行ったんだったら終結にすべきだったでしょうね。

P₃： 最初はどこ迄というような目的を持って始めたわけじゃないんです。彼はここへ来てははじめ、どうせ又叱られるんだというような不安を持っていたんです。ところが叱られるという事は無くここへ来たらどんな事でもさせてくれるという安心感が出て来て、非常にポジティブになってきたんです。そこ迄は良かったんです。この子が財布を拾ってとどげる様な状態になってきて、そして何もここまで来なくても自分の気持を受け容れてくれる所が家庭や学校に出来てきたら、彼はここへ来なくてもよくなる理窟なんですね。そうやって来て、理想的にいえば、彼自身からここへ出て来なくなると思うんです。それがそうなりそうもない。もっと端的にいえばこれを遅らせれば遅らせる程打ち切りにくくなっていくという不安が、私の中にできちゃったんです。

D₃： 依存性を強めるという意味なんですね。

P₂： しかし現実に財布を拾ってとどけたり、或いは母親との間に前とは違った関係が出来たというような動きがあるんでしょう。するとそういう動きがもっと治療を続けることによって促進されて、もっと離れ易いような形になるという期待が持てはしないでしょうか。

P₃： 普通の場合ならその期待は十分持てるんです。然しこの場合、私が後で失敗だったと思ったのは、将棋というような固定したフォームを作っちゃった。だからそういう風に発展していかないんじゃないかという恐れがあったと思います。そんな意味で、こんなゲームを取り入れちゃったのは失敗

だったと思った。

P₂ : 4回目, 5回目が失敗だったとありますが, その事なんですか。

P₃ : そうです。そこ迄は初めこわがったのが, だんだん順調に発展して来たと見ていいと思います。それから先は, 私との関係は深まらなかったという感じがするんですね。母親が終わったということは, こちらにとってのきっかけでその時期を過ぎて自然に終結出来る機会を待つという事が出来る為には, すでに将棋なら将棋という1つのきまったフォームを作ってしまったとはならなかったと思うのです。この形を変化させない限りは, 自然な終結はむずかしいんじゃないかと思ったんです。まあ結果的に考えれば最後の附記の所に書いたように, その学校の校長に2回会ったんですけど1回目の時には何も問題が無くなってきましたというっておられたが, 4ヶ月位たってから又会った時は「もう全く普通の子ですよ」といわれた。理想的にはそうなるべきだと思うんです。そういう状態になってから, もう少し子供だけ続けていたらもっと自然な終結が出来たと思うんです。然し私があれば以上発展する可能性のない関係を作ってしまった事に, 根本的にミスがあったという反省をしています。

P₂ : これ以上発展する可能性のない形と先生がいわれたが, 実際に向うが将棋やろうといい出したんでしょ, そういう形で治療が始まった場合, それ以外の形に移して行くとすれば, どういう根拠があるんですか。

P₃ : 最初にこの子が野球をやろうといった時, 私はそれに応じたわけです。然しそれはそのまま続けなかった。それから向うがその次に発展して行ったんですね。本人が将棋をやろうと言って私がそれに応じたんですが, そのまま固定しちゃったのはそれが数回続いた間にそれ以上発展しないような関係を作っちゃったんじゃないかと思うん

です。

S₁ : 大分話が発展しましたが, 少し, どういうふうにして治療に入るか, というような問題についてはいかがでしょうか。

治療のストラクチャリングの問題

P₂ : 1回目の母親との面接についてなんですが治療に対する準備として治療の枠組を説明していますが, その時ケースワーカーと母親とが良い治療的關係にあったからその基礎の上に乗って出来たと書いてありますね。この場合, もしも治療的關係が出来てないという判断があれば, 説明を先にのばすということがあり得るわけですか。

C₁ : 私はこの場合は母親とは, 4回目なので比較的やり易かったと思います。ここで説明しても解らないと思ったらやらなかったでしょうね。

P₂ : 子供に問題があると思ってやって来ている母親の場合, 治療の枠組の説明のやり方によってかなり大きな失敗になったりすると思うんですがね。

C₁ : 時々母親の方から, 先生から何かいわれればいいんだけど, といわれるような場合を利用してそういった説明ができると思うんです。そういうこともないのに説明するということは徒勞に終るだろうし, 又かえって有害なことが多いんじゃないでしょうか。

P₂ : 向うで何かきっかけが出て来た時をとらえて説明するわけですか。第1回目だからしなくてはならないとか, 治療的關係がそこ迄進んだからするというようなそういう法則があるわけではないんですね。

C₁ : 特に何時するということはきめてないんです。最も自然な時を選んで, 自然な気分でなされねばならないと思うんです。

S₁ : それじゃ今日はこのへんで終わらしましょうか。

神経症における「心因」の問題

— 1 症例の自由連想を通じて —

Masaaki KATOH:

On the "Psgchogenesis, of Neurosis

心理学部長 加 藤 正 明

まえがき

次に述べる1症例は、われわれが臨床上しばしば見る不安神経症であり、その自由連想も特に新しい方法を加えたわけではない。ただこの平凡な1例の自由連想においても、古くから問題にされている心因論の問題点が見出だされると思う。神経症における心因論の根拠は、主として Freud, Janet に始まるのであるが、心因に対して働きかけることが、原因療法の主眼であるとすれば、心因論の問題は、そのまま心理療法の問題であるといわざるを得ない。

以下に述べる自由連想の記録について、治療者との相互作用の分析が問題になるのであるが、ここではもっぱら Kubie のいうように、自由連想の内容はクライアントの思考の無作為抽出標本であるという立場に、できるだけ忠実であろうと努めたにとどまる。従って古典派精神分析学的な解釈は全く避けている。このさい、心因とは状況因と性格因の両者を含むものと解しておくことにする。

心理療法のプロセスにおける心因の発見という問題は、根元的には診断と治療との関係につながっている。Sullivan の主張である「干渉しながらの観察」participant observation をここで引合いに出すまでもないが、インタビュー intake, ケ이스スタディ case study, トリートメント treatment というプロセスにおいて、この診断と治療との関係が、劃然と一線を引けないことも明かである。しかし、診断とは単に状態像を把握するというだけではなくて、原因と構造を明かにするものである以の医学領域においても、可能的な原因と構造から診断を決めているのである。しかし、心因に上、他関するかぎり、現在のところ、体因におけると同様の因果関係が説明できるとはいえない。ここに心因の発生的な関係の了解の問題がある。K. Jaspers が, Dilthey に従って因果関係の説明と、発生的な関係の了解とを区別し、前者を自然科学的方法、後者を心理学的方法としたことは周知のことだが、果して心因の発生的な了解は、どこまで進めることによってその妥当性が実証できるのであろうか。精神分析における了解は真の了解ではなく、「かのような了解Als-ob Verstehen」であるという Jaspers の非難に答えるためにも、心因の問題について再考する必要があると思われる。

以下にまず、この症例のインタビュー記録および自由連想内容をかかげ、これを従来の方法によって構成してみたいと思う。

インタビュー記録 (記録者 紀 幸子)

H.S. 30 才の男性

1. 来所経路

東大の五月祭で「ノイローゼ特集」という催しがあると聞いて出掛けた。その際に研究所を教えられたので、早速本人が相談に来た。

2. 相談理由及び経過と従前の処置

昭和23年5月(22才)から肺浸潤にかかり、気胸を行った。同年10月から24年3月まで、安静を命ぜられて自宅療養していた。昭和24年4月のある日、大分気分が良くなったので、近所の床屋に出かけたが、暑い日だった、ドテラを着て出掛けた。順番を待っていたが、西陽が強くさしこんでいたという記憶がある。そのうちに、動悸がはげしく起ってきて、気分が悪くなり、医師を呼んで注射したのち、リヤカーに乗せられて家に帰った。その夜、歯を磨こうとしたさい、再び動悸がはじまって気分がわるくなった。このことがあった翌日から、家に誰もいないと不安になり、また気分がわるくなるのではないかと考えただけで、激しく動悸がしてくるようになった。

その後、昭和24年4月から8月まで、東大に入院した。当時神経的な興奮がつよく、神経科でも受診したが、別に何ともないといわれた。この入院はもっぱら副睪丸結核の手術のためであったが、手術に対する恐怖がつよく、三階の病室から一階の診察室におりるのにも、動悸がして苦しかったという。

副睪丸の手術後、昭和24年8月に退院、その後は自宅で静養していた。このころ歩いていると、気分がわるくなるのではないかと不安にかられ、10米ほど歩くのがやっとであった。昭和25年には暮ごろから10分位は歩けるようになり、同26

年には家から駅まで12,3分のところまで、ようやく行ける程度になった。同年11月、近所の米屋で手伝ってくれというので、事務の仕事を手伝いはじめ、それ以来現在までつづけている。自由にやらしてくれるし、家でやってもかまわないので、楽にやっている。昭和27年には、米屋の仕事で王子までいく必要ができ、自転車は不安だったので、父に同伴してもらって、病後はじめて電車に乗った。この年から酒を少量飲むようになり、友人に誘われて、池袋まで往復ができるようになった。それが契機となって、少しづつ外へ出掛けるようになった。昭和30年に弟の結婚式があり、初めて目黒まで行ったが、行くまでは不安があった。

最近では気分がわるくなったら、タクシーを拾えばいいという気分があるので、すこしは気が楽になった。しかし遠方へいったり、タクシーのない所へいくと、不安がつよくなる。今度市川まで相談に来たのが、最大の距離であった。以前は旅行が好きで、暇さえあれば出掛けていたことを考えると、実際不思議でならない。外出すると気分がわるくなるのではないかと不安が起り、動悸がはげしくなってしまう。

患者は長男であり、職業の点も考えたり、結婚も考慮したりしてみるが、不安がつよくてどうにもできない。何とかならないかと思って相談に来た。

従前の処置として、東大神経科でみて貰ったほか、近所の神経科をも訪れているが、別になんでもないといわれた。

3. 既往症

幼時から腺病質で、風邪をひいたり腹をこわしたりすることはよくあったが、大病はしていない。昭和23年肺浸潤、同25年副睪丸結核のため手

術、現在は健康診断でもう大丈夫といわれている。

4. 生活史

幼時からおとなしいほうであり、勉強では人に負けずに努力した。小学校のときはずっと副級長をしていた。昭和17年工業学校を卒業後、工場に勤め、設計や図面の仕事をしていた。終戦後その工場が解散になり、町工場に勤めながら、夜間高工に通った。そのうち過労がつづいて肺浸潤になった。元気なころは友人仲間でリーダー格になっていたが、発病して休んでから劣等感がつよくなり、自信を失った。何もできず男性的な面がなくなってしまうように思う。現在米屋の手伝いをしており、事務や配給の仕事をしているが、こんな生活に満足してはいられない。

5. 家族関係

父は67歳、会社員、性格的に当人に似ており、

昔神経衰弱になったことがある。母親は54歳、勝気で小さいときから人に迷惑をかけてはいけないというしつけを受けてきた。本人の病気について両親は心配しており、なんでもかくさずに話している。家族に秘密はもちたくないと思う。長男としての責任を感じ、早くもとの体に戻って両親を安心させたいと思う。姉は1度結婚したが、現在家に帰ってきている。弟は去年結婚して別居している。下の弟妹は勤めている。(同胞5名)

6. 治療に対する態度

東大で受診したさい、鎮静剤を服用したが軽快せず、自分で努力する以外に方法はないと考え、約5年間すこしずつ遠くへ行ってみたが、その後はかばかしくない。このままではどうにもならないと痛感している。ノイローゼに関する本などいろいろ読みあさり、心理療法を受けたいと積極的な態度を示している。

ケーススタディ 31. 6. 4.

30才、男、未婚、夜間高工中退、米穀商店員。

面接回数 2回

主 訴： 不安発作、動悸、下腹部に力がはいらなくなる、頭がしびれる、顔がほてる、遠距離に1人でいけない等。

既往症： 肺浸潤、副睪丸手術及びレ線照射。

現 症： 精神的所見—感情緊張、不安、刺戟性亢進、劣等感、自信欠乏等。

身体的所見—胸部レ線所見及び心電図所見に著変なし。

問題の解釈： 昭和 23 年肺浸潤による職業及び学業の挫折、副睪丸手術後のレ線照射等の条件があり、昭和 24 年 4 月以来、不安発作が起るようになった。現在の職業の将来性に対する不安、結婚への不安、肺浸潤への顧慮、長男としての負い目、老年の父などの諸状況がある。また、幼時より小心依存的であった。父も41才時神経衰弱となり不眠の症状があった。

診断不安神経症。

以上の intake record 及び case study の内容を検討し、心理療法を開始。6月12日より自由連想法による心理療法を14回行った。他の症例と同様毎週1回1時間と決めたが、途中2週目のことも2回ほどあり、中間に2ヶ月本人の希望で中断した。

治療経過

自由連想第1回、()は治療者

夜みた夢です。夕べじゃないんですが。このところずっと気管がぜいぜいしている。透視はとったんですけど、気管支なんかで、手術した方がいいんじゃないかといわれた。それで医者にみてもらった夢です。それからもう1つ、高いところからおちそうになった。(そこに誰かいました?) ちよっと思ひ出せないんです。すぐくひやひやする危い場面なんです。一間一割合早くねてもねられない。ぐっすりねたことがないんです。(何か考えているんですね) ねむるまえに考えごとをするとねつけなくなるんです。いろいろ考える。このさき職業はどうなるか。(何をしたらいいかと考えるんですね) ええ、いろいろ欲が多いんです。あれもこれもやってみたい。考えるときは考えるんです。別にうちこんでやろうという気がおきない。あきっぱいというか、碁などもやるが、自身の気持ちに反撥するものがある。何回もやると、時間をもったいないような気がする。碁とかクイズとか、余り考えつめると、すぐく頭がこんがらがってくる。それだけ頭の疲労が早い。前にはそんなことはなかった。病氣してからです。(胸を悪くしてからですね) ねてからですね。ねこんで半年ぐらいねていました。そういうことはほとんど病人になってからです。(何かいつも緊張してしまうので疲れるんですね) まゝ緊張しているとか、なにか考えてないことはないんです。(考えがまとまらない) まゝそうですね。(たまにはいい考えが浮ぶこともあるんでしょ) ハア、いろいろ考えてみても、やっぱりそれは考えただけであって実行できないんです。(例えばどんなことです)。就職についても余りいいところがない。今いるところは貸家で店をもってみて、米屋をやってみたらと思ったりする。(自分でやろうと思うんですね) ええ。前にはそんなことも考

えたんですが、やはりつとめたほうがいいとも思いう。(つとめたほうがいいと思うんですね)…… 間…… 酒ものむんですけど、やっぱり呑みはじめると呑みすぎてしまう。あくる日はほとんど呑みたくないんです。しかし疲れたときは、呑みたいと思います。大体小使いには余裕があるんです。独りでのみ始めるときは、さほどハメをはずすことはないんです。もう年ですから女性関係のことも考えるんです。(すすめられたりするんですね) じゃなくて……いままつとめているところは米屋をやっているんですけど、組合の事務をやっています。だから自由販売になれば解散になります。(そういう見通しがあるんですね) ええ、将来性がないことがわかっているから、そういうわけで結婚できないんです。すすめられても一笑に附してしまふ。やはり自分の一身上のことですから。そういう話をするのもいやなんです。女友達を持ったらいいと思うんです。(持ちたいと思っても持てないんですね) 自信がないから気おくれしてしまうんです。まゝ自分で自分を知っていますから。一間一特に遠くにはいかれないが、それに対してつまらないという気がします。結局、呑み歩くのもそういうことからなんです。(つまらないという気持ちがつよいんですね) それは口実で呑んで淋しさをまぎらわすんです。自分自身、人には従順ですが、自我はつよくないんです。意志が弱い。このまえ神経症の本をよんでましたが、ちょっとした失敗は人もやるんですが、人より馬鹿に見えるという錯覚があるんです。人に立ちおくれるということを思うので、焦燥を感じます。だから結局、余りに気が散慢だから、1つのことに打ちこめない。いろいろ自分で反省したりしているんですが、思うようには進まないんです。碁をやるとき負けまいと思ってやる。英語でも将棋でも、1つのことでおさえればいいんですが、自分でもそうしないからわるいんだと思うんです。(なにかそういうふうにおさえたいと思

うんですね) やればできるという気持ちはあるんです。……割合に金のある人は尊敬しない。学問的だとか、社会的地位は尊敬します。人間的な人だとか。要するにそういうことを考えているのは余りひまがありすぎるのか、それとも遠くへいたり、気をまぎらすことがないからでしょう。

(ハァ、ハァ) 酒を呑んでもあくる日は頭痛たかったりするんです。なにか昔のように、ノンビリした気分がないんです。(ええ) いつも張りつめている……砂浜で裸かでねっころがるとか、裸足になって百姓をするとか、身体をつかって汗を流してくたくたになるときがほしいと思うんです。頭脳的にいそがしいと頭が重くなります。ある程度軽い仕事をしているときは、そういう自信のないことも考えないで、気持ちがいいんです。(ハァ)

一間一 余り人と話すのも、目上の人とかなんとかいう人になると、なにを話していいか意識してしまうんです。(ハァハァ) どうも苦しくなってしまう。やはり距離があって胸がしめつけられるようになるんです。(ハァ、目上の人だとなんだか不安になるんですね) まあ結局、左の胸ですね。胸や肩がいつもなんともないと思って、息苦しくなる時があるんです。そういうとこへ出るのがいやなんです。ちょっとした痛みはそれに比例して苦しくないんです。でもここへ来てから大分自信がついて来ました。一間一余りこまわりのことに気がつき過ぎるんです。(ああ、なにか気がつきすぎてしまう) 例えばこういうふうに1つの部屋にいると緊張してしまうんです。病気のあととは眼がピクピクしたりする。(ハァ) 気持わるくなって、苦しくてあたふたしているところを見られたくないとか、一間一ちょっと考えがまとまらない。(ハァ、ハァ) たえず緊張していて頭が疲れているんです。そういうとき脈に弾力性がない。張っている糸をひっぱる。そんなような気がするんです。(そういう緊張がつづくんですね) 緊張しているためでしょうが、頭が晴々しない、

たえず頭が重くなる。物を考えると具合がわるくなるんです。どうしてよくなれないのかわからない。ゆったりした気持ちがない。(ハァハァ) そういう状態だから、物ごとに対して度胸がないんですね。夜知らない男に話しかけられると、撲られはしないか、とかそんなことを考える。不安定な状態ですね(ハァ不安定で困る) クイズとかパズルとかが好きなんです。といっても7時間働く疲れしてしまう。ねてもねられない。頭がおもくなって嘔気がしてくるんです。

以上、第1回の自由連想では病気への不安、職業の問題、結婚についての不安などが述べられている。しかもこのさいは母と同道して来所している第2回来所時は、途中で母とおち合い、帰路は独りで帰宅した。このさいの連想内容は要点は次の如くであった。

「胸や胃が下へひっぱられる。深い息ができない息苦しい。独りでこよようと思ったが、家を出たら母が途中で会おうといってくれた。息苦しい。」という訴えからはじまっている。しかし、「ここへ来ることになって自信がもてそうです。今度は独りでできます。ダンス講習会に出たが、顔がほてってドキドキした。乗物に乗るのが不安だ。床屋で倒れたとき、人に迷惑をかけた。」そのほか不安発作のさいの経験が始めの大半を占め、後半に至って、「胸部疾患の再発の不安、副睪丸炎のため、結婚しても子供ができないと思う。そのことを相手に話すのはいやだし、といって結婚するのに秘密はもたないほうがいい。それをいえば結婚が成立しないだろう。そういうひげ目がある。」また「現在の職業について不安があり、結婚よりも職業の安定が当面の問題であると思う。だが職が安定すれば不安がいくらかおさまると思うが、現在の体の具合では職業は安定しない。どうどうめぐりしている。」

第3回は独りで来所した。「今朝は気分がよくて独りでこられました。途中で週刊朝日を買って

それを読みながら来た。以前は本を読んでもおちつかなかったが、今日は本に気をとられて、不安はなかった。こちらへ来るようになってから、随分気分的に楽になったような気がする。自分では気持がさっぱりしているつもりだが、承認して実行できないのがおかしい。思い切ってやってみれば、次第に自信がつくのではないかと思う。」

「父が会社をやめたら経済的に苦しくなる。もう67ですからいつまでもつかわからない。そうなる自分でも何とかして安定した職業を選ばなければならぬ。いらいらしてあせってしまうんです。両親としても私が工業をでているのだから、ふつうの会社にはいって、永續性のあるところにいけば安心する。米が自由販売になるといられなくなる。長男だから兄弟のことも考えますし、財産はありませんから嫁をとるにしても、まず経済のことをちゃんとおこななければならない。そんなことを考えるとつい酒を呑んでしまう。ちゃんとしなければいけないと思いつつながら、そんなことをやってしまうので、自分自身がいやになることがある。」

第4回

今日も独りだという気持で、ちょっと心配でしたが思い切って来ました。割合なんでもなかった。(ここまで来るのに慣れてきたわけですね)大分慣れました。後頭部が疲労している感じで、月曜日は外苑へいったんですが、外を歩いているときは何でもなし。芝の上に立ったときめまいがしました。友人の家へいったものだから。(友人の家へいったんですね)ええ独りでいきました。友人から日光へドライブにいかないかといわれたのですが、自信がありません。まァ今年度は1度位、海水浴にいってみたい。何だかいけそうな気もする。海は8-9年いかない。(胸を悪くしてからですね。)ええそうです。外苑へいったのはじめてです。まえはいきました。悪くなってからは、はじめてです。結局友人などに会うと、なおのこ

とぐずぐずしちゃいけないという感じがしました。(その友人は相当やっている人ですね)自分でやっています。カメラの卸しです。まァ一応地盤も出来、家もあり、安定している。ほかの友達も教員などいろいろです。まァそういうふうに充分活躍できるのに対して、嫉妬めいた気持です。

(以下略)

この自由連想では主として職業上、経済上の不安が中心になっている。

第5回

「夜上野を歩いて気持がわるくなった。友人に日光へいかないかとさそわれているが、往復3時間間ならいくとっておいた。姉の勤め先でピンポンをやり、へとへとになったが、心配することはなかった。」

「3-4 才ごろ、みけんをバケツのふちで切った。あとは6才ぐらいのとき、自転車にぶつかって、頭を切った。3.4 人で押えられて縫われた。それから6才のとき、祖父の葬式があった。恐怖はなかったが印象に残っている。友人の自転車を借りて、ドブにおちておこられたり、線路に石を乗せておこられたこともあった。子供のころから臆病だった。お化けがこわかった。5-6 年のとき、お岩の映画を見た。恐かったのは空襲のときです。遠くでみているときは平気だったが、頭の上におちてきたときは、小便したくなったりした。それは1回だけです。」「20年4月にY高工の夜学に通った。終戦後も通ったが、家も苦しいし、勤めもやめずに通った。帰りが11時半で、食事をするに12時になった。木曜になるとへとへとになってしまった。昭和21年の3月に退学した。この年に妹が肋膜炎と腹膜炎になった。(中略)振り返ってみて、別に恐怖といったものはない。床屋で倒れたショックが一番大きかった。」

「Onanie について、中学時代罪悪感があった。卒業のとき校長が性病の話をしてくれた。そういうこともあるし、自分としては好きな人ならいい

が、そうでない場合はいやですね。結核で副腎丸炎になったことは大きかった。よく両方やられると腎丸もやられるというそういうことを恐れた。手術に対する恐怖がつかった。放射線をかけて恐らく子供ができないだろうといわれた。子供を抱いて歩いている人を見ると淋しい。それを領解してくれる人があればいいが、余り考えるとくしゃくしゃしてくる。10ミリ・レントゲン通しているから、奇型児が生れる可能性もある。今は女性と親しくなると、精神的には淋しいが、何となく一緒にお茶を飲んだりしてしまう。」(以下略)

この自由連想では、主として幼時の不安と結婚への絶望感が中心になっていた。この連想では、かなり誘導していった点もあった。

第6回

「苦しくはなりますが、自信がでてきました。就職のことを考えるようになった。今のところ、あちこち知人をまわっています。(職を変えるつもりなんですね)結局自由販売になりますから、来年春ぐらいにはどこかへはいらないと……。 (中略)友人のところへ行って帰りの電車のなかで気持ちがわるくなった。その友人も昭和23年に胸がわるくなって、7年も入院していた。彼の方が先によくくなっている。今までの不安の大部分は、ずっと病気で通ってきたから、依頼する気持ちになっている。生活の点でも、経済的にもそうだった。ちょっと具合がわるいと、母が来てくれると安心する。弟の家へ母といったとき、何となくフラフラしたこともある。勇気がでると、冒険してみようという気になる。そういうことは月に何回もない。7-8ヶ月いかないところへは、出不精になる。」(以下略)この日はやや自信が出たこと、自己の依頼心への反省がでてきている。

第7回

「このごろ銀座へ行って映画を見る。で、自動車でもと思って練習をはじめた。やりだすと夢中になって、ほかのことを考えない。何か楽しみが

できた。やはり動悸はしても運転中は何ともない。友達が小型をもっているから、ドライブでもしてみようと思う。(免状もとろうというわけですね)とろうと思います。前ほど不安になると思わなくなった。(不安になるんじゃないかという不安だったんですね)ええそうです。ひっこみ思案になるんです。飛込台の上に登ってやめてしまいう気持ちです。(飛込台に登らなきゃならないわけですね)今のところどうしてもということはないんです。一ぺんやってみれば何ともないと思うんです。何か自動車という目的をもっていこうと思った。いけばいい。(何か目的をもっていけばいいんですね)ここへ来るのと同じように、目的をもっていけばいけないことはない。しかし体の調子のいいときは不安がすくないが、体力が伴わないこともあるんです。不安がききにくるほどひどいが、動悸が最初だとそれほどひどくないんです。割合前ほどはげしくないんです。まァ毎日同じような生活ばかりだし、何か新しい空気に触れて生活を変えたいという欲望にかられたんです。マンネリズム。年令的に発展性がないと思うんです。(それで自動車をはじめたというわけ)気分的に何か1つの足がかりになって、何か変わったことをやればいいんじゃないかと思ったんです。それをはじめると、運転の仕方のことが頭に残るので、他のことを考える余裕がなくなるんです。何だか嬉しいような気がします。(それだけ発展したわけですね)ええ(中略)今のところすぐできそうな職業はない。学校も中途半端ですし、経歴も中途半端でできてしまったのですが、何を始めても新規まきなおしの状態です。自分で仕事をAとBとどっちがいいかと判断して、Aをして失敗したら気にしてしまうんです。(自分で決めることが不安なんですね)それだと苦しい。(人が決めてくれたらいいと思うんですね)こういう状態だからそういう風になってしまったんです。そのほうが気分的に楽なんです。こうなっている自

分がいやで、いつも人に頼っている自分がいやなんです。それに反撥しているんです。小さいときから人のいうことはよくきくほうでした。そんなに逆らわなかった。それでも人がこうこうというのに、自分はこうするといつてやったこともあります。でもファイトは余りなく、していいことがあってもやらなかった。結局自分のやろうと思うことをやり通さないんですね。きかない人間ならやってしまうでしょう。」(以下略)

この日は、自動車運転をはじめたこと、目的をもつこと、依頼せずに自分で決めることなどに触れた。

第 8 回

「運転に自信がもてるようになった。免許という目的をやり通せば、何か開けてくるような気がします。でも体はどうも夏から秋にかけて具合がわるい。そういう点で自分でもファイトがないと思うんです。もうすこし張り切ってやらなきゃ。一昨日酒を呑みすぎて、昨日はお午ごろまで調子がわるかった。胃が苦しい。胃の具合がわるいと不安になるキザシがあるんです。近ごろへその上まで動悸がのぼってきます。……自動車を捨えるところでは安心です。……まァファイトがないということは仕事がないことからです。情熱がおこらないんです。そんな状態で暮していますから、何かそれに慣れてしまった感じです。自動車を始めてからいくら喜びを見出したように思います。囲碁をやっても、ものになる楽しみはない。生活を考えることが先になるので、やめてしまう。しかし方針がはっきりした線がでてこないんです。それで自分もヒョコヒョコしているんです。人は自分の満足感を子供っぽいと思っているらしい。(子供っぽいということですね)上手にできることがない。大い受身の状態です。何か人に頼るといふか、甘ったれるとか、そういう点にあると思います。この前の日曜に休まなかったので、今日は休んで自動車の練習をしました。それ

から映画を見にいけます。あとすこし歩いてみます。要するに大丈夫だという信念がほしいんです。そういうことは練習でしょう。病院としてそうして貰いたいと思います。それを自分のものにするんです。自分でもそう思っているんですが、なかなか実現しない。進歩が遅々たるものなので……。誰かにああこうしろといってもらいたいんですね)全部人からではないんです。ヒントのようなものを与えて載せて。まァ結局、自分自身でおおそうという意志がないことはないんですがまァお医者さんにみてもらって、心配ないといわれると安心するんです。」

この日も依頼心への反省と、ともにやはり依存的な態度を示している。

第 9 回

「頭が重くて鼻もすこしわるいようです。自動車の練習も16回やりました。仮免をもらうのに試験があります。法規と学科です。身体検査もあります。(ハァ試験ですね)仮免はやさしいんです。運転免許は20回足らずでやれます。35回やると実地は免除になります。今本をよんでいますけど、そのほかには別にやってません。何か熱中していることがいいんです。仕事がいそがしいとか、その日のプランが一杯だと、体のことは余り考えないんです。この間、帰りに映画を見たりしましたが、別に何ともない。一昨日友達の家に行きましたが、奥さんがいて、御飯を御馳走になりましたが、ちょっと食べられなかった。気を使うんですね。(ああ気を使ってしまうんですね)ええ改まると。話しているうちはなんともないが、食事になるといけないんです。どこか食堂でも、人と一緒だといけないんです。友人ならいいんですが、ちょっとした知人ぐらいの人だといけないんです。もう一膳といわれて、自分でまあ半分位などといったりすると、何か余計疲れてしまう。食べなきゃいけないと思うと、段々食べられなくなるんです。(中略)友人で一人親しくしているのが

いるんですが、彼も不遇なんです。お互いにはげまし合っていますが、どうもなかなかうまくいかないんです。友達と月に2、3回会って話すと、気持ちが愉快になって、前途に対して頑張ろうという気がおこりますね。(いい友達があるんですね)かざり気がなく、金銭的にも、まあ女性のことで何でもいえるんです。…間…今度妹が来年あたり結婚します。で何か御祝してやらなきゃならない。兄妹は割合仲がいいんです。(略)ここ2、3年の間に皆いってしまうと、両親と3人になります。父も来年はやめて、私が就職しなけりやらない。姉も働いているが自分のことだけで、仲々。皆働いているわりに給料がよくないから、どうしても苦しいんです。下の弟も僕が病気でなければ、アルバイトしてでも大学へやれたんですが、僕がねこんじやったんで……」(以下略)

自動車運転への熱意と、友人その他依存できる対象について述べている。

第10回

「昨日免許の試験にいきました。順番を待つ間がいやでした。風邪気味で、こんど21日に箱根に行くことになってるんですが、こんな調子じゃ……(略)自分でもこういう機会だから箱根ぐらいならいられると思う。…(略)いよいよ明日の具合で決めます。試験のとき、初めての所ですし、気持ちがわるいからやめさせてくれというのもみっともないし、順番を待っている内が一番わるかった。6人のうちで、そのまま無条件でパスした人は1人で、もう1回30分の教授を補足するのが2人、2教授が1人、3教授が2人でした。私は1教授のなかにはいました。人より駄目だという気持ちでしたが、学科は1回で受かりました。自信がもてきました。……私も前は人に劣るというほどではありませんでした。何か気が弱くなってるんです。ちょっと具合がわるくなると、人にすがりたいという気持ち、独立心といいますか、自分独りでやっついていく気持ちが欠けているんです。前はハイキ

ングでも人を誘ったくらいです。……(略)自動車でも、不断はこうやってと考えているが、試験になるとあがっちゃう。そそっかしいというか、何やってるのか判らなくなる。……(略)体の方の動悸とかそういうことはありますが、最近は前よりよくなりました。呼吸が押えつけられるように、深呼吸しても息がよくできない。それでも以前にくらべるとほぐれてきた。」(以下略)

この連想では、自動車の免許試験への成功から自信がもてるようになってきたが、なお、自己の依存傾向についてのべている。

第11回

「ドライブに行きました。ちょっと気持ちが変わりましたが、大したことはありませんでした。1つ仕事をやってパッと次の仕事ができたら楽だと思います。仕事していても、何となしに考えているんです。…(略)…ドライブして気持ちが変わってきました。自信といえますか……何か責任を負わされたとき頭に感じがあるんです。しなければならぬことがあると、不安になるんです。…どっちかという与自己主張をひかえ目にしている。そういう性質で、割合人の気持ちを汲みとってしまうんです。いいことだとも思いますが、弱点でもあると思います。何かいつまでも子供っぽいんです。困るというか損することもあります。大体性質が陰性の方なんです。考えることがさっぱりさっといかない。最初に下手に出ると下手になってしまうんです。貫録というか、そういうものがないんです」。(以下略)

ドライブ後の自信とともに、自己の性格への反省。

第12回

「最近不安な気持はなくなってきました。どうにかなるという気持ちになってきました。どうにかなると思っているうちに忘れてしまうんです。相当自信ができたつもりです。結局今までの不安がどこからきたのかわからない。病氣してから神

経が鋭敏になって不安定になりました。もともと神経質だということもありましたけど……副睪丸の手術には非常に驚いたんです。それで病気がおきてくると不安になるんです。…(略)…職業の面ではまだ解決がつきませんから、問題にならないんです。職業のことを考えると行きづまってしまうんです。何かいいことがあるだろうということしかない。今でも多少の収入はありますから。死ぬことはないから気が楽なんです。それでもよくなった友人に会うと、立遅れを感じてしまいます。……この間も病氣した友人と会って、いろいろ話して慰め合ったりはげまし会ったりしました。幸福になるには経済的に恵まれないと話し合いました。その友達も就職はしているがよくない。僕より肉体的に疲労しているんです。やはり自分が相当の収入を得られないというんで、ガツガツしているんです。疲れたってやめるわけにはいかない。自分も同じようなわけで、やめれば収入がとだえるんです。…(略)…まあ最初の所は学校からだだし、2回目の所は父の紹介ではいりました。そこでちょっと体に無理して病気になるしました。今の所は自然と人が話を持ってきてくれました。こういう考えは甘いかも知れませんが、今の職場でもちゃんとやっておけば、またあるんじゃないかと思っています。結局ちょっとした事務とか、いろいろなことができるようにならなくちゃあ」……(以下略)

このさい、不安感がへったことや自己の性格への反省などを中心に述べ、多忙のため、ここ暫く

休むというて帰った。

第13回 (約2ヶ月目に來所)

「今月は全然まえとちがうようです。知人の紹介で履歴書を書いて頼むことになりました。3月から4月ごろです。可能性があります。…(略)…今年店の人と飲んで歩いたが、なんともなかったし、希望が湧いてきます。去年は焦っているような不安がありましたが、今年は自然になるようになってしまうのではないかと思います。職が決まるまで、今の仕事を懸命にやります。健康診断でもなんともないといわれました。大みそかまで毎晩11時ごろまでやりました。今年もう少し精神面で鍛えていきたいと思っています。…(略)…オートバイにも乗っています。最初は恐いと思いましたが、平気になりました。スピードを出すことも慣れてきました。」とほとんど軽快したこと、仕事も人一倍できるようになったことを述べている。

第14回

「現在不安がおこる気持ちになることはない。やはり不安がおこることに逆わないほうがいい。いや、ある程度逆って、ある程度頼り、これ以上はできないとするわけです。ある程度やつてみて、この次もうすこし延してやってみる。それで条件が恵まれているときは、思い切ってやる。…一間一……(略)…はじめ市川ときいてびっくりしました。わるくなる前には独りでできたことがあった。」……(以下略) と述べ、症状も軽快したので、これで打ち切りたいという。

概 括：

以上の自由連想の経過を概括すると、

初め、職業と病氣に対する不安について述べ、ことに副睪丸手術及びレ線照射のため、結婚に対する不安がつよかったこと、長男としての責任、父母に対する顧慮などが中心になっている。2—3回ごろから、これらの不安に対する反省も生じてきており、それとともに友人の成功

に対する焦りも第4回ごろから起っている。友人にドライブに誘われたとき、つよい不安があり、このさいの連想で、幼時の頭部切創や祖父の葬式、お化けに対する恐怖、校長の性病の話も、次の回にでてくる。第7回ごろから、自信もやや生じてきて、職業の見透しについて、実行を考え、自動車練習のことが、次回以後に中心の課題となった。学歴や経歴が中途半端なこと、酒を呑んだあとの不快感、受身的な未熟さへの反省、自信に対して誰かの保証を求めていることへの反省などが、相次いで述べられている。その後、結婚への不安や、長男としての責任なども、繰返されているが、自動車の仮免許証の合格や、友人にドライブに誘われ、遠距離まで行けたことが、つよい自信の根拠になった。そこで11—12回で、責任をもつことに対する不安、自己の未熟さと劣等感についての反省、自己の不安定さへの観察、死ぬことはないという見極め、就職への楽観などの洞察が、相次いで述べられている。ことに13回では、自信と希望がもてると述べ、14回で一応、打ち切ることになった。

以上の自由連想によって得られた素材を、時間的経過に従って、身体条件、環境条件、人間関係、性格傾向等の諸点について整理すると、次表の如くなる。

年令	身体条件・ 環境条件	人間関係		性格傾向 (特に神経症的)
		家庭内	家庭外	
0才		父・母・姉の4人。父は神経質だったが、特に家庭の問題はなかった。		
3才		弟生る。		
4才	前頭部切創。 3人に押えつけられ、縫合しこわかった。			
5才		妹生る。		
6才	扁桃腺手術。	祖父死亡。葬式を見たが恐怖はなかった		このころから臆病でお化けを恐がり、暗くなると外へ出られず、夜驚あり。小学校2年生まで夜尿あり。
8才		妹生る。		
12才			中学にはいるてから1人の親友ができた。	
20才	働きながら高工夜間部に通学したが、疲労がつよく、翌年退学した。			
21才	同校退学	妹が結核性胸腹膜炎になった。		
23才	肺浸潤となり自宅療養。会社を失職した。		失職。	
24才	床屋に行き、初めて動悸がおこった。			不安発作

年令	身体条件・ 環境条件	人間関係		性格傾向 (特に神経症的)
		家庭内	家庭外	
25才	副睾丸の手術のため 東大入院	早大生だった弟が結 核になり、入院した	米屋に勤め、ふ つうにやっている。 。	手術、特に疾病に対する 恐怖。
27才	米屋に勤務。			不安発作
31才	米穀統制徹廃による 失職の恐れ。	老年の父、妹の結婚 問題、長男としての 責任		不安発作

考 察：

さて、以上の表に記載された素材は、クライアントが自由連想の過程で述べた記憶を主体としている。それはあくまでもクライアントが治療状況において引きだした内容であり、過去の事実をそのまま述べたものではない。しかし、従来の心因説によれば、彼の結核と失業、老年の父と長男としての責任などは、この不安神経症発病の状況因であり、幼時からの小心、臆病かつ依存的な傾向が性格因として挙げられ、この状況因と性格因との両者が心因とみなされるであろう。

この心因の推定は、すでに初めの診断においてなされていたのであって、クライアントの訴える動悸その他の症状が、器質性疾患の根拠をもたず、不安発作ないしは予期不安として示されるという「非器質性」及び「神経症症状群」という条件から、この診断がおかれたのであった。

しかし、状況因としての結核や失業、手術の不安などの条件にしても、実はクライアント自身がそれをいかに受けとり、いかに反応したかという主観的な体験に立ちいらなければ、それが発病の一因としての状況因であることを確めるわけにはいかない。さらにいわゆる性格因としてのクライアントの性格ないしはパーソナリティの把握は、治療者との対人関係が密接になるにつれて、はじめてやや正確なものとなる。この点はパーソナリティ・テストを行うに当たっても、検者とクライアントとの対人関係の問題が重視されることと関連する。

従って初めの診断に当たって、非器質性及び症状群と並んで、有力な根拠であった「心因」の推定は、心理療法の進行によって、治療者とクライアントとの対人関係がより密接になるに伴って、次第に明確になるのである。しかし、この平凡な不安神経症例が示すように、神経症の原因としての「心因」についての素材は、ほとんど無制限に自由連想のうちに現れてくるのであって、そのいずれに重点を置くべきかの問題がある。不安を抱くクライアントが、過去の生活史のなかから、不安を経験した状況を思い起したとしても、この「隠蔽された記憶」が、現在の不安の原因であると断定する根拠はない。また、クライアントの示す依存傾向にして

も、それだけが不安神経症の原因として十分な条件だとはいえないのである。

結局、初期の診断に当って推定された心因の可能性は、心理療法の進行という治療過程を通じて明かにされる。つまり治療しながらの診断、干渉しながらの観察ということにならざるを得ない。しかも状況因にせよ、性格因にせよ、その発生的連関の了解という方法によるかぎり、了解の無限性という課題に当面せざるを得ないのである。

しかし、このように心因の了解はどこまで深められるべきかという問題があるからといって、ただちにすべての診断を否定することは正しくないだろう。まして「最後の診断家は精神分析においても、患者中心の療法においても、等しくクライアントもしくは患者である」とする Rogers の見解を、すべての場合に適用することはできない。素朴な心的決定論にもとづくサイコダイナミックスの理論を、機械的にすべての症例にあてはめる「心因」論が危険であるとともに、生物学的及び社会学的な要因の一さいを無視し、クライアントの主観的な「認知または認知の仕方」のみに終始することもまた、甚だ問題であるといわざるを得ない。

「万事について過去のみを詮索し、それによって現在を説明する」こと、つまり古典派精神分析学のいう反復強迫説に対しては、新フロイト派からの多くの批判がある。例えば Horney も記憶に決定的な回答を見いだすよりは、当人の現実の構造において、直接の事件がどんな意味をもつかを理解しようとするべきだといっている。もっともこのさい、現実の構造と直接の事件を治療家がいかに把握するかが、まず問題になるのではあるが。

心因の診断という問題は、はなはだ古くかつ新しい問題である。このさい診断とは、原因の診断であるばかりでなく、現実の構造ないしは状態像の診断をも意味している。上記の症例において、不安神経症と診断し、かつ問題の解釈を仮定することがこれに相当する。事実、この両者は治療の進行とともに、最初の診断時よりも深められていくものであった。この治療と診断の進行に当って、可能な限りの素材を集めることは、診断を深めるには有効であろうが、治療のために障害になる場合もすくなくない。社会的背景の把握、心理テスト、生物学的諸検査などが、心理療法の進行にいかに関与するかという点も、甚だ重要な問題であろう。この点、治療者は自から心理療法家であると同時に、心理療法の研究者であり得るかどうかの問題もある。その他、これに関連して心理療法の奏効機転、特に自覚洞察及び仕上げ等の過程についての研究がなされなければならない。

しかし、例えば Shoben は、心理療法のプロセスは極めて複雑であり、研究対象として扱える諸単位に分解することが、極めて困難であるとする。このことは、Alexander と French が、心理療法は science であるよりも、art であるといっていることと相通ずる。心因の把握が心理療法の進行とともに深められていくものとすれば、この心理療法のプロセスを明かにすることが、すなわち心因を明かにする方法とならざるを得ない。だがこの心因がクライアントの主観的体験にぞくするかぎり、その決定はクライアントの手にゆだねられ、治療者が集め得

た種類の素材も、これを心因と断定することが困難になるのである。もしこの心因が、クライアットの主観的体験に左右されず、客観的な素材にもとづく「社会因」又は「神経因」として把握できるならばその決定は治療者の手にあることになる。これに答えるためには「心因」の心理学的研究にとどまらず、「社会因」の社会学的研究と「神経因」の精神生理学的研究がさらに推進されなければならないであろう。

なお、今回は1症例の自由連想を通じて、神経症の「心因」の問題を提起するにとどめた。従って十分に論議をつくしていない憾みがあるが、それは今後の課題としたいと思う。

文 献

- | | |
|--|---|
| 1) Alexander F. & French T.M.; Psychoanalytic Therapy. New York, Ronald Press. 1946. | Aspects of Psychoanalysis. New York, International Universities Press. |
| 2) Horney K.; New Ways in Psychoanalysis. N.Y. Norton. 1939. | 5) Shoben E.J.; Some Observations of Psychotherapy and the Learning Process. H. Mowrer: Psychotherapy, Theory and Research. 1953. |
| 3) Jaspers K.; Allgemeine Psychopathologie. 1952. | 6) Sullivan H.S.; Conceptions of Modern Psychiatry. Washington D.C. 1947. |
| 4) Kubie L.S.; Practical and Theoretical | |

ディスカッション

自由連想到に於ける無作為抽出と非指示的方法

S₁: (司会) 今日には神経症の心因が問題になるでしょうか。

P₁: そのまえにちょっとお伺いしたいんですがこのD₁先生の治療は純粋な自由連想というよりは、むしろノン・ディレクティブ・メソッドの要素が強いと思うんです。そして最初にKubieの無作為抽出の標本と書いてあるんですが、本来テクニックの上では自由連想とノンディレクティブ・カウンセリングとの間に大分違ったものがあると思うんですがいかがですか。

P₂: 私、考えるんですけどね、自由連想では寝ているという事に依って依存的傾向を与えてしまうんじゃないでしょうか。それを考えなければこの治療の形とノン・ディレクティブとの間の中にそう差は無いのじゃないか、本来の自由連想という形とは大分違うと思うんです。

D₁: (著者) そうですね、この事例は所謂自由連想到に於ける解釈は入っていないと思うんです。オーソドックスの分析的な仕方よりも、むしろロジャースのやり方を取り入れて治療しているところに、方法論的な問題があると思うんです。

P₂: ここでいう無作為というの、治療者の方

注: 発言者はアルファベット記号で表わしてある。Sは社会学専攻Dは精神医学Pは心理学専攻をさす。

で特に治療のプロセスを動かさない、解釈の為の素材となるものを撰択したりしないといった程度の意味じゃないんですか。

D₁ (著者) : それもまあそうなんですがね、ここではむしろ治療そのものには余り重点をおかないで、治療効果よりもむしろ心因を探るにはどういう方法が良いか、心因を決定する素材を無作為抽出するといった意味なんです。

P₂ : その場合の無作為というのは、こちらから意図的にさぐるのではなく出てくるものを使って心因論の素材にするという意味ですね。

D₂ : 心因を探ることに目的があるのか、治療そのものに目的があるのかその処に問題があると思います。まあこの中では全体の主張としてサイコダイナミックスが問題にされているんですが、やっぱり治療もしなければならぬでしょう。

P₁ : 一般的に先生の治療はこういう形である可きだとお考えになっておられるんですか。然しこの場合にはサイコダイナミックスにその問題点をしぼられたわけですね。

D₁ : ええ、このケースを始めた頃は可成りサイコダイナミックスに重点をおいてみました。

P₁ : そうすると、若し治療だけを考えて場合には、形が変ってくるんでしょうか。

D₁ : 本来はそうであってはならないんですね。診断し乍ら治療して行くというのは矛盾してはいないと思うんです。然し治療者の態度には多少の違いがあるのじゃないかとも考へられるんですけどね。

心因と了解の問題—心的決定論への反省と不可知論に対する批判

P₂ : 心因に関連して所謂 *Als-ob-verstehen* (かのごとき了解) ということがここでいわれているんですが、実際にはD₁先生は心因ということにどのような見解をお持ちだったんですか。

D₁ : 心因と了解ということはD₂先生に御尋ねし

たいんですが、ヤスパーズが了解の無限性といっているように、心因の検討は終ることがないわけです。そうするとその患者が良くなって了解は完全であるとは限らない。そうだとしたら、全く不可知論になってしまいます。この点でロジャースの概念の根柢には不可知論があると思うんですが、そうするとノイローゼの心因という考えがこわれてしまう。ノイローゼを決めていく場合、器質的でないという事と一定の神経症症状があること。これらは頼りにはなるが、頼りにはなるだけであってきめてにはならない。心因がやっぱりノイローゼの診断のきめてになると思うんです。しかし心因というものを決めるためには、相手の人間を完全に了解しつくさねばいけないことになるんですね。ところが完全に了解しつくすというのは不可能に近い。そうなると矢張り不可知論に陥ってしまうんですね。

P₁ : そうするとその了解という事の何処かに限度を置かなくちゃならないわけですか。

D₁ : そういう事ですね。今迄は心的決定論で割り切っていたんです。それでノイローゼの発生が凡て決められるのかどうか、恐らくそこからもれるものが一杯あるとすれば、心的決定論というものを一廻考え直さなければならないと思うんです。然しそうかといって不可知論にはおちいりたくない気持ちもしますね。

P₁ : ちょっと別のことなんですが、神経症の心因論と分裂病の心因論とはどんな差異があるのですか。

D₁ : 根本的には違いはないでしょう。ただ分裂病の世界がわれわれにどこまで解るかということです。それはやはり分裂病だから解らないということと、人間そのものが解らないということもあって、それが二重に重っているのじゃないかと思っています。しかし分裂病の場合でも神経症の場合でも同じように解らないものがあるんですが、心因に関してどうやって決定するかという点では矢張

り分裂病の方により困難があるのじゃないかと思
います。

S₁ : 心因に関してですが、そういうものの素材
についてひとつ。

心因とその素材

P₂ : D₁ 先生はここで心因として働いている素
材を集めて居られるわけですが、クライアントが
問題にして言語化されているものを、無作為に抽
出されたものとして出て来たんだと考えて居られ
るわけですね。

D₁ : それを最後に一寸触れたんですが※心因の
決定がクライアントの手にある事になるとすれば
、ノイローゼを決める客観的なきめてがない。矢
張りそれから離れた素材がなくては神経症という
ものを規定出来ないんです。

P₂ : それを了解するっていう場合は、治療者の
方で再構成して理解して行くという意味なんです
ね。その場合に向うがそれに関して素材を提供し
なかつたならばその事の構成の仕方も変わって
くる。それは不可知論に結びつかないまでもそう
いった素材の提供の仕方等がクライアントに委さ
れているので、それが心因だと決定するわけには
いかないですね。

D₁ : 結局心因というものに入って行く場合にそ
こにぶつかるんです。それを精神生理学や神経化
学などの生理学的な客観的方法でつかめるもの、
つまり神経因といったものをそこに置かない限
り、心因だけで考えると結局不可知論におちい
てしまうと思うんです。ですから幾らそれを自分
の考えで整理して並べてみても、そこが問題にな
っちゃうんですね。然し今迄の神経症論では、心
因というものが極めて自明なものとして扱われた
ように思います。或る1つの心的事実と他の心的
事実とが、因果関係にあるとして、極めて単純に

割り切ってこれを心因とよんでいたのですが、た
またまそこに出て来た素材というものは特定の治
療条件の中で出て来たものですから、それを心因
とみなすことができるかどうかは、その治療の仕
方によって違ってくるんですね。

S₁ : ロジャースの立場は不可知論的な立場をと
って、原因結果論的な分析を全然しないわけなん
ですか。

P₂ : 出来ないだろうと思うんですね。その場合
因果の連鎖として事実を事実とのつながりという
形で考えはしても、それを心因に結びつけようと
はしない。クライアントの認知の仕方としてどう
いうような位置を占めているかが考えられている
だけなんですね。

S₁ : そういったものから客観的な素材を取り出
すことは出来ないという立場なんですね。

P₂ : ええそうです。例えば記憶の変容とか認知
の仕方とかディストーション等そういう色々なク
ライアント自身にうけとられたものが、事実であ
るかないかは結局わからないんです。そういう意
味で、不可知論的といえはいえるんですが。

S₁ : そこに D₁ 先生が云われる科学(Science)
でなくて技術 (art) となってしまうのではない
かという問題が起ってくるわけですね。

P₂ : でもね、心理学的事実を問題にしている限
り、私は科学だと思うんですけどね。心理学的な
事実というものはオープン・システムであるとい
はいてもですね、その中でそれを支えている外
にある事実と関係があるんじゃないか、だから問
題にするのは外側のわれわれにとって未知の事実
というものじゃなくて、心理的な世界の中の事実
をつかむということがポイントになるんです。

D₁ : その場合科学になり得るものとして社会的
要因なり性格的要因なり、普遍的な事実としての
要因がある筈でしょう。そういうものを求めるの

が科学だと思うのです。然し心因論の問題に関する限り、どうしてこれに科学性を持たせるかという問題が残ってきますね。

P₄ : ここで心因という場合は歴史的なものを指しているわけですか。社会的なものは別なんでしょうね。

D₁ : いや、そういう要因も入っているんです。それから性格的な要因も入って来ます。つまり心因とは状況因と性格因の2つになりますね。

P₄ : 必ずしもそれが現在に於いて、どういうダイナミックスの場でそういう位置を占めているかということ表現するんじゃないくて、過去に於ける精神分析の伝統的なものといったものも入るわけですね。

D₁ : そうですね。そういう要因も広くいえば含められたわけですね。然し少なくとも現在ある状態をひき起している要因は何であるかということが大事だと思います。

P₄ : そうすると重点は現在になりますね。

D₁ : というよりも現在しかつかめないわけです。

P₂ : でも客観的事実という意味の素材を問題にする場合、矢張り現在よりも過去の事実としてとらえなければならぬんじゃないですか。例えばD₁先生がここであげている“こわかった”という事を、これをその当時の事実として裏付けるものがないとそれは結局どうだかわからないってことになっちゃうでしょう。然しそれが事実であろうとなかろうと、その人が考えてみて事実としてとり上げるとしたらですね、それで少なくともその事実に関する感情というものは、クライアントの意識の中に現在あるわけだから、そういう意味でなら不可知論にはならないんじゃないかと思うんです。

D₁ : 例えばその人が非常に不安がある時に過去の経験を引き出す事があります。過去の不安の経験を喋っているのは、現在不安であることの日安になると思うんですが、それではその当時にどれだけの不安があったかという、それはわからな

いですね。現在不安だという事は良くわかるんですけどね。

P₂ : 然しそれじゃ結局原因結果はつかめないことになっちゃうんじゃないかという気がするんです。でそれはロジャースの立場じゃなくても、心理学的な事実としてそれをつかもうとすると同じ事がひかかってくるのじゃないかと思うんです。

D₁ : それを若し否定すると、因果関係をここから導き出すことは難しくなってくる。従って心因というものは否定されてしまうんですね。

P₂ : 心因というものは現在のその性格の構造の中でのそれがどういう位置を占めているかという意味で、問題になってくる。

D₁ : 例えば驚愕反応みたいな場合であれば、確かにそこに心的事実としての経験があって、そこに驚愕という現象が起る。恐らくこの因果関係は否定出来ないのではないかと思います。直接的な驚愕みたいなものはかなりはっきり心因がつかめるとは思います。さらにいえば、心因によって起っているから心理療法が適当だということも考えられる。若し心因から起っていないものならば、心理療法をする事が治療として適当かどうか問題となるでしょう。身体因に対して働きかけるのが狭い意味の身体療法なら、心因に働きかけるのが心理療法であると考えてもよいでしょうね。この事例でも子供の時の不安の経験を思い出している。で子供の不安の経験を思い出していることから、現在不安なんだという事はわかった。然し心理療法が対象治療ではなくて、原因治療だとしたら、この不安が何故起っているかを説明出来なければならぬでしょう。いいかえれば、心理的原因から起っていると解って、はじめて心理療法の対象になり得るんだと思う。

S₁ : その場合、器質的な体質的なそういう原因が無さそうだという事が1つの条件になるんですか。

D₁ : いえ、あっても良いと思います。身体的障

害も心理療法の対象になるんですからね。ですから心因があれば身体的原因が働いていても、心理療法を身体療法と並行して行ってかまわないと思うんです。

S₂ : 私はね、こう思うんです。心理療法をまず始めちゃうんですよ。第1回の時にはその時の事実が問題になるでしょう。それが6回目に変化が起れば、或る程度心因があった事になるのじゃないんですか。

D₁ : しかし心因にしる身体因にしる、まったく予測なしに治療はできない。そこに何が働いているのかわからないままに治療することはできないと思います。これが薬物による治療ならば、与える条件と与えられた条件がある程度はつきりするでんすけどね。ある種の薬が効いたら、こういう原因だろうという診断が可能になることもあると思います。しかし心理療法が有効だったから心因があるとするのは独断だと思います。

D₂ : 心因についてヤスパースがやはり *Als-observieren* といっているように、或る特定の出来事がこれが心因だといってこれを直線的に現在の症状と結びつけるということには、もう激しく反対しているんですね。それはあくまで予測的な構成なんだ。こういう事があってこのような変化があったということの了解性はこれは強く彼は説めているけれど、それだからといって逆にこうなった凡てをわれわれは了解出来るかという事は否定しているんです。だから神経症の場合その心因を凡てわれわれは了解し得るとは彼はっていないんです。

D₁ : そうすると心理療法をはじめるときにそこに心因があるかどうかはつきり断定できないんですがね。ロジャースのノン・ディレクティブ・カウンセリングの場合、そこに問題があるんですね。しかしそこを予測することは許されるでしょう。

D₂ : それは許される。その場合に彼はあくまでこれは理論だという事を念頭に於てやれといっている。それは真実であるかどうか解らないという

立場を強調しているんです。

D₁ : それをわからせるにはどういう方法があるでしょう。今S₂さんがいわれたように、治療上或る変化があれば、逆にそれから判断していくというやり方は間違だと思ふ。

S₁ : 変化する為には治療者が何か刺戟を与えているわけですね。然しどんな刺戟を与えたかは客観的にはつかめないですね。

D₁ : ええ身体的な場合です、与えたストレス自体はつかめないことがあると思うんです。従ってそこに起った変化とか結果から判断する場合がありますね。

S₁ : 薬物にはそれを注射すればこうなる等という一応何か標準がある筈ですね。ところが心理療法では与えるものはつきり解らない。本人がどう受けとったかという事ですからね。

P₁ : しかし薬物の場合ははつきりしているとおっしゃいますが、薬を与えるという心理的影響もあるわけです。ですから早い話がイソミタールと称して片栗粉を飲ませても症状がなくなることでって考えられますよ。だからそういうことも考えなくちゃならないし、刺戟の意味がわからないことの方が多んじゃないでしょうか。

D₂ : D₁先生の結論ですが、結局精神生理学的な或いは社会的な2つ方向に活路を見出そうとしておられるわけですね。だがどんな場合でも心理的な了解という事が起ってくるでしょう。でも神経生理の場合だってわれわれが果してそれに近づけるかという、そうとばかりもいえませんよ。それは恐らく無限級数的なものだと思うんです。近づくかも知れないけど完全に到達するとはいえないと思うんだ。

D₁ : しかし1歩でも近づき得ることが科学ではないでしょうか。

P₂ : 神経生理的なものは客観的素材といえるんですかね。

D₁ : 例えば身体医学的な領域では進行麻痺は梅

毒によるとわかっていれば、それ以上の事を知らなくてもいいんですね。これは神経梅毒だけを治療すればいい。その人が誇大妄想を持とうが、被害妄想を持とうが、治療には関係がないんですよ。身体医学的な意味での Wesen（本質）には関係がないと思うんですよ。それには進行痲痺が梅毒によって起っている脳膜脳炎だとさえ解ってれば、それ以上の事は必要がなくなる。進行痲痺の場合、その人が乱暴しようが独り言をいっようが、それは別な面からみた本質であって身体医学的にはその程度の処で済むんですな。

P₂： 済むような気がするだけじゃないのかな。

D₂： あくまでわれわれは社会的、或いは神経生理学的な認知はしなければならぬ。しかしもっ

とも主要な問題は心理学的の同一の中にある。だからわれわれ神経症の診断というものは、心因の有無によって診断するんですか。

D₁： 従来の考えでは少くとも3つの大きなファクターとして、器質的でないこと、いわゆる神経症特有の症状というものがあること、それに心因というものがある、はじめてノイローゼといえるのだと思うんです。

D₂： 状態像だけで凡てやっているわけでないけれど、或る程度は状態像だけでも診断がつけられたんですね、今までは。

S₁： それじゃ一応結論のようなものができましたから、これで今日は終りにしましょう。

幼児恐怖症の心理療法

Yoshiko IKEDA and Makie TAMURA:

Psychotherapy of a Child with Phobia

児童精神衛生部 池田由子

社会学部 田村満喜枝

1 ま え が き

小児の恐怖症の報告については、S. Freud のハンス少年の報告のほかにも、Bornstein Wulff, Sperling, Schnurmann, Newwell その他の報告がみられる。

これらの報告を概観すると、恐怖の発生は心理的に、両親と子供との愛情関係に基礎づけられ、その源は幼児期の離乳や排泄の躰け時代にさかのぼるもので、後年の外傷的体験により誘発されたものといわれる。とくに、母親と子供との関係や、小児の攻撃的衝動の役割が注目されている。

われわれの相談室においても、恐怖を主症状とする幼児の事例を取扱い、患児に対して精神科医が遊戯療法を、母親に対してソーシャルワーカーが、ケースワークを行った。この例では恐怖の発生機転や遊戯療法の各過程が比較的明らかに観察され、また予後も約3年間にわたり追求しえたのでここに報告する。

遊戯療法の機転はまだわれわれに明らかでないことも多く、いくつかの問題をもつので、その内容、会話の録音等により記録されたものを冗長ではあるが出来るだけ詳しく述べ、読者の御教示を得たいと思う。なおこの例はわれわれの相談室が

開設されてから比較的初期に属するものであるのが、まだわれわれの経験も乏しく、治療の進め方も系統的でなく、遊戯室の装置も不完全であり、現在の相談室の状況からみると種々の問題点があることを、予め御了承いただきたいと思う。

2 事例の概要

先ず事例のあらましを述べると、来所当時5才4ヶ月の男児で、幼稚園に通っており、その家族的、社会的環境及び發育史は後述のとおりである。主訴は来所より約4ヶ月前に幼稚園に入り、入園1ヶ月後に幼稚園で大水の話をしき、その2ヶ月後に症状が始まり、どんな小雨でも大雨になり洪水がおきるのでないかと過度に心配し、雨が降り出すとおびえて眠りもせず、外出も出来ず、幼稚園にも通えない。両親が言聞かせても、叱っても効がなく、泣き出すのみで、更に海や川の水をも恐怖するようになった。一般に泣き易く気分は沈み、母親を恋しがる傾向が認められ、これらの症状が約1ヶ月間持続していた。

本例に対してワーカーが母親にインテーク面接を行い、医師が診断のための面接を行い、直ちに本児に対する遊戯療法を母親のケース・ワークを始め、ともに1週1回1時間宛前者は23回、後者は22回で終結し、その後約3年以上にわたり予後を調査した。また母以外の家族や幼稚園保母との面接も行われている。

症状発生に重要な関係をもっと思われる家族の問題と、本児の発育史について、インテーク及びその後の母との面接により得られた資料のうちとくに重要と思われるものを整理し、総合すると次のようになる。

<家族歴>

この児童の家族は大学卒の勤勉な公務員である47才の父親と、家庭にいる43才の母親及び1才の弟、親類から養子にきている20才の義兄及び本児の5人である。

経済的には、ほぼ中流の生活を送っている。

遺伝的にも、家系には精神病、神経病などの欠陥をもつ人はおらず、むしろ学術的な優秀な才能をもつひと達が多いようである。

父親は地方の何代も続いた老舗に生れ、実父が早く死亡して継父が入家したため、主としてその祖母に育てられた。

祖母は武家の出で、柔剣道の心得があり、女丈夫といわれた人で、孫に対してスパルタ式の教育を施し、たとえば3才の時父親を川に連れ、その中に泣き叫ぶ父を放り込んで泳ぎを教えを教えたり、6才から剣道の寒稽古に通わせたという。父は格式を重んじ、礼儀正しくするよう躾けられ、また一面では長男であり、実父がいないというので、祖母からとくに大切にされたという。父親は若い時から短歌に興味をもち、現在では狂言、歌舞伎などについて興味があり、その方面の論文などもある。

母親の話によれば、その父親の性格は、几帳面で礼儀正しい、食事の態度、目上への礼儀などについてやかましくいい、神経質であるが、一見子供っぽいところもあるという。

母親は漢学者の家に生れ、その父親は茶道や仏画に興味をもち、子供達に幼時期から論語などを教えていた。母の実母は母が5才の時結核で療養所に入り、7才のとき死亡した。その後継母に育てられたが、兄や姉が独立すると、転々と彼等の家の世話になり、18才で高女を終えるとすぐに父親の許に嫁がされた。

世話になつた兄達も漢学、書道で世に立っており、金銭を卑むこと、長幼の序を尊ぶこと、東洋趣味などは家族にうけつがれている。

母親は、やや肥満した体格で、治療者が面接したときうけた感じでは、淑やかで温厚な人柄で、日本婦人の模範として考えられるような人格を理想にしているようであった。

事実、同居したことのある姑との関係も、近隣から賞讃されていたということである。

母親はワーカーとの面接経過にも出ているように末子であり、父親との結びつきはとくに強

かったらしい。晩酌に酔った父親に毎晩抱かれて寝、懐しい思い出を持っている。

母親が 28 才で満州に居るとき、その父親は死亡し、帰国したが死目に会えなかった。しかし、父親については何時も自分と共にいるといった結合感を強く抱いていると述べている。

実母に対しては、5 才のとき急に入院され、不安や孤独感で泣きながら姿を探し求めた記憶や、母が死亡したとき、俄かに変わり果てた怖い死顔を見せられ、母と思えずたゞ恐怖のみが強かった思い出など、外傷的な体験が残されている。

この母親にとって死というものに対する特別な怖れが、その後、つづいており、時折死という観念が浮んで来て払いのけるのに困ったり、自分の愛するものが自分の手から俄かに奪われるのではないかという不安が、本児の出生以後再び始ってきている。

両親は結婚後新京に居住し円満に暮してきたが、跡取りの出来ないことが悩みの種であった。結婚五年目に、父の妹の子を連れて、姑が同居するようになり、実子が生れないと思っていたので、その甥を養子縁組をした。

ところが終戦後、内地に引揚げたが、姑と養子は郷里に帰省し、両親のみが 2 年間壕舎生活を送るようになった。この経済的にもっとも不安定な時期に、結婚後 13 年目で本児が出生した。

このとき父親は 42 才、母親は 38 才であった。

なお、養子である義兄は本児が 2 才のとき再び同居するようになったが、現在では大学の教育学部を卒業して会社に勤めている。幼時、祖母の手で育ったためか、内気で、気が弱く、社交性が乏しいという。本児に対しては年齢が十数年以上へだたっているが、競争相手とみなすような感情をもち、本児への躰け方が甘いといって母親に文句をいうことが多い。

< 養 育 史 >

本児は母親の思いがけぬ喜びの中に生れ、出産は正常で出生時の体重は 600 両であった。

しかし泣き声は弱く医師から生活力薄弱で育たないといわれたこともあり、母親は毎月健康診断をうけては、必死に養育したが、母乳不足で体重増加は不良だった。

後述するように本児の生命線の短いことや、年齢に比し智恵づきがよく、感受性の鋭いことは母親に本児が早死するのではないかという恐れを抱かせ、乳製品が不足で入手しにくいことも、母親の心配を助長した。離乳は 1 才 3 ヶ月、排泄の躰けは 1 才 6 ヶ月に完成した。

乳児期には環境の変化に敏感で、人ごみの中や変った場所に行くとすぐはげしく泣いたという。

2 才 6 ヶ月のとき養子の義兄が、郷里から来て同居するようになったが、本児を嫌い無関心な態度をとった。

5 才 6 ヶ月時幼稚園に入園するまでは、麻疹や感冒のほか特別の疾患はなかった。しかし、

本児が感冒などに罹って薬をのまないようなとき、母親は思わず、「薬をのまないと死んでしまっ、お母さんと別れて一人ぼっちになってしまうのだよ。」と口走ったり、偏食をしたときも、偏食→栄養不良→死という考えが母の念頭に浮んで来るようなことがあった。

勿論、母親はあとで後悔したり、馬鹿げたことだと思いつ返すのだったが。本児に対して、両親とも、正しい立派な清らかな人間に育て上げたいという理想をもっていた。父親は自分が受けてきた躾け方のように、言葉、挨拶、年長者への態度、食事の礼儀などを、口やかましくいい、ときには体罰を加えた。自分が祖母にされたように早く泳ぎを教えようとし、本児を海に連れて行ったところ、脅えて泣き出したので落胆したこともあった。父親は勤め先などの対人関係に非常に気を使うことを自覚しているので、本児が両親の態度に敏感に反応したりすると、自分の態度と似ているといていやがって、線の太い子の方がよいといつたりすることがあった。

母親は本児の健康に細心の注意を払いつゝ、自分の近くに何時も置き、自分の道德規範をおとぎ話の中に盛りこんで、よい子になるようにひたすら教えこんだ。小さい子をいじめないように、外で汚い遊びや乱暴な遊びをしないように、友人に叩かれてもやり返さぬように、年長者のいうことはよく聞くように、その他さまざまのいいつけを、本児が守らないようなときは、「そんなことをするとお母さんはとても悲しいのだ」と熱心にさととして、結局、本児は模範的な幼児として生長してきた。

4才11ヶ月になり、母親が出産のため入院弟が出生した。この頃、ツベルクリン反応が陽転して、フリクテンになり治療を受けた。

また5才6ヶ月から幼稚園に通うようになった。

弟の出生に対して、本児も嫉妬を示した。母親を弟に独占されたこと、義兄がことさら弟を大事にすること、父親も弟が線が太そうだと喜ぶことなどから、弟への敵意をあらわすようなことが時にあったが、その度に父親に叱責された。

幼稚園では、教師の命令にはよく従う善良な生徒であるが、遊び道具や遊び場所の制限、帰宅時間、服装などへの注意がやかましいため、友人とは遊べないし、社会性が乏しいといわれている。

通園して約1ヶ月後に、庭の池で園児が遊んでいるとき、幼稚園の保母が、前年の大水で池がこわれ、金魚が皆流されてしまったことを話した。

帰宅して両親にそのことを告げたが、それから約2ヶ月後にこの症状が始まったのである。

<インタビュー面接>

ソーシャルワーカーの母親とのインタビュー面接では、後述するように患児の現在の症状が主として語られている。その後医師が、母及び患児に1回面接した。

患児に対しては主として器質的疾患ならびに精神病的な徴候の有無が観察されうるかの点について、関が心払われ、ともに否定されうると考えられた。

3. 治療経過

A. 遊戯療法

診断のための準備面接が終ってから、遊戯室で治療が行われた。診断のためのテストも本児の不安が強かったので、諸テストは治療がある程度進んでから行われた。

第1回 患児は、体の小柄な、やせた、利発そうな顔付をした児童である。

言葉ははっきりとしているが、小声で時々口ごもる。部屋に入って治療者に対すると、はにかんだような表情で治療者をながめ、かすかに笑いかける。この表情は暖く、柔かみがあって、よそよそしさ、硬さはない。

部屋におかれた玩具を彼に示して、そのどれでも彼の好む玩具で遊んでよいこと、この部屋では彼の自由に行動してよいことなどを告げると、彼はまぶしそうな表情で治療者を見上げてうなづいた。

部屋の玩具に次々に視線を走らせて行ったが、それは乗物にやっとなどまった。しかし、なかなか取り上げようとはしない。

治療者の顔をじっと凝視し、その反応を見逃すまいと注意しているようであったが、やがて治療者の許可を求めて、1つずつ玩具を取り上げた。しかしすぐ置いてしまう。

絵のついた積木を取り上げ、暫らくの間箱から積木を出しては、もとのように詰めこむ遊びを繰返した。腕や指の動きは、やゝぎこちなく、彼の行動を抑制している何かがあるような印象をうける。色と種類を合せて、詰めこむ点はやゝ強迫的である。

少し時間をおいて、彼は絵本を取上げ、その中の絵について、半ば独語のように、半ば治療者への話しかけのように説明し始めた。

ジェット機、コメット、三角翼、無線ケーブル、トロリーバス、その他について交通博物館で見たといいながら解説したが、その知識は幼稚園児と思えぬ程進んでいる。

頁の最後に火星探険の絵が出ていたが、それを見ると、彼は一寸得意そうに、

「あっ、これは火星だ。火星探険だ。火星がここだと地球は何処にあるんだろう？ 地球は廻るんだろう？」と天体についての話を始めたが、突然言葉をやめ心配そうな顔付になり、1、2分の沈黙ののちせきこむように、「地球はぐるぐる廻っている中に、壊れはしないだろうか？ 先生、壊れてしまうことはないの。壊れちゃつたら、いやだ。壊れたら、人間が死んで了うんだもの。地球が壊れて、ばらばらになって、人間が死んだらいやだ。死んだら怖いから、いやだ。僕死ぬのいやだ。……」と、繰返し治療者に尋ね、顔色もやゝ蒼白く、明らかな不安状態を示した。治療者が、そのような事はおこらぬことを説明し、彼に、「君は地球が壊

れるような気がして、心配でたまらないでしょう。」という、黙ってうなづいた。「壊れないね。大丈夫ね。」と小声で呟きながら、絵本の次の頁をまくと、其処には消防自動車が描かれてあった。

「これは消防自動車だ。消防自動車見たことあるよ。僕の見た消防自動車には、この梯子着いていなかった。火事だね。火事はいやだ。そばが焼けたことないけど、火事になったらどうしよう。怖いな、火事は……」と前と同様に繰返し、更に、「僕、大水も怖いや。大水は全部流して了うでしょ。大水は人間も家もすっかり流れて了うんだね、大水になると、死んで了うんだね。大水になったら、僕どうしよう。」と泣き声になって来て、反復した。

治療者はこれに対して、大水や火事をたゞ恐れる必要のないことを一応説明したのち、「君は大水や火事がおこりそうな気がして、心配でたまらないのでしょうか？大水がおきて、流されると、お母さんと離れてひとりぼっちになるような気がして怖いのでしょうか？」ゆっくり問い返すと、「うん」とか細い声で答えた。治療者は、そこでもう一度それを繰返し、また知的な説明を与えたが、その際、彼の不安を減ずるように、注意を払って行った。

劇的な恐怖の表出が過ぎると、彼はやや落ち着いて、ツ反応の陽転になった話をした。時間がきたとき、ワーカーが室外で呼び、治療者が戸を開くと、患児はすりぬけて母親の許に飛んで行き、母の体にぴったり体をすり寄せていた。確かに母親との結合は強いようにみえる。

第1回の面接を終えてワーカーと治療者はいろいろ打合せを行った。

たとえば、母親より神経質にさせているツ反応の陽転について、あるいは患児がはげしい恐怖を家庭で示したとき母親はどのような態度をとったらよいかということ、あるいは母親が学校の教育への準備をどのようにすべきか心配していること等、母親は直接的な指示を求めており、次の面接時にどのように取扱うかについて打合せを行い、毎週1回治療をつづけて行くことを決めた。

第1回の遊戯療法の場合において、治療者がもっとも関心を払ったのは、このはげしい恐怖を示す児童と、いかにして治療的関係を結ぶかということである。問題児の多くは両親の要求によって治療者の許を訪れるので、しばしば第1回の場面において治療者に拒否的であるが、本児は成人の神経症患者の如く、自ら苦痛を訴え治療者に援助を求めている。また治療者一医師を権威と認め、服従や依存の態度を示している。そして、自分が権威者にいかに受け入れられるか、悪い子供として斥けられるのではなからうかという懸念をもっている。

遊びの型についても、強迫的、常同的であり、いろいろの問題をもっている。地球の破壊、火事、大水等により、不安が表現されている。

面接の初めにも母親の許からすぐに離れにくく、終了近くにもすぐ母親の近くに走って行ったりすることは、彼が現在症状として母親との分離に対して恐怖をもつのみならず、新たに始められた治療者との関係によって、母親と彼との親子関係が影響されているものと思われる。

第 2 回

第1回のときよりやゝ口数が多くなり、幼稚園の話などを遊びの間にするようになったが、やはり1つ1つの答に対して慎重に吟味してから答え、自分が善良な子供であろうとする自己弁護的な態度が多く認められた。

たとえば、幼稚園を休んだ話をし、幼稚園での仲よしを治療者が尋ねると、すぐに緊張して、「僕、みんな好き。みんな良い子だからと」答えたり、友人と一緒にする遊びの話になると、「ちゃんばらごっこ、めんこ、……」と答えながらすぐに、「でも僕はしないよ。僕はやらないよ。」と答えたりする。治療者の表情や態度には、第1回と同じく、敏感で、たえず注意を払っている。

遊戯室には第一回よりもすぐに入ってきたが、母親の存在については気にかけて、隣室の物音に耳を澄ますようなことがある。

面接の途中、母親に会っているワーカーが、用事のため部屋の扉をノックして治療者と問答をしたところ、患者は突然「お母さん、お母さん」と大声で叫びながら部屋を飛出し、母の存在を確認して再び部屋にもどってきた。

この回ではあまり創造的でない、機械的な繰返

し遊びを、治療者への依存を示しながら行ったが、その種類はごく僅かであった。玩具に手を触れる度に、「僕、これやってもいいでしょう？」と治療者に尋ねるのは、前回通りである。

面接の終り近くになって、治療者は彼に「3つの希望」を尋ねてみたが、彼は、緊張して顔をさっと赤くし、眼に薄く涙を浮べてしばらく考え、「良い子になること。皆にほめられる子。叱られないで、皆に偉いってほめられる子になりたい」と答えた。面接の終りに治療者が、「また、来週ね」と言うのと、「うん僕来るよ。」とうなづき足早に出て行った。

この回では前回のようなはげしい恐怖は、軽減されている。母と離れることへの不安はあるが、治療状況への参加はより積極的で、次の回への期待を示している。

第 3 回

第3回は前回と同様であるが、幾分動きがなめらかになり、治療者の反応をうかがう事が少なくなった。この回で患児は治療者に「お母さん」と呼かけ、「あっ、間違っちゃった」といい赤面した。このとき、治療者は軽く笑いがなら、患児の顔を見たが、それに対して言語では反応しなかった。この回では遊びの種類はやや増加している。

玩具を見て、「これ、幼稚園にあったよ」などと言い、「塗絵したよ。」とぼつんという。

治療者が「大きくなったら、どうするの？」と尋ねると、彼は「大きくならない。大人になると年にとって死んでしまうから。僕死ぬのいやだから」

と答えた。

面接の終り近くに、夢の話をした。お化けや蛇が自分を追いかけて怖かったと、話しながら溜息をつき、「夢って、いやだね。」とませた口ぶりで独語のようにいった。

治療者との積極的な関係が出来上りつつある。より自由に遊ぶことが可能。破滅への恐怖は直接表現されないが成長→死の不安が示され、夢も恐怖夢で語られる。

<心理テスト所見>

本児に対して第3回目の治療までに行われた知能テスト、Childrens Apperception Test (Bellak), Picture Frustration Test (Rosenzweig)の結果と、母親に記入を求めた社会的成熟の程度をまとめてみると次の通りである。これらのテストは多くの場合は、治療に入る以前に心理学者の手により行われるのであるが、本児の不安が強いので先ず治療的関係をつくり出すことに主力が注がれ、次いで治療者自身の手により実施されたものである。

先ず知能テストについてみると、田中ビネー式テストにより、I. Q. 125以上を示している。以上というのは本児の緊張が高まっており、疲労したような様子がみられたので、途中でやめたためである。完全に行えば更に高い値を示すであろう。治療の初期の場面の本児の会話からも、本児が優秀な知的能力を有し、その各側面もよく平均しており、社会的知識も豊かであることが推測された。

諸家の恐怖症児童の報告例も、高い知能を有していることと考えあわせて、その人格の構造や、防衛機制の選択などという観点から興味を惹くことである。

C. A. T. は、テストの中、もっとも最初に行われている。そのためか、彼は至って警戒的で、口ごもりながら答え、反応時間も長く、単に動物の名を列挙することが多く、自己の内的感情を投射することは少かった。

そして10枚中7枚の絵には、動物の名を簡単に述べてから、「これは絵だから、男か、女かわからない。」とか、「僕は紙芝居は見ないから、よく知らない。」などという。弁解的な言葉をつけ加えている。

ただ、ライオンの絵に対しては、「ライオンがえばって、煙草吸ってる。………」と比較的詳しく、ライオンの権威を認めつつ述べたが、ライオンの絵の上に、玩具の箱をのせ、「これ、えばってるから、埋めちゃおうか?」と攻撃的な態度を表現している。

カンガルーの絵に対しては、三輪車に乗っている子供と、母親のお腹に入っている子供とを、1人は幼稚園位の年齢、1人は「信〇ちゃん位」と自分達兄弟と比較して答えていた。

Byrdの整理法による、Sexuality, Oedipal situatin, Sibling rivalryなどの反応は、注意深くこれを避けているような印象をうけた。これらの内容は、治療進行後の詳細な家族関係の叙述と比較して、対照的であるといえよう。

また、社会的成熟(当研究所による尺度)では、Communication, Sociability, Self-direction, Selfhelping dressingなど各方向に、大体年齢より進んでいる結果が認められたが、家庭の庇護が多くかつ制限の多い取扱いから来るとみられる。Umbalanceも多少認められた。

P. F. T. では、自分の道徳性の価値判断をされるのではないかという、防衛的な態度がもっとも目立った。

反応の形式としては、欲求不満をおこさせた障害の指摘が最小限度にとどめられ、ほとんど否定するような、無罰方向—障害優位型の反応が、全24枚の絵の中、21枚にわたって認められ、その他には自己防禦型の外罰方向、無罰方向が認められた。すなわち無罰方向への反応が91%を占めており、この年齢児に多く認められることの多い外罰方向はまことに僅かである。

欲求不満の解決を強調する要求固執型が0であることも、非常に注目を惹く。

検査者の表情を注目しながら、反応時間をおいて、もっとも短い言葉で答えようとし、友人の玩具をこわしたような絵をみると、「僕はお友達の玩具こわさないよ。」とか、あるいはメンコの絵を見ると、「僕は先生に云われてるから、メンコしない。」というような自己弁護が、C. A. T. のときと同様に附加えられている。これらの結果は彼が社会に適應するのに必要な程度の攻撃の解放も抑えられ、抑制的な対社会程度をもつことを示しているのであろう。しかしこの時期の反応は、テスト場面における異常な警戒や治療者との間に十分な治療的關係が結合されていないことから、後の時期において自由に表現した P. F. T. の結果の方が、患児の人格構造を知る上に、興味があるかもしれない。

第4回

前の3回に比較して、著しく活動性が増し、遊びの自発的な選択が多くなったことが特徴的である。

治療者が部屋にいと、かけ足で定刻に部屋に入って来る。言葉使いもやゝ乱暴になり、自発的に喋り、絶えず治療者の態度に注意を払うことも少い。

この回以後すべて録音したが治療者が、録音の許可を尋ねる前に、「これテープ、レコーダーか。録音して後で聴くんだね。僕、マイクいじりたいんだけど、いじらせてくれる？」と、寧ろ録音を喜ぶ様子を見せた。

この回には前3回に比較すると、遊びの種類もふえ、足踏みや、部屋のあちこちを歩き廻ることも多くなり、自分から遊びを進めて行った。

たとえば、先づ最初に絵具箱を取り、やりたいと言い許可を求め、絵具を出して筆で溶き、3枚の画用紙にはっきりしない線を数本えがいた。絵具を溶かしたり、かきまぜたり、茶碗の中で筆を洗うことに熱中した。

次に丸太組木で、起重機をつくり始めたが、よく出来なかったのでやめ、普通の積木で電気機関車をつくり、完成したのを棚の上に飾った。輪投

げを1回やり、治療者にさせ、次に自分が数回投げる。それから棚の所に行き、カーテンを外し、それを頭からすっぽりかぶって、眼だけをのぞかけてみせることを繰り返す。顔を出して覗き治療者に笑いかける。次に治療者にすっぽりかぶせ、カーテンをそっと引張っては内部を覗き込み、げらげら笑い出す。この笑いは恐怖を伴っているように思われる。

最後には、マイクの所に行き、「これから楽隊をやります。」と小声で言い、笛を吹いたり、鈴を鳴らしたりする。その度に、マイクの所で説明する。しまいには治療者にもベルをもたせ、「先生と一緒にやります。」と一しきり合奏させた。

その時間の最後に、治療者に一寸笑いながら、「今日、僕、随分騒いだでしよ。おうちや幼稚園ではこんな事して騒がない。おうちで騒いだり暴

れたりすると、お父さんやお母さんがいやがるでしょ。おうちには赤ちゃんいるけど、小さいから何時も1人で塗絵なんかするんだよ。幼稚園ではお友達と遊ぶけれど、いじめっ子がいるんだよ。」と、自分から相当に長く話し出した。ただ途中で自分の出来なかった起重機が組立てられているのを見たとき、誰が製作したか治療者に尋ね、治療者が「さあ、誰が作ったのかしら。」という、「本当は誰が作ったか、先生は知っているんだけど、僕にわざと言わないいでしょ。」と2回反問し、治療者が本当に知らない旨を告げると、やっ

と安心したような顔付きになった。

この回では楽器、絵具、積木などの玩具が選ばれた。刀や鉄砲には手を触れない。同じ回の母親の面接の中で、家庭で危険な玩具を取扱わせないことが出て来ている。患児の治療者への態度は現在母に対するようなアムビバレント ambivalent な感情が出ており、覗くことへの恐怖も出ている。

この朝小雨が降り母が怖くないかと尋ねたが、患児は行くといったとのこと。母との面接により恐怖発生の経過が次第に明らかになる。

第 5 回

遊びの量も質も非常に変化した。

活潑で動きが多く、絶えず話しかけたり、歌ったり、ひとりごとをいったりする。歩くのも走るように歩き、じっとしてられないようにみえる。

彼をつなぎとめていた綱が、すっかりゆるめられたようにも見える。破壊的、攻撃的な行動が言語にも行動にも表現され、服や机の汚れを気にすることもなくなった。

最初に積木で汽車を作り、手早くそれを走らせ、大声で叫ぶ。組立てるときも木槌で力一杯叩き、ついでに机上也叩いたりする。これが約10分位続く。

次に机の上のままごと道具のバケツ2個、お釜数个を並べ、ままごとの小さい容器に水道から水を汲んで運んできてはバケツなどにあける。すでに始めながら、「僕、こぼさないから、やらして」という。それを続けながら、口の中で「ジャブジャブ」と呟いたり、歌ったりする。一しきり辺りを水だらけにしてやめる。治療者が、「お水いたずら、好き？」と問うと、「うん唯のお水ならいい。雨や大水のときはいやだけど。」と至って平静に答えた。次の約十分間は、まとまりのない行動である。部屋の中を片足で飛んだり、高く足を挙げて足ぶみしてみたり、両足で跳ねたりする。また椅子や机をゆすったり、よじ上ったり、玩具を投げる身振りをしたりする。

それから、また棚のカーテンを開けたり、閉じたりして結局外し、それを治療者に軽く投げかける。

そばに来てカーテンを治療者にかぶせた後、自分で頭からすっぽりそれをかぶり、床にひきづりながら、奇妙な声を出し、「お化けだぞ！ お化けだぞ！」と脅かすようにする。椅子に乗って、鏡に姿を映し、唸ってみせ、「怖いだろう。凄いだろう。」といい、げらげら、けたましく笑い出し、暫らく部屋を練り歩くことを、10数分続けた。

次に再び机にもどり、積木を並べて汽車を作り、厚紙を駅のホームにする。トンネルも治療

者に手伝わせて作り、大小の麦わらを大人と子供とする。人間を乗せ、シュツ、シュツと叫びながら汽車を走らせていたが、先刻自分が濡らした机の部分に汽車を突込み「大水だ！大水だ！」といい、汽車を濡らして了う。更に汽車を凄い勢で走らせ、トンネルを倒し、駅に打ちつけ、「衝突だ！衝突だ！」と叫び、人間と駅とトンネルを床に弾ねとばす。顔を赤くし、熱狂して足踏みしながら、「衝突だよ。汽車がぶっかったんだよ。皆殺しだよ。皆死んでしまったんだよ。」と興奮した早口で喋る。治療者が手伝って人間を生かしてはまた殺す遊び続けている中に終了の時間が来て室外に出ると、講堂でピンポンの試合の準備をしているを見た。すると彼は治療者に何をしているか尋ね、午後試合があることを告げると、治療者の出場の有無、勝敗を気にして負けないでねと、2、3回繰返して帰って行った。

治療的關係が十分に成立し、患児は治療者に積極的な感情転移を示している。

また破壊的な遊び及び言語的表現により、彼の攻撃性ははっきり解放されている。この破壊の強さは彼のせきとめられていた憎悪の強さを示すのであろう。もう雨に対しても嫌悪は示すが恐怖は少く、水いたずらを積極的にやっている。

お化け、木植で叩く遊び、水あそび等の内容も深層心理学的に意味を有するのであろうが、ここでは解釈は与えていない。治療者は彼が、これらの衝動を十分解放することが出来るよう、またそれによって罪悪感を発生させぬよう、場面を整え、共に遊びの中に入って援助を与えている。

治療場面における攻撃の自由な解放が示されたので、児童と母の双方の治療者は十分に打合せを行い、日常行動の家庭においても示され始めるであろう自己主張や反抗を親によく理解してもらうように話し合いをした。事実、兄にも屈従のみしていた彼が、敵対的行動をとるということが、ワーカーから通告されている。

第6回、第7回

攻撃的、破壊的な遊びは前回と同様である。色積木で家を作り、それを汽車で破壊したり、トラックを衝突させてこなごなに崩したりする。

更に引越しの荷物や麦わらの人間を積みこんだトラックと、他のトラックが衝突して、山(机)

の上から墜落してしまふ遊びをする。そんなとき彼は前回と同様に、顔を紅潮させ、「皆殺しだよ、皆殺しだよ、皆死んで了ったんだよ。」と熱狂して叫んだ。

面接時間中これらの遊びに没頭してこの回は終わった。遊びの中に示される攻撃の強さは次第に増加し、第7回目で絶頂に達したと思われた。

ここでも攻習的感情へのレフレクション(reflectin)は与えられたが象徴の意味への解釈は与えられない。

日常行動の上には大きな変化がみられている。雨や大水への恐怖ははるかに軽くなり、感情も抑鬱的、非哀的でない。自己主張が始まり出し、友人との間にも1人で入って遊べるようになり、以前のように母の助けを求めたり泣かされることは少い。父の態度も強圧的に叱ることが少くなり、兄の叱責も減じているようである。

第8回

治療者が廊下で患児と母親に会うと、母親はすぐに、一寸前に運動会があり、彼が壇上に登ったが、恥づかしがって眼を開いておれず、閉じた儘指揮をとったこと、それでもやっと予行通り出来、その写真があることなどを何時もよりせきこんで話した。

その間彼は後を向き、窓の鍵をいじりながら恥づかしそうな様子をしていた。遊戯室の方に行く

途中講堂の扉が開いていると、彼は中を覗き「今日は此处でしたい」という。そして舞台を見つけると、その壇上に駆けて行き、お辞儀をして、壇の下の聴衆に挨拶をするような真似を3回繰返した。

楽屋や幕について質問するので治療者が説明している中に、演壇の下にもぐって隠れて了った。

治療者が「何処かな」といって探し廻るふりをすると、クスクス笑って存在を明らかにする。そして隠れんぼごっこをしようとして治療者に提案する。最初彼が鬼になると、「もういいかい」を連発しながら、幕の蔭から治療者の隠れ場所を覗いており「もういいよ。」というが早いか、「見つけたよ」と飛んで来る。

自分が隠れる番になると、演壇の下に潜んだが治療者が近付くにつれ、笑い出したり、物音をさせて、わざと見付かるようにしてしまう。自然に探し出されるまで待つことが出来ないようだ。探し出されるとやっとな安心したような面持になる。

これを3回繰返したが、「つまらないや。」と言い、治療者を連れて黒板の所に行く。

そして白墨を取り考えこんでいたが、白い白墨で山を3つかけ、その上雪が積り、空から雪が降っているところをえがいた。

そして、治療者に白墨を渡し、「何かかいて」という。治療者はヘリコプターや飛行機の絵本を最初に見たことを思い出し、落下傘と飛行機をかいた。彼はしきりに、「これ誰？」と尋ね、「誰にしましょうか？ 君にしょうか」というと黙って笑って、肯定した。

そして、「それ何処に降りの？」といい、治療者に家をかかせ、自分が煙突を附加えた。そして治療者に、家の中に住んでいる人間もかかせた。「誰をかくの？」ときくと、「昌〇」と自分の名

をいい、「お母さん」「お父さん」といい、自分や両親の特徴を附加えさせた。最後に治療者が「これだけ？」という「それから、（沈黙……）それから信〇」と弟の名をいった。「それだけだよ」といい、遂に義兄のことは出て来なかった。

治療者が、父母の像の傍らに、彼より少し小さい男の子の立っている姿をかいたところ、彼はいきなり白墨を治療者の手から取り、「違うよ。違うよ。信〇はこんなに大きくなかないし、立ったり、座ったり出来やしないよ。ねんねしか出来ないし、もっともっと、ずっと小さいよ。洋服だつて、大きな子のような洋服なんかまだ着られないよ」といい、その絵の上に×をつけて了った。

治療者が、「では君がよく知っているから、書いて頂戴」というと、ふにゃ、ふにゃしたような寝ている小さい子の絵をかいたが、余り小さくかこうとするのでよくかけず、「かけないや。」とやめて治療者と自分の絵の両方を黒板拭きで消して了った。

この面接が終ったとき、母親が治療者に挨拶をしに来た。母親は、彼を見るとやさしい口調であるが、早速行儀を注意した。治療者と母親が部屋の中で話していると、彼は外に出て行ったが、扉の鍵をまわして行ったところ、もどって来たとき鍵が開かなくなって了った。治療者と母が開き方を説明したが開けこれない。母親がどなたか呼ぶようにといったが、「いやだー。いやだー。」と泣き声を出しながら、必死に開けようとしてつとめている。その中すすり泣きが始まったとき、ワーカーが通りかかり、無事に扉が開かれた。

涙を光らせた彼は、皆を恥ずかしそうな上目使いで眺めていた。

この面接は全経過中で1つの重要な問題点を含んでいる。先ず壇上に登って同じ行動を繰返すことにより、運動会の際の外傷的な体験を自ら癒している。これは強迫反復的なものであろうと思われる。また隠れること、覗くことを繰返している。

黒板にかかれた雪山の絵は、精神分析的にみれば、いわゆる **Anal-stage** を示すのかもしれない。次にかかれた家族の絵で、彼は自分の家族に対する感情をはっきり表わしている。先ず、母、父、次いで弟はうけいれられたが、義兄は拒んでしまう。また弟も小さく無力なものとしてえがかれ、遂に抹消して否定的感情を表現する。ここでは同胞への敵意が、解放されている。治療者に対しては自分の意見を積極的に述べ、ときに命令したり反対意見を述べている。治療者のみといる時の方が、より多弁で思うままに振舞い、母親が来ると一寸緊張してしまう。治療者と母親が扉の中に閉じこめられた事件は、彼の心を混乱に導き彼の悪い子であるという罪悪感を強めたのではないかと思われる。治療者が何気なく落下傘と飛行機をえがいたことは、治療者自身の対抗転移を示すのではないかと、反省された。ワーカー側の資料によれば、患児はこの頃風船をふくらますことが出来、また義兄に対する競争的態度が著しくなったという。母親が、偏食や陽転についての対策や適当な書物について具体的な指示を求めているので、治療者側は相談した上、機会をみて児童の心理と身体発育についての書物を1冊推せんしている。

第 9 回

ビスケットと写真帳を持参してきた彼が、運動会の写真の説明をしていると、突然視察の人と所員が入室して来た。すると彼は非常に恥づかしそうな顔付になり、話をやめて了った。この時は、前半に絵画欲求不満テストと、**Blacky test** が行われた。

このテストが終わった後、彼は **Blacky** の乳からの聯想からか、話題を一しきり食物に集中させ、カルミン、アンコ、キャラメル、その他好物を列挙し、廊下にあった「食物」という絵本を持って来て、頁毎に「これが一番好きだ。」とか、「一番おいしそうだ」とか、「前に食べたよ」と言いながら、開いて行った。治療者が「君はお菓子がみんな大好きなのでしょう。お菓子を1杯、1杯、食べたいのでしょうか。」という、「うん」といい、本のお菓子をつまむ真似をしてみせた。治療者はここで彼の母親への欲求に対して解釈を与えている。

更に他の船や飛行機の本を持って来て、正確に説明する。そして雨降りの童謡が出ていると「あ、雨雨降れ降れた。マント着てるよ。傘のない子に入れてやってんだね。僕だって傘持ってるさ。昔はかっぱだの、女の子のような傘だったけど。何時も雨降ると傘さして幼稚園に行くんだよ。」と平然といい、何の動揺も示さない。また良寛の絵本の最後に、良寛神社の絵が出ていると、治療者に質問し、「良寛が死んだので神様に祭ったのだ。」という「なーんだ。なーんだ。死んちゃったのか。かわいそうだな。かわいそうだな。」と繰返していたが、この時も以前のような死について不安は示されなかった。

面接を終えたとき、外でサイレンが聞え、すぐに消えて了うと、ほっと息をついて「あゝ、おひるのサイレンか。僕火事かと思ったよ。」と安心したように眼をキョロキョロさせて話した。

この治療場面では、彼の口愛的な、乳児的な欲求が表現され、それに対する解釈が与えられている。雨についての恐怖は全く認められず、死への不安も一応消失している。

家庭で雨への恐怖は消失し自己主張がふえ、自分だけ菓子を独占しようとするところがあるという。ワーカー側よりの希望で、治療者は母親に、治療の段階について簡単な説明を与えている。

<心理テスト所見>

第9回の面接の際に、Blacky test と、P. F. T. が行われた。P. F. T. は前回と比較すると、検査者に対して警戒することも殆どなくなり、笑ったり、足を動かしたりしながら答え、反応時間も短くなった。しかし、その結果は、やはり同年齢の児童と比較すると、著しく異なる傾向を示している。

すなわち、4～5才の幼稚園児に50%以上認められる外罰方向の反応が皆無であり、他の無罰方向63%、内罰方向37%ときわめて高い。

また自己防禦型が63%、障害優位型が29%存在するに比し、ふつう30%程度出現する要求固執型が、僅か8%しかない。

欲求不満に対するこれらの反応は、本児が欲求不満の場面に際して、人や物に攻撃を向けずに、自分に向けたり、回避したりする反応をとりやすく、抑圧が強く、自責しやすい傾向をもつことを示している。

もしも自我の発達¹⁾の程度ということを考えるならば、年齢よりはるかに進み、その構造は複雑化されているといえると思う。

やはり、前回と同様に、「先生がいけないというから、メンコはしない。」というような附加えが1つあり、また友人間の場面では、「けんかになるといけないから、黙っているだろう。」というように答えている。

Bornstein は、恐怖症の1児童の症候が単純なるにかかわらず、その自我の構造が複雑であったと述べているが、この児童の場合も、それに近いものと思われる。

次のBlacky test は、Fenichel の精神分析理論に基づく10枚のカードより成る成人のテストであるが、試みに本児に施行してみたのである。ところが、本児は絵の意味を相当に了解し、熟慮したのち、情緒的な表現を伴いながら、答えた。そのすべてを記すのは煩雑なので省略するが、その一部を記してみよう。

たとえば、Sucking の絵では、一寸恥しげな表情になり、母親に依存し乳を吸いつづけたい要求と同時に、母の世話を離れて独立したいという要求も持つことを明らかにし、toilet training の絵では、黒犬は自分の排泄物をきれいに隠そうとし、それは教えられた通りの方法で便をして、善良さを家族に認めてもらう機会だと思っているが、父犬はそれでも悪い子だと

叱るだろうと述べている。

また Aggression では、黒犬は母から乳がもらえぬので母を怒っているが、母が来たら首輪を返して、乳を貰うし、母は許してもう一度乳をのませると語り、Oedipal situation ではやはり困惑したような表情となり、黒犬は父や母が仲よくしているのを見て、つまらないから向うへ行ってしまう。しかし、吠えはしない。父と母が仲よくしているのを見ると、時々そうなるのだ。黒犬がもっとも不幸なのは、父が母を一人占めにしているのを見る時だが、父はわざととしてるのではないという。父と母はもっと子供をふやす相談をしているのであり、母は黒犬に向うに行けと言うと、質問以外のことにも詳細に述べた。他の Guilt feeling や Sibling rivalry の絵などでも、全体の絵の意味を十分に理解して、反応を示している。勿論、彼の年齢的条件から果してこれらの答を成人と同様に解釈することが、可能か否か疑問はあるが、これらの絵から判断されることは、母親に対して甘えて固着していたい欲求とともに独立したい欲求をもっていること、父親は権威をもち、母を独占しようとし、子供はそれに敵意と反抗をもつが、一方父の全能に屈伏、依存してそれを抑圧すること、性についての好奇心があること、反動形成的な傾向があること、子犬はいろいろの失敗により罪悪感をもっていることなどである。これらの点は、児童の発達に対する精神分析的な考え方にある程度まで一致していると考えられるのではないかと思われる。

第 10 回

この面接では、指えのぐにより大火事の絵がえがかれた。赤い絵具をひしゃくでしゃくっては塗りたくり、火の粉が飛び、消防自動車が走り、煙がひどいので家は見えないという。

青いなぐりがきは、水が放水されている所だといい、サイレンのような唸り声を挙げた。

消防自動車の絵をかき上げてから、暫らく幼稚園の劇の話をする。「みにくい、あひろの子をやるんだよ。僕は火勢出てくるあひろの子の1人。遊戯だけじゃないんだぞお。もっといいんだ。もう練習したよ。」

手を洗ってから、箱を積上げ、それに糸をかけ崩して、「地震だ。地震だ。大変だ。」という。「人はいないから、大丈夫でした。これ、よく出来たから、壊すのいやだなあ。」と、建物を治療者に見せ替えるようにいう。

「僕、今日何時までも此処にいたいんだけどな。あと1時間位はいたいんだ。お腹空かないもん。」と、治療者の顔を眺めないでいう。

治療者が治療時間の制限を再び説明すると、黙

って聞いていたが、「僕、もう一度、これやるよ。」と指えのぐを取り上げ、「ライスカレー、バターパン、ジャムパン、クリームパン、デコレーションケーキ……」といいながら、えのぐを厚く塗り上げ、更に空間にも沢山の食物をかいた。

時間が終りに近付くと、患児は「僕、洗って上げるよ。よく落ちないかな。」といいながら、匙やしゃもじを水道で洗い、指えのぐの瓶を並べ始めた。治療者は、彼の食物への欲求に対して、前と同様に解釈を与えた。

今日の面接は、幼稚園の行事のため、日時が変更されたのを、母親が誤って指定日より早く来所したのだったが、彼はそれを気にしているらしく、「今日は失敗しちやったね。今日は失敗しち

やったね。間違えちやったんだね。」といい出し、治療者がかまわなかった旨を告げると、母親にも今日書いたものを見せるのだと、廊下にいた母親を連れてきた。

母親は丁寧に挨拶してから、「うちではいけないことや出来ないことが多いのですが……、いろいろやらせて頂き、よろこんで来たがる筈です。」と述べ、更に「前は消防の音をきいても震えたのに、火事の絵をかくなんて」と嬉しそうな表情になった。

この回においては、指えのぐや積木により攻撃的衝動の表現が行われている。治療者に対する積極的な感情的結合が著明に表現され、これは治療者が権威であるから気に入られたいというのではなく、治療者と親しい関係をもつから、手伝おうとしている。また前と同様に、口愛的一乳を与える母親への欲求が示され、解釈が与えられている。

家庭では、前と同様、お菓子の分け前を主張し、多食になっている。種々の物や場面に対する恐怖は少くなっている。

第 11 回

この回において、治療者は重大な失敗をしてしまった。それは時間前に面接した、1人の小学生男児が、指えのぐを遊戯室でいじりつけて部屋を出ようとしなかったことである。その児童は精神分裂症を疑われたこともある神経症の児童で、どうしても部屋から出ず、無言で作業をつづけていた。両親は面接室を探したが見当らず、結局、遊戯室が足りないで本児の方に納得させて同じ部屋を使うことにした。

初め不満げに見えたが、治療者が話すと、一応納得したように気軽に返事をしたので、部屋に入ったところ、本児は殆ど1時間中、その児童を意識して競争的な態度をとった。

絶えずその児童を眺めたり、治療者を独占しようとし、言葉も乱暴になり、治療者に答えながらも、その児童に挑戦しているような態度をとっ

た。自分もその児童と同じに指えのぐをやったが、いらいらと落着かず、治療者に向かって「僕がかきまわして上げようか?」とか「これ片付けて上げようか?」といったり、治療者が他の児童に、「君は何をするの?」と問い、その児童が無言でいると、「何だ、何するか自分で判らないのか」と嘲ったり、彼に向かって「アジャパー」といったりする。

動きが多く、転導性がはげしく、意味のないような叫び声を上げる。「チャッ、チャッ、キャン、キャン、キャラリコ、キャン、オッホッホのホ。」「これやりましょうか、やろうか、はい、やりましょう。」と闘球盤を出して1人で問答する。

闘球盤を出したので、治療者が他の児童にやるか、どうか尋ねると、

「何だい、あんなの、だめだい。負けるもんか。勝つぞー」といい、「パンカ、パンカ、パーン」と叫んだりする。

結局、治療者と闘球盤をやるが、攻撃的で目標も決めずに、弾ねとぼしてう。

次に輪投げをやり始めたが、その時にはもう一人の児童も参加した。すると、

「声を出さないで図々しいや。図々しいぞ。あんな前に出て。」とか「あれじゃ入って了うよ。」と口を出し、相手の手が外れると、

「外れ、外れ、」と大声を出し、相手の済んだ後では自分を行わなかった。

次に軍艦マーチを吹きながら、鈴を鳴らし、「これから、戦争ごっこ、やりまーす。」といい、部屋の内部に陣地をつくり、「陣地よ。ここは先生の領分だ。」と治療者に示し、「僕のはここだ。」と自分の位置を決め、「僕達はここだよ。」と治療者に呼び、治療者に「僕はいいけど、先生打つけられると、かわいそうだから、これやるよ。」とお面を渡す。

そして次々に、駒を放り、他の児童に打つけ、相手が投げると、「馬鹿やるー、打つかるもんか。」

と叫ぶ。「駄目だな、下手だな。」といい、投げているが、相手が暫らく投げている中に、家族が来たので室外に出て行くと、急に無言になり、ひとりで積木の家をつくり出す。

そして治療者に、「あの子、何処の子？ 変な子だ、体が弱いのか。体の病気かな？ 頭の病気かな」と言い、治療者が「体が弱いよ」というと、「ふーん」と安心したような顔になり、済まなかったような表情を浮べた。

この回の面接は幼稚園の行事の関係で隔週になっていたが、今日の他の児童の存在という事件もあったので、次回より必ず毎週ということにした。行動は、動きが多く、攻撃的で自己主張が多く、直接自己の意志を表現し、ときに治療者へ命令的になる。他の児童へは、敵対的で競争心を露わにし、弱虫で負けているようなことはなく、自分の行動への自己弁護は少なくなった。治療者へはアムビバレントな感情を示している。

母と一緒にあって、母が一寸行儀をたしなめるとすぐにふくれてしまう。ワーカー側の家庭における本児の態度についての報告でも、兄や父へ自己を主張するようなことがあるという。

第 12 回

快活に笑い乍ら部屋に踊りこんでくる。

学芸会の話をしながらか、輪投げをする。

「幕を開けたり、歌ったり、躍ったり、レコードもかけた。何て話したか、忘れてしまった。これはクリスマスの代りなんだよ。」

「もうじき、お正月、それから四月になると一年生になるんだ。ランドセルなんか買わないんだ。貰う約束になっているから……」

黒いボール紙の箱を見付けると、それを椅子に立て拳を固めてはねとばす。

速くから飛んで来てはなぐりつける事を、十数回繰返し、空中に投げながら、「おれ様は拳闘家だぞ。やつつけるぞ。皆やっちゃうぞ」「僕は強いんですよ。僕は強いんだぞ。お父さんみたいにうーん。うーん（吟声）」それから、椅子にカー

第 13 回

前回同様拳闘ごっこ、お化けごっこが前半行われ、後半は水道で水遊びが行われた。

治療が終り、次回の日時について、母とソーシャルワーカーが相談に来ると、幼稚園の行事の日をはっきり教えなかったり、母の揚足を取ったりして、困らせた。

この場面では治療者の失敗のため、同胞に対する彼の嫉妬心を刺戟し、不安定な状況に陥れてしまったが、他の児童に対して攻撃を示しながらも一応、相手が去ると、優越感と同時に罪悪感を感じているように思われる。

テンをかけ、お面をかぶって隠れて首を出したり、カーテンを体にまきつけて、「お化けだぞ！ お化けだぞ！」と眼だけのぞかせて、脅やかすような身振りをする。お化けごっこは大変満足するような表情で、何回も繰返した。面接時間が終ると、「僕もう一時間位いたいんだけど」といいながら、カーテンを棚に再びつけようとしたが仲々つかない。治療者が手伝おうとすると、「いいよ、僕自分でしたから、自分でするよ。出来るもの。」といて留めた。

攻撃の解放、父親の全能→恐怖→同一視などが示されている。治療者への依存は少なくなったが、治療時間のことで治療者を試している。

家では弟へ自分が優越的立場で親しみを見せ、義兄に対しても、自分が納得できない強圧的な叱り方をされると、暴れたりすることがあるという。

洗面所に水を満たし、舟を浮べ、大洪水がおこり、船が難破する遊びを何度も繰返した。

如露で水をまいて、大雨だという。大雨と大洪水の物語を治療者に何度も話す。

この段階で彼は、自己を圧倒し恐怖に陥れた場面を遊びの中で再現し、それを支配しようと試みている。安定感を与えるような治療場面において、彼は恐怖の対象であった事件を反復し、それによって緊張を解放し、その体験の desensitization が進められている。治療過程の動きと共に生じている家庭での行動の変化について、同時に母親に説明が与えられている。

第 14 回

クリスマスの時期なので、録音機のマイクでクリスマスの放送ごっこが行われた。

「サンタクロースって、何でも知ってるんだってね。凄いな。」といいながら、クリスマスの放送をする。恥しがらずに、マイクを持っては、「これから、クリスマスの放送です。最初は高○君と小岩幼稚園、曲はシングルベルです。あのね。一寸めっちゃめっちゃです。」といい治療者にも楽器をもたせ、次々に曲をやる。劇といって夜で赤ん坊が泣いている場面もやる。

最後は「めちゃくちゃ音頭」といい、棒を振って暴れ廻る。終りに冬休みの話が出ると、「じゃ、

第 15 回

弟の日常の行動が会話の中に出てくるようになった。第 13 回と同様、洗面所で大水、大嵐、船の難破の話が繰返される。

「わあーっ、難破だ。沈没。沈没。皆沈むよ。」と叫び、踊り出す。太鼓を叩いて、「わっしょい。わっしょい。」と踊る。

第 16 回

第 16 回目時には、「僕、嵐になったって平気さ。沈んだって泳いじゃうし、大波が来たって乗りこえちゃうもん。力が強いから泳げない人助けてやるよ。エーイ。(水泳の真似) 弟が赤ん坊で泳げなくとも、おぶって泳いじゃうから平気だよ。」と楽しそうに語った。

この回の最後に、治療者は再び将来の希望を尋ねてみた。はっきりと、「お父さんみたいに勤めするか、トラックや自動車や消防自動車の運転手になるか、どっちかにする。」と答えた。

ここでは受動的に体験した事件を、彼自ら積極的に統制している。また弟や父親に対して、それぞれの立場を認めようとしている。父親に対する親しみや尊敬が表現されているが、家庭においても、父親が接近し、理解しようとしており、彼が父親にピストルを買ってもらったり、時に理屈を言ったりするようなことがあるという。彼にとってもはや成長は死につながる

此処きれいにしておきましょう。先生雑巾持って来る？」といい、片付ける。

「来年、一番に此処使いましょう。」とか「先生何時から休み？ 僕もう休みよ。」など治療者に親しみを示し、しきりに話しかけ協力的である。

遊びも会話も、より自然になってきた。クリスマスのプレゼントを両親からもらって非常に喜んでいる。この回には幼稚園の保育が母親と同道しており、ワーカーと医師が面接している。以前は姿をみると逃げ出していた犬を最近飼いたがっているという。また母親が私立学校の受験を断念したことが、ワーカーから告げられている。

ゆいでなく、自己の建設的な成長の道程となっている。

第 17 回—第 23 回

この間中、彼の希望によって人形の家と家族のセットによる遊びが続けられた。

家族人形は父母と男の子から、弟、次いで兄、友人が加わった。その他に泥棒人形がいつも出現し、家に忍びこんでは悪戯をし、それから泥棒が来ても家の周囲が嚴重に垣根をしているので、泥棒がまごまごし、次に男の子の人形が非常に強くて泥棒を投げ飛ばすというようになりゆきが認められた。

第 21 回頃より幼稚園の卒業式の話が会話の中に表われるようになった。卒業や小学校入学のことを、期待をもって、嬉しそうに話す。研究所に通うことも卒業だと、自分から告げ、新しい世界である小学校をいろいろに空想して次々に話す。

もはや、多くの制限から触き放たれて、未来への恐れもなく、自由な態度で積極的にそこに入って行けるように見える。

17回目には、人形の家や家具のセットが備えつけられたので非常によろこぶ。家族は父母と小学生の男の子で、時間の終りに赤ん坊が加えられる。家族が引越して来る前に泥棒が侵入して、家具をかもの上に上げて悪戯をし、引越して来た人を驚かすという。

この頃、義兄が来所してワーカーと面接しており、卒論などで静かにさせられてかわいそうだ、一応患児に理解を示している。

18回目には、感冒に罹っていたため顔色がやや蒼く、注射を泣かずに受けたので医師から薬の箱を褒美にもらったことを自慢する。

そして 20 本位注射しても平気だといひ、「先生もお医者さんだったね。」と思い出したようにいひ。人形の家で未完成な所を治療者と完成させ、便所から泥棒が入らぬよう何かを置くことを提案し、塀を立てることにする。消防署や交番のセットがあるが、それを近くに置くと、便所臭くて気の毒だと大笑する。

男の子の人形をもっと沢山つくろうと言ひ出し、自動車の運転手は兄さん人形、助手を男の子人形にする。「兄さんが此処に来たでしょう？うちに帰って此処のこと話してたよ」と笑いなが

らいう。玩具を取ってと 2 回いうが、治療者が取るより前に自分で取る。

義兄の話が大分出て来るようになった。

19回目には、家族は両親、男の子、赤ん坊、兄の五人になり、赤ん坊はひるねをし、男の子は幼稚園に行く。泥棒が侵入して来ても、子供達が強いので投げとばして追払って了う。時間の初めには、「今日はあと百時間位遊んで行く」といっていたが終りの時刻になると、家具を整頓して帰って行った。

20回目には同じ家族のところに、他の子供が遊びに来て騒ぐ。幼稚園の卒業の話や義兄のことが会話に出てくる。赤ん坊人形は悪戯をするが、赤ちゃんとわからずやだから、大きい子供達は遊んでやるといひ。家庭では入学を楽しみにしてよく話すという。

21回目、生々とした表情で人形遊びを続ける。家族は同様で、色々の家具を並べ、初めは、「大統領か総理大臣の家だから勉強なんかしないから本はない」といっていたが、途中で「兄さんが勉強家で特待生だから、(義兄は大学で特待生である。)勉強もする」といひ。赤ん坊がおいたして女の子をいじめるが、男の子が「赤ちゃんだから仕

様がないよ」と女の子にいう。3人組の泥棒が入り犬に咬まれて逃げ出して行く。もうじき家具を持って大阪に引越すという。(現実引越をするのが間近い。)幼稚園の卒業式の話をする。遊びに夢中になり、「いいねえ。此処は。全く、僕は幸福やだ。幸福やでござい。」とニヤニヤする。

この回では祖母が母親とともに来所している。

22回、卒業式の話が多く、自分から「今度は幼稚園の卒業式だから来られない。そうでなければちゃんと来られるんだけど。此処ももうじき卒業だね。幼稚園と此処と卒業2つだ。そいで入学は1つだ。差し引き損かな？ 卒業式には皆何かやるんだ。」と卒業式と入学式の話詳しく聞かせ、「此処も卒業だね。だから今日はずっと長く遊んで行く。百時間位よ。おひるのサイレンが鳴っても、おなか空かないから、何時までも遊んで行くよ。」と治療者を見て笑う。兄の人形は、力持ちで勉強家で特待生で、よく働き、学校でも皆

に好かれる。動物園に行くときも、家族を自動車に乗せて連れて行くなど、義兄の性格が大きい男の子人形の中にとり入れられている。事実、家庭で義兄との関係が好転して、一緒に入浴に行ったりして父親を驚かしたという。

23回目には、男の子の入学式の日で、御馳走がつくれ、皆が新しい洋服を着て、机には本やランドセル、筆箱が並べられる。治療者は大人の人形を持ち、お客になってお祝に訪れる。そして皆で楽しく遊ぶところでおしまいになる。最後に「学校に行ったら…」と笑いながら述べ、治療者がある間を繰返すと、嬉しそうな表情で笑い出してしまった。入学したのちにもう一度訪れることを約束し、母親を連れて来て家を見せ、その約束を話す。母親と治療者が話しながら渡り廊下を行くと、患児は扉の蔭に隠れていて2人をおどし、転がるように門の方へ走って行った。

要 約

本児の遊戯療法の経過は、模型的にこれを分ければ、ほぼ4段階に分けられよう。すなわち、1～3回の第1段階、4～15回の第2段階、16～19回の第3段階、23～23回の第4段階、である。この中第2段階の後半と第3段階の前半はある程度重なり合っており、第3、4段階の関係も同様である。各段階について、その相と内容について簡単に要約してみよう。

第1段階、この時期は、不安、恐怖、抑制的な態度に特徴づけられ、遊びの内容としては強迫的、常同的なくりかえし、自発性の乏しさなどが目立ち、積木や絵本など、その種類も僅かに限定されている。この段階は、また母親自身の不安の強い最初の時期とも一致している。

治療者はここでは、彼の恐怖が一部は現実の親の態度から、一部はすでに内面化されたいわゆる神経症的な超自我の要求から来ているのであろうということを感じ、前者に対してはワーカーとの話し合いによる母の治療をすすめる、後者に対しては、彼の問題に深い関心を示し、その感情をうけいれ、依存したい願望や不安や攻撃的衝動を自由に表現させるような雰囲気をつくることを目指した。

第2段階は、4～15回で、相としては治療者への治療的關係が成立し、せきとめられていた攻撃的衝動が解放され、内容としては、攻撃的、破壊的な遊び、たとえば汽車やトラックの衝突、火事、地震、洪水、戦争ごっこ等が繰返し反復され、同胞への嫉妬も明らかに表現され、

両親に対する感情も示された。この時期には母親の治療もすすみ、家庭における取扱いも変化しつつあり、患児の主症状は軽くなり、面接日には雨が降っても来るようになり、夜も雨が降っても布団をかぶれば眠るようになり、日常行動も自己主張が多く活潑になるというような変化がみられている。

第3段階は、16～19回までで、解放 release として攻撃的な遊びとともに、自分の感情を是認し父、同胞などの家族をうけいれ、遊びも攻撃的な遊びとともに、より構成的な遊びも増してきた。洪水、拳闘、家族人形その他の遊びが、より自由に行われた。日常行動でも、弟をうけいれるような兄的な態度があらわれ、自分の意志を発表することが出来るようになっている。

第4段階は、家族人形による遊びが行われ、父及び兄に親しみ、これをとりいれて行こうとする願望、成長への意志が認められ、小学校入学への期待が示された。ここで彼の自我の成熟、対人関係の安定が認められ、治療は終結した。

B, 母親のケースワーク治療

インテークでは本児の現在の症状、つまり水や音に対する異常な恐怖や感情の起伏の激しさ(特に弟に対する)ということが主に訴えられた。またそれと共に本児の体の発育が2年程遅れていると思はれること、偏食の多いこと、睡眠の少ないことなどが語られ、そこにこの本児の症状に対する母親なりの理解がなされているように感じられた。本児の養育方法については別に問題はないと思うし、家庭内は至極円満であり、ただ居住地が赤線地帯で環境的にヤイ問題があるなどと述べられたが、そういう話の中に察せられる母親自身を中心とした家庭での神経質な養育態度という点では全く無自覚のようであった。そのことは、母が自からを楽天的だと述べている言葉からも察せられるように思えた。

インテーク以後スタディ、の結果本児に対する家庭での特に母親自身の問題を更にはっきりさせ、その調整を目的として母親の治療が子供と併行して続けられることになった。

1 回

ここで始めてワーカーが母親に会った。田舎っぽい感じ、やや38才にしては子供っぽいところのある母親で、服装にも多少だらしないところが見受けられた。ここでも母親は「私は楽道家だから」と屢々述べたが、ワーカーは逆に特に本児に対しては神経質ではないかという感じを受けている。

話の内容は主にインテークの繰返しであるが水の恐怖といっても、海や大水のように一切が失われてしまうというふうな恐怖であり、そんな時本字は母につきまとうことが述べられた。そして下の弟との比較がされて、本児は11年ぶりにでもうできないと諦めていたのにできた子で、それだけ気をつけて育ててきたのに……、どうしてこんなになったのか、……来年の入学を控えどうし

たらよいか、という訴がなされた。

しかし自分につきまとい離れがたい態度をとる本児 11 年ぶりにできて心をこめて育ててきた本児、母親は症状には困っていても、なおそういう本児の態度のみならず本児のいること自体可愛いくてたまらないといった調子で、本児との強い共感性、本児を愛情の対象とした母親としての満足感等が症状の困惑さと交錯して表現された。途方にくれたといった切迫感が感じられなかったはこのためであろう。

ワーカーはこういう母親の態度に対し本児と母親の結びつきの強さ、母親の本児に対する神経質な点を感じながらもその感情をそのまま受容し、母親と今後相談を続けてゆくことを約し第 1 回の面接を終った。

2 回

前回までで一応母親は自分の訴を終ったためか、ワーカーの話かけを待つ態度であった。ワーカーは本児の生育歴特に母親を中心とした本児の養育の経過が、自然に母親の口から話されることを期待し、直接的な質問は避けインテークでふれられた話をとりあげて、「引揚げで御苦労されたそうですね」という刺戟を与えてみた。

これに対し母親は、結婚直後渡満したこと、夫

が頑固な真面目な人だったこと、自分の体の欠陥のため子供ができないと医師に宣せられたこと、その時の夫の暖い態度、養子を迎え姑と一緒に生活、昭和 20 年のショッキングな引揚げの状況、其の後の夫婦だけの防空壕生活等が淡々として述べられた。この壕舎生活の困窮さ、特に雨洩りがひどかったという話から母親は、本児の水の恐怖はこの時の胎教と関係があるのではないか……、現在もその不安を持ちつづけていると語った。

ワーカーがこ不安の感情を受容していると、つづけて、そこから感情をこめて昭和 22 年 10 月本児を産んだ当時の不安の話が語られていった。

「あの子を身籠った時は、絶対に生れないと思っていたので驚いてしまった……どうしても本当とは思えなかった……、でも嬉しかった。生れた時は 600 匁しかなかった。見舞客が陰で「こんなに小さくて育つかしら」といっているのを聞いた時は不安でたまらず子供の掌をソット 拡げてみた、……生命線が掌の半分もない位で切れていた……、とても小学校入学までは育たないような気持がして不安でたまらなくなった……。自分は末っ子なので赤ん坊を知らなかったため、なお小さい本

児が心もとなく思えた。そんなことで何でもあの子のいうことは通して来た。4 つで幼稚園に入りがった時も生命線は短い、2 才ですっかり平仮名を覚えてしまった子なので、どうも薄命のように思えて、もし死んでしまった時後悔すると思ってあげてやった……。小さい時から目のとどかぬところにいると不安でたまらなかったし、人にお守りを頼むことなど考えられもしなかった。1 週 1 回ずつ病院に健康診断を受けに行って育てたものだ……」

と現在までの本児に対する心配のしつづけた経過を話し、そのため母親自身が恐怖に常に曝されていた経過が話された。

3 回

前回で本児の生育歴についてかなり感情的に話した母親は、今回ではより現在の日常生活のトピックについて具体的に感情的に話をすすめている。

まず、“あの子が小さい子にも苛められ泣いて帰ってくるので、「どうしたの」と聞くと「だっ

て小さい子を苛めない子がえらいって何時もお母さんいうでしょ。だから叩かれても僕我慢して帰ってきたの」というんですよ”，と母は涙ぐみながら話した。ここから話は本児の仲間はずれの方向に発展して、その理由が戦争ごっこに必要な刀をよくないと思いついて与えないことからくるのだと述べられた。

ここで母親は自分のいうことをきく本児の可愛さと、現実には仲間はずれになって泣いて帰る本児との間にたって困惑している。

ワーカーが戦争ごっこの子供の世界での意味を暗示すると、母親は“安心して買ってやれれば私もほんとに楽で……”，と初めて解放感を示している。

この一種の解放から次の夫への不満等が述べられている。

夫が本児の帰宅食事身じまいなどに厳しすぎて、本児が可哀そうだという話。それから本児が

偏食するとその都度いいきかされ、薬のように食べている現状が話された。

しかしこゝでの夫への不満や本児の偏食の話では、責任は夫なり本児なりにあって、まだ母親自身との関係において十分に把握されていない。

ワーカーは、母親の不安や神経質な養育方法、それをそのままうけいれている本児、それからこの上にたつ2人の強い共感性を改めて感じている。

4 回

4回目では、これらの点に問題が更に深められ焦点が絞られてくる。でこんどは、本児が泣かされても直ぐには帰宅せず、電柱の陰で泣きやんでから帰ってくることが話された。そして「泣かされて帰ってきてはいけないうちにお母さんが言ったでしょ」という状況が話され、本児が敏感に母親の気持を投入し、反面やはり母親はそういう本児の態度を愛しんだり困惑したりしていることが語られた。

次いで従兄弟のところ遊びにいって、別れる時に示す本児のサメザメとした悲哀の感情が、母

ワーカーは、“まあちゃん（本児）がそんななら、お母様の方はどんなお気持ちですか”と愈々母自身の感情の問題へと焦点を絞ってみた。

親自身目に涙をためて話された。

ワーカーはその母親の感情を受容 accept しながら“あなたから離れて1人でどこかへ行ったことはありますか”と聞いている。母親は夫以外には本児を預けられないことや、本児が母親の入院（弟の出産）中に示した態度などを述べた後で“私から離れるのがあの子にはショックなんですよ”と結んでいる。

“それは夫に対しても、「お母さん、アッお父さん」先生にも「お母さん、アッ先生」と思はず間違えて呼ぶ位なんですから……”。

“実は私の方が離せないんです、ついあの子につきまわってしまう……、それがかえっていけな

いことだと思うんですが……、ふと何処かへいってしまうのではないかと思ってしまって……”と

こゝで初めて自分自身の不安な感情の問題を母もみつめるようになっている。

ワーカーはこの母の態度を支持すると共に、更にこの不安な感情の問題を掘り深めるために

“漠然とした不安なんですね、他に何かそんな気持ちになられたようなことはありませんか”と聞いている。ここで母親は、7才の時の母の死、それにまつわる瘡せた人への恐怖等を次の回にまで渡って語り始めた。

5 回

前回はうけて“5才の時でした、突然母がいなくなり、淋しく不安でたまらず泣きながら捜し廻り……、お倉の中で泣いていたことを覚えていません……。7才の時、急に病院に連れて行かれ、母の死顔を見せられたのですが母の面影はありませんでした……、怖かっただけで……、それ以来瘡せた人が怖くなったのです……。それから結婚し

てやっと夫と2人で築き上げた私達の家庭が、あの突然の引揚げで夢のように失われてしまったこと、まだあのまま私達の荷物が新京に残っているような錯覚を起しては、打消すことが何度ありました。特に終戦後の不自由な時は……、”とこの2つのショッキングな体験を話した後で母親は“、私は何か自分の手の中にある大事な物が、自分の力以外の大きな力で、ふっと取り上げられてしまうような、それには自分の力ではどうにも抗しきれない……、そんな気持ちを持ってしまうんです。あの子に対しても、ふっとあの子が何処か私の手のとどかない処へいってしまうような、そんな気持ちを持ってしまうのではないかと思うんです”、と

前回ではたゞ漠然とした本児への不安を、過去の自分の同じような経験に関連づけてインサイトをもち、話している。

ワーカーは、現在の本児への不安の理由を更に明かにさせようとして、“弟さんの場合はそれ程心配ではないのですね”と弟との比較においてをながめられるように疑問をなげかけてみた。

母親は、“本当にそうなんです”と今更のようにつづき考えながら帰った。

6 回

前回を受けて——“弟は食欲もあって元気なのですが、あの子は生命線が短いし少食だし偏食もするし、それに年にしては聞わけがよすぎるのが何か不安で……”と母親は語り始めた。

ワーカーはこの不安を更に具体化し明確化しようとして“例えば?”ときいている。“例えば大人でものめぬようながい薬を「この薬をのまないと

お母さんも誰もついてゆけないお墓の中に1人で行くようになりますよ」といってきかせたら、それ以後は黙っていても嫌がらずに飲むようになったのです……あの時はほんとに恐ろしい様子をして……今考えると可哀そうなことをしたと思います”、ワーカーは更に、“その時のお母さまの御気持は言わなければならなかった”(support)ている。“ええ、ほんとに死んでしまうような気がして……、一寸ほほ笑み、実感がありすぎて本人も怖かったのでしょう、ほんとにいけないことをしました”と、

こゝで母親は始めて具体例から自己の不安な感情が子共にどう影響したかに気づき、接し方を反省している。

ワーカーがレフレクトreflectすると母親は更に昔のことを覚えて話すという不安を述べた。ワーカーはそういうことは病気の時だけなのかと

問題を他の場合と比較させ具体的に母親に考えさせてみた。

母親は日常生活について話をすすめつつ、遊びで考え直し認め、“病気の時は私の方が緊張しているでのそう思うでしょう”と

他の場合と比較し帰納して初めてこの不安な感情に根拠のないことを、はっきりと自覚している。

“実は私も、あの子に不安を感じることには理由がないことは感じだしているんです……、だけどフッと不安になって……遊びにいらしているところへいっては一々注意したりしていたんですが、理由のないことを感じはじめてからはそと、元気な様子を見てくるだけにしています。かえってその方が楽しそうに、お友達ともよく遊んでいるようで、私も安心して帰ってくるんです”と、母親はここで始めて明るく笑った。

ワーカーとの話合の中で今ははっきりと自覚し出したことゝ、母自身のこの頃の日常の感じとがピッタリと重って嬉しかったのか、この回を境にして母親の話す態度は急テンポに明るくなっている。

7 回

ここでは主に自覚しだした母親と本児のその後の変化が語られている。以前と違って雨が降っても本児が夜中に目ざめないこと、雨降りの朝でも1人で幼稚園へでかけてゆくことが笑いながら語られて、“合羽を嫌がっていたので傘を与えてみたのですが効果があったんですね”と母親は不安な感情から離れて今度は専ら本児を自立の方向に導いている。“……今から考えてみますと、悲しみ

をしょってたっているようなあの子の態度も、弟が可愛い盛り、皆からチャホヤされてから始まったように思います……”との自分不安の一つだったの悲哀の感情も決して生得的運命的なものではなく、弟との関係で起っていたことが母親自身理解されている。例の偏食の話もでて“……私のあんなに強制する気持も結局つきつめると、自分の不安な気持から来ているんですね”と語っている。

このようにして母親の不安の根拠がひとつひとつ正しく理解され、本児の変化と共にその確信を次第に深めてゆく過程が示されている。そして過去の不安からくる無意識的な本児への態度もこの新しい理解の視点から反省され、同時に新しい本児への態度が僅かずつ始まりかけている。終りに本児がいうことをきかずに頑張るという自己主張の態度がでてきたことが語られた。これは自立するようになれば必然的に目についてくる現象であるが、本児との共感性が

強く、それを愛しがっていたこの母親にとっては残された問題となる。

ワーカーは全般的な新しい母親の理解と方法を支持しながら、自己主張の点では治療の過程であることを暗示している。

以後は母親の理解が次第に深められると共に、本児への新しい接し方——方法、態度が次々と試みられ、本児の好変化と相応じて母がこの基本的方向に愈々自信をもち、遂には家族の感情生活調整の中心的機能を果たすに至る過程である。

8 回

母親はいかにも嬉しそうに「先生あの子が頭より大きく風船をふくらましたんです。私は止めようかと思ったんですが、それがいけないんだと思って黙って見ていたんです。そのうちにパンと破れてしまったら、一寸驚いたようで悲しそうでし

たが、私が別の風船を与えると、またふくらませていました……」とニコニコしながら語った。

そして最近では乱暴な遊びをするが、注意しなくても結構怪我をしないし、見ていると危気がなくなると嬉しそうに幾分得意そうに報告している。

不安になるよりそういう本児を積極的に支持するように母親自身の態度が変ってきている。

9 回

本児と弟との話で、本児がケーキを分けなかったり、「可愛がってんのよ」といいながら弟をしっこくいじって泣かせたり、手をなめていて噛みついたり、本児の自己主張と共に起ってきた新しい困惑を母親は語った。ワーカーは母親の語った日常の話の中から「まあちゃんがお兄さんらしい時に、それを強調して賞めてみては」と advice してみた。母親は直に肯いて、そうなんですよ、そういうところがあるんですよ、先日弟の方を注射に連れて行って案外早く帰ってきたら、あの子が嬉しそうに「ああもう終わったの、のぶちゃん泣

かなかった？それはいい子だ」と自分の牛乳やお菓子を私が止めるのにどンドンわけてくれたんです、こんなことは始めてで、私はお兄さんらしいと賞めてやりました」とやはり本児には兄さんらしい立場に置かれ強調されることがよいことを認めている。

10 回

「……して下さい」とか「頂戴」とかいていた本児が最近「……しなさい」とか「もって来なさい」とか命令口調になってきた、母も夫もこれは治療の段階なので、きっとよい子になると思っていてそっとしていると述べられた。

本児の自主的変化と両親がこれを理解し認めている態度が示されている。

(一度時間を間違えて来所、帰す)

11 回

本児が弟を練習台として学芸会の練習をしている。まだ時々弟を泣かすが、注意してみていると

弟の方が邪魔をしたりして無理もないようにも思う、とにかく本児のすることは弟への親愛の情が感じられる、と母親は語った。

変化してゆく本児と弟との関係をよく観察し、その意味の理解を深め、母自身安定化へと向

っている。

12 回

本児が最近金銭のことに興味を持ちだし、夫が嫌がっているがどうしたものだろうかという話。ワーカーが例によって具体化して解きほぐせるように“具体的には？”と聞くと、“自分と一緒に買物について来ると、「幾つ買ったの？ それでは 80 円ですね、お釣は 20 円だ」といった調子だとその様子を詳しく話す。“ここでワーカーは”

本児の意味と夫の意味との差を理解して、そういった差の調整機能を母自身自ら果さねばならないことを自覚しかけている。

13 回

弟の可愛がっていた犬が連れてゆかれたことについて、本児が兄さんからしい態度で弟を慰めていることが語られた本児の弟に対する態度の変化と成長が示されている。

14 回

一寸した事件が語られている。夫の書き物をしている炬燵に弟が寝かせてあった。それに本児が入ろうとすると、夫が“静にしろよ起すな”といった。本児は気をつけていたつもりだったのに弟が起きてしまった、夫が“お前が静にしないからだ”と叱ったら、本児は玩具をガチャガチャなげ出

こゝでは夫々の立場に立つ家族間であって、がもはや落ち着いた安定した態度で感情の調整機能を果していることが示されている。

15 回

嬉しそうに母親は次の話をする。……本児がピストルをせがむので買ってやったら、始めはできるだけ手を遠くにだして射っていたが、その中馴れるとパンパン射ち、友達にも射ってみせていたと、そしてはこれで乱暴や粗暴になっては困る

本児の音への恐怖が消え、ピストルが既に関心の対象ともならなくなった変化が示されている。こゝでも母親の自信と落ち着いた態度調整機能が喜びの中に示されている。

それじゃあお金の興味というよりむしろ数の興味なんですね”。と、この頃は学校で盛んにお金の模型で数の勘定をさせることを説明し“幾分早く興味が出たんでしょうね”という時、母親は笑いだして、“夫が固い教育を受けたので気にするんですが、今の教育も確かに一理ありますね”と結んだ。金銭についての

した。また“うるさい”と父に叱られたら“僕ばかり怒る、僕はうるさくしないのに、のぶちゃんが1人で起きたのに僕を叱った、僕どこかへいっちゃう”と泣き泣き玄関へ出ていった。母親が声をかけたら漸くして入って来たが、夫も入れというつもりでまあちゃんと呼んだら、又出ていってしまい母と夫とが幾ら呼んでも今度は入って来ない。母が玄関に行って“直ぐに出てゆく出てゆくっていうけれど何処か、いくところがあるの？”といったら涙をためて“お父さんに謝って”と行って入って来た。――

が、あんなに怖がってたのに……と嬉しくて、ただ“のぶちゃんにむけて射たないように”と注意だけしておいた。夫にも、射てるようになったから買ってやった、と説明しておいた。見てたらは2,3日熱中していたがその中放り出してしまった。

16 回

ここで再び母親自身の生育歴が話されているが、過去の自分の母にまつわる不安と恐怖の影が消えて、正常な態度で理性的に述べられている。

17 回

本児の朝の支度が遅いので、一々注意したり、手伝ったりしていたが、近頃は黙って外に出て待っていると。急いで自分で着てしまつて“お待ちどうさま”と出てくるようになった。昨日はみると足袋をはいていない、今迄なら直ぐ買ってやったところだが“つめたくないの？”ときいたら“平気だい”というのでそのまま幼稚園に連れてい

った。寒ければ自分ではくよになるだろう……できるだけ自分のことは自分でするようにして手出ししないようにしていると。それから夫の書き物があるため叱られ勝なので、本児達ももっとのびのび遊べるような広い家を探していること。本児の弟への兄らしい態度が板についてきたこと。終りに本児が必要以上に自分を喜ばせようとしているのが目について、なんとかその点をなおしてやりたいと、母親らしいゆとりのある態度で述べた。ワーカーが“随分変られましたね”という母親も自分でもそれを認めて笑っていた。

本児の自主的な方向への成長、母親のそれを専ら認め支持しようとしている態度、その為の調整の努力などが窺われる。

18 回

夫が本児に度々“静にしろ”ということから、夫自身の趣味、性格、感情がその生育歴と共に述べられた。ここでは母親が夫への理解を深めながら夫と本児との調整をしていることが示されている。

19 回—22 回

本児が小学校の入学が嬉しくて夢中になっていること、紅梅キャラメルのくじをためるのに熱中

したりしているが、興味のある時は無理に止めても、と思つてそのままにしている。入学前に子供部屋のある家に転居したくて家探しをし、遂に移転に成功した話。最後に本児の遊びが勇敢になってきてもう少しも危な気なくなったこと——電信柱に張った針金をつたわって橋の欄干に登り、電気をつけて得意そうに“僕がつけたんだよ”などといっていること、等が不安気なく専ら喜びをもって母親から報告されている。

本児のますます安定し潑刺としてきた態度、これを支持する母親のゆるぎない安定した適切な処置が、自信と喜びの中に示されている。

こゝ迄で来所当時の本児の恐怖や烈しい感情の起伏の症状、そして母親の不安の感情などが全部消えて、新しい自主的な方向づけの上にしかりとした自信と見透しが立てられ、かくて、このケースは終結になっている。

要 約

母親との面接はインタビューを含めて前後 24 回にわたっているが、段階的にはインタビューから 3 回迄の第 1 段階、第 4 回—第 7 回迄の第 2 段階、第 8 回から以後の第 3 段階にわけられると思う。

第1段階——では、本児の水音への恐怖、特に弟に対する感情の起伏の激しさなどが症状として先ず訴えられ、次いで本児の生育歴や日常生活のトピックにおける不安、更に夫の本児に対する態度の不満などが述べられた。しかし、この段階では、母親は本児のこれらの症状がどちらかと云えば器質的なものからくると考え、特に本児の偏食をあげている。しかし、ワーカー側の感じた母自身の神経質な本児への養育態度及び本児のこれをこの母親の不安な感情を投入しその態度に従っている本児の存在には、全く無自覚のようであった。と、いうより、自分の感情をしている本児への可愛さ自体が現在の症状の困惑さと交錯して示されてもいた。

第2段階——ではワーカーが日常生活のトピックをとらえ、母自身の不安な感情そのものが表現され問題とされるように刺戟を与えている。これにより母親は、自分の生育歴中の不安の感情を本児にも本児していることを感じだし、日常生活のトピックにおいても自分の不安な感情が本児にどう影響しているかを理解し始め、不安な感情に根拠のないことをひとつひとつ理解し接し方への反省がなされている。そして、本児の好変化が認められたことと相俟って、それを母自身支持するような新しい明るい態度が始まっている。

第3段階——本児自体の変化では、水や音への恐怖及び偏食が消え、態度が自主的に積極的になっていることが報告されている。また本児が自己主張をするようになって目立ってきた本児と弟との関係でも、よく理解して兄さんらしさを強調することによりその調整にほぼ成功し、また本児と夫との関係でも夫をもよく理解し家の移転をもって調整に見透しをつけている。この段階では、母親は第2段階で得た方向づけを日常生活の夫々の問題に用い試みて、本児の好変化・ワーカーの支持と相まって、いよいよ不安から離れ安定化し、適切な処置・態度が主婦らしいゆとりと自信をもって自主的に演じられるに至っている。母親自身の過去の経験に対する不安の感情も、表現上は全く消えている。

<予 後>

治療を終結して約半月経った後母親と共に来所した。患児は小学校の生活にも馴れ、陽に焼けた黒い顔をし、学校が退けたあとなので手足は泥にまみれていた。児童と母親に別個に面接が行われ、治療者は遊戯室で児童から学校の話を書いた。彼は懐しげに部屋を見廻し、部屋の変化に目をつけて注意するが、もう他の児童のことは気にしない。学校の先生や友人について熱心に語り、また義兄との接近についても、嬉しげに報告している。

治療者に対しては、最初は小学生姿を一寸照れたような様子であったが、そこにあった録音器から自分のテープがまだ保存されていることをきくと、嬉しそうな顔付になった。そして、習った歌を歌いながら、自分で選択して、新しくふえた家具などを揃えていたが、棚の上にあ

る玩具を取ろうとし、「先生、椅子へ上げて」といい、治療者が抱き上げると、はしやいで足をバタバタさせた。

ワーカーと母親の面接でも、母親の安定感は増し、本児が毎日川の中でえびがにを獲って遊んでおり、元気に登校して友人ともよく遊ぶこと、給食は何でも食べ偏食はしないこと、学校で発表力があることなどが述べられた。

母親は医師に対しても、「サイレンの音をきいても怖かったのに、この頃は勇ましいから消防自動車の運転手になるなどと言います。」と、にこやかに語った。

その後、最初は約3ヶ月毎に経過を尋ね、1年8ヶ月後にくわしく調査し、現在満3年を経たが、患児は何の症状も再発せず、また他の神経症的症状もなく成績のよい、活潑な生徒として小学校に通学しており、家庭内の対人関係も安定している。

5. 考察ならびに総括

以上述べてきた如く、われわれは5才の恐怖を主症状とする幼児例に対して、患児とその母親の心理療法を行ってきた。このように児童が問題をもって相談室を訪れる場合には、成人の患者とおのずから相違があることは言うまでもない。たとえば、成人の患者では、自らその症候に悩み、自己の意志によって治療を求めて医師を訪れるのに対し、児童の場合には、周囲の成人は彼の症状に悩むが、児童が自ら悩むことは少いし、病気の認識はなく、自己の意志で治療を決定したり、望んだりすることは殆どない。また環境的影響、ことに親の態度に強く影響されている。心理療法の方法にしても、児童の言語能力が発達していないこと、心的構造の単純なこと、成人である治療者の世界とへだたりがあることなどから、治療者が成人の精神分析の如く中性的な隠れ身的態度をとらず、いろいろの技術を工夫しなければならないなど、いくつかの特徴を有している。

(1) 治療の方法

われわれはこの事例の場合、児童を遊戯療法の対象とし、さらに母親にも治療を行ったが、このように双方に治療を行うことは、児童指導クリニックで、しばしば行われるのであるが、先ずこの点から簡単に考察してゆきたい。

すでに Solomon その他が述べているように、心理的問題をもつ児童の治療に際し、親のみを治療するか、児童のみに治療を行うか、あるいは双方に治療を行うかという点に対し、研究者により意見の相違が認められる。親のみに治療を行い、親の態度が是正されれば、児童は自動的に回復するという説、また児童に治療を行って児童が変化

する事により、間接的に親も変化してゆくと考え、児童の精神の深層の根本的变化を目的とし、環境の影響を最小に評価し親の参加を期待しない説もあり、両者の折衷説もある。これらは、児童の発達の程度、問題の種類、環境の条件などによって考慮しなければならないと思われる。

われわれが、この事例の場合、患児と母親の双方に治療を行ったのは、

1) 患児が年齢的にすでに幼児後期に達しており、その情緒的障害は相当に重症で、彼の反応の型式がかなり固定しており、両親の治療による養育態度の変化のみでは、彼が現在自ら訴えている症状を鎮め、さらに人格に対しても十分な影響を与えにくいのではないかということ。及び

2) 母親自身もインテーク当時から、自己の面接に対する欲求を強くもっており、治療計画の上で両親ことに母親の果す役割が大きいと思われたこと。すなわち、患児に治療を進め、現在症状をひきおこしている古い葛藤を解消し、新しい自我の機制が始まったとしても、両親がその変化を受け入れない場合、予後は望ましくないのではないかということが、治療者達によって考えられたからである。

(2) 診断と発生機転

本児については最初に一応身体的診断がなされており、器質的疾患は除外されている。

次いで問題となったのは、精神分裂病、神経症、及び性格的な問題として臆病でこわがりやの子供の3つである。

本児が宇宙の破滅という強い恐怖を示したことから、分裂病の可能性の有無を1、2の精神医学者により質問されたことがあったが、これは最初の面接時の態度、他の自閉的症状の欠如、遊戯場面での行動などによって明らかに鑑別し得るものであった。

性格的な問題としてのこわがりの子供と恐怖症というものも問題になる。Louttit は、恐怖を1) Normal fear, 2) Common fear, but abnormal 3) persistent fear の3群に分けているが、子供の恐怖は多くの心理学者の研究によっても、その発達段階、個人的体験、外界の成人の影響などによってさまざまに変化してゆくものである。5～15才の児童の20%は死、幽霊、超自然、14%は暗黒、一人でいることなどを恐れるというが、個々の児童にとってどこからが異常であるかを判定するのはなかなか困難である。

この児童の場合も乳児期から虚弱で、刺戟に敏感でその反応はすみやかで長く続き、見なれぬ物や人ごみにあるとすぐ泣き、自律神経系が過敏で

ある傾向を持っていたが、その後の知能や社会性などの発達によって、非合理的な恐れは次第に少なくなっていくっており、症状が発生するまでは、その為に現実の行動が妨害されて了うようなことはなかった。また現在本児はもっと幼い児童のようにその発達の程度から大水や大雨の視覚的あるいは聴覚的印象を恐れているのではなく、理論的には一応その不合理を納得しているのだが、恐怖は異常にはげしく長く続きそれに圧倒されてどうしようもないのである。そして恐怖はある誘因を契機として症状が始まっており、心理的に跡づけられるものであり、心理的な治療により癒し得るものであった。このような点からいうと、症状として単純ではあるが単に性格的なあるいは発達の問題としてよりもやはり神経症としての恐怖症が診断として考えられる。

恐怖症及びその成因については成書を参照すれば、「強迫状態においては実際には何の危険もないにかかわらず、特殊な対象や状況に対する恐怖感があらわれ制止出来ない。対象の選び方は個人

に特有、選択的で、生活史や環境に特徴づけられる。対象のない漠然とした不安が、特定の対象や状況に凝集されることが不安を除き葛藤を軽くする。葛藤は合理的な知性や道徳的な規範に対する、非合理的な欲求との間の葛藤であり、特有な性格基礎が存在する。」という。

しかしこれは成人の場合であって、児童の場合には、厳密に定義にあてはめることは困難である。

Strohmeier は児童にも強迫的思考や強迫的恐怖が認められるといい、事例を挙げているがどれも12才以上のものである。Hamburger も、psychische Ethism として恐怖症を挙げており、教育と意志の鍛練によれば、ぬきがたい傾向は児童では殆ど問題とするに足らないが、潜在的あるいは顕在的にその傾向が持続するときは予後が不良であるという。Ziehen も児童の強迫的精神病質の素質を挙げ、自律神経系の障害と関係づけている。米国の研究者の報告の中で2才以前の幼児について、恐怖症 phobia として報告されているものがあるが、恐怖が強迫的な恐怖であり、Jaspers のいうように「自我の随意性と選択がなければ、精神的強迫はない。」のならば、これらの事例を厳密にその範囲の中に含めることは出来ないと思う。

児童の場合、幼少の時から形式的、儀式的、呪術的な遊びや行動を示したり、眠り、夜、暗黒、自然的現象を恐れこれを儀式的行動により取除こうとすることはしばしばある。これは乳児期以来規則正しい簇をうけて来て一種の儀式的順序が出来上がった場合や、また思考や行動が全体的順序の些少の改変でも、悉無反応の法則により妨害されるという原始的思考における自我と環境の未分化性に原因づけられる。このような行動は、生育する文化的環境の影響が大きいが、強迫的現象と類似しており、後年に特有の性格傾向に発展して行くこともあると思われる。

強迫現象を(1)強迫観念、(2)強迫疑惑、

(3)強迫衝動、(4)強迫恐怖に分け、児童には(3)が認められるという説もある。私の乏しい経験では成人と全く同じ強迫観念、強迫行為を明らかに示したのは多くは10才以上の児童であり、6才前後の幼児で過度に几帳面で何度も教科書を揃えたり、戸の鍵を気にするような癖が他の何らかの問題とともに訴えられることがあるが、日常行為がそのため障害されてしまうようなことは少ない。

発達の段階と関連して恐怖を示しやすくなる年齢が予想されるが、恐怖を示す幼児の場合も、それが強迫的といえるものは稀で、感動的な体験や外界の影響によっておこり、親の適当な処置により比較的すぐに消失してしまうことが多いようである。この事例の場合は前述のように現象的及び発生的にみて神経症として恐怖症の中に包含させたがこの点について御教示願いたいと思う。

精神分析的な立場をとる人びとの報告例では、発達の時期は何れも Oedipal stage に関係し、たとえば Newwell は火への恐怖を示した4才女児について、若干の Pregenital Conflict は残っているが、発達の程度は Oedipal-genital level に達していることを述べ、火の恐怖は両親の性的関係を熱い危険な破壊と同一視することにより生じたといっている。

また何れの報告においても弟妹の誕生が契機となっていることが多く、幼児にとって弟妹の誕生が一つの危機的状况になりやすいことを物語っている。発達心理学的にいう人格の分離、分節は、このような危機を通してつくられるのであろう。すなわち、児童におけるこのような症状の発生には、本人の素質、親の養育態度、親子関係、文化的環境、誘因となる外傷的体験が互に影響しあっているものと考えられる。

次に患児と母親の面接によって得られた資料からこの児童の症候発生に至る心的機制について仮説として、ごく簡単にまとめてみると、次のようになる。

1) 本児の両親はともに権威的な家庭に育ち、本児に対しても、一人子として大切にすると同時に、一方権威的、支配的な養育態度をとり、躾の枠は他の児童より厳しかった。

2) 母親は自己の発育史から来た情緒的な問題によって、思いがけなく出生した虚弱な本児に強く愛着し、養育上の不安をたえずもち、母と本児の間の結合はきわめて強かった。本児はそのため、母の要求を自己の内にとり入れ、高い倫理規範につねに従おうとしていた。

3) 彼が次第に第一次反抗期に入り自己主張が多くなりつつある頃、義兄が同居し、また弟が出生した。本児は母親が自己のみの愛情の対象でなくなったことを強く感じ、また両親の関係についても考えるようになり、父親や弟に強い敵意をむけた。

しかし、現実には敵対的行動は父や義兄の権威によっておさえられ、内的にも、自己の内形にずくられつつある「母に愛される善良な児童」としての道徳性により批判され、抑圧されざるを得なかった。しかしこの方法は完全にゆかず、攻撃に対する父の罰、母の愛情の喪失の危険は彼に強い不安が生ぜしめた。

4) 幼稚園の入園により、現実には母親から離れたことが彼に不安を強め、現在までの生育環境などにより外界へ働きかける能力が乏しく、遊戯や友人との集団生活により、自己の葛藤を放散することが出来なかった。

たまたま、幼稚園の池が大水によってすっかり流された話を聞いたことがきっかけとなり、彼の強い不安は、大水大雨などに対する恐怖に移りそこに固定した。

彼が世界の破滅、大水、大火事、死などに示した恐怖は、彼の内的な危険がいかに強烈で、彼を絶望的にしていたかを物語るものであろう。なおこの両親のそれぞれの性格、またその生長してきた家庭的、社会的、文化的環境というものは、われわれにとってきわめて興味があった。それについて後に社会学的考察として詳しく述べる。ここでは単にこの両親の性格を類型的に述べてみると、父は細長型の体格でいわゆる神経質的な性格、母親はやや肥満型で易感性的な点はあるが感情は暖く豊富でその表現はなだらかであり、どちらかといえば循環性性格に近く、両親とも社会生活への適応への努力は強い方である。外国の恐怖症幼児の報告例に見る両親には、しばしば *neurotic* (神経症的) なる語によって性格を表現されていることが多く、情緒的に不安定で、道徳的、几帳面、完全主義的でかれら自身の親子関係から由来する不適当な養育態度をわが子に向けていることが多いとされている。

われわれの場合の両親にも、このような傾向はみられるが、かれらが強迫的、自己不確実的精神病質に属するような著しい性格の偏りは認められず、治療に対する可能性も十分にあった。この点が、治療を成功させ、さらに予後を佳良ならしめている一因であろう。

また、この恐怖の発生を防衛機制という面から眺めるならば、ここには抑圧、投射、転移、

凝縮、拡散などの諸機制が働いていると推測される。すなわち、自己の攻撃によって生ずる不安、愛の喪失という内的な危険は、外界の自然現象からの危険に投射、転移され、不安は大水に凝縮され、次第に他の自然現象にも拡がって行ったものであろう。これは、幼児がしばしば用いるより単純な防衛機制—たとえば、現在の苦痛な事実を単純に拒否するよう—に比較して、より複雑なものといえよう。

これは親の養育態度などの環境的な影響とともに、本人自身の知能、感情の発達程度その他の素質的なものに関係すると思われる。

3. 治療の経過について

先ず経過を追って、遊戯の内容 **content** と、治療者と患児の関係 **therapeutic relationship** の2側面を主として考察してみよう。

第1段階 第1回の場面では患児は抑制の多い、強迫的な遊びの型式を示し、その量も少ない。しかし2, 3回と回が進むにつれ、遊びの種類がやや多くなり、遊びへの参加の積極性が増しつつある。

治療者との関係では、最初の場面では患児は治療者に対して、伝統的な医師としての権威を認め、警戒を示しながらも、拒否的ではなく、後半に至って自己の恐怖を強い情緒とともに表現し、治療者に依存しその援助を求めている。この最初の治療者と患児との関係は、成人の患者と医師との間のいわゆるラポルト **rapport**—治療者が患者から尊敬され権威として受け入れられ、治療者と患者の間に協力や相互理解が成立ち、患者が治療者に信頼して服従するような関係—と類似している。

治療者は、これに対して、彼の言葉をききいり、彼の真の情緒を表現するよう励まし、彼を積極的に支持している。また彼の大水や宇宙の破滅の恐怖—その源にある母と別離の不安—を彼にわかりやすく語りこのときの彼の感情をうけいれている。ここでは表現 **expression** や、支持 **support** の効果が働いている。

2回目に至ると、患児の遊びは次第に自由遊びに近ざりつつあるが、治療者には権威者に気に入られ、認められようとする依存と従属を示し、倫理規範から外れまいとする努力をこめて、3つの希望が答えられている。

母親との別離は空想のみならず現実と離れることへの心配として1, 2回目に表現されている。次第に母と共に治療者が彼の心の中に位置づけられるようになり、第2回の前後における治療者に対する彼の積極的な反応は、治療場面が彼にとって次第に意味あるものになりつつあることを示すのであろうか。

第3回目に至って治療者は、伝統的な医師としての位置から、患児にとってより親しい理解者、協力者としての存在になりつつある。そのため患児はさらにより自由な行動をとり、恐怖

夢や死への不安も自発的に語られている。治療者は彼の感情を完全に表現出来るように、同情をもった態度で熱心にその言葉に伴う感情をうけいれている。

母と混同した呼かけは、患児が母親に対する感情を治療者に向けたあらわれと見るべきかもしれないが、そうでないかもしれない。

治療者が言語ですぐに反応していないのはそのためである。しかし治療者は患児にとって、母親と異なる対象として、患児に認識されてきているようである。

第2段階 第4回から15回までの面接では、相として、めまぐるしい移りゆきが認められた。たとえば、遊びの種類がふえ、活動性、自発性が増し、退行的なバラバラ遊び、はげしい破壊的、攻撃的な遊び、遊びの断裂などが入りまじり、攻撃性の除反応がもっともしばしば認められたが、この段階の終り頃から次第に遊戯がより発達し安定した型式を示すようになった。

弟への敵意、他の家族に対するさまざまな感情、他の児童への競争心もあらわに示されている。

治療者に対する関係は、次第に両親と治療者の差異を認識し、治療者に対する信頼や疑惑も卒直に表わすようになり、治療者はの協力者として、彼のカタルシスの機制を援助し、抑圧、転移されたものを開放させようとした。

治療者との積極的な関係により、彼は恐怖場面を自ら支配しようとし、外傷的体験を反復し、自己の退行的、幼児的欲求や親に対するアムビバレント *ambivalent* な欲求も自由に表現している。彼の治療者への依存は12回目辺りより少くなり、自己を治療者と別個の独立した個人として、吟味し方向づけをしている。

治療者はつねに彼の感情をうけいれているが、彼が情緒的に強い執着を示し、時間の制限を無視しようとした時には、現実の世界に立つ治療者としての立場を明らかにしている。

しかし8回目に彼が遊戯室でない部屋を選んだ時は、恐らく講堂の舞台が運動会の失敗の体験と関係があると思ったので、彼の決定通りにしており、同一の遊戯室ということに固執しない。

彼の感情や欲求について治療者は解釈を与えているが、深い心的構造が示されているときに、治療者の未熟さからそれを見逃していることもある。

治療者は第11回目に不注意—これも治療者の対抗転移によるのかもしれない—によって、彼に同胞への嫉妬をかきたて、その結果罪悪感をおこさせている。この治療者への独占欲と敵意は、母親に向けられたものと同様の構造のものではないかと思われる。

第3段階 16~19回では内容として攻撃の解放とともに、創造的なまとまった遊びがふえ弟、父、兄のうけいれが始まり、この変化は家庭における変化と一致している。

第4段階 母親以外家族の父、兄に対する同一視、新しい世界への期待が、人形の家と家族という場面の劇的な物語により、繰返されている。

この段階では治療者への依存は減じ、自ら治療の終結を表現し、成長と独立への意志が示されている。

これらの場面の治療機転については、言語的媒介が完全でないため、はっきりしない点もあるが、児童をうけいれる自由な治療状況で、治療者との関係が成立したことにより、患児が不安、攻撃性、敵意を解放し、自ら主導性をもって硬い構造をもった自我を変化させて行ったものと考えられる。

治療の終結の時期についてはまた問題がある。Newwell その他の心理療法例を見ても、簡便法として10回前後の治療により恐怖の症状を除き、後は家族の指導のみを続ける場合もあるし、2年以上にわたり丹念な児童分析を続けている場合もある。われわれの場合は、症候の除去、不安の解放というのみでなく、それ以上の自我の変

化、児童なりの洞察というものを目指したので、当面の症状が消失した後も治療を続けたのである。そして母親自身の不安も除かれ母親を中心として両親の態度の変化も明らかになり、時期的にも小学校入学ということがあり、児童自身も終結への心がまえを示したので、23回で治療を終結したのである。

社会学的考察

(1) 治療前

この家族は形態としては父母と子よりなる二世帯家族であり、しかも父の俸給によって支えられている都市的近代家族である。しかしその成員一特に主要成員である父母は、家族歴にもある通りどちらかと言えば極めて権威的な伝統的家族の中に育てられ、人格も伝統的家族特有の認知構造、価値体系及び情緒傾向を多分にもっている。この父と母が奇しくも同じような家族の雰囲気の中で育てられ、同じような人格を持っているということは、敗戦・引揚・戦後の困窮した生活をのりこえていったこの夫婦間、ひいては家族の安定に随分役立っていると思われる。一面夫婦間或は家族の人間関係においては、夫婦の平等とか家族の合議制とか、成員の自由ということについては、近代家族以前の古い形のままできている。資料がやや不足しているが、父も母も養子も実子も独立した個人の生き生きとした生活があるというより、そこでは「いえ」のやや固苦しい格ばった役割生活が支配的だったといえよう。満洲時代は更に姑が居り母はよくこれに仕えたところからも、姑が主婦の座にいたと云えよう。そして更に父が全体を統率していたように推察される。(例えば子供が産めないと言われた場合の手術の可否は父が決定権を持ち、母はこれに従うだけであったようだ、養子を迎える場合も同じ事であった) 伝統的家族では子供が産めないということは妻或は嫁として資格さえ云々されるものであるし、時代も産児奨励の時だったから、父の配慮は有難く感じても、父、姑の手前引け目を感じざるを得なかったろうし、小さくならざるを得なかったろう。引揚後は、姑とも別れ、夫婦丈、後には本児を交えた小家族の生活が暫く続いたが、人間関係としては矢張り厳格な几帳面

な父が統卒者で、母はこれに多少の不満（本児に対する取扱の不満）はあっても従うことが当然だと考えていたし、何の疑問も持たずに従っても来た。都市家族に特有な父が収入責任だけを果して家庭生活そのものの全責任は母にまかせる、といった傾向は、この家族に余りみられない。全責任はむしろ経済生活上も情緒生活上もずっと父にあったようである。

次にこの事例の中心をなす母についてももう少しみてみよう。伝統的家族における女性は一般的に、祖母からの溺愛—子への溺愛—嫁への憎しみ—孫への溺愛という一連の（人によると不潔な）愛情関係をもつと云われるが、この事例の母親の場合は、実母が結核であったため（後に死亡）祖母（母の実父の継母）に5～8才まで育てられている。末っ子で可哀想な子として祖母からは一応よくされていた。しかしこれも中途半端で後は実兄姉及びその結婚した家を転々として育てられている。母はこの兄姉達には末子として可愛がられたし、実父には特に強い愛情的な結合を持ったらしい。しかし実父も実兄も漢学者であり、姉達は婚家先となったし、母と子、或は実の祖母と孫というような溺愛的な愛情欲求の満足は得られなかったに違いない。時代的にも母の子供だった時期は伝統的家族の溺愛的関係が強かった時である。当然実母をなくした淋しい母は、その人間関係の照準基準を同年令の他の子供の家庭と結びつけたであろうし、一層満されない思いに意識的無意識的にフラストレートしたものと思われる。

この実父や実兄との人間関係は、この母にある態度をつくり、これが後に結婚して、夫（父）への態度にスムーズに移し代えられている。といってもこれは伝統的家族内での家父長に対する女性の依存的な態度であり、やはり母の求めた真に受容れられる愛情の喜び—自ら愛することも愛されることも—そこにはなかったのではないか。ここに第1の仮定を設けて、もしこの母が近代的な夫婦愛を中心とするような夫と割に余裕のある家庭をつくったとしたらどうだろう。勿論、伝統的家族の臭を多分にもった母は、近代的な夫婦愛の前に一時は混乱するかも知れない。しかしもしここで母の多年の模索していた愛情が満足されることができたとしたら、或は例え子供が産れたとしても（夫婦愛の中に満足される為には子供は矢張り結婚後しばらくして産れる方がいい）、このケースのような症状は呈さなかったかも知れない。しかし、現実には前述のような夫であり、また時代的にもそのような夫婦愛はどちらかと云えば育ちにくい時であった。

ともかくも戦後近代家族の理念がおしすすめられようとしている時代に本児を産むことができたのは、この母にとり二重の喜びとなる条件であった。ここに母の多年の愛情的不満足は、この伝統的家族の雰囲気の中でも子を相手としておおびらに満足することができるし、子をもうけたことは夫や姑に対する引け目を緩和し、主婦の座を固めたことにもなる。折よくも姑は別居していたし、時代も夫婦中心の小家族を推進していた。ここで第2の仮定をもうけて、もし本児があのようなならなければ、ここで、この母は情緒的にも社会的にも健全な主婦として母として立直り安定化できたのかもしれない。しかし本児の結果がどうであろうと、と

にかく全体としてはこの母の成熟のためには、産れた子を思う存分満足する程愛することが安定化の為に必要だったと思う。そして本児も十分に母の愛情—感情を受容れ、これに報いたのである。が、産れた時のひよわいこと、他人からの不安の声、短い生命線などもあったが、母の本児に対する期待（愛情の満足を本児から得るという期待）はやや過大に過ぎ、これが過保護的になってしまった。本児に対して不安が先立ち、これに過去の外傷的経験が結びついて一層母を怯えさせた。盲目的な母の愛は折角立った主婦の座—特に家族員の情緒的調整機能の役割りを十分に果し得ないようにした。本児もこの母との愛情関係に強く束縛され、そこから独立し得ず同輩への仲間入りも困難を極めた。このような母の傾向が主となって、治療直前のこの家族の問題を引起しているように思われる。

一方父は、やはり伝統的家族の中に育てられ長男として特別扱いをされている。気丈な祖母の教育はあったけれども、矢張りおばあちゃん子としての甘さと武士的理念を合せ持って育ったようである。つまり、表面的な格式ばった厳格さ几帳面さと内面的な神経質気弱さをもっていった。従って勤め先での相当な気づかれもあり、家族内では表面的には多少口やかましく支配的だったが、内面的にはかなり母（妻）に精神的に甘えており、やや我儘な面もあったようである。伝統的家族の家父長的面と都市家族の夫に特有な面とが、その特異な生育歴の上にミックスしている。これが、母が主婦の座になかなかつげなかつたにかかわらず、父が母を大事にし（例えば母の身を思って手術をやめさせている）、母の地位役割りを家族内で安定させた所以であろう。いわば、前述した母の父に対する依存と、この父の母に対する依存とが持ちつ持たれつの夫婦をつくって来たといえる。しかし、その相互依存の様式は、どちらかといえば伝統的家族特有な格式ばった感情をあらはにしない役割中心的な方法で行われており、パーソナルコミュニケーションも、従って相互の理解も充分とはいえなかつたようである。

本児に対しては、父は祖母からうけつた武士的な教育を課そうとした。勤め先で相当緊張し疲れた父が、家族内で更に本児に対しやかましく云い、又身をもって範をたれるということは、伝統的家族の教育方法が身につけているといっても、相当な努力であったにちがいない。この父の場合、前に触れたように母との関係においても又この本児との関係においても、伝統的家族の家長としての格式ばったゆき方と都市の俸給生活者としての家族外で疲労し家族内で甘えたい夫のゆき方とが混淆し、自己矛盾するような立場の上に余裕のないやや無理な態度を持している。これが母及び本児に対する理解の不足ともなり、又本児が父自らの努力に応えない場合に腹立って体罰を加え或は失望して本児の身心のひよわさを嘆ぜしめている。父は本児に関する限り、このような状態を繰返してきており治療直前には、ようやくその教育にも倦み、熱意を失い、母に本児の養育を全面的に委ねるようになっていた。本児は母との愛情関係に束縛され依存し、愛情関係が十分に父へ拡大することはできなかつたし、従ってその期待にも応じえなかつた。

治療中の変化については経過記録の通りである。

(2) 治療後

治療後においては、この家族は漸く伝統的家族から脱皮し、名実共に都市の近代的家族に近づくようになった。そしてこの変化は主として新たな実質上の家族の統卒者となった母を要として行われたのである。

治療を通して母は、過去からの愛情の不満とその歪められたはげ口を清算し、愛情関係、は家族内の個々の人間関係、(例えば本児との関係)から家族全体との関係に拡大した。

一般にグループノルム(規準)にもっとも忠実なのはそのリーダーだといわれるが、この母の生活の主要な基盤が家族全体にまで成長しその調整に誰よりも努力し、しかもかなりの程度においてその努力が報われてくるとなると、もはやグループのノルムに直接携るのは母であり、母がリーダーの資格を持ったことになる。母はかつての依存者から脱皮し、近代的な家族の統卒力をすでに失いかけている父に代り調整者、統卒者の立場にたち、この新しい立場の上に立って自主的な調和のとれた愛情関係を各員に対しても結ぶことができるようになっていく。(例えば、兄らしさを賞める事により本児と弟との関係を調整し、或は転居を進めることにより父と本児との関係を調整している)

父は以前は母と本児との強い愛情関係があったため、本児への教育はしていてもむしろ愛情的には局外者の立場にあった。母がその閉鎖的な愛情関係を解いたことは、母が父の本児に関する理解を深めたことと相俟って、父をも拡大された家族全体の愛情関係に包含することとなり、情緒的に父の安定化をもたらしている。母のこの成長と調整能力は父にとり信頼にあたいするものであり、父は安心して家族内のリーダーの立場を母に委ね、むしろ協力的立場に変わって来ている。かくて父が家族内でのリーダーの立場から解放され、協力的な立場を持ちながら母に依存することができるようになったのは、前述した父の自己矛盾するような2つの立場を解消することにもなってやはり父の安定化を助けている。時代的にも都市家族においてはこのような形が普通であり、この家族も伝統的家族から近代家族への移り代りをようやくしてなし得たともいえよう。

総括

以上われわれは、幼児恐怖症の一事例に対し、患児と母親に心理療法を行い、その予後を観察した。そして本事例の発生ならびに治療に関して、精神医学的及び社会学的立場から考察を加えた。

ディスカッション

問題の発生機制について

S 1: この事例について著者の方から発生原因的な問題と、診断即ち Psychosis か Neurosis かの鑑別診断の問題と、それから遊戯療法の手続きやそのテクニックを、又ケースワークの方ではそのプロセスなどが問題になるんじゃないかと予めいっておられるんですが、始めに D3 先生何か。

D 3: (筆者) 始めに一寸おことわりしなければならぬのですが、この事例は相談室のフォーマルな処置のやりかたには従っていない点もあり、問題もあるものなのです。しかし恐怖を症状とする幼児の事例であって、遊戯療法を子供にケースワーク治療を母親に行って、その発生機制が比較的明らかにされたし、それから予後が追求し得たということと、又遊戯療法の経過がくわしく観察されたのでここに出したわけなのです。

P 1: 私、ちょっと遊戯療法のテクニックについて D3 先生にお聞きしたいのですが、115ページにあるこの子の不安を安心させるという説明をしてから、それから後にいわゆる non-directive におけるような reflection に似た受け方をなさっているんですが、この場合純粹に non-directive な遊戯療法とそうじゃない場合の遊戯療法との間に違いがあって、その違いがこういうところに出てきたのか、その辺の所をひとつ説明して頂きたいんですが。

D 3: このケースはどちらかといえば分析的なものに近いと思います。だから non-directive のような受け方があったとしても、その機能はいささか違うのではないのでしょうか。

P 1: 分析的なこの治療の中でも一番重要だと思

うんですが、恐怖と攻撃的な表現の両面の間の関係はどうなのでしょう。

D 3: この子供の場合にはこの2つがいつも相ともなって相当治療が進んだ後でも互に関係をもって現われます。例えばかくれんぼなどの遊びをしている時でも又笑ったりさわいりしている時でも、何かその蔭に恐怖が伴われています。その源になっているのは、やはり色々な形で出されるべきだった攻撃的傾向が抑えられてしまっているのではないかと。そういうものはテストに比較的是り出ているのですが、そういうものが内面化されてそこに強い恐怖が起きているのではないかと思うのです。でも遊戯療法というものが言葉が少なく、ちょっとした切々の言葉や遊びを追ってやっておりますので未熟なわれわれがそれをはっきり了解出来るかどうかは疑問なのですが。

D 1: その発生原因なんですが、家族歴に関する資料は、治療が終わってから集められた素材をもとに構成されたものなんですね。

D 3: そうです。

S 1: それじゃ発生原因的な問題はどのくらいにして、そろそろ遊戯療法のテクニックに入りましょうか。

遊戯療法のテクニックについて

P 4: そのことなんですが、1回目のおしまいの所で不安を減るように注意を払ったと書いてありますが、これはどういうものなのかそしてその効果はどうなのかお伺いしたいんですが。

D 3: 一口にいえば母親が赤ん坊を安心させる時のような言葉だけではない色々な表現をして近づく仕方でやっているのですが。

注：発言者はその専攻を記号で表わす。Sは社会学，Dは医学，Pは心理学，Cはケースワーク

をさしている。

P 4: この場合の不安というのは遊戯療法という新しい状況に対する反応としてのものか、それとももっと根本的なものなのか、或はその両者なのか、その点はどうなんですか。

D 3: これは両方だと思います。例えば子供が両方の理由で不安を示したとします。そして治療者がそばに腰掛けて向うが黙っていたら、こちらも黙ってそれをうけいれているというようなやり方もあります。

S 1: 先生のはもう少し積極的な接近をなさるわけなんですね。

D 3: ええ、そうですね。もっと積極的に解釈などもある所では相当はつきり与えたこともあるのです。不安や依存的傾向がある場合、現在そのような感情があることをうけいれレフレクトするだけでなくもっと深い発生的な解釈を与えた所もあります。

S 1: 母親のケースワークの方で何か問題になることはありませんか。

P 1: 137ページ一番下にある accept という言葉についてなんですが私はその acceptance をロジャーリアンのいう acceptance と対比させたいと思うんですけど。

P 4: ロジャースのいうような意味での acceptance の深さ迄には達していないと思うんですが

C 3: (筆者) これはこの子に対して不安な感じを持って母親が接しているんじゃないかというような診断的理解に立っているんです。だから母親との接面中に非常に干渉的な態度で子供に接している様子が出て来ているがむしろ、母親が不安にかられて扱はなければいられない感情を理解というより受入れようとして面接を進めていたということなのです。

S 1: ロジャースの場合は如何ですか。もっと深い層というところはどういうようなものを指すんでしょうか。

P 4: 例えばそういった理解さえ治療者は意識的に持たないといった、全く無批判的な受容をいう

んじゃないでしょうか。

S 1: 最初にちょっと申し上げたんですが、こういう症状を持った子供が果して神経症なのか、或は分裂病に近いんじゃないかというような疑問が当然起ってくると思うんですが、そういった点で何か。

分裂病か神経症か

D 3: 私としては別にこの点について疑問は感じていなかったのですが。

S 1: ええ、でもいつかこれを学会にお出しになったとき、何かそんな点で、質問があったんじゃないんですか。

D 3: ええ、そうなのですが、その質問をされた先生は大人の方を診ておられる精神科医なので、「世界がこわれるんじゃないか」というようなことがこの子の表現の中にあっただけ、これは分裂病のいわゆる世界破壊体験のようなものでないか、何かそんな感じがするっていわれたのです。5つぐらいの子供がこんな事をいうのは、恐怖症というよりもっと分裂病的なニュアンスがあるんじゃないかという意味でおっしゃったのだと思います。同じように恐怖を主訴とするような子供をわけると、だいたい3つに分れると思うのです。子供では生理的に音などに対する視覚的あるいは聴覚的な不安があって、そういうものは発達的に変化してくるのですが個々の子供によりずれがあります。そういうようないわゆるこわがりな子供、臆病な子供というものと、或る時期から心因によって起きてきた神経症的なものと、もう1つ分裂病的な恐怖と3つのものが診断としては問題になるのではないかと思うのです。

D 1: そうすると心因の問題と状態像の2つの問題になるでしょうか

D 3: 状態像については分裂病児童と神経症児童との遊戯療法の場面における質的量的な差異を比較したかったのですがそういう点をここに触れる

余裕がなかったのですが。まあ私としては分裂病ではないという考えもっています。

D 2: 大体このケースを読んでみればやはり分裂病は否定されるでしょうね。

D 1: 心因の仮設はやはり過保護(over protective) でしょうか。心因の問題についてはやはり推測(speculation)の域をまぬかれないでしょうね。

S 1: それでそろそろ母親のケースワークに入ってくださいませうか。

母親の治療参加

C 1: 発生機制にもこれはちょっと関係があるんですが、どういうわけで母親のが必要だったのか伺いたいんですが。

D 1: それもやはり speculation の問題だと思う。母親の態度が心因的な関係にあるという1つの仮設があるわけでしょうね。

C 1: この場合でしたら子供だけでも治療が可能だったんじゃないかという気もします。ある治療者の場合は3年間かかって子供だけやっており、必要がある時だけ母親に連絡をとるという方法でやっています。

S 1: 児童相談所あたりではそういうやり方が精一ぱいでしょうね。

D 3: 或はその反対に母親だけ心理療法をやって子供をやらなくても治っていく場合もあるかも知れません。ここで両方やったというのは恐怖症の発生に対する母親の態度ということに関して仮説があるのですが、むしろこの慣習に従っているともいえるでしょう。子供だけをやる場合は子供自身の心理療法が可能な場合だと思う。年齢が小さい子供であってもインテンシブな働きかけをしてそれで子供が変るといように子供自身の精神的な能力が高い場合には、母子関係を子供の方から変えることが出来るという可能性も非常にあると思うのです。

P 4: この場合は完全に並行して治療がなされたわけですね。お互いの相互の働きかけ(interaction)という点で何かもう少し……

S 1: 私もその治療者間の統一(integration)という点で一考の余地があると思うんですが

P 1: この様に2人でやる治療に何かどういふふうにお互いに関連を持ちながらやるか、そういうような原則があるんでしょうか。

D 3: 始終連絡をとって相談をやっていますが、各分野の統一ということについては暗中模索していたというのが正直な所でしょう。

C 3: 母親をとりあげた理由は、母親が自分から子供の事について話そうという態度だったこと、又母親が不安を持っていて、それが子供に対する態度に現れて居り。子供との結びつきが強かったということです。

D 1: この場合問題を持って来たのは母親なんです。

D 3: この子供は他の子供に較べると大人的な要素があって治療に関する自主的参加という点が強いいい得るかも知れないのです。こういうように最初から不安を表現して援助を求めるといような子供はあまりいません。

知能は優秀で社会成熟度(social maturity)も非常に高くCAT なんかも一々弁解をつけて動物の名前を列挙するだけですが知能が、低いから列挙するのは違ってます。ここで何か自分のことを試されるんじゃないかという警戒が強くて列挙しているのだと思うのです。PFTは要求固執が多くない点で特徴的でした。それで抑圧が強くて神経症的な特殊な人格構造を持っているのではないか、何か大人のような、5才位な子供ではとて考えられない複雑な構造を持っているのではないかと考えられました。だからこの子の単独の心理療法だけする可能性もあったかもしれません。

S 1: それではこの位にしておきましょう。

ABSTRACTS

A CASE TREATED BY NONDIRECTIVE METHOD

By

Morio SAZI

1. The system of nondirective, or client centered psychotherapy has become widely recognized as a major contribution to the methods of treating the problems of emotionally disturbed persons. Major factor which differentiates the nondirective method from others is that it is client-centered. By this expression we mean that the direction of therapy process is essentially in the hand of a client rather than of a therapist. Furthermore, the individual, and not his symptoms, is the focus of the therapy. The method of therapy, in contrast with some other forms of treatment is directed toward the achievement of the integration and independence of the client in the minimum of necessary time.

2. In nondirective psychotherapy, the necessity of several basic attitudes on the part of the therapist is emphasized. The first is that the therapist must genuinely accept the client. The second basic attitude of the therapist is that he must recognize the value of establishing a permissive situation, he carefully avoids doing anything which would imply that he is evaluating the client's attitudes or behavior in terms of therapist's own values. The therapist must not give the client the impression that any attitude the client wishes to express, or any behavior he wishes to discuss, legitimately defended by the client. The third important attitude for the therapist is that he must be convinced that the client is capable of managing his own life. If the therapist does not follow above attitude it is not likely that he will use a non-directive approach.

3. According to these general principles, the therapist had nine times of therapeutic interview with a woman, twenty seven years old, single. She was depressed and showed signs of anxiety. She came to the clinic on her own intention with the problem of occupational maladjustment mainly focussed in interpersonal difficulties with an emotionally unstable old maid who was the chief of the section where this client was working.

4. Personality characteristics of the client expressed and recognized at intake interview or early periods of therapeutic interview are as follows.

She is emotionally immature, dependent, narcissistic, egocentric and apt to be involved in her subjective feelings. She has developed a neurotic need of being loved. When this neurotic need is not satisfied, she gets depressed and frustrated, and feels that anyone doesn't care about her. She is, therefore, always ambivalent about others; she approaches to others with the expectation of being loved and leave them with the feeling of hostility and disappointment that the need is not satisfied. This ambivalence is directed especially in relation with her mother who is her only relative lived with her since she was four-years old. This mother-child relationship may have developed her characteristic unrealistic attitude which may be the cause of her failure of adjusting herself in the relations with her chief and her disappointment in love. She is considered as maladjusted personality with hysteric trend.

5. As a highly intelligent person, she was able to respond to internal stimuli as well as external ones and utilize interview situation to express feelings freely and understand herself. In permissive atmosphere, being encouraged by therapist's understanding attitude and acceptance, she could take responsibility of her self-direction in therapeutic situation and also in her life. Her internal resource, ambivalent attitude toward her mother or the chief in the office, ego-centricism manifested in her attitude which sought others to satisfy her need for affection were expressed frankly and accepted by herself. This understanding was followed by the next step of realizing that it was the time to give up the infantile way which, she thought, was effective in the past to maintain security. She was ready to look for the better way of seeking security, i. e., seeing herself and others more realistically and acting on this realistic ground.

6. Dependent attitude toward the therapist, appeared at the early period of interview, was reflected and clarified by the therapist and accepted by herself as manifestation of her own inner problem, and the transference situation did not develop.

7. The client, in some phase of therapy, was absorbed in job, trying to escape into reality. But it was not long before she could find herself that absorbing in job would merely cover up her unsolved emotional problem which displayed itself

in her interpersonal situations. She began to see herself and others in more realistic eyes which did not distort the whole picture of the world as before. Dependent relationship with others which was useful for her defence in the past was now understood by herself.

8. In the Rorschach Test Protocol which was obtained at follow-up period, compared with that which was obtained at 7th interview, it would be appropriate to draw an inference that there occurred some change in her personality.

The ratio of FC to CF+C changes $0/4$ to $7/6$, and this suggests her improved control, but the content of FC contains fabulized responses. The weakened sign of color shock response may show the same aspect as FC ratio. The number of AT responses remarkably decreased and we may be able to infer that her anxiety diminished to some degree. Deviant verbalization which still exists also shows her specific narcissistic and subjective attitudes which are central figures of the way of her thinking and acting at the follow up period.

In these respects we may say that she to some extent became emotionally mature. Yet the subjective and infantile emotional tone did not disappear.

TREATMENT OF THE CHILD WHO STEALS

By

Shusuke TAMAI and Akira KASHIWAGI

The following case is the process of the treatment of a boy with a stealing problem, and the simultaneous casework treatment of the step-mother. This case has been chosen because of the illumination it gives on possibilities for the selection of patients for psychotherapy. It also is significant from the point of view of the client's self-determination; whether the mother would be willing and able to help herself go through the process of solving her child's problem of stealing.

Speaking of simultaneous treatment, I would like to call the reader's attention to collaborative therapy which Dr. Szurek initiated when he was the director of the Institute for Juvenile Research, Chicago. Collaborative therapy, as I understand it calls specifically for integration between the two therapists, one of whom does the therapy with the child in coordination with the therapist who works with the parent. While this is a characteristic of the function of collaborative therapy, it might be open to discussion whether this integration would always benefit the treatment.

For if one of the two therapists knows too much about what the other does with the client, he would possibly be influenced by the knowledge and become unable to make a natural response to the person with whom he works. We feel against the close contacts between the therapists especially because of the fact that it is often unmanageable for the therapist to keep building up the therapeutic relationship simply because it is unavoidable for him to judge the patient in terms of what he has been informed by the other therapist.

So this is a new attempt of the concurrent treatment, in the sense of conscious avoidance of getting to know too much about each other's contents of treatment.

The caseworker put an emphasis on finding out and building up the mother's own feelings of responsibility about the problem so that she could utilize this constructive ego force to modify the situation.

The case was referred in May, 1956, by the principal of the primary school which the boy, 10 years of age, attended, because of the problem of stealing and

being cruel toward his friends. Mrs. T., step-mother of the boy, came to the intake interview to tell the caseworker about how he would steal and how he would pretend to behave himself. She elaborated her lengthy story about the boy in a negative tone, and said that she did not know what to do about him. His father, a day-worker, was totally dismayed about his son's problems. He would threaten the boy by saying he would ask a policeman to send him to a reformatory, which the father himself thinks is the only place that could correct his misdemeanour. Mrs. T however had a different opinion about solving the problem and would do anything that would possibly be good for the boy except institutionalizing him.

The intake interview was followed by the two sessions for study in which a psychologist and a child psychiatrist in addition to the caseworker participated to develop a total treatment plan on the basis of the probable diagnostic formulation of the case.

Diagnostic formulation

This is the case of a 10-year-old boy whose stealing and aggressive behavior are a reaction to factors around the parents-child relationship. Criticized by his parents, especially his step-mother, since he was 4 years old, he reacts to them with marked hostility, and inability to accept social limitations. The step-mother's positive attitudes toward the treatment procedure, and general intelligence and flexibility of personality of the boy suggest a favorable outcome.

The possibility of use of the mother's self-determination was a bridgehead to expand the extent and scope of casework treatment with the step-mother.

Treatment

Tamai did 15 sessions of play therapy with the boy, and Kashiwagi had 15 interviews (including intake and study) with the step-mother. Each therapist, holding separate appointments for the boy and step-mother, did the treatment independently.

Each of the courses of play therapy with the boy and the casework treatment with the mother may be divided into three periods. The first period included the first three sessions in each of the treatments. They had enough time to get oriented to the therapies. The boy in the first session had feelings of reluctance about coming to see the therapist. The therapist encouraged that that was entirely his time to use for playing with anything he wanted, The boy did not seem to believe that

he could do whatever he wanted, because his past experience with most adults was rather disagreeable. In the second session he volunteered to play tossing a ball and the therapist accepted this. After the session, he shouted aloud at his step-mother, waiting for him, "It was fun!" By the end of this period, it was observed in the boy that his negative attitude that he would have no way to escape from being scolded anyway was reduced and that he was quite ready for treatment.

During this period, Mrs. T began to get accustomed to the therapy in which she was not persuaded to do this and that nor would she be recommended the best way the caseworker could have thought of. She used up most of her time in the first and second interviews to report how the boy spent his time at home. In the third interview she began to conform to the way the caseworker would respond to her and told him that she had never thought that the feelings and attitude of the parents would affect the feelings of her step-child to such an extent that he would seek the opportunity for acting out. She also expressed that she felt so significant in coming to talk with the worker that she could hardly wait for the next interview.

In the second period, that is, from the fourth to the seventh interviews, both of them showed a remarkable progress as to expressing themselves in the treatment situation as fully as they could make use of the therapy toward understanding self.

During this period the boy kept coming to the appointment promptly. He got interested in playing checkers in which he often times tested the therapist to see whether he would get irritated by his cheating. Having found that the therapist would not criticize him at all he gained the feelings of security with an adult for the first time in his life.

As for Mrs. T., it was characteristic of the interviews of this period that she talked more about the way she has been feeling about her husband. She was not a bit pleased with her husband because he would scrutinize whether everything was in order in the house, or whether the boy behaved all right through the day. She said it was awful but in the next sentence stated that he was a hard worker and would do anything for the family. The other day she jokingly asked her husband who among the ten wives of the apartment house where the T's lived he would have chosen for his wife if he hadn't married Mrs. T. Mr. T got provoked and said that it was a little too much. Mrs. T. told the worker that she herself

would think of Mr. T. as the best of all the husbands in the apartment house.

Seeing her husband with new insight, she developed a considerable realization of the fact that parent-child relationship has been certainly affected by the conflict which has existed between Mr. T. and Mrs. T. Although this conflict between husband and wife has been rather on a superficial level, it has surely given negative effects to the feelings of Mrs. T. about the boy.

The last period included the sessions from 8 to the termination for the boy and Mrs. T. Child's stealing disappeared. In the treatment situation, the boy was observed to have become more natural about playing checkers with the therapist. He would not continue cheating any more. He would not mind upon losing games.

The step-mother, on the other hand, made a remarkable progress in developing the insight into the negative factors on the side of the parents. The father has become interested in the situation and, being influenced by Mrs. T, his desire to send the boy to a reformatory has been very much discouraged.

Conclusion

Step-mother: The whole process of casework with the step-mother has been followed by the principle of self-determination as the main line of treatment. Receiving psychological treatment at the clinic rather than sending the boy to a reformatory was decided by the step-mother. The function of the contacts has not been of giving advice or direction as to how as a mother she would have to treat the boy, but the full use of the self-determination has enabled Mrs. T. attain the understanding the characteristic of her boy's problem.

Child: The psychotherapy has been also started with the free participation of the boy. The therapist only encouraged that he could do anything he wanted. Through the process of therapist's acceptance, he could move to diminish his anxiety of being criticized about his misconduct.

ON THE PSYCHOGENESIS OF NEUROSIS

—Through free-association of an anxiety neurosis—

By

Masaaki KATOH

Through the free-association of an anxiety neurosis, I put a question on the problem of "Psychogenesis", which is always the old but new question in psychiatry. The case study may be summarized as follows.

A man, 30 years old factory worker, showed anxiety symptoms which began 8 years ago, when he had suffered from the infiltration in lungs and was obliged to be out of his occupation and to leave the night-school. Soon after then, he experienced the operation in his testicles, and was attacked by anxiety feeling which had continued these 7 years. His heart and lungs showed no remarkable change in the examination by E. C. G. and X Ray etc., and diagnosis was anxiety neurosis. On a weekly basis, I treated him through free-association for one hour a day. In the course of treatment, he expressed feelings of anxiety about the future of his occupation, marriage and the lung-infiltration. He also expressed fear of the death of his aged father, and mentioned about the responsibility of his being the first son. His personality was characterized as dependent and timid, and his father is considered to have the same personality as the patient, and suffered from nervous insomnia, when he was 41 years old.

In the course of the first free-association, he expressed the anxiety that he might not be able to marry on account of the operation. In the 2nd and the 3rd free-association, he presented his jealousy about his friend's success, and when the friend invited him to drive, he developed to a great extent anxiety about whether he could accept the invitation. He also told of the memory that he had an injuries in head when he was 4 years of age, and the death of his grand-father when he was 6 years old. Fears of ghost and venereal disease etc. appeared in this association.

In the 7th association, he said that he could recover his self-confidence and might have some hope for his occupation. He started to attend an auto-school.

In the 7 - 10th association, he expressed his inferiority feelings about his ability and unpleasant feeling after drinking. Gradually he started gaining insight into his immature personality and his strong desire for the assurance by others. He finished the exercise of driving and had succeeded to go on the trip, accompanied by his friends. In the course of the 11 - 12th. association, he expressed an insight into his immaturity and inferiority feelings. Then he could believe that he might never die of anxiety attacks. The 14th free-association was finished, when he mentioned that he might be able to go well and to recover his self-confidence, so he wanted to finish the psychotherapy.

Thus, his anxiety may be interpreted as "a castration fear or" a fear of losing love", though the uncovered memory in his free-association. However, the material which we can gather from his free-association may become larger and deeper in the course of treatment. This endless understanding depends on the degree of the friendliness, empathic and the transference-feeling between the therapist and the patient. I attempted to arrange the materials of his "uncovered memories", in accordance with his somatic and environmental conditions, his human relations (intrafamilial and extrafamilial) and his characteristic neurotic traits as follows.

Age	Somatic & environmental conditions	Human Relationships		Neurotic Traits
		Intrafamilial	Extrafamilial	
0	Parents and a sister. Father was nervous			
3		Brother was born		
4	Injuries in head & the experience of Operation			
5		Sister was born		
6	Operation of Tonsillitis	Grand-father died		Timid, fear of ghost. Pavor nocturnus. Enuresis up till 7 years of age
8		Second sister was born		
12			Have an intimate friend	
20	Even hard work in factory attend to night-school			
21	Left school on account of fatigue	Sister was affected by pleuritis TB.		
23	Infiltration in lungs		Out of his occupation	

24	Experience of anxious heartbeat			Anxiety attacks.
25	Operation in his testicles	Brother was also affected by TB.		Fear of the operation and the death
27	Get a job		Get a job	
31	Anxiety about losing a job	Care for aged father, Responsibility as a first son		Anxiety attacks.

I wonder if we could establish the causality of his symptoms in these materials. K. Jaspers says that the understanding in the psycho-analytic meaning is not the understanding in the true sense, but "as if understood" (Als-ob Verstehen,) because we can not establish the causal relationship between the two mental facts so exactly as between the two physical facts. Also, C. Rogers says that the diagnosis of the psychogenesis is in the hands of the client. Even if we may find the causal relationship between the two mental facts, how can we prove the truth of this causality? Is this a speculation which can not be proved in the end? Psychotherapy can not prove the truth of this causality. I agree in the opinion of K. Alexander that the psychotherapy may be art rather than science, and hope that the psychogenesis of neurosis could be proved in the sense of the causal relationship through the "sociogenesis" or "neurogenesis" in the future.

PSYCHOTHERAPY OF A CHILD WITH PHOBIA

By

Yoshiko IKEDA and Makie TAMURA

A five years and ten months old boy with superior intelligence was brought into for psychotherapy because of several phobiasymptoms.

His mother complained at the first interview of his son's fear of rain, flood, destruction of the earth and so forth.

The symptoms appeared when he was told that there was flood last year in the nursery school and continued for one month.

He was desperate, refused to go to nursery school, often became panic stricken if it was raining or if his mother was out of sight.

The family was consisted of intelligent middle aged parents who had been grown up with strict discipline in conservative families, a twenty-years-old adopted son, and one-year-old younger brother besides the patient.

His mother was a gentle, sensitive women with a neurotic trend and his father who was somewhat a rigid and authoritarian type of person, was apt to be domineering with his wife and children.

The patient was born in the thirteenth year of his parent's marriage.

The mother reported that she had never expected to be able to become pregnant because of a disturbance in uterus and that she felt happy and contented anticipating her first baby's arrival.

The delivery was normal, but the child weighed far less than average on his birth.

During infancy he was so weak and delicate physically.

The mother was very much worried about him and took meticulous care of him. She then became tied closely to him.

On the other hand, the parents required him to observe high degree of ethical code.

Weaning, bladder and bowel control were easily established. His younger brother was born when he was four years and eleven months old and he entered into nursery school at the age of five years and six months.

In the nursery school he was good, docile, shy and played by himself rather than playing with other children, he always was very careful not to get dirty himself and avoided to have the opportunity to quarrel with his friends.

Several psychological testing which were given by the therapist in the process of therapy, such as C. A. T., P. F. T. and Blachy test, showed his anxiety, fears, ambivalent attitude toward his parents, and his repressive tendency.

Twenty-three sessions of psychotherapy were given to the patient and the mother came simultaneously to twenty-two sessions of casework treatment.

The process of play therapy may be divided into four steps.

In the first step, he was insecure about therapy, defensive toward the therapist and his behavior showed inhibited and compulsive trends.

The second step was the period that therapeutic relationship was established between the patient and the therapist, and he expressed aggression and hostility by playing earthquake, fire, flood and crash of cars. In the third step, he gradually became to accept his younger brother and the father and creative plays were observed.

In the last step, he gave up his need for dependency on his mother or the therapist and indicated that he had developed the will for growth.

The process of case work treatment with the mother may be divided into three steps. In the first step, she chiefly complained of her son's symptoms and her own anxieties. She had rather cherished to identify with him.

She started to understand the mutual relation and, then, the attitude toward him changed in the second step. In the last step, she applied the new orientation to every day affairs and got good results on the whole. As her own anxieties disappeared, she gained selfconfidence for the family life, especially for the caring of him.

We had follow-up contacts with the family for three years. but have not found problems so far.

We studied from the psychiatric and sociological view points about genetic mechanisms, diagnosis and therapeutic mechanisms of this particular neurosis.

所 報

人 事 異 動（昭和31年4月から昭和32年3月まで）

新 任

西 内 育 子 昭和31年12月16日付 社会学部（ケース・ワーク）

退 職

菅 野 重 道 昭和31年8月31日付 日本医科大学精神科専任講師に就任

紀 幸 子 昭和31年10月30日付 大阪市児童相談所ケース・ワーカーに就任

精神衛生研究

— 第 5 号 —

編集責任者	横 山 定 雄
発行所	国立精神衛生研究所 千葉県市川市国府台町1の2
印刷所	五宝堂印刷株式会社 東京都北区滝野川町3の17 電話王子(91)6105・0967番

(非 売 品)

JOURNAL

of

MENTAL HEALTH

Number 5

March 1957

Contents

Foreword	1
The Outline of our Mental Hygiene Clinic	<i>Shiro Takagi</i> 3
A Case treated by Non-directive Method	<i>Morio Sazi</i> 7
Treatment of the Child who Steals	<i>Shusuke Tamai & Akira Kashiwagi</i> 63
On the Psychogenesis of Neurosis.....	<i>Masaaki Katoh</i> 95
—Through Free-association of an Anxiety Neurosis—	
Psychotherapy of a Child with Phobia	<i>Yoshiko Ikeda & Makie Tamura</i> 105
English Abstracts.....	157

Published by

National Institute of Mental Health
Konodai, Ichikawa, Chiba-Prefecture, Japan